

間山遺跡緊急発掘調査報告書

間 山

III

1993. 3

長野県中野市教育委員会

# 序

当市の東南部に位置する間山地区は、三方を山に囲まれた小扇状地です。この中心部は縄文・弥生・古墳・平安・中世の各時代にわたる遺跡で、昭和初年以来学会に知られ、先年も県道須坂～中野線の拡幅改良に伴う発掘調査が実施されました。

この遺跡内の中央を縦貫して、間山地区が長年の懸案でありました農道を新設・拡幅改良工事の企画・実施されるにあたり、平成3・4（1991・2）年の2か年にわたって緊急発掘調査を実施しました。その成果のうち、弥生時代までの部分は平成4年度に報告書を刊行しました。この報告書は、その続編として集大成したものでありますが、この遺跡が縄文時代からの重要な遺跡であることが改めて認識されました。

とくに、弥生時代から古墳時代に移り変わる古代国家形成期までの地域の様相が、市内の安源寺遺跡・七瀬遺跡などの調査結果とともに、東海系・北陸系の土器の在り方から、この地域に中継基地的な様相がよみとれます。

このほかの成果も、この報告書によって幾分なりとも地域の原始・古代・中世の歴史が究明されたと信じます。終わりにりましたが、報告書の刊行にあたり、発掘調査に協力を惜しまれなかった地元間山区の皆さん、開発事業の続く当市の中にあって、献身的に協力願っている調査団の皆さんのご労苦に厚く感謝申し上げます。

平成5年3月

中野市教育委員会

教育長 嶋田 春三

# 例 言

- 1 本書は、平成3・4年度に行った長野県中野市間山に所在する間山遺跡で行った。団体営土地改良事業の農道建設事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、中野市農政課の所管で、委託を受けた市教育委員会は、国庫補助金、県費補助金を得て、発掘調査団を組織し事業を行った。調査団関係者の名簿は別掲してある。
- 3 発掘調査は事前に試掘を行い、平成3年6月11日より間を休んで、12月11日まで行い、平成4年3月まで市民プール事務室で整理作業を行い、当該年度事業分の弥生時代までの報告書を刊行した。

次年度は試掘調査の後、9月21日より12月12日まで発掘調査を行い、ただちに前記事務室で整理作業を行い本書を刊行した。したがって『間山』II・IIIの報告書は、合冊とした考えで、今回の間山遺跡の発掘調査報告書として編集した。
- 4 発掘現場での記録は、池田実男、湯本栄一が主に行った。遺構写真は檀原が行った。遺物整理作業は、樋口義政、樋口政勝、秋山恒巳、檀原みち江、池田正子、常田誠が行い、遺物実測は檀原が行い、トレース作業は、山崎のり子、池田きよ子が行った。

遺構実測図の整理は、池田、湯本がおもに行い、全員が協力した。
- 5 本書の作成は檀原が担当し、徳竹が補助した。原稿の執筆は、檀原が行った。
- 6 助言・指導は長野県埋蔵文化財センター中野調査事務所の調査員の方々、笹沢浩氏などからうけた。
- 7 出土品、諸記録は中野市歴史民俗資料館に保管している。

# 目 次

序	
例言	
第I章 発掘調査の経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査団の編成	2
第3節 調査日誌	3
第II章 調査の成果	21
第1節 縄文時代の遺構と遺物	21
1 遺構……21      46号住居址……22      2 土器……23	
第2節 弥生時代の遺構と遺物	25
1 5号住居址……25      2 28号住居址……27      3 29号住居址……31	
4 31号住居址……32      5 35号住居址……37      6 36号住居址……39	
37・38号住居址……42      10 39号住居址……45      11 41・46・47号住居址……49	
12 42・43号住居址……53      13 45号住居址      14 48号住居址……64	
15 50号住居址……69      16 51号住居址……73      17 52・53号住居址……78	
18 54号住居址……81      19 壺棺……82	
第3節 古墳時代の遺構と遺物	86
1 7号住居址……86      2 9号住居址……93      3 13号住居址……95	
4 14・16号住居址……96      5 15号住居址……98      6 20号住居址……101	
7 27号住居址……103      8 30号住居址……106      9 32号住居址……107	
10 33号住居址……113      11 34号住居址……116      12 40号住居址……119	
第4節 平安時代の遺構と遺物	120
1 49号住居址……120      2 土壙……125	
第5節 中世の遺構と遺物	129
1 中世の道跡……129      2 溝と土壘状遺構……132	
第6節 近代の遺構	134
1 礫の埋没坑……134	
第III章 調査の結果と考察	135
第1節 間山遺跡の土器編年試案と考察	135
1 間山遺跡住居址・土壙・壺棺編年表……135	
第2節 各住居址の土器様相について	137
(1) 51号住居址……137      (2) 6号住居址とアメリカ式石鏃……138	
(3) 31号住居址……139      (4) 45号住居址……140      (5) 7号住居址……140	
(6) 32号住居址……142	
第IV章 むすび	143
付表	144

# 写真目次

1	北から見た縄文時代の土坑	21	37	北から見た48号住の土器	66
2	西から見た46号住(土坑)	22	38	北から見た48号住の床面	66
3	北から見たD地点	22	39	西から見た50号住の土器	70
4	東から見た5号住	25	40	西から見た50号住の床面	70
5	28号住の白色粘土	29	41	北から見た50号住の地床炉	71
6	西から見た支線1号	30	42	西から見たE地点	71
7	北から見た28号住の遺物	30	43	東から見た51号住の遺物	73
8	北から見た28号住の床面	30	44	西から見た51号住の土器	74
9	29号住北方に検出した須恵器破片	31	45	西から見た51号住の床面	77
10	29号住の土器	31	46	西から見た52・53号住・土壌	79
11	北から見た29号住の土器	31	47	西から見たE地点	80
12	西から見た31号住の遺物	34	48	西から見た56・50号住	81
13	西から見た31号住の床面	34	49	西から見た壺棺(1)	83
14	東から見た35号住の土器	37	50	西から見た壺棺(2)	83
15	東から見た35号住の床面	38	51	北から見た壺棺の掘り方	83
16	鉄鏃の出土	39	52	南から見た壺棺	84
17	北から見た36号住の土器	40	53	北から見たD地点	84
18	小土坑内の土器	40	54	7号住の高坏	88
19	東から見た36号住の床面	41	55	7号住南壁の炭	88
20	南から見たC地点全景	41	56	西から見た7号住の遺物	88
21	西から見た37・38号住の土器	43	57	7号住床面出土禾本科植物の炭化物	89
22	西から見た37・38号住の床面	44			
23	西から見た39号住の土器	48	58	南から見た7号住の炭化物	90
24	西から見た39号住の床面	49	59	南から見た7号住の床面	90
25	南から見た39号住とD地点	50	60	南から見た7号住上層の土器	90
26	北から見た41・47号住の土器	52	61	西から見た9号住の土器	93
27	43号住の土器	54	62	9号住の地床炉と土器	93
28	西から見た42号住の土器	54	63	北から見た13号住	95
29	42号住の地床炉	57	64	北から見た14・16号住	96
30	北から見た42・42号住の床面	57	65	北から見た14号住の土器	97
31	西から見た44号住の土器	59	66	西から見た16号住の土坑内の土器	98
32	西から見た44号住の床面	59	67	北から見た15号住の土器	99
33	南から見た45号住北の土器	59	68	北から見た15号住の床面	101
34	南から見た45号住の床面	60	69	北から見た20号住の床面	102
35	北から見た45号住の土器	60	70	北から見た27号住の土器	104
36	48号出土土器	66			

71	北から見た27号住の床面	104	90	北から見たE D23出土の坏	124
72	南から見た30号の土器(1)	106	91	南から見た49号住のカマドと土器	124
73	北から見た30号住土器(2)	107	92	南から見た49号住のカマド	125
74	西から見た30号住と支線1号全景	107	93	北から見た平安時代の土壙と土器	126
75	東から見た32号住の土器	112	94	北から見た平安時代の土壙	127
76	西から見た32号住の土器	112	95	西から見た平安時代の土壙と土器	127
77	西から見た32号住の床面の土器	113	96	西方の山から見た間山遺跡	127
78	西から見た32号住の床面	113	97	15号住と中世の道跡	129
79	西から見た本線B地点	114	98	18号住から南の中世の道跡	130
80	西から見た33号住の床面	115	100	E40から北の中世の道跡	131
81	西から見たB地点調査全景	115	101	北に見る6号住南の中世の道跡	131
82	南から見た33号住の土器	116	102	西から溝跡を見る	132
83	南から見た34号住上層の土器	117	103	西から見た溝と道跡	132
84	東から見た34号住の床面	118	104	東から見た北側の溝断面	133
85	南から見た40号住の土器	120	105	東から見た中世の溝跡	134
86	南から見た40号住の初期須恵器	120	106	北から見た礫の埋没坑	134
87	南から見た49号住の土器	121	107	アメリカ式石鏃とガラス小玉	138
88	南から見た調査前の支線2号D地点	123			
89	東から見た調査前の支線2号E地点	123			

# 挿 図 目 次

1	間山遺跡位置図	15	35	37・38号住遺物検出図	42
2	間山遺跡住居址位置図	16	36	37・38号住遺構実測図	43
3	間山遺跡調査全体図(1) 1991	17・18	37	37・38号住柱穴・焼土実測図	44
4	間山遺跡調査全体図(2) 1992	19・20	38	37・38号住出土土器実測図	45
5	支線1号縄文土坑実測図	21	39	39号住遺構実測図	46
6	46号住(土坑)実測図	22	40	39号住柱穴・焼土実測図	47
7	支線1号出土の縄文土器拓影図	23	41	39号住遺物検出実測図	47
8	石器実測図(1) 1991	23	42	39号住出土土器実測図	48
9	石器実測図(2) 1991	23	43	41・47号住遺物検出図(2回目)	49
10	石器実測図(3) 1992	23	44	40・41・47号住遺物検出図(1回目)	50
11	石器など実測図 1991	24	45	40・41号住出土土器実測図	51
12	5号住出土土器実測図	25	46	47号住出土土器実測図	51
13	5号住遺物検出図	25	47	40・41・47号柱穴・火床実測図	52
14	支線1号調査全体図	26	48	40・41・46・47号住遺構実測図	53
15	28号住遺構実測図	27	49	43号住遺物検出図	54
16	28・29・30号住出土土器実測図	28	50	42・43号住遺構実測図	55
17	28号住柱穴実測図	29	51	43号住出土土器実測図	56
18	28号住遺物検出図	29	52	42・43号出土土器実測図	56
19	29号住遺物検出図	31	53	42・43号住柱穴・焼土実測図	57
20	29号住遺構実測図	32	54	42・43号住遺物検出図	58
21	21号住遺物検出図	32	55	44号住遺構実測図	58
22	31号住遺構実測図	33	56	44号住遺物検出図	59
23	31号住柱穴など実測図	35	57	45号住遺物検出図	60
24	31号住出土土器実測図(1)	35	58	45号住出土土器(1)・木器実測図	61
25	31号住出土土器実測図(2)	36	59	45号住出土土器実測図(2)	62
26	35号住遺構実測図	37	60	45号住出土土器実測図(3)	63
27	35号住柱穴実測図	38	61	45号住遺構実測図	64
28	35・36号住出土土器実測図	38	62	45号住柱穴実測図	64
29	35号遺物検出図	39	63	48号住遺物検出図	65
30	36号住遺物検出図	39	64	48号住遺構検出図	65
31	36号住遺構実測図	40	65	48号住柱穴実測図	66
31	鉄鏃実測図	40	66	48号住出土土器実測図(1)	67
33	36号住柱穴実測図	40			
34	36号住集石実測図	41			

67	紡錘車実測図	68	107	15号住柱穴実測図	100
68	48号住出土土器実測図(2)	68	108	15号住出土土器実測図	100
69	50号住遺構実測図	69	109	20号住柱穴実測図	101
70	50号住柱穴・地床炉実測図	70	110	20号住遺構実測図	102
71	50号住遺物検出図	71	111	27号住遺物・遺構検出実測図	103
72	50号住出土土器実測図	72	112	27号住柱穴実測図	104
73	51号住遺物検出図	73	113	27号住出土土器実測図	105
74	51号住遺構実測図	74	114	30号住遺構・遺物検出実測図	106
75	51号住出土土器実測図(1)	75	115	30号住柱穴実測図	106
76	51号住出土土器実測図(2)	76	116	32号住遺構実測図	108
77	51号住柱穴・火床実測図	77	117	32号住柱穴・炉址実測図	109
78	52・53号住柱穴・火床・土坑実測図	78	118	32号住出土土器実測図(1)	109
			119	32号住出土土器実測図(2)	110
79	52・53号住遺構実測図	79	120	32号住出土土器実測図(3)	111
80	52・53号住遺物検出図	80	121	32号住遺物検出図	112
81	52・53号住出土土器実測図	81	122	33号出土土器実測図	114
82	54号住遺構実測図	82	123	33号住遺構実測図	115
83	54号住遺物検出図	82	124	33号住柱穴実測図	116
84	54号住柱穴実測図	82	125	33号住遺物検出図	116
85	壺棺検出実測図	84	126	34号住遺構実測図	117
86	壺棺墓壇実測図	84	127	34号住出土土器実測図	118
87	壺棺B実測図	85	128	34号住遺物検出図	119
88	壺棺A・C実測図	86	129	34号住柱穴・土坑実測図	119
89	7号住柱穴・焼土実測図	87	130	E地点D23付近出土土器実測図	120
90	7号住遺構実測図	88	131	49号住遺構実測図	121
91	7号遺物実測図	89	132	49号住出土土器実測図(1)	122
92	7号住遺物検出図	89	133	49号住出土土器実測図(2)	123
93	7号住出土土器・石器実測図	89	134	49号住柱穴実測図	124
94	7号住出土土器実測図(1)	91	135	49号住遺物検出図	124
95	7号住出土土器実測図(2)	92	136	49号住カマド実測図	125
96	9号住出土土器実測図	93	137	平安時代の土壌遺物実測図	126
97	9号住柱穴・地床炉実測図	94	138	平安時代の土壌実測図	126
98	9号住遺構実測図	94	139	平安時代の土壌出土土器実測図	126
99	13号住遺構実測図	95	140	間山遺跡出土須恵器・珠洲焼	
100	13号住柱穴実測図	95		拓影図	128
101	14・16号住遺構実測図	96	141	中世の道跡実測図(1)	130
102	16号住出土土器実測図	97	142	中世の道跡実測図(2)	131
103	14・16号住遺物実測図	97	143	中世の溝跡実測図	132
104	14号住出土土器実測図	97	144	間山館推定図	133
105	14・16号住柱穴実測図	98	145	6号住遺物出土実測図	138
106	15号住遺構実測図	99	146	支線1号表採土器実測図	141



# 第 I 章 発掘調査の経過

## 第 1 節 調査の経過

間山遺跡の発掘は、市農政課の所管で、団体営土地改良事業として、平成4年度から農道を新設・改良する工事に伴うもので、地元では中央農道とよんでいる。これは幅4.5m延長1,050m、延べ面積6,300m<sup>2</sup>の広さで、事前協議で2年間にわたって、調査を行う事になっていた。

このうち平成4年度は、間山豊富神社から上の本線と、支線2箇所を延長470m延べ面積2,820m<sup>2</sup>の発掘調査を予定していた。

平成4（1992）年の調査の経過は、6月17日に本線の間山豊富神社の上を試掘し、A・B・Cの3地点の全面発掘調査と、遺物の表面採集により、支線1・2号も全面発掘調査する事の調査団の方針につき、市農政課、地元関係者の了解が得られた。

このように6月24日から7月12日まで、支線1号約70mの現地調査を行い、9月21日から本線の間山豊富神社上のA地点、20mの調査を行い、農作物の関係から発掘地点を上求めて、10月12日からB地点20mの調査を行い、19日からC地点42mの調査、11月2日から支線2号D地点80mの調査、25日から同E地点68mの調査に入り、12月12日現地調査が終了した。

12月14日から市民プール事務室で整理作業を行い、報告書の作成を行った。

## 第2節 調査団の編成

昨年に引き続いて、ほとんど同じメンバーの調査団の編成を行った。

調査責任者	嶋田 春三	中野市教育委員会教育長			
調査団長	金井 汲次				
調査主任	檀原 長則				
調査員	池田 実男				
事務局	小野沢 捷	同	社会教育課長		
	池田 剛	同	歴史民俗資料館管理係長		
	徳竹 雅之	同	学芸員		
参加者	湯本 栄一	樋口 義政	檀原みち江	池田 正子	
	池田きよ子	金井 幸子	宮本 公次	秋山 恒巳	
	樋口 政勝	常田 誠	酒井 悦郎	中村 晴江	
	土屋 光	古川しず江	土屋 守子	市川さだ子	
	片原 元春	千村 政巳	湯本 広枝	高橋ただし	
	海野 らく	矢野とみ江	小林美知子	樋口 健吾	
	矢野 郁勇	酒井 修	内藤 年男	中島 宏	
	山本 静子	藤沢 富雄	原沢 邦男	望月 澄雄	
	小林 辰郎	木原 久夫	土屋 保	海野 佐介	
	海野 和好	中山昇一郎	矢野 武明	古川 安公	
	関谷 満雄	小林 重保	小林 次男	牧野 正雄	
	小林 久恵	海野 佳広	小林 雅彦	檀原 重康	
	樋口アイコ	宮本つた子	浅野喜代子	下田 一二	
	武田 康子	近藤かずい	小林 保子	小林 五雄	
	山本 静子				
	発掘協力者	間山中央農道建設委員会			
		委員長	小林 充男		
	副委員長	古川 充男	矢野謙一郎	関取 茂善 他委員名略	
	間山区長	矢野謙一郎 (平成3年度)	海野 鉄治 (4年度)		

### 第3節 調査日誌

平成3年度

試掘調査

4月26日 試掘坑 1. 1m<sup>2</sup>を小形バックホーを使い掘り下げ。調査坑深さ70cm、弥生土器片とホップ吊線アンカーあり、 2. 弥生土器片と、北壁にピットあり。  
3. 住居址の壁確認、-50cmあり、 4. 地山まで1m以上深い、弥生土器片おとし。  
5. 深さ60cm弥生土器片3。 6. 弥生住居址?1.1m下にあり、底に弥生土器あり、  
7. 土師土器(古式)片あり、 8. 同 溝あり、 9. 遺構・遺物なし。  
10. 弥生住居址?、高坏脚部あり。

4月30日 11. 遺物なし、落ち込みあり。 12. 縄文前期関山式土器片、地表下60cm出土、柱穴状のところあり、耕作土30cm、礫層20cm、黒土10cm、漸移層10cm、以下地山(ローム) 13. 耕土浅く石礫多し、 14. 同 15. 黒土50cm。 16. 黒土80cm、弥生土器片少し。 17. 黒土80cm下層ローム識別良好。土器片少し。 18. 黒土30~50cm以下石礫で、-90cmローム層、弥生土器片少し。 19. 黒土50cm以下ローム層弥生土器片少し。 20. 同じ 21. 黒土80cm、土器片少し。

発掘調査

6月11日 テント設営、機材搬入、草刈を行う。北方地点より、午後から(榊宮本のバックホー)によって表土剥ぎを行う。深さ約40cm排土、箱清水式土器、土師器、須恵器、灰釉の破片あり。

6月12日 朝、安全祈願祭を行う、間山区長、正副工事委員長、教育委員会次長、課長、係長、調査団全員出席。表土剥ぎ続行、縄文土器片も出土。

6月13日 表土剥ぎ続行、両側の壁断面削り、午後雨のため作業中断。

6月14日 表土剥ぎ続行、矢野氏畑西、石礫多し、大正期に旧小学校建設の時、基礎工事にこの矢塚から運びだしたといわれている。弥生土器片、須恵坏、黒耀石、頁岩破片、縄文前期後葉縁孔浅鉢土器破片出土。午後3mのグリット設定。

6月15日 G~5・6 F~5・6グリット削平掘り下げ、縄文と須恵土器片同じ層から出土、両側の畑からホップ栽培の棚吊線の穴点々と見つかる。地山層に達して、遺構を破壊していた。

6月17日 F~7掘り下げ、住居址プラン確認。

6月18日 F~8、G~8掘り下げ、吊線深さ116m。

6月19日 F~12付近弥生土器破片になって黒土、礫中に集中。個体別まとまりを欠く。

- 6月20日 雨のため作業中止。
- 6月21日 F～14焼土部分あり、径30cm、磨石斧頭部破片、斜格子文の縄文中期土器片出土、F～16諸磯B式浅鉢片出土。
- 6月22日 G～16・17、F～16、C～17掘り下げ、G～16に落ち込みと炭片あり。
- 6月24日 試掘調査の時、F～17から床面土器が発見されたところ掘り下げ。G～17箱清水式土器小片多い、縄文前期土器片上層にあり、F～18黒土落ち込みに集石、その間に土器片あり。
- 6月25日 G～20F～20・21住居址隅丸方形確認。午後雨作業中止。
- 6月26日 休み
- 6月27日 F～21住居址箱清水式。G～21溝が下から続く、G～22溝続き、G～23まで続く、その中の黒土に縄文土器片、石が埋まる。
- 6月28日 F～25黒色土と石混在、中に土師土器、焼土あり、GF～27まで調査。
- 6月29日 雨のため作業中止。
- 7月1日 F～29東側小石敷列状遺構（古代～中世の道の跡）G～27から続く。同所箱清水土器つぶれて倒立。G～30の敷石列はやや大きな石あり、
- 7月2日 休み
- 7月3日 F～32覆土中に箱清水土器片、剥片石器、磨製石鏃などあり、黒色土、黄色土混合土層深く住居址になる可能性あり、F～30・31住居址の隅部を確認。G～31土器片東壁に多い。小石敷列は、箱清水式土器の上層にあり、G～33住居址の主体部位置を占める。
- 7月4日 F～34小石敷列東側に続く、G～34同西側につづく、縄文中期北陸系土器片あり、F～35滑石製環（半欠）出土。G～35北陸系B字状文土器片あり。小石敷列黄色土にくいこみ半円状になっている。
- 7月5日 グリット40付近まで調査、小石敷列西に移動、石多い地点。
- 7月6日 南から6号住まで清掃、石の間古式土師などあり、小石敷石列6号住の確認面上13cmあり、午後県埋文センター土屋、中島、藤沢氏等来訪。
- 7月8日 北からベルトを削平、
- 7月9日 同じ
- 7月10日 高梨氏館跡行
- 7月11日 同じ
- 7月13日 ベルトを削平F～14から南へ作業。2個平板石のあったベルト中央から頭蓋骨検出、外の体の部分はなし、
- 7月15日 グリット30付近実測図、昨日の続きのベルト削平、土器片多数出土。
- 7月16日 雨天休み
- 7月17日 前日の頭蓋骨後頭部上、北に向く。慰霊祭を行う。F～7から北を掘り下げ、G

～9・10黒色土落ち込み住居址確認。G～17も住居址か。平面図実測昨日の続き。

- 7月18日 昨日の続き平面実測。G～5から南東壁面実測、G～5住居址か。G～8須恵、箱清水式土器同時出土。G～9住居址上の土器は古式土師。礫上層にあり。
- 7月19日 平面実測図続行。東壁断面図も続行。G～5に溝あり、焼土塊、箱清水式土器片、縄文前期末竹管円形貼付文の土器片出土。ここに7号住確認、床面上小さい礫が見られ、炭片多く焼土広がっていた。
- 7月20日から作業休み23日から高梨氏館跡調査、
- 10月1日から調査再開、午後から草刈、トイレの位置を変更。シート剥ぎ、遺構再確認。
- 10月3日 6号住掘り下げ、東壁石層の中に古式土師混在。床面上でアメリカ式石鏃2個検出。一辺5m程の隅丸方形の住居址と確認。
- 10月4日 6号住G～32の部分掘り下げ、土器片加工紡錘車出土、大形甕、小形甕2出土。箱清水式の古い段階の住居址とみられる。
- 10月5日 6号住G～32の部分を床面まで掘り下げ、壺口縁・赤彩鉢・注口鉢・甕など出土。床面までの東断面最深110cmを計る。
- 10月6日(日)7日雨のため作業中止。
- 10月8日 6号住掘り下げ、清掃、5号住確認、掘り下げ、3号住確認。
- 10月9日 2号住、8号住(F～19・20)半分掘りこみ、床面に炭化物、小形鉢あり、2号住1辺4mの方形。5・6号住清掃土器洗い。
- 10月10日 6号住アメリカ式石鏃1出土(合計2)青緑色のガラス小玉1出土。土器清掃写真撮影。2号住清掃、5号清掃、ベルト掘り下げ写真撮影。
- 10月11日 6号住・1号住水糸方眼実測。溝、中世の道の発掘。1号住東複合か。午後雨で休み。
- 10月12日 6号住・2号住ベルト断面測図、1号住掘り下げ重複を確認、9号住掘り下げ、古式土師期の住居址か。
- 10月13日 雨休み
- 10月14日 6号住清掃2・3号住掘り下げ、9号住の東側拡張、上層に古式土師器出土、4号住東拡張掘り、6号住測量。
- 10月15日 6号住測量続行、1・4号住掘り下げ、9号住隅丸となる。東側から器台・小形甕出土。
- 10月16日 4号住床面叩き締めになっている。床面に黄色粘土あり、搬入されたもの。5号住実測、9号住清掃、写真。4号住G～17南壁床面上石槍出土、7号住東壁を掘りプラン確認焼け土多し。
- 10月17日 7号住北掘り下げ、1・4号住清掃、2・3号住実測、レベル落とし、柱穴掘り、7号住土層深し、土器片多い。

- 10月18日 7号住土坑状溝掘り下げ、道の跡、溝掘り下げ、1・4号住下層に縄文前期末諸磯B式の木の葉文の浅鉢片あり、1号住の西側拡張。清掃、写真。
- 10月19日 7号住甕片出土、炭、焼け土南壁に多く焼失家屋とみられ、屋内に広がる様子。北南に半分の検出面積で、炭化材が葉脈状になっていた。4号住掘り下げ、1号住を埋めていた。
- 10月21日 7号住焼け土、炭化材清掃写真。焼け土は屋根に載っていた可能性あり。4・6・9号住実測図、9号住南・西側溝回る。支柱穴3箇所、炉縁石2個あり、古式土師の甕・高坏器台などあり。
- 10月22日 7号住炭化材層掘り下げ、焼け土厚さ10cm、焼け土中に箱清水式土器片あり、西端より紡錘車出土、焼け土南、西南壁側に多く堆積、下に炭化材層、壁焼けて堅い箇所あり、東側の壁で床面まで最深150cm埋没。9号住レベル落とし、写真。1・4号住ベルト削平、実測図。
- 10月23日 7号住ベルト削平、排土片付け、北側を拡張掘り下げ、床上の黒土層に古墳時代2～3期の大甕展開、遺構確認困難。コンテナ小屋移動、1・4号住土器取り上げ、柱穴掘り下げ、1・2号住断面実測図。溝、道の跡測図。
- 10月24日 G～2からA～2間の耕作土排出、7号住の北、昨日の続き床面上30cmに土器集中、検出土坑1×3mの規模、黒土充填、内黒土器出土、G～2からH～2K間に焼け土2.5mあり、8号住か。同所北に縄文前期後葉下島式の深鉢、地表下30cmにあり。東西方向に溝東の7号住まで続く、F～3の底より10cm上から珠洲焼片出土。
- 10月25日 雨で休み
- 10月26日 A～G間の溝掘り下げ、G～2上層土師器出土。第2期発掘予定地にテープを張る。
- 10月28日 7号住北部分掘り下げ、溝測図、8号住の上層40cmに柱穴3箇所発見、西側に畑から出た石を埋めた坑あり、石を取り上げる。床面は叩き締め、6号住土器取り上げ。
- 10月29日 7号住南北（1辺）8mとなる。溝は西にあさく伸びて道路まで続く、途中に道の跡横断している。8号住の南に箱清水式の土器集中。6号住の柱穴確認、火床あり。
- 10月30日 7号住炭化材写真。西側の溝掘り下げ、2筋平行となる。土塁の跡か。道東の10号住掘り下げ、8号住の地床炉、粘土塊検出。第2期分表土排出開始。
- 11月1日 A～G間の溝に柱穴あり、炭・土器片出土。8号住北端に11号住僅かに複合。石の埋め穴6×5mの規模、10号住は黄色・黒色混合土に厚く覆われる。縄文前期後葉土器あり、7号住実測図、8号住土器取り上げ、柱穴掘り。第2期分グリット設定。
- 11月2日 10号住掘り下げ、8・11号住掘り下げ、F～59古墳時代土器集中、F～44から46の北1mにかけて、(道の下)石の埋めた大きな穴あり、12号住南東水の流れた跡、砂の道あり。北側にはやや大きい石落ち込み。E～66に北から続く道の跡確認、道面上から珠

洲摺鉢片出土。

- 11月4日 A～G清掃全景写真。7号住炭化層掘り下げ写真、柱穴掘り下げ写真。E～68の12号住床面近くまで掘り下げ、石の埋まり多い。13・14号住確認。道跡確認面から掘り広げる。
- 11月5日 7号住実測図。F～64道面上内耳土器破片あり、12号住掘り下げ、この辺の道の跡の幅130～150cm。13・14号住確認の写真。14号住掘り下げ、古墳時代の土器あり。
- 11月6日 A～G実測図、12号住、道の跡掘り下げ、13号住も掘り始める。
- 11月7日 12号住清掃写真。E～60の道の跡掘り下げ、A～G全景写真撮影すべて終了。南上方排土作業。間山区新設道路の起工式。
- 11月8日 13号住掘り下げ、14号住土器清掃、拡張掘り、12号住実測図、ベルト削平、南上方の表土排土、黒色土層深い、水の流れた跡、砂利層、土器集中地点あり。
- 11月9日 14号住のF～59甕片あり、E・F～60に壺・甕出土。16号住甕出土、13号住の北に水流れの跡あり、覆土深い。12号住写真撮影、土器取り上げ、後、柱穴掘り。14・16号住写真、道跡部分掘り下げ、F～54付近の道跡掘り下げ、E～68から南上方表土排土。
- 11月11日 13号住床面まで掘り下げ、14・16号住土器清掃、G～51～56道跡掘り下げ、F～60～66道跡実測図。16号住の土坑・柱穴掘り下げ、中から甕破片出土。18号住平面確認作業、土器多数出土。
- 11月12日 G～50 I 中世の道の補修の跡あり、上下の敷磔の間層10cmあり、F・G～47東西にトレンチをいれる。18号住掘り下げ、器台、箱清水式土器あり、12～16号住写真撮影。12号住の上方にトレンチをいれる。遺構なし。南上方排土続行。トイレとコンテナハウスお宮下に移動する。
- 11月13日 18号住に石と土器の混入多く、古式土師の台付甕・器台と箱清水式土器あり、南西に完形の小形甕出土。19号住南壁確認。E～60T O南上方グリット設定。
- 11月14日 19号住プラン確認写真。掘り下げ、黒色土に石あり、土器片多く箱清水期と推定される。18号住掘り下げ、E～60付近実測図。今年度の発掘予定地点の排土作業終了。
- 11月15日 18号住西拡張掘り下げ、壺破片などあり。19号住掘り下げ、高坏・甕など多数出土。道跡実測図、14号住土器取り上げ。今までの調査から古式土師期の住居址は、堅穴深く、床の周囲に溝を巡らせていることが分かった。
- 11月16日 15号住掘り下げ、古墳時代の土器出土。18号住南西から箱清水式壺・甕2・鉢などがあり、北東に甕・高坏があった。遺物とベルトの写真撮影。17号住掘り下げ、19号住炭化材多し写真。高坏・甕・紡錘車など出土。道跡掘り下げ。
- 11月18日 15号住の中央にある乱流の溝は、床面に達していた。17号住は中世の道下10cmの北側に焼け土あり、北側壁確認できず。14号住は複合。19号住炭化材南東にあつて高坏西縁に、壺東縁に、甕4、屋内にあり、石も多くあり。写真・実測図をとる。

- 11月19日 20号住確認作業は、前日から行方。G～55の15号住北の中世の道の面から無文の鏝銭1枚出土。18・19号住実測図。17号住掘り下げ、F～63東中世の道から開元通宝1枚出土。15号住床面上掘り下げ、21号住トレンチにて西壁確認。
- 11月20日 14・15・16号住掘り下げ、17号住清掃、写真、実測図。18号写真撮影。19号住実測図、B・C～86から上の遺構確認作業。
- 11月21日 20号住掘り下げ、古式土師期土器出土。15号住ほぼ完掘。21号プラン確認作業。18号住ベルト削平。14・16・19号住実測図。
- 11月22日 22・23号住プラン確認、写真。19号住ベルト削平。20・21号住掘り下げ、20号住の北東壁検出難航。17・18号住清掃、写真撮影。14・16・17号住実測図。
- 11月23日 19号住土器清掃、20・21号住掘り下げ、A～108付近遺構確認作業。14・16・17・18号住実測図、土器取り上げ。21号住は昨日より土器多数出土、完形品もあり。
- 11月25日 18号住柱穴掘り、19号住土器取り上げ、柱穴確認写真撮影。20・21・22号掘り下げ。21号住南に甕・高坏など土器展開。15・19号住ベルト削平、実測図。23～25号住のプラン確認作業。
- 11月26日 22号掘り下げ、15号住ベルト削平、東断面測図。19号住柱穴掘り、20号住ベルト写真撮影。22号住掘り下げ。
- 11月27日 14・16・19号住写真撮影。15号住柱穴掘り、乱流の溝あり。22号住掘り下げ、
- 11月28日 15・17号住柱穴写真。24・25号住掘り下げ、箱清水期の土器あり、周囲に砂利層あり、25号住南側は段状を呈す。19号住実測図。土層断面実測図。中世の敷石道全景写真撮影。
- 11月29日 12～18号住全景写真撮影。19号住柱穴掘り。20号住実測図、ベルト削平、南に貯蔵穴、柱穴に器台あり。22・23・24・25号住掘り下げ、22・25号住土器多数あり、26号住確認作業、乱流の跡あり、黒色土の部分は住居址の範囲を示す。A～96～99黄褐色砂層、小石で遺構なし。
- 11月30日 15号住実測図。20号住終了写真。21号住ベルト削平、写真撮影。22・24・25号住掘り下げ、23号住土器写真撮影。26号住確認写真、掘り下げ。
- 12月2日 24～26号住掘り下げ、23号住ベルトの写真、壺・台付甕・高坏あり。24号住壺、25号住高坏検出。17号住実測図。
- 12月3日 中世の道実測。これは19号住の北で、真つすぐ南に延びていた。24・25号住写真撮影。25号住東縁に甕展開。26号住西拡張掘り、23号住実測図。中世の道実測、24号住東壁、26号住東西壁断面削り。
- 12月4日 21号住柱穴掘り、19～21号住全景写真。20号住柱穴断面実測。24号住柱穴掘り、遺物写真撮影。23号住ベルト実測、削平。26号住遺物写真。27号住確認写真。
- 12月5日 27号住掘り下げ、中央に粘土あり、石礫多く埋まる。甕・ミニチュア土器出土、



古墳時代の住居址。24～26号住ベルト、土器実測図。22号住清掃。27号住掘り下げ。24・27号住の東壁断面の観察によれば、住居南側上に小さな周堤があった可能性あり。

12月6日 23号住土器取り上げ、ベルト削平、写真撮影。24号住土器取り上げ、柱穴掘り。

25号住実測図。26・27号住ベルト削平、写真撮影。

12月7日 24号住全景写真。25号住柱穴ほり、写真撮影。26・27号住土器実測図、ベルト削平。

12月9日 24・25号住柱穴実測図。26・27号住柱穴確認、掘り下げ。写真撮影。26号住の地床炉西側、赤く焼けて固まって盛り上がっている。

12月10日 26号住実測図、東の壁全般実測図。

12月11日 東の壁実測終了。今年度の現地調査終了。

## 1992（平成4）年度

### 間山遺跡発掘調査日誌

6月17日 間山豊富神社から南の道路の試掘を行う。支線1・2号は、分布調査の結果、遺物が多く、全面発掘と決定する。本線は、約10m間隔に試掘坑を掘って、遺構・遺物の状態を調べ、農作業との関連で、発掘地点の選定順序を行う事とした。

この結果、A・B・Cの調査必要箇所が生じた。

6月24日 支線1号にテント設営。

6月25日 試掘を行う。重機にて表土排土。

6月26日 排土作業終了。青磁の見込み花文の碗破片、五輪塔地輪出土

6月29日 間山区工事関係者と発掘調査安全祈願祭と、調査団の結団式を午前9時より行う。プレハブ小屋、テント設営後、トランシットを使いグリット確定作業と、南側の壁断面の削りを行う。

6月30日 東より地山まで削平作業。に～29に土坑墓と思われる円形の小石の詰まった土坑を検出、写真撮影後、掘り下げる。遺物なし畑の石の埋めた跡と推定された。

7月1日 は～26から23まで削平作業。昨日の土坑の半分掘り下げ、写真、実測を行う。

7月2日 土坑の詰まった石取り上げ、清掃、写真、実測を行う。ろ～22に縄文前期土器片あり、住居址にしては、小さい方形の落ち込みである。

ろ～17・18の弥生住居址プラン確認。28号住居址とする。写真と実測を行う。

7月3日 ろ～22の縄文遺構実測。28号住清掃、写真撮影、後、床面まで掘り下げる。紡錘車出土、土器製作用の粘土あり、ろ～13の遺構確認調査に入る。

7月4日 1号住ベルト実測、ろ～13・14・15の削平作業、28号住床面の実測、ろ～11に29号住検出、清掃。ろ～6～12削平作業。

7月6日 28号住柱穴掘り下げ、29号住掘り下げ、昨日の続き削平作業。

- 7月7日 28号住柱穴掘り下げ、清掃後写真、実測終了後、西側の後世の落ち込み（円形2連）掘り下げ。29号住土器実測、ろ～7・8の土器片実測。
- 7月9日 調査地点の南側断面実測。30号住プラン確認、掘り下げ写真、遺物実測。
- 7月10日 30号住実測、写真、土器取り上げ。1号住柱穴実測、
- 7月11日 30号住ベルト実測、柱穴掘り下げ、全体の南側断面実測。調査地点全体図を作成。
- 7月12日 30号住清掃写真、29号住南側断面実測。支線1号の調査終了。
- 9月21日 間山豊富神社上の本線A排土作業。重機にて表土50cm程度除去。トイレ・コンテナハウス設置。土器片、炭片などあり。
- 9月22日 排土作業と削平、両側の壁削り。箱清水式、古式土師多く須恵片もあり。グリット設定作業。
- 9月24日 B・C～10・11に炭片広がる。表土下60cmに31号住確認。1辺4.6mの方形プランで、A・B～4に32号住確認作業平面掘り下げ。
- 9月25日 31号住掘り下げ、南西隅に大形壺が、東に倒れて展開していた。C～2に焼土あり、床面上炭化材、焼け土が覆っていた。柱穴1検出。32号住プラン確認。掘り下げ、黒色土層深く埋まる。
- 9月28日 両側の壁面実測。31号住床面まで掘り、写真撮影。ベルトと土器出土状況実測図。32号住上層は古墳時代土器多く、北陸系目立つ、土器写真。掘り下げ、石、土器片多い。
- 9月29日 32号住上層は、古式土師と箱清水式土器混在。高坏・壺・甕・台付甕など2面土器取り上げ。1号住ベルト削平、実測図、清掃、写真撮影。
- 9月30日 31号住柱穴掘り、西側に溝検出、土坑と火床もあり。32号住土製勾玉、紡錘車出土、西に拡大掘り下げ、一部床面まで掘り下げ。
- 10月1日 31号住柱穴掘り、平面実測図。32号住床面まで掘り下げ、4×6.9mの長方形のプランを呈す。東隅で床面まで地表下120cm、確認面から70cmを測る。
- 10月2日 31号住清掃、写真撮影、この地点もホップ棚の吊線の穴あり。32号住床面まで掘り下げ、土器清掃、写真撮影。ベルト断面実測。
- 10月3日 32号住3面土器写真、取り上げ、柱穴確認掘り下げ。31号住遺構レベル測量。
- 10月5日 32号住床面写真、柱穴掘り。柱穴3箇所確認、西柱間に火床あり、東端に土坑あり。
- 10月6日 32号住昨日の土坑はベット状の窪みとなる。溝が31号住の北から32号住の北に検出する。32号住写真、A地点全景写真撮影。A地点現地調査終了。
- 10月7・8日 A地点埋め戻し。
- 10月12日 B地点重機で表土排土。東側黒色土深い。その北に土器片多くあり。
- 10月13日 削平作業、用地内南北の壁面削り、南壁の3カ所に礫を埋めた所あり、グリット設定。33号住プラン確認作業、掘り下げ、34号住確認、南側に黒色土厚く堆積する。

- 10月14・15日 雨で休み
- 10月16日 33号住は、C～3に確認、古墳時代土器多く、床面が不明瞭につき、物を置く小屋の可能性あり。土器は床面上層に多い。写真撮影。34号は当初の確認プランを変更。土器は破片ばかりで個体なし。C～7に確認。
- 10月17日 33号住実測図、レベルおとし、ベルト削平、土器取り上げ。34号住掘り下げ、東の断面実測。
- 10月19日 34号住土器レベル実測、土器取り上げ、床面掘り。南と東側に溝が回る。重機でC地点の表土排土開始。約半分終了。
- 10月20日 C地点の南の排土作業1日、終了する。
- 10月21日 B地点34号床面清掃、写真。B地点全景写真撮影。34号の遺構・平面・断面実測図。C地点の東側は傾斜のため黒色土深い。35号住A～2に確認、住居の東部分だけ、ほかは用地外。床面まで掘り下げ、土器清掃。南へ削平作業。
- 10月22日 B～34号住柱穴など実測、これでB地点の現地調査終了。高梨氏館跡現地説明会の準備。25日実施。
- 10月24日 35号住写真、実測図。ほか削平作業。午後は雨で整理作業。
- 10月26日 35号住実測図、36号住A～10に確認作業。
- 10月27日 35号住の土器写真、取り上げ、柱穴掘り、4箇所あり、中に土器片、箱清水式期あり、36号住には石集中して埋まる。ここにこちらでは初期の古墳時代に属する鉄鏃が検出され、横に箱清水式の小形甕があった。この南削平作業続行。
- 10月28日 東壁断面図実測。C～13～15に37・38号住プラン複合確認。B地点埋めもどし。
- 10月29日 37・38号住、写真撮影、実測図。土器取り上げ、床面まで掘り下げ。2号住プラン再確認、掘り下げ、加曾利E式の把手、床面上にあり、甕・高坏・壺破片あり、中央部に石が集中埋没、回り少ない。38号住の東南に乱流の跡あり。37・38号住土器写真、38号住の南に壺上半部あり、実測、土器取り上げ。
- 10月30日 37・38号住に箱清水式土器、古式土師あり、37号住の東壁は表土から床面まで112cm計る。写真、実測図。36号住土器実測、ベルト削平、写真撮影。西の畑面から床面まで67cmを測る。38号住は37号住より5cm低い。
- 10月31日 36号住南東に小形土坑あり、小形甕埋まる。主柱穴は1箇所確認、写真撮影、全景写真もとる。36号住柱穴断面、プラン実測図。D地点下見、打ち合わせ。
- 11月2日 支線2号D地点とする。南角から重機にて排土作業、トラックにて土を搬出。アスパラ刈り、リンゴ枝切り、水道の止水工事。東の壁づくり、住居址2確認。
- 11月3日 C地点の埋めもどし。
- 11月4日 排土作業続行、午後早く終わる。壺B～37にあり、グリット設定、削平作業続行。
- 11月5日 グリット設定作業。削平作業、住居址検出。

- 11月6日 住居址確認、用地内で南方から39号住はほぼ完掘。40・41号住複合。42・43号住複合、42号住1/3確認、43号住はほぼ完掘。44号住約1/5確認。45号住1/2確認。46号住4/5確認。39号住からベルト残して掘り下げ、40号住南東に炭があり、焼け土、土器などあった。
- 11月7日 39号住掘り下げ、カップ形高坏・壺など多数出土。40号住焼け土広がる、炭、初期須恵器遡高坏など、41号住掘り下げ、箱清水式土器下層になるに従い土器多い。42号住床面まで深い。
- 11月9日 39～41号住の土器清掃、切り合い確認。午後雨となり、土器洗い。
- 11月10日 39～42号住写真撮影、実測。43号住掘り下げ、焼け土、炭片多い。大形赤彩壺あり、紡錘車2出土、39号住からも出土。
- 11月11日 39～42号住土器実測。39号住ベルト削平。43・44号住土器実測、写真撮影。45・46号住掘り下げ、b～37に合わせ壺棺、大形壺2個肩部で欠いて合わせ、横に小形壺1個あった。44号住床面明確ならず。45号住は黒色土に埋まる、小形甕・壺などあり、42号住表土から床面まで117cmを測る。
- 11月12日 39号住ベルト削平、41～43号住土器実測。45・46号住掘り下げ、写真撮影。壺棺写真、実測。45号住から高坏・壺・甕など出土。47号住を41・42号の西に設定。
- 11月13日 43号住2回目掘り下げ、43号住掘り下げ、西壁確認、床面まで掘る。46号住実測ベルト削平。壺棺内部の土除去、遺物発見されず。
- 11月14日 39・47号住掘り下げ、44号住清掃、写真、掘り下げ。45号住の東側のプラン再確認、掘り下げ。床面焼け土、骨片、炭片、土器片あり、中に小形甕・壺・高坏などあり。壺棺実測、写真撮影。47号住の中央にやや大きい石埋没する。
- 11月15日 間山文化祭で昨年度の発掘した、土器を展示して説明した。
- 11月16日 45号住の南北の長さ7.7mとなる。東北の壁にて大形の紡錘車出土。完形のミニ甕が西北から出土。43号住土器実測、ベルト削平、箱清水式の住居址。47号住床面まで掘り下げ、土器清掃、甕・甑・器台など出土、古式土師期の住居址か。39号住写真、土器実測、ベルト土層実測。
- 11月17日 39号住土器写真、取り上げ。42号住床面まで掘り下げ、西壁面拡張、炉、炉辺石検出。43号住土器、壺写真撮影。47号住写真、掘り下げ。
- 11月18日 39号住床面まで掘り、柱穴間、地床炉あり、焼けこみ少ない。炭は雑木類多い。41号住床面まで掘り下げ、箱清水式末から古式土師期。42号住も柱穴の間に地床炉あり。床面に土器片散乱、南側の切り合い関係を検討する。45号住土器実測、床面に焼け土、骨片・炭あり、木の盤の炭化物あり。
- 11月19日 39号住実測。40・47号住掘り下げ、写真、実測図。42号住の土器写真、実測図、床面まで掘り下げ。この西方にトレンチを入れる。
- 11月20日 41号住ベルト削平、写真、実測図、土器を上げる。42号住柱穴掘り、写真撮影。

- 11月21日 壺棺の掘り方を観察する。41号住土器取り上げ、床面まで掘り、柱穴掘り、写真撮影。小土坑に壺・高坏脚部あり。47号住の北焼け土が覆土する。
- 11月24日 39・45号住実測。柱穴実測図。
- 11月25日 40～43号住柱穴実測。E地点重機で排土作業開始。壺棺の掘り方と隣の土坑写真撮影。
- 11月26日 40～43号住実測、土坑実測。重機の排土作業終わり、下方西から削平作業に入る。グリット設定。平安時代の完形小形坏3個出土、焼け土部分多い。
- 11月28日 D地点全体図作成。C～27に48号住、箱清水式の甕・壺など破片多数ありD～21に49号住検出、カマド、内黒坏などあり、黒色土中でプラン確認焼け土による。
- 11月30日 48号住折返し口縁甕・壺など箱清水式の土器多数あり、凹石が上層にあり。道路拡張用地内にて既存の道路には、遺構がないことが判明した。49号住のカマドの回りに甕・坏2・小型甕など多数あり。
- 12月1日 48号住土器レベル落とし、写真、土器取り上げ、床面まで掘り下げ。49号住プランを確定する。土器清掃、灰釉碗破片などあり。50号住確認掘り下げ、箱清水式期か、焼土あり。
- 12月2日 48号住の床面東に小土坑あり、写真、実測図。49号住写真、実測図。50号住床面まで掘り下げ、焼土あり、床面上に黒色土3～5cmあり、一部石が埋まる。51号住掘り下げ、壁に炭化材あり、床面の炭化材が中心部に向かっていて。甕・鉢2・壺などあり、吉田式期の住居址か。
- 12月3日 51号住土器清掃、写真。49号住実測図、ベルト削平。50号住床面まで掘り下げ、土器清掃、写真。
- 12月4日 49号住土器取り上げ、床面プラン再確認。50号住ベルト断面実測、土器清掃、実測図。51号住ベルト実測図、削平、写真撮影。床面土器の確定。
- 12月5日 49号住柱穴掘り、写真、実測図。床面土器を掘る、B～11K土壇直径1.2m地表から90cmの深さあり、小形坏3個副葬、(後に回りに2個)51号住土器実測図、取り上げ、写真撮影、炭化材当間隔に中心部へ並ぶ、東側がよく残る。床面に後世に攪乱を受けた箇所あり。
- 12月7日 49号住実測図終わり。50号住プラン再確認床面まで掘り下げ、土器片多い。平安期土壇の写真、実測図。51号住床面まで掘り下げ、高坏脚部が北にあり。52号住深く埋没し、トレンチを入れる。
- 12月8日 雨のため土器洗い、接合。
- 12月9日 50号住清掃、写真、実測図。51号住柱穴掘り、写真、実測図。52号住プラン確認床面に焼土、炭片。53号住は、52号住の南にあり、複合して、北側を切られている。52号住の覆土には黄色土混合。この東のE C～10に後世の柱穴検出。

12月10日 50号住土器実測図、取り上げ、柱穴掘り。51号住実測図、柱穴・土坑掘り、実測図、柱穴掘り。西側に甕の破片展開。52号住床面まで掘り下げ、プラン確定、鉢が南から出土。53号住の南中央に平安期土壙が掘られていた。54号住検出、50号住の北西角を切る。床面の差13cm、炭化材、土器多い。

12月11日 52・53号住ベルト実測、削平、写真、実測図。54号住掘り下げ、炭化材、壺破片など出土、写真撮影。午後雪降りとなり、土器洗い。

12月12日 54号住掘り下げ、炭化材は栗その他、南側に柱穴あり、焼土塊もあり、写真、実測図終わり。52・53号住掘り下げ、土器取り上げ、床面まで掘り、52号住の東に土坑あり、中に壺破片埋まる。地床炉西にあり。53号住柱穴2箇所あり、1基は52号住の中にあり。51号住西に柱穴4基、1基中から鉢の破片2種床面から20cm下に埋まる。E地点全景写真撮影。機材清掃、梱包、土器を整理場所に運ぶ。

以後整理作業

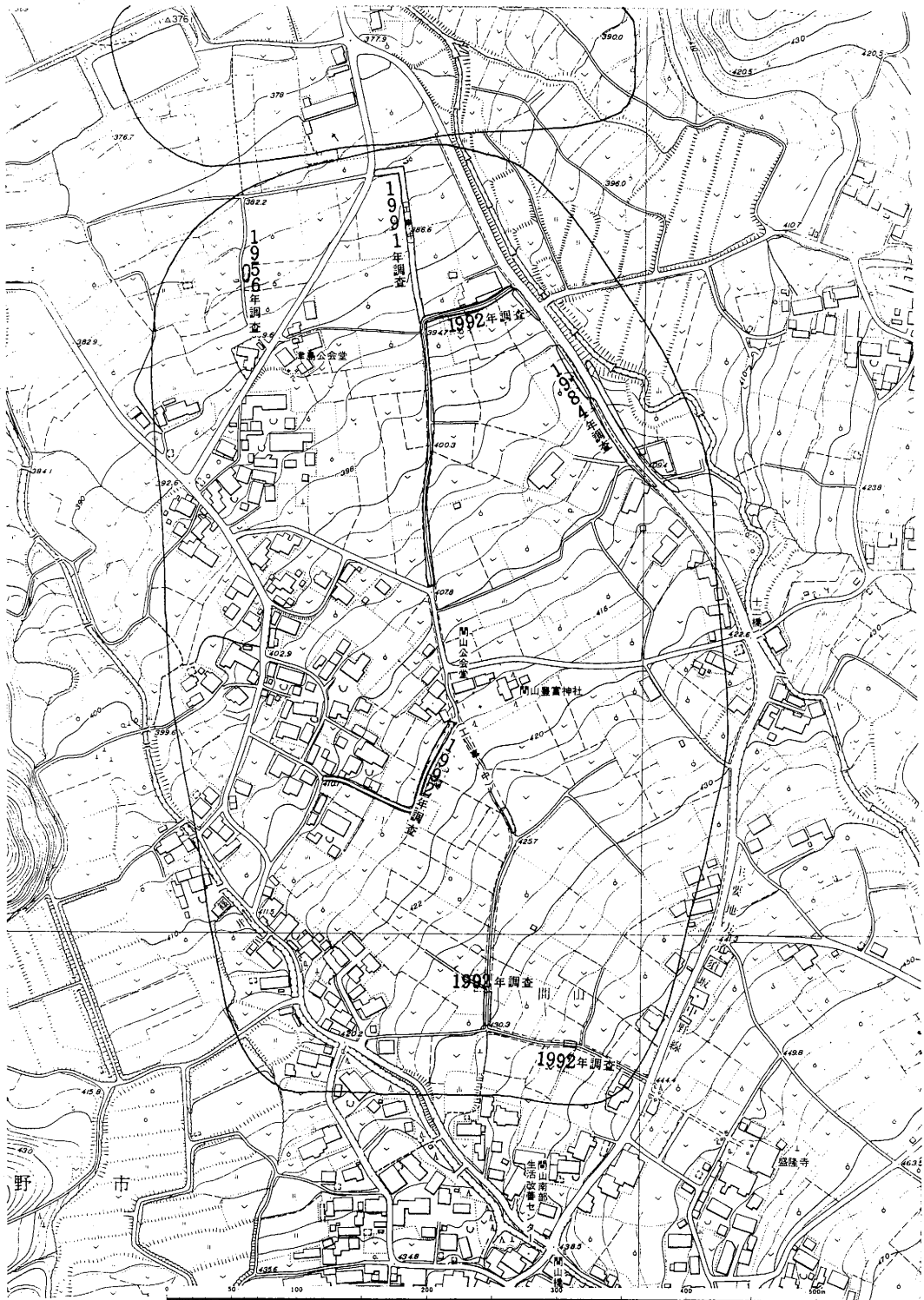


図1 間山遺跡位置図

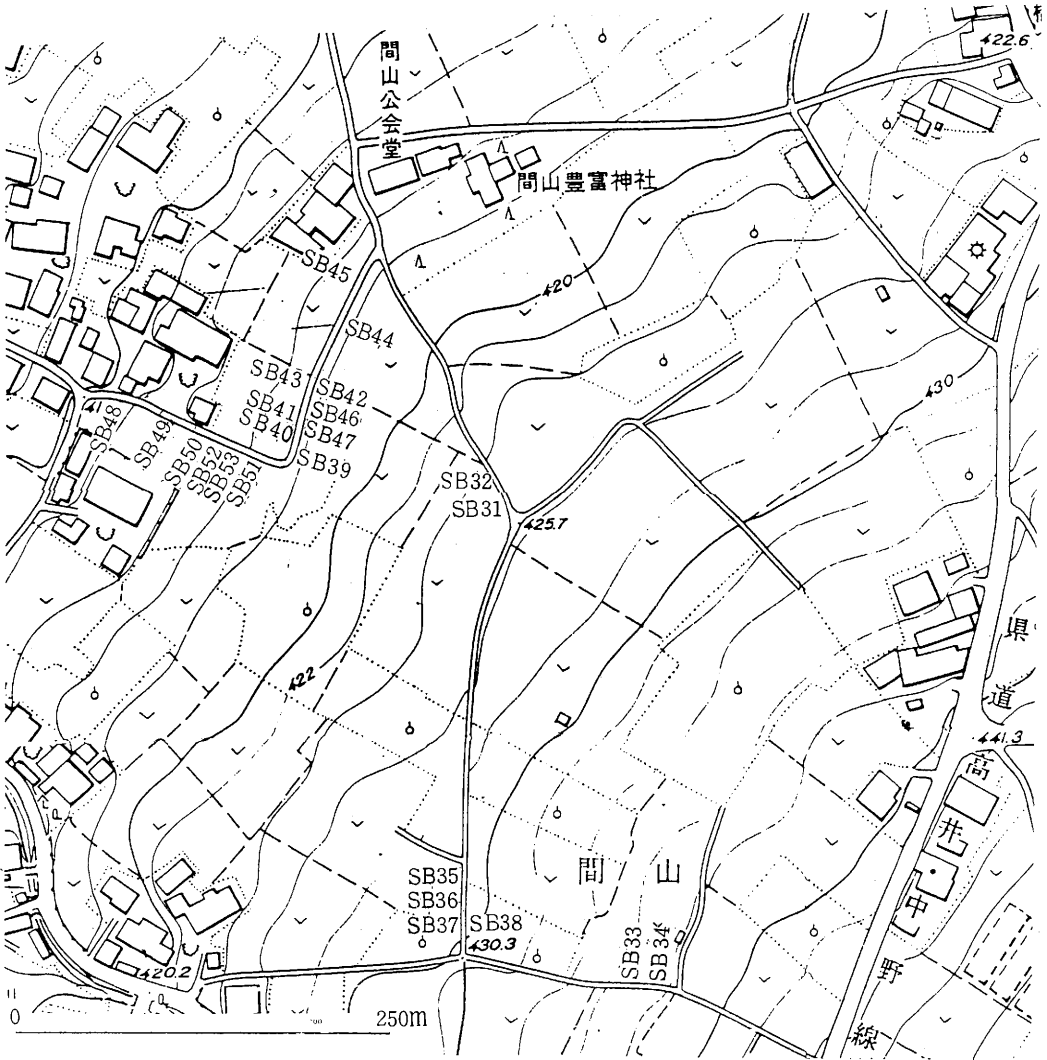
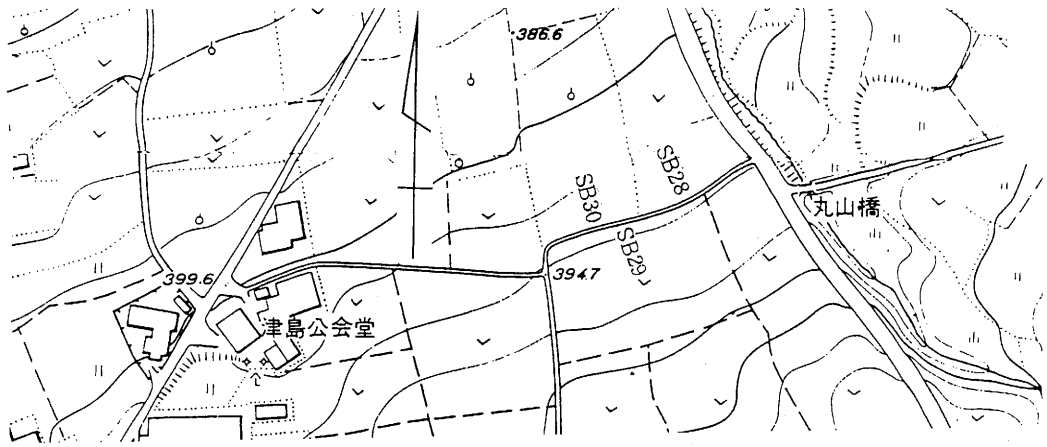


図2 間山遺跡住居址位置図



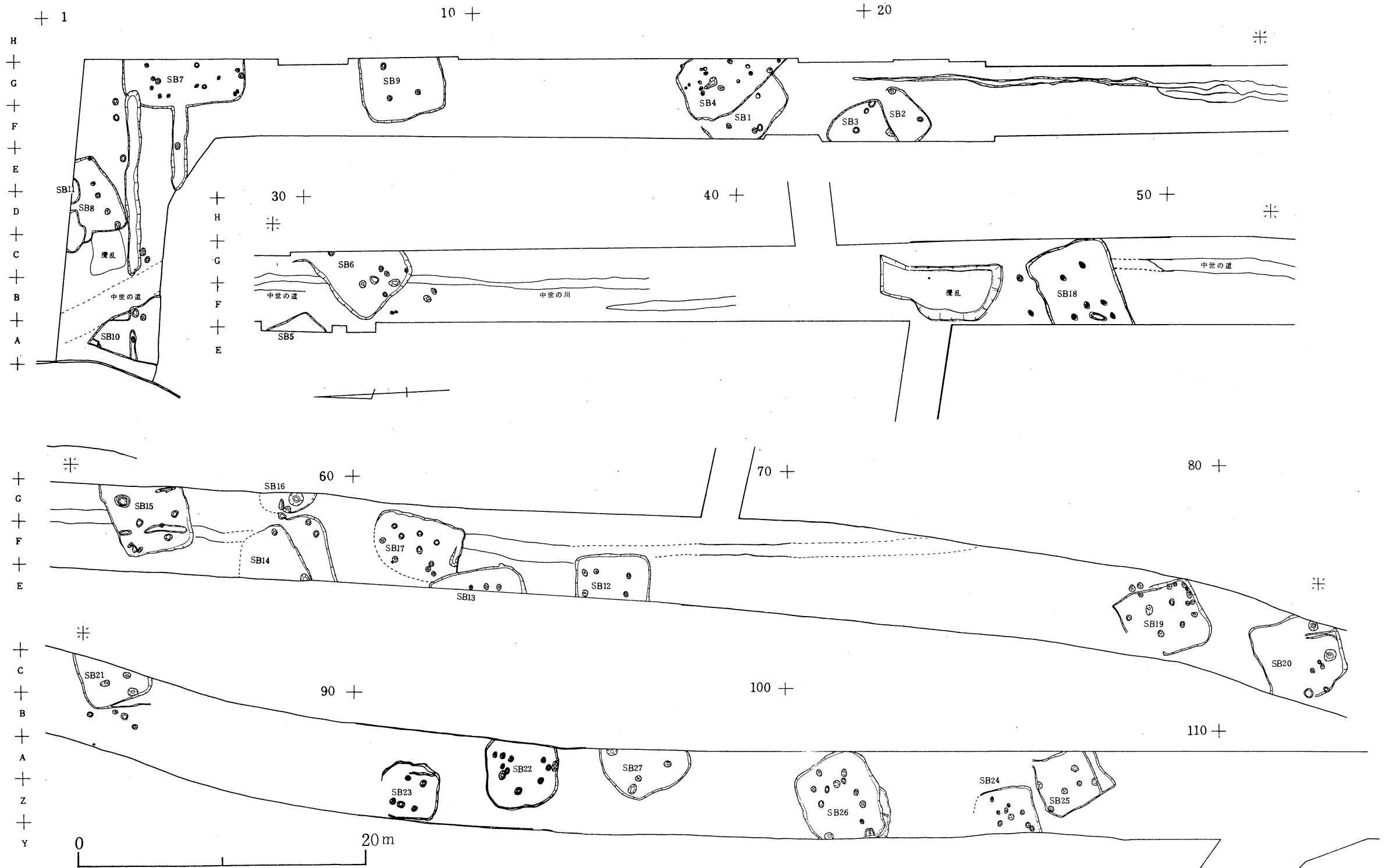


図3 間山遺跡調査全体図 (1)

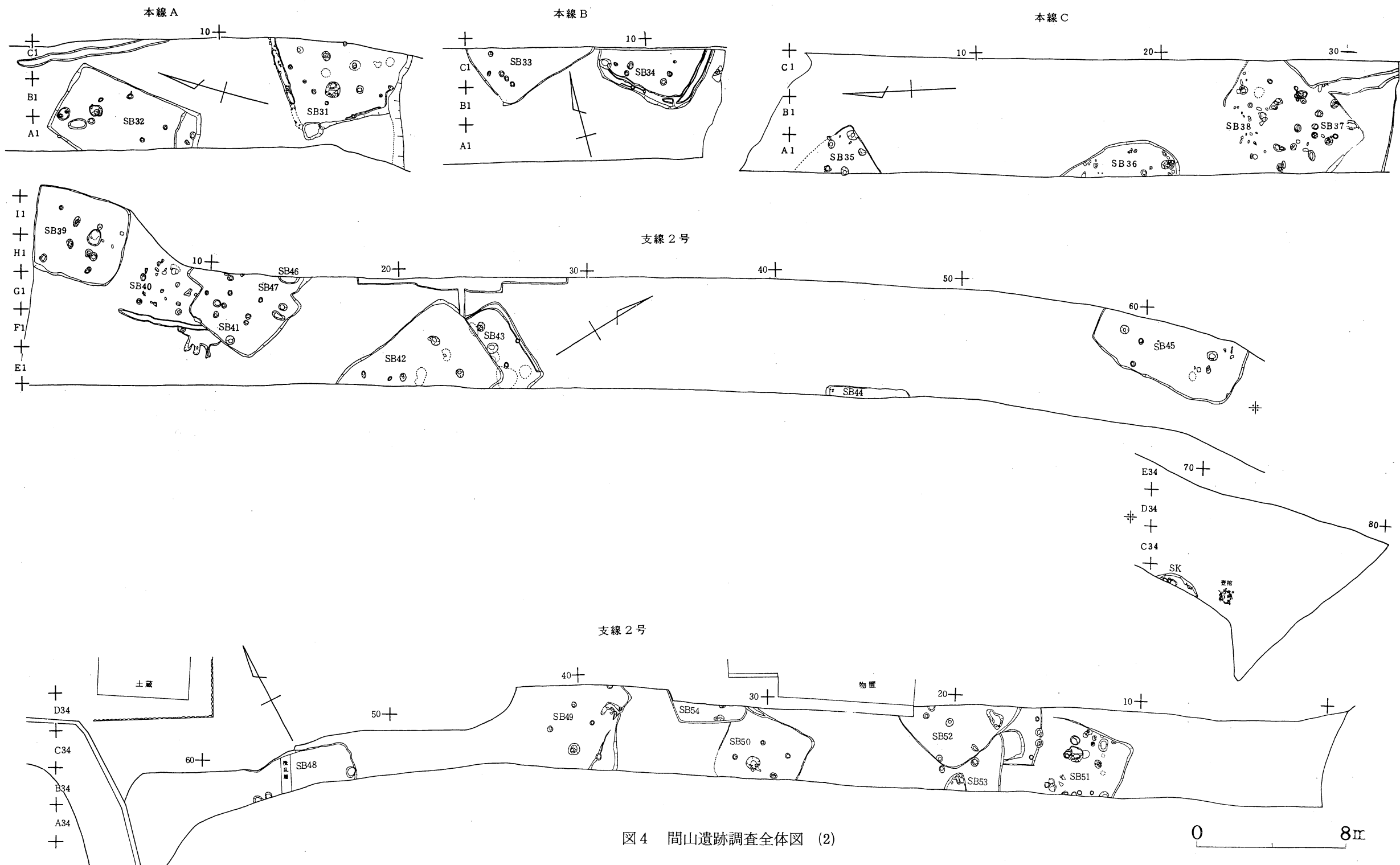


図4 間山遺跡調査全体図 (2)

0 8m

## 第II章 調査の成果

### 第1節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1 遺構

縄文時代の遺構と推定されるのは、支線1号のろ-38~40の落ち込みで、確認面積は4×2.2mで深さは10cm程度であった。この中には弥生時代から古墳時代の土器が混入されていた。しかし床面の土器は、縄文時代前期前葉の関山式平行の在地の土器で、土器の焼成は脆く胎土の中は黒ずんでおり、繊維痕が顕著で、文様は羽状縄文が卓越している。

しかしこの落ち込みの下には、床面として認める根拠がなく、柱穴も検出されず、焼け土の部分もなく住居址として認定するには至らなかった。



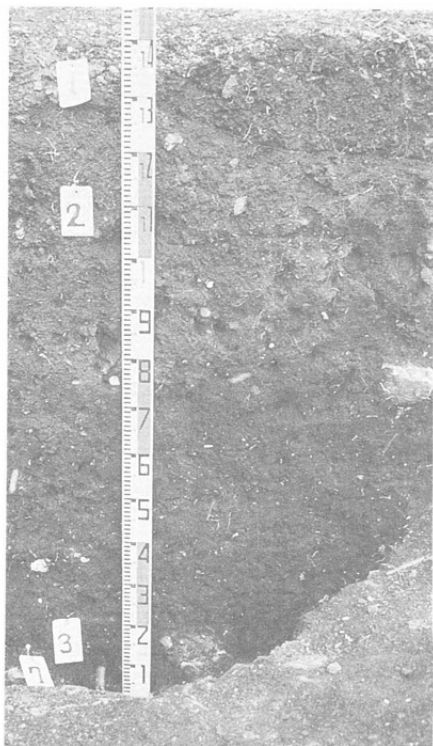
図5 支線1号縄文土坑実測図



↑1 北からみた縄文時代の土坑

### 46号住居址

D地点のB34~35の用地内の東にあって、長さ2.3m、幅0.6mの僅かの検出面積と、遺物の出土を見ないため、所属年代は確定できない。しかし、円形のプランで、落ち込みの壁は傾斜をなし、柱穴なども見られ、土坑の可能性もあるが、縄文の住居址として、取り扱った。



↑ 2 西から  
見た46号住  
(土坑)

→ 3 北から  
見たD地点  
左手前壺棺、そ  
の上46号住、  
右上45号住

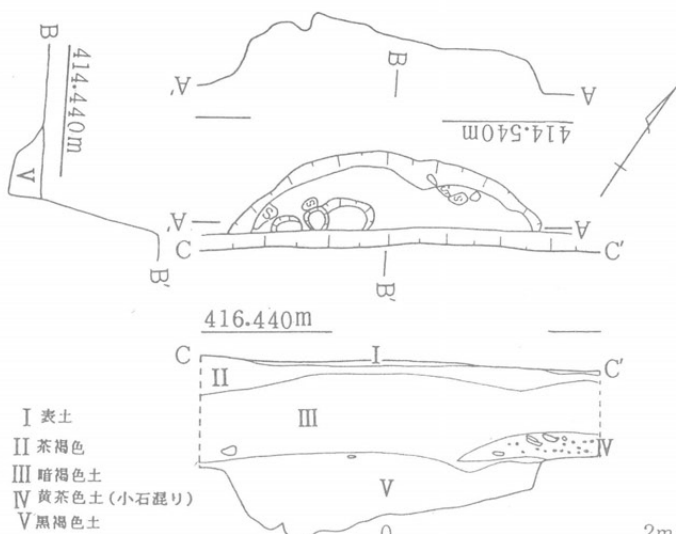


図6 46号住(土坑)実測図

## 2 土器

本年度の調査でも縄文時代の土器が少量出土した。前期の土器は羽状縄文系の土器があり、前に記した。これは1984年の調査でも確認されている。これは十二川沿いに当該期の遺跡が希薄ではあるが、広がっていることを示している。

また今回は、36号住の覆土から加曾利E式の土器が出土し、中期末にも関東系の土器がみられ、僅かながら人が住んでいたことが分かった。

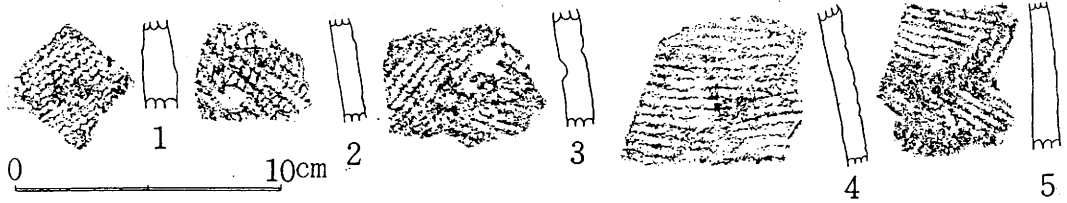


図7 支線1号出土の縄文前期土器拓影図

## 3 石器

兩年度の調査で、間山遺跡からは縄文時代から弥生時代の各期にわたる各種の石器が検出されている。しかし遺構と結びつく資料は少ないため、図示することにとどめ、後に必須の分は、考察の項で記述する。

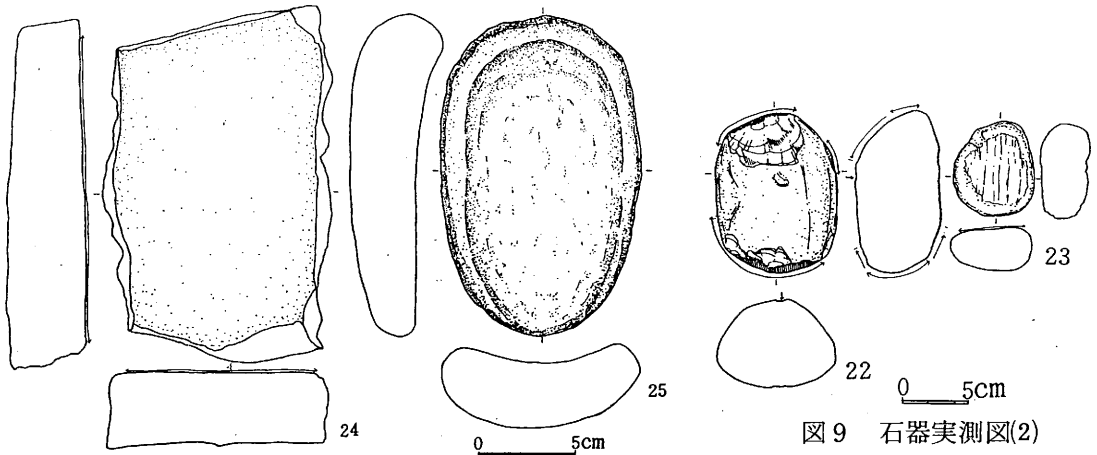


図8 石器実測図(1) (1991年)

図9 石器実測図(2) (1991年)

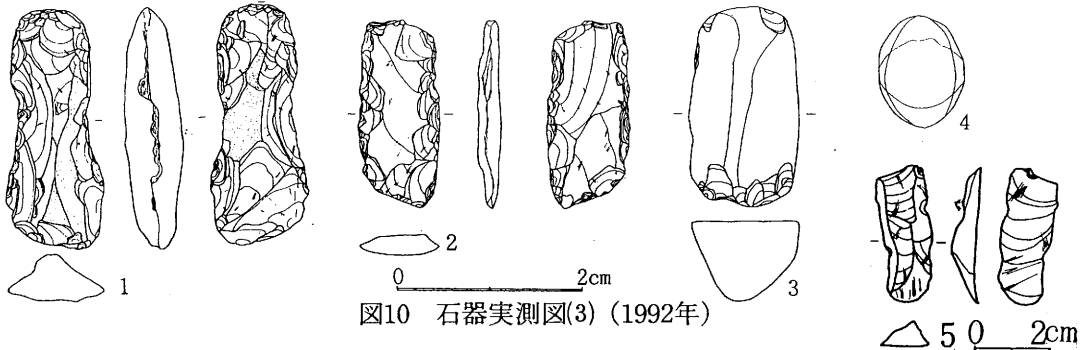


図10 石器実測図(3) (1992年)

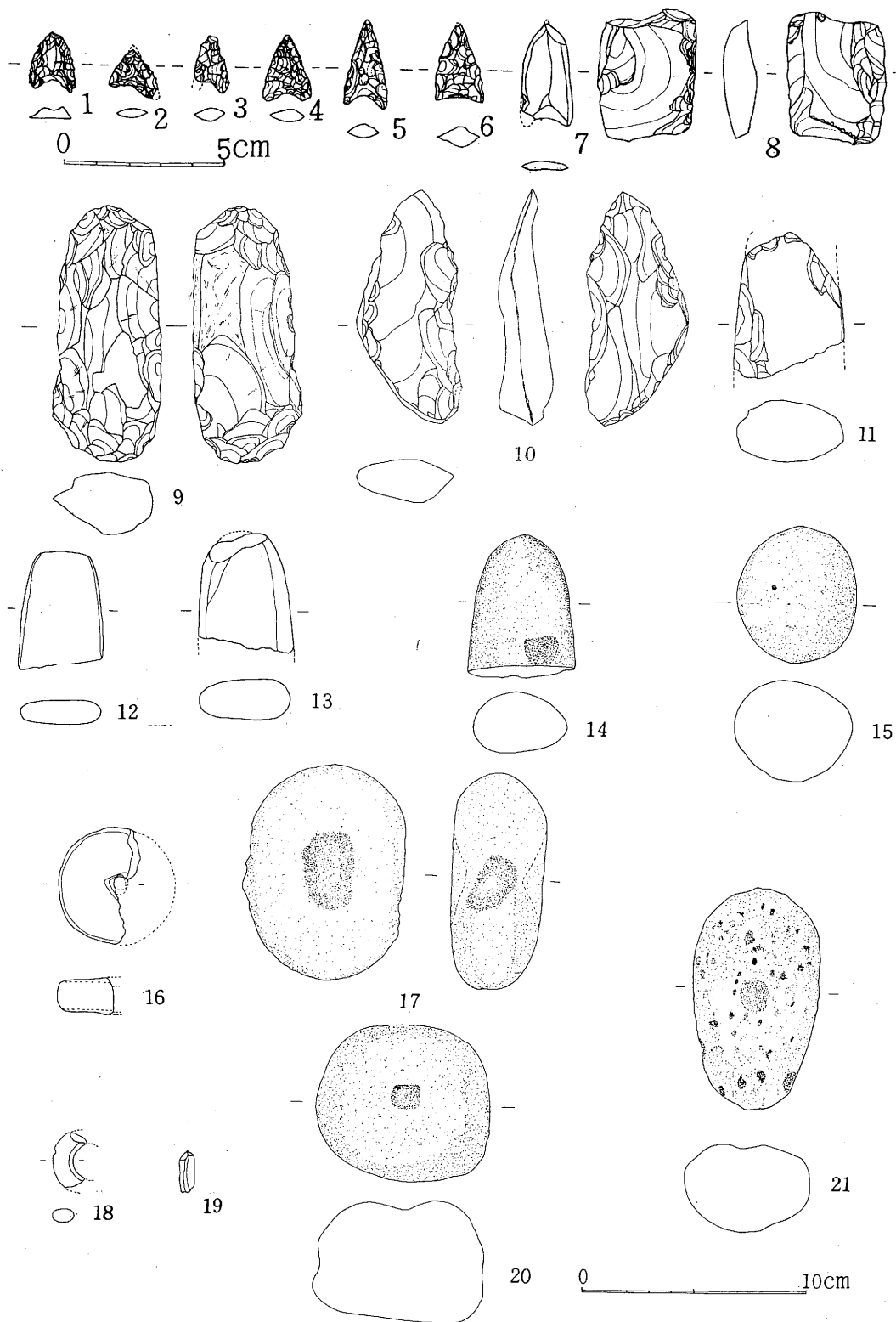


図11 石器など実測図(4) (1991年)

## 第2節 弥生時代の遺構と遺物

### 1 5号住居址 (1991年調査)

5号柱はF29~31の間にあり、6号柱の斜め西北の位置である。検出されたのは東の3.5×2mの部分である。西側の畑表面から床面まで深い位置で、70cmを測る。発見された土器は、甕(12図1)と小破片で、それらから箱清水式期に該当する住居址と思われるが、小面積のため明細を欠く。

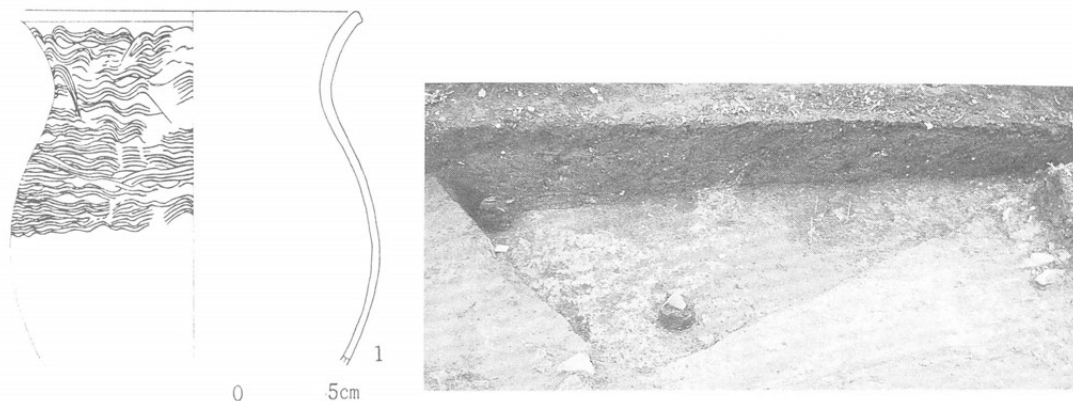


図12 5号住出土土器実測図

↑4 東から見た5号住

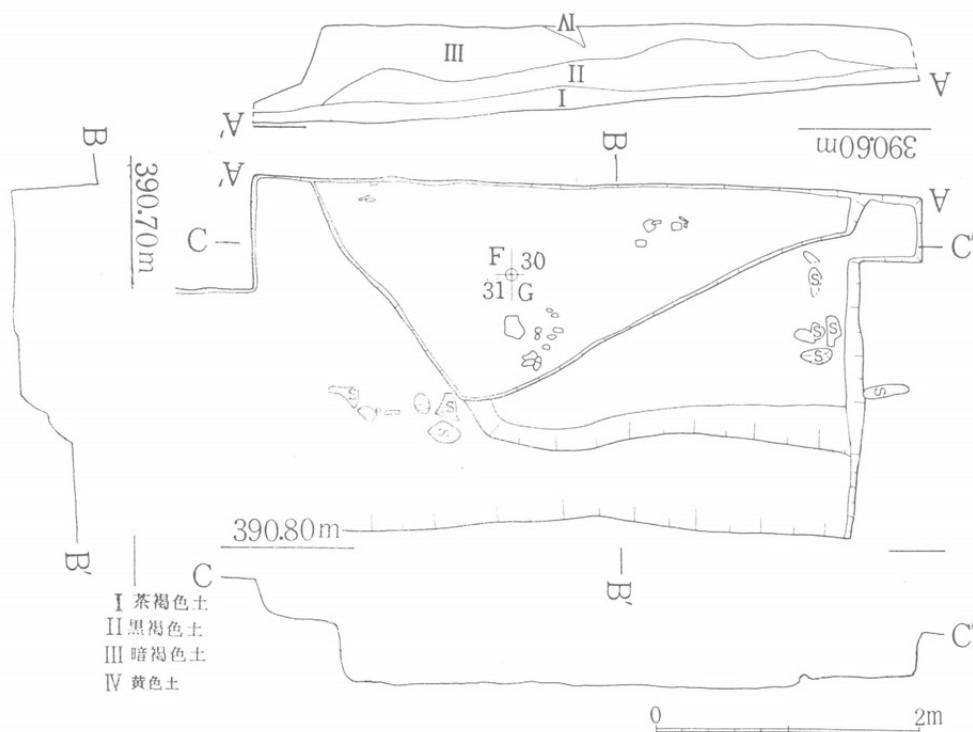


図13 5号住遺物検出図

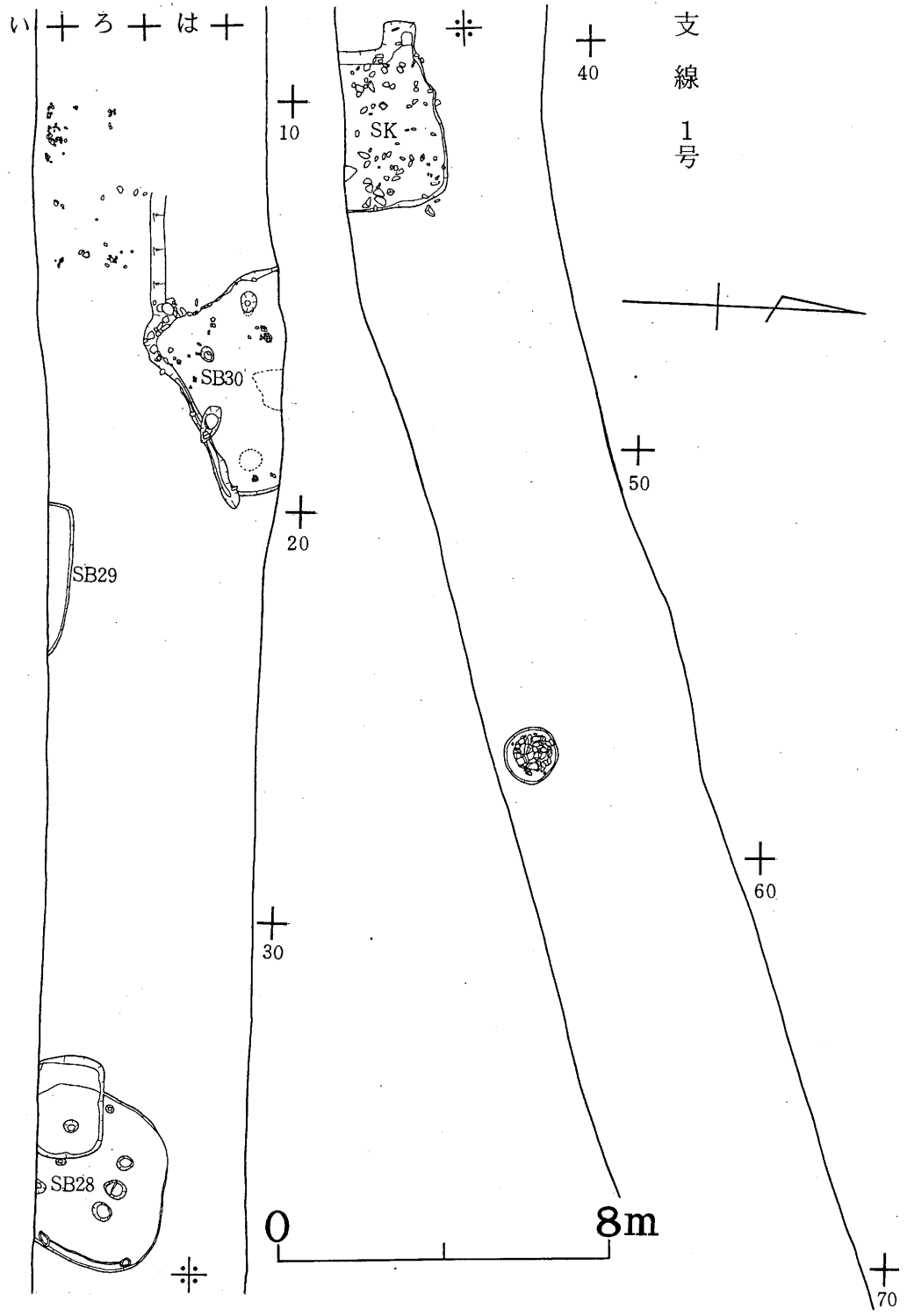


図14 支線 1号調査全体図 (28~30号住)



## 2 28号住居址

支線1号は間山小字森下に位置し、調査地は新設の中央農道と県道須坂～中野線を結ぶ連絡の道路で、延長は約80mである。今までは丸山橋の下から細い馬入れ道（赤線）があった。この所は上下の畑に1m以上の段差があり、北に傾斜している地点である。

28号住はこの中間のろ17～19の間にあり、南側の1/3は用地外で未調査である。また西側に後世の攪乱層があって、直径90cmの円形が2基連なっていた。この回りには、粗悪の黄色粘土がみられた。このことから肥溜めの施設と推定して、地主の方にお聞きしたが不明であった（15図）。

この住居址の1辺は4mで、隅丸方形をなし、上層には古式土師や箱清水式の土器片がみられたが、床面の土器は少なく西方に高坏（16図2）があり、これによって箱清水式期の住居址と知れる。東北には白色の粘土塊が50cm<sup>2</sup>存在した。これらを除去した床面には炭片が広がり、P1～P4が支柱穴で、P1～P2の間に石を南側に伴った、直径50cmの地床炉があり東側に排水溝が巡っている。

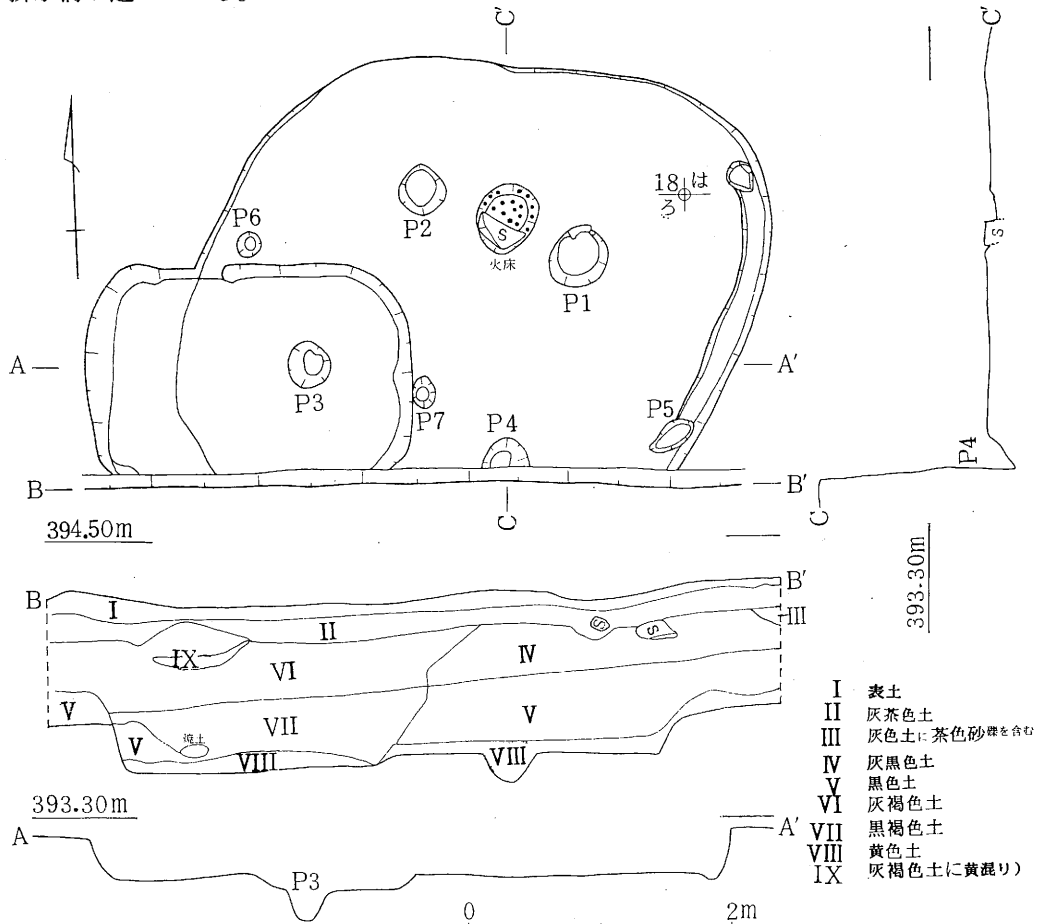


図15 28号住遺構実測図

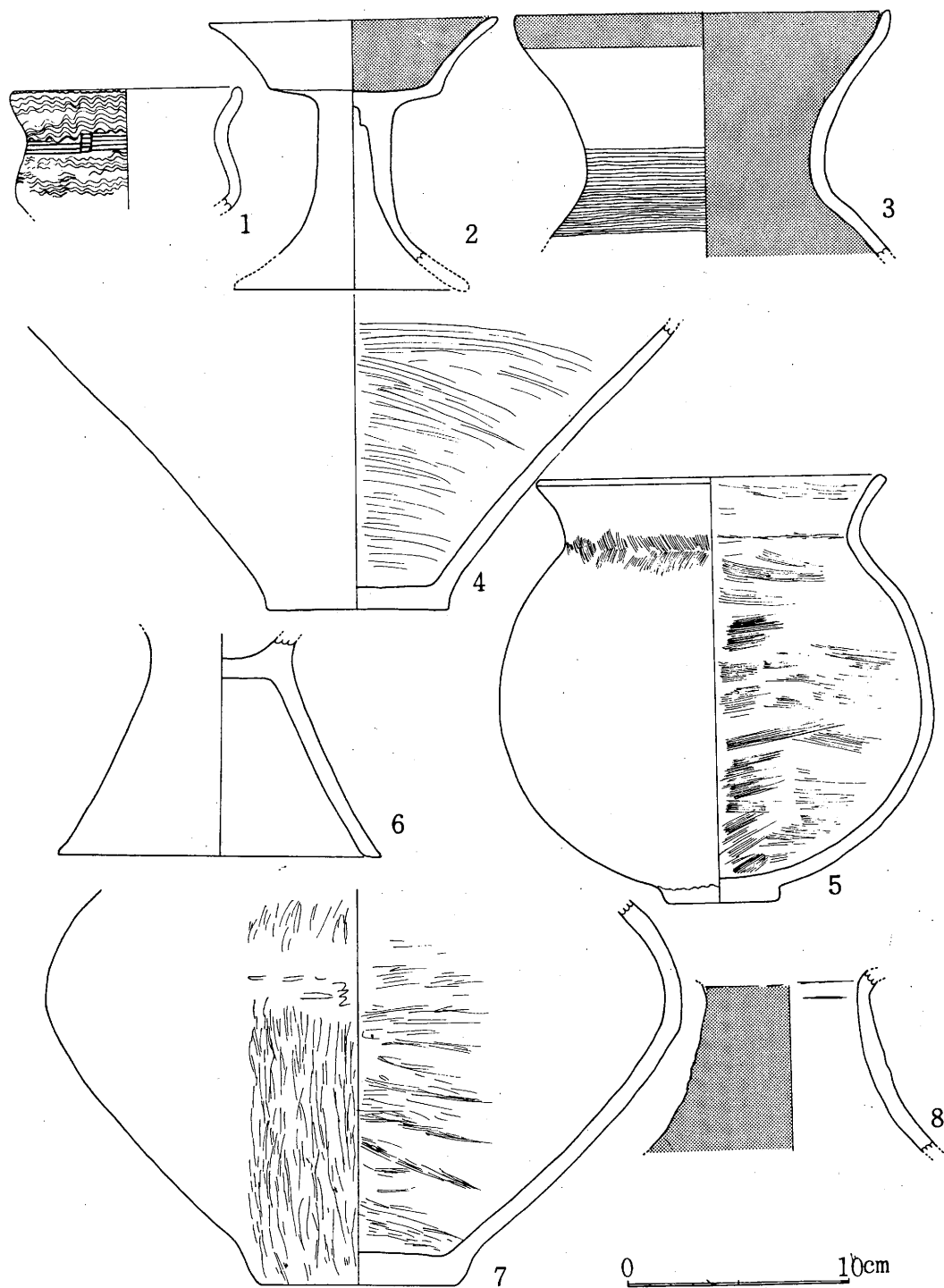


图16 土器实测图（支線1号 28・29・30号住）

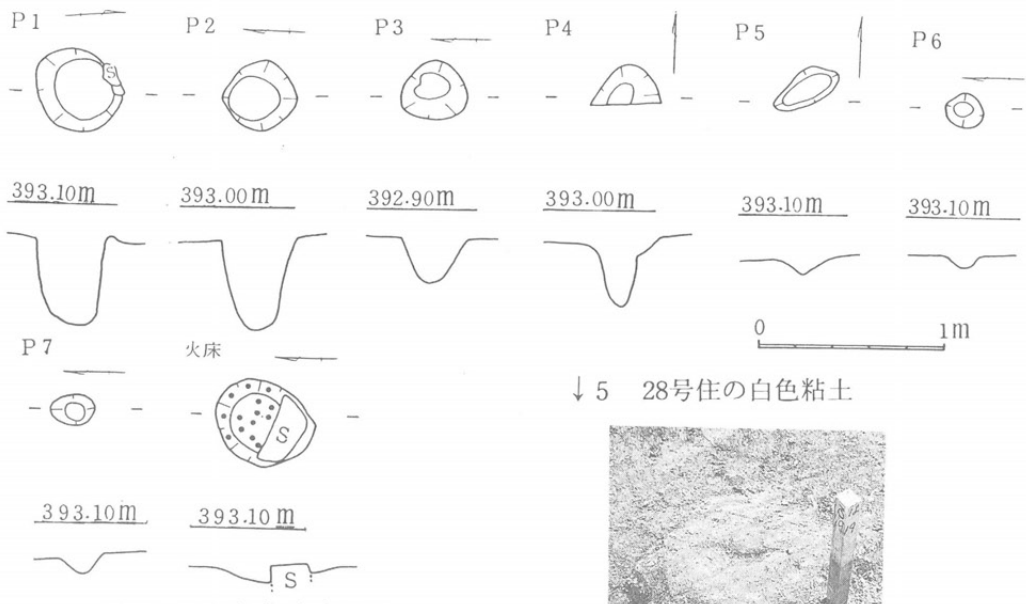


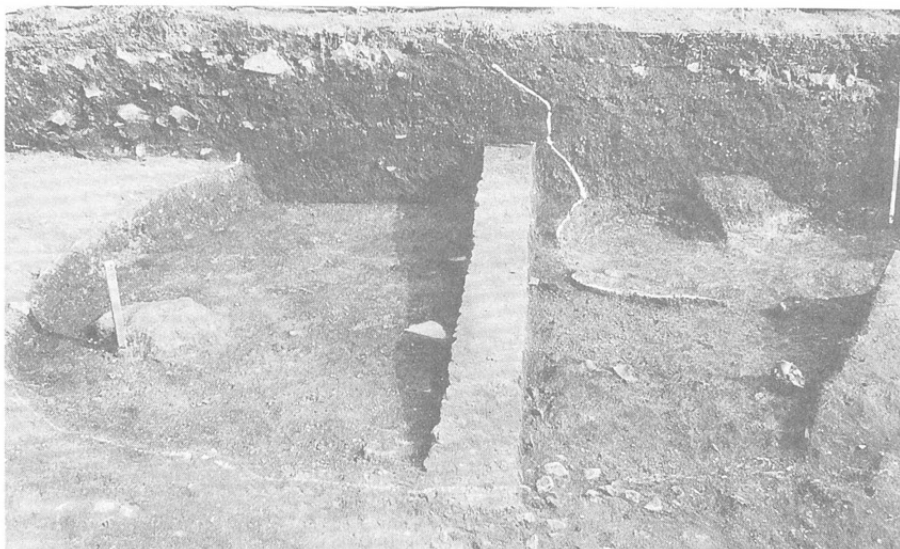
図17 28号住柱穴実測図

↓ 5 28号住の白色粘土



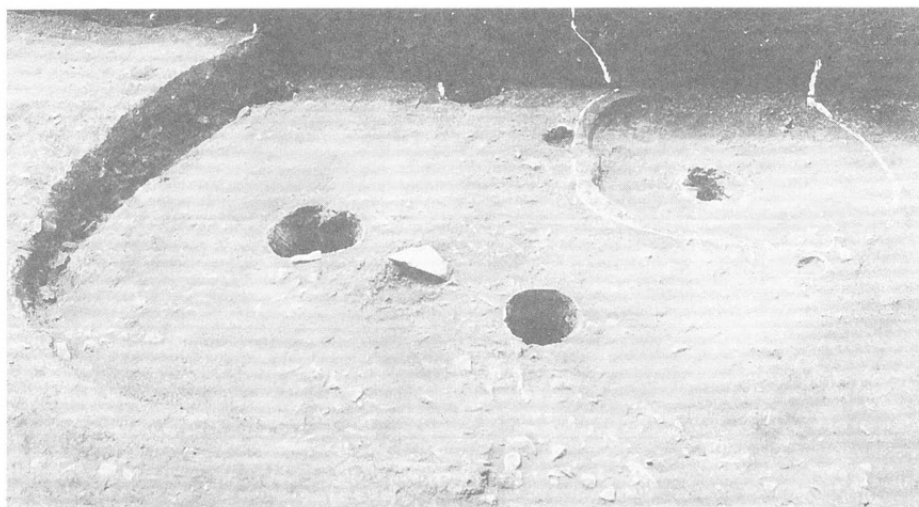
図18 28号住遺物検出図

→6  
西から見た  
支線1号



←7  
北から見た  
28号住の  
遺物

→8  
同上の床面



### 29号住居址

29号住はろ11の位置にあり、南のアスバラ畑面から住居址の床面まで、90cmを測る。この北側の一部が確認されたもので、検出の長さは3.6mである。隅はあまり円くなっていない。この中間の壁に壺破片が3個体存在した。この土器より推定すれば、吉田式の時期の住居址と想定される。(20図) 床面に炭片が多くみられ、焼失家屋と認められた。



↑ 9 29号住北方に検出した須恵器破片

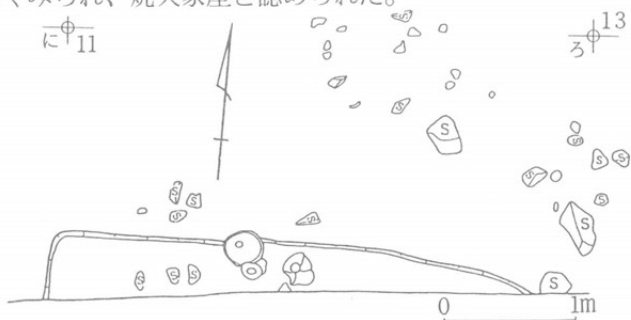
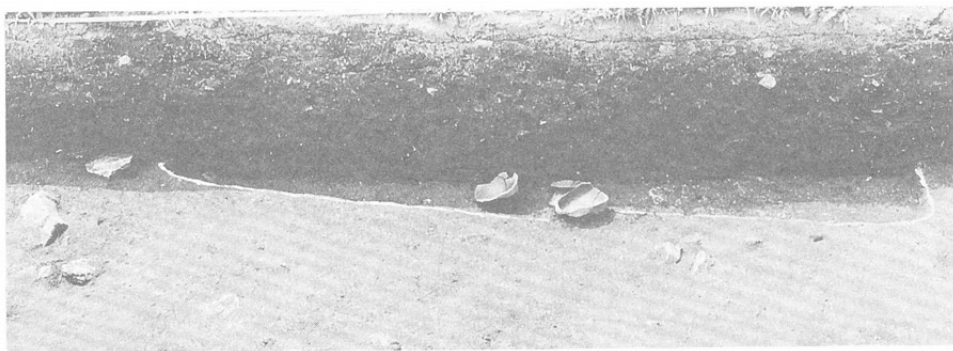


図19 29号住遺物検出図



↑ 10 29号住の土器



↑ 11 北から見た29号住の土器

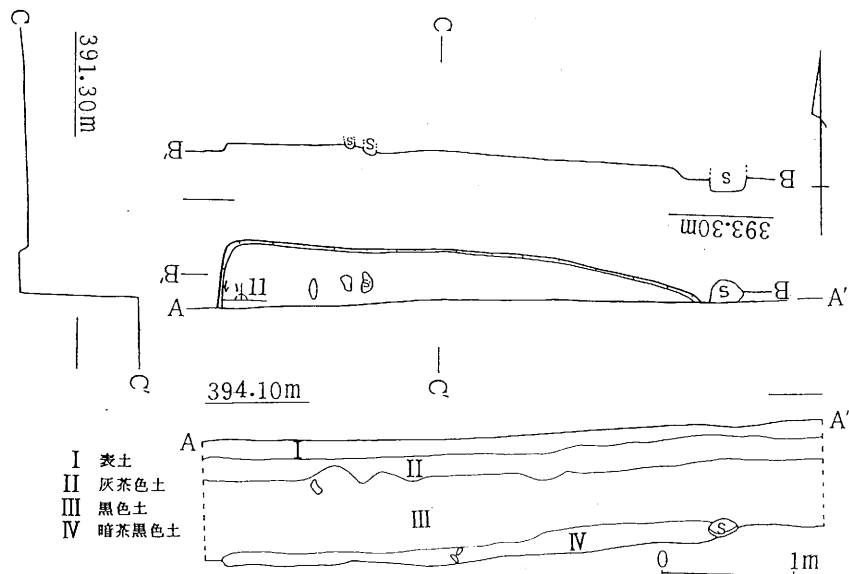


図20 29号住遺構実測図

### 31号住居址

間山豊富神社から上（東南）方の遺跡の広がりについては、従来あまり具体的に知られていなかった。今回の調査で、中野市の遺跡地図の範囲から、さらに拡大した遺跡の姿が、判明した。

31号住は本線A地点のC 9～11の間に確認された。ここは表土から下は石礫の多く含んだ土

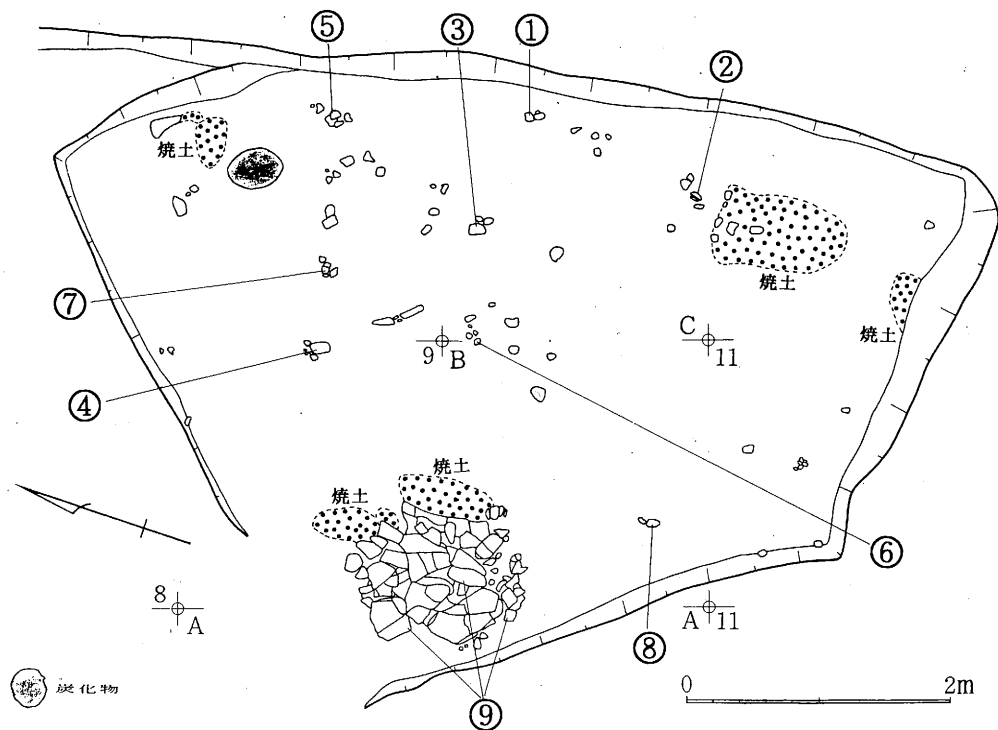


図21 31号住遺物検出図

層である。地表から60cm下に床面が見られた。

北東は用地外で、東は水道の配管の関係で、発掘できなかった。この断面には古式土師から箱清水式の土器片が床面上層に見られた。

この住居址は1辺4.6mの隅丸方形のプランで、床面に焼けた土、炭片が広がっており、焼失家屋であった。これは西南隅に東に向かって倒れていた大壺（25図）の破片が焼けて変色していた。このほか台付甕（24図8）甕（同図4）鉢（同図7）などがあり、箱清水式期の所産

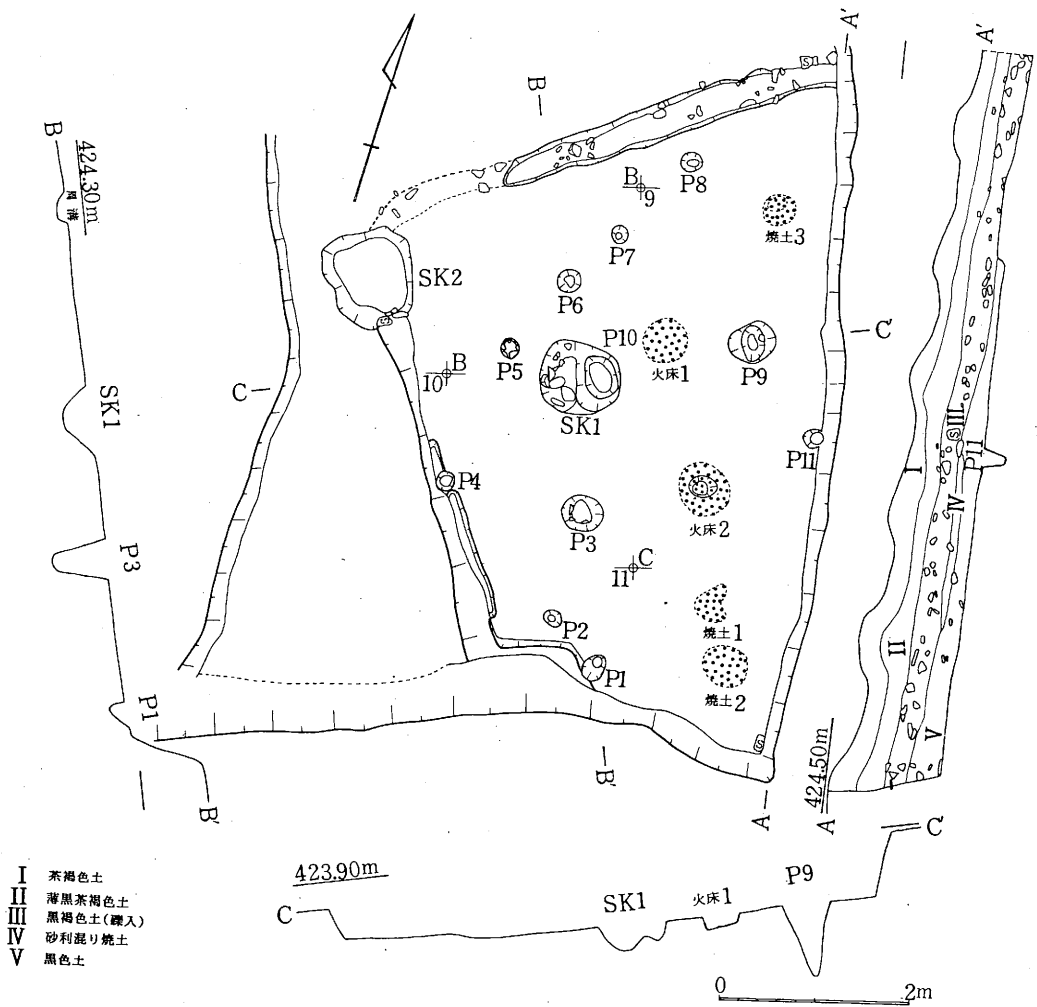


図22 31号住遺構実測図

産である。このほかに淡赤色の壺の胴部破片（同図5）があり、ここに突帯3条がつく、これは胎土・焼成からみて北陸系の外来土器で、北加賀の法仏式に認められるものである。

床面の西側に溝があり、P 9・P10が支柱穴と認められる。しかしP 3とP11が組んで支柱穴とすると、梯形の組み合わせとなる。

P10はSK 1と重なり、南西隅にはSK 2がある。火床は5箇所あり、地床炉は中央にある直径50cmの火床2とP 9～P10の間にある直径45cmの火床1でこれは線がはずれている。

→12  
西から見た  
31号  
住の遺物



→13  
同上の  
床面





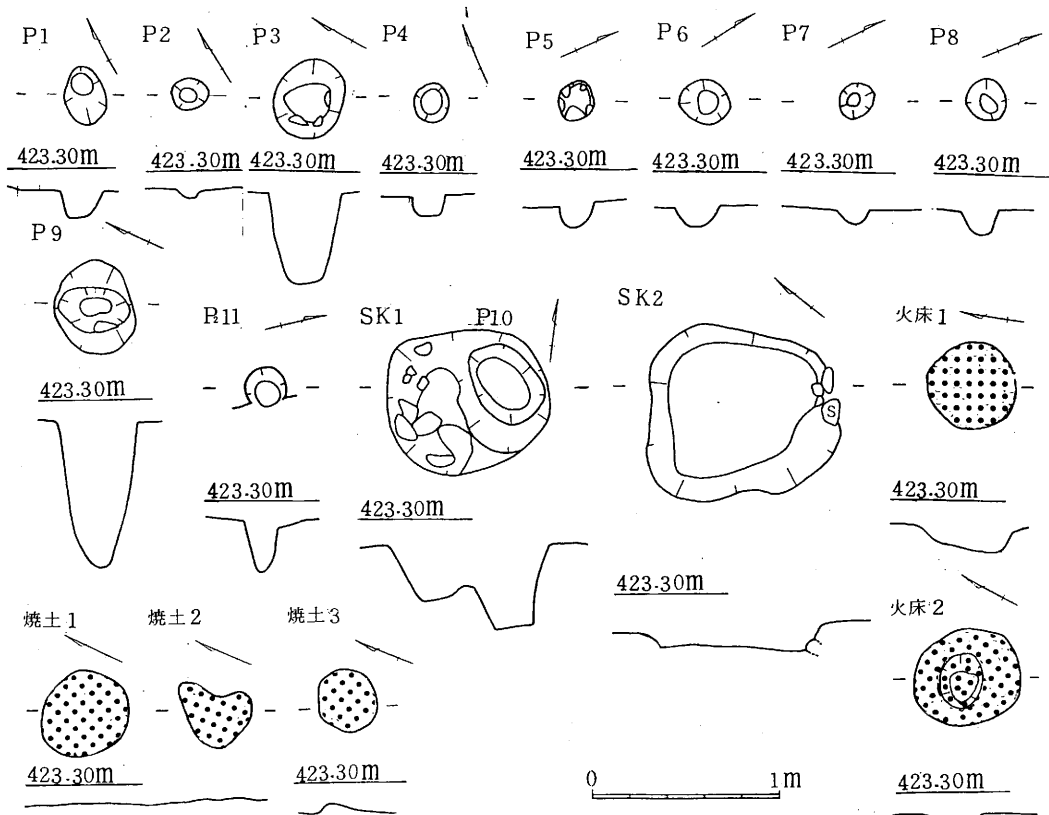


図23 31号住柱穴など実測図

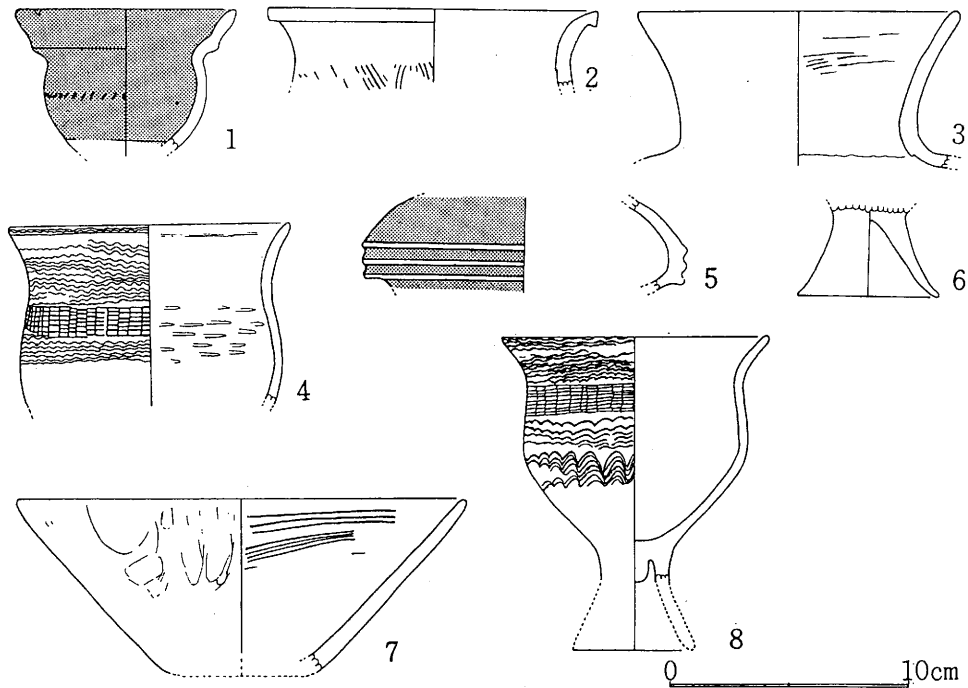


図24 31号住出土土器実測図(1)

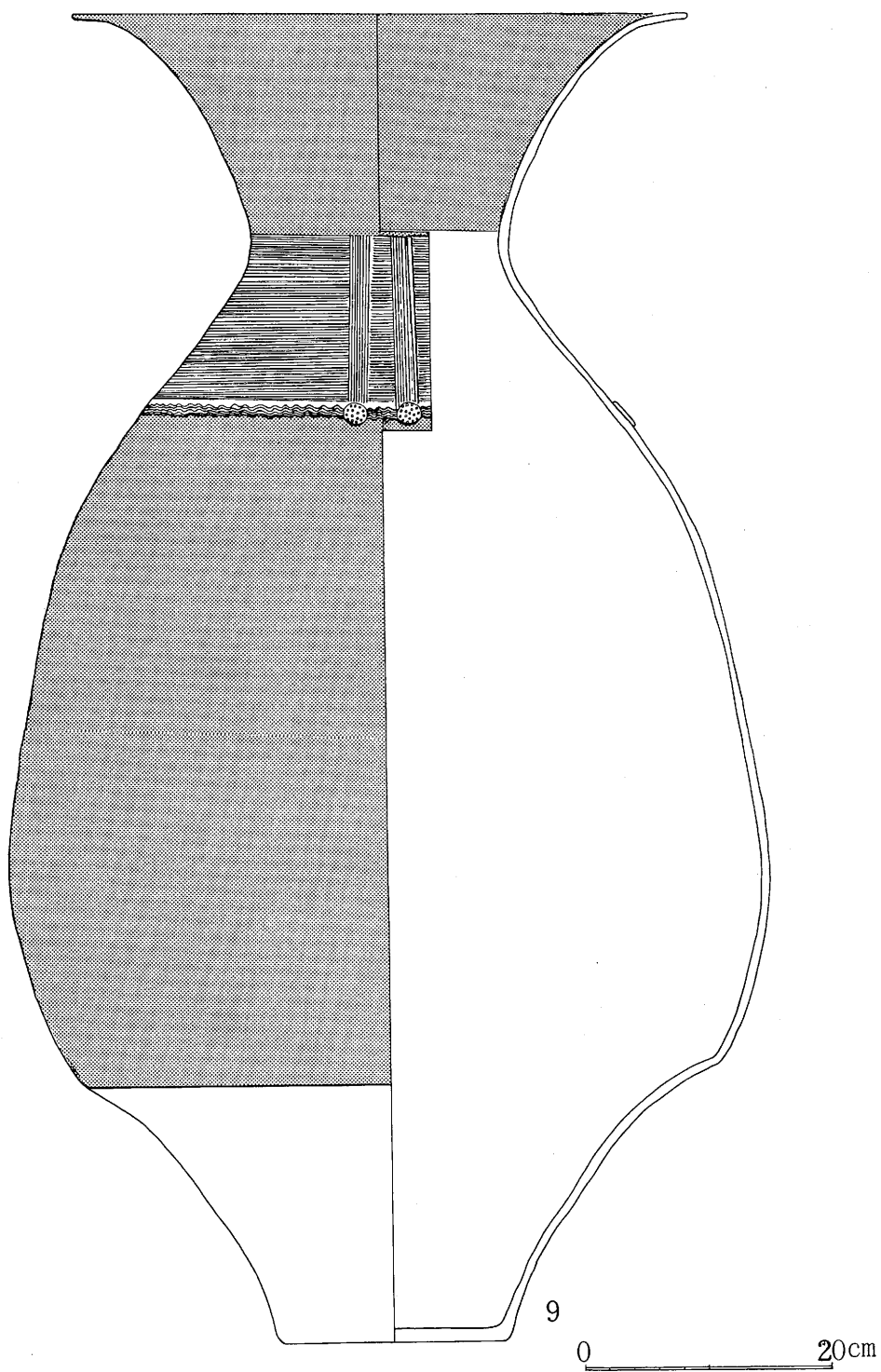


图25 31号住出土土器实测图(2)

### 35号住居址

C地点はA B両地点の中間に在って、用地長さ32mを全面排土した。東側で遺構面まで1mの深さがあり、この地点の弥生時代の微地形は、低くなっていた。

35号住はA 1～3の間にあり、約1/3の面積が検出され、角を傾斜の上に向けている。

西側の用地外の畑面から床面までは、20cmを測る。

この住居址面の上には、箱清水式の土器片がかなりあり、甕・高坏など（28図1～3）に示した土器で、柱穴の5箇所の内にも土器片が落ち込んでいるものが多かった。

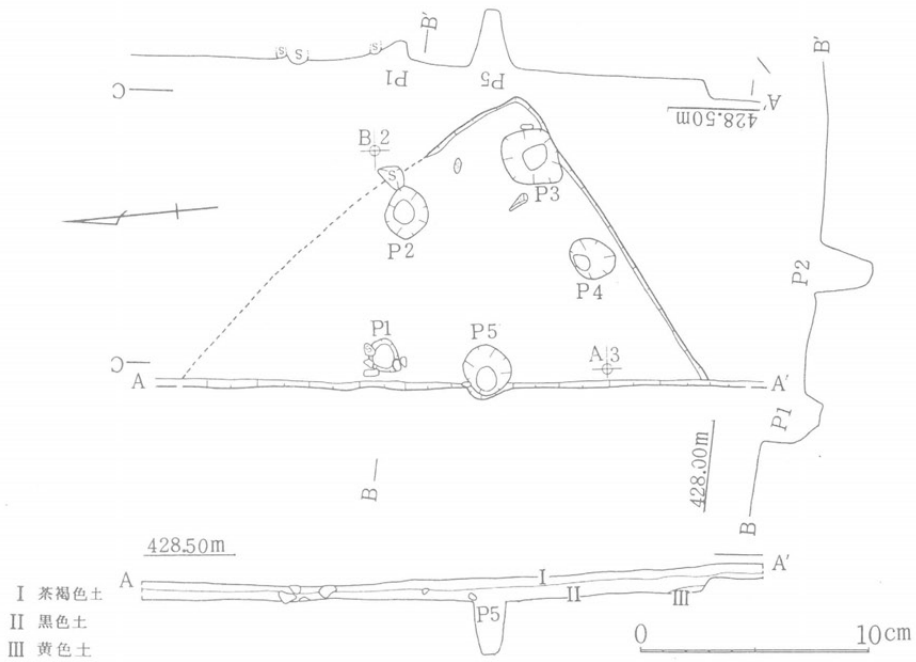


図26 35号住遺構実測図

→14  
東から見た  
35号住  
の土器



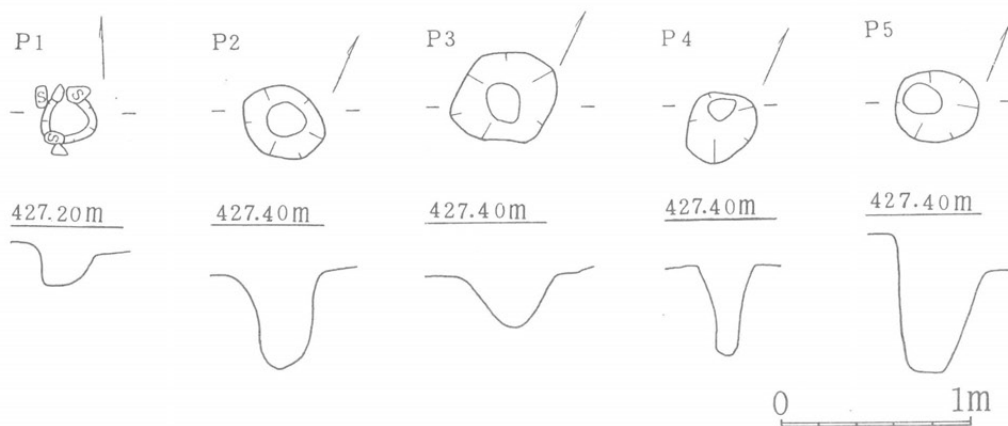


図27 35号住柱穴実測図

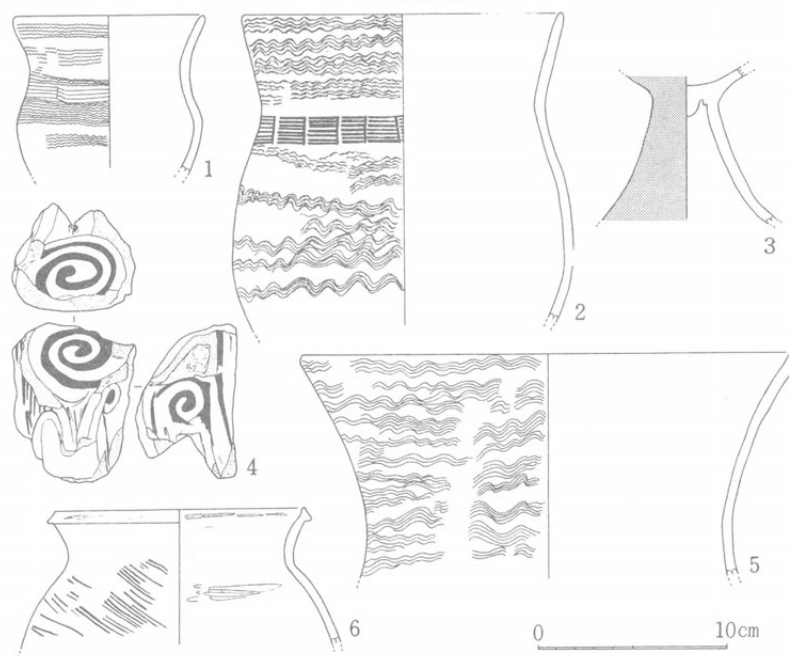


図28 35・36号住出土土器実測図

→15  
東から見た  
35号住  
の床面



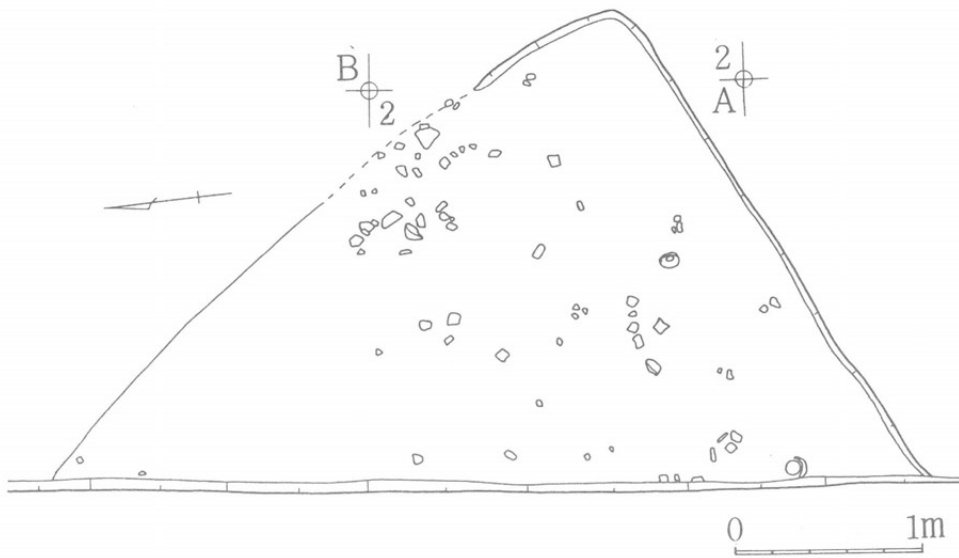


図29 35号住遺物検出図

### 36号住居址

A 8～11の間にあり、黒色土と石で埋まっていた。西側の畑から深い所で床面まで67cmを測る。検出の面積は、約2/5である。この中央部に石が集中し、この中にこの地方の古墳時代の初め頃の鉄鏝が見つかった（32図1）。このそばには箱清水式の小形の甕があった。

このほか当該期の壺・高坏・甕の破片、北陸系の甕、平安時代の坏などがみられ、床面近くに縄文時代中期後葉の加曾利E式の把手（28図4）があり、付近に縄文時代の遺構も予想される。

柱穴は支柱穴が1箇所だけ検出され、南側の小土坑内に甕が埋まっていた。検出した住居址のプランは直線的でないが、1辺5mの住居址で、時期は甕（28図2）などから箱清水式の時代と推定される。



↑16 鉄鏝の出土



図30 36号住遺物検出図

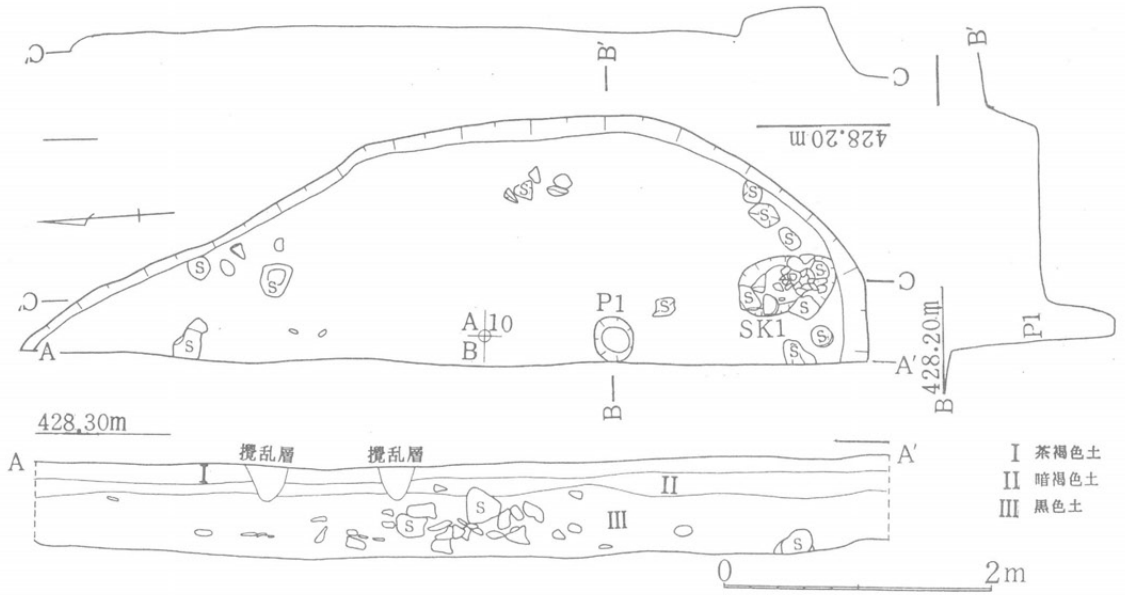


図31 36号住遺構実測図



↑17 北から見た36号住の土器

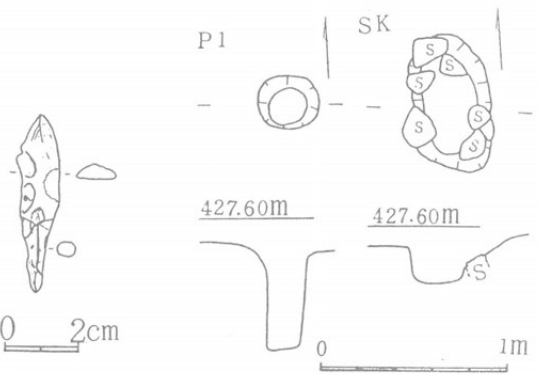


図32  
鉄鏝実測図

図33 36号住柱穴実測図



↑18 小土坑内の土器

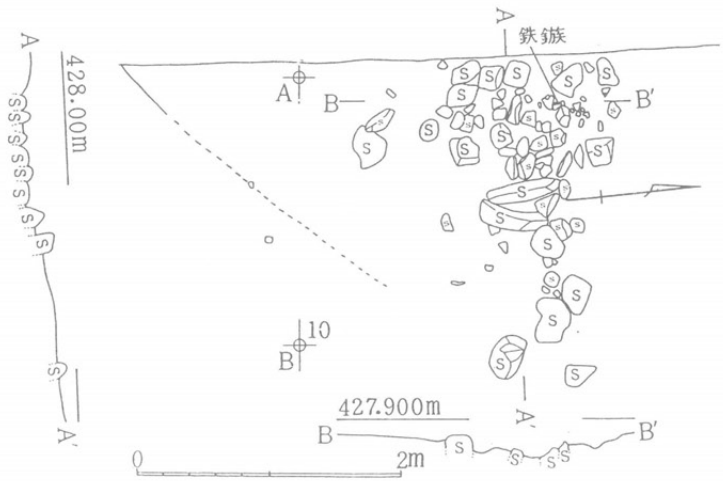
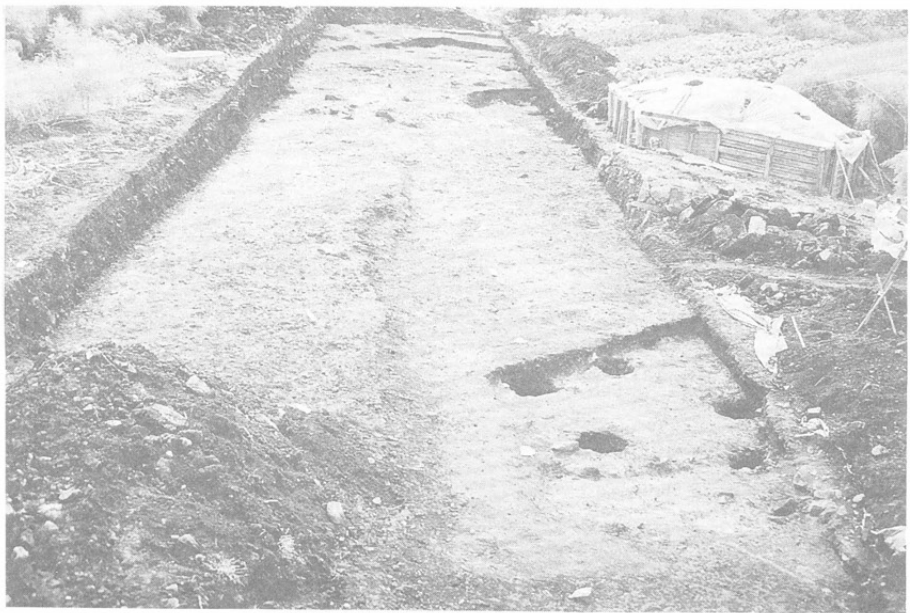


図34 36号住集石実測図

→19  
東から見た  
36号住  
の床面



←20  
南から見た  
C地点全景

### 37・38号住居址

37・38号住居址は複合住居址である。東の畑から床面までは、80cmを測る。B13～16の南北7mが複合した落ち込みの範囲で、西側は傾斜のため、壁面が確認されていない。

南から乱流の跡が、幅50cm～80cm、深さ30cmの規模であり、複合の中心部を流下していた。

両者の床面の段差は、38号住が5cm低く、37号住の火床は、中央に直径50cmの円形で残り、柱穴P15・P17が見られるが、他は不明である。推定すれば1辺約4mの住居跡が復元できそうである。

検出された土器は、弥生後期終末から古墳時代にかけての土器で、甕・蓋・鉢・壺が見られるが、住居跡との関係は、土層の観察から流動的である(38図)。

38号住の支柱穴は、P1～5・8・10の7箇所見られ、建て替えなどが考えられる。プランは、1辺4mの方形である。出土した小形甕・壺の頸部から箱清水式期に該当する(38図)。

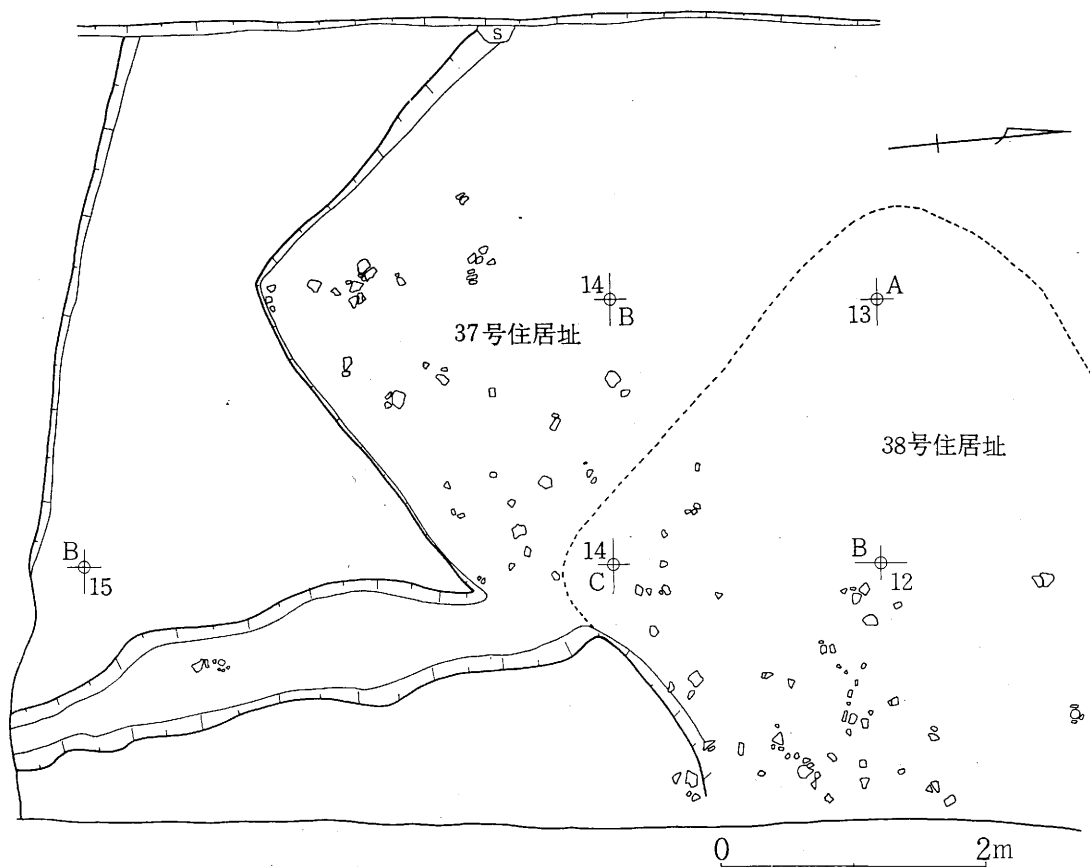


図35 37・38号住遺物検出図



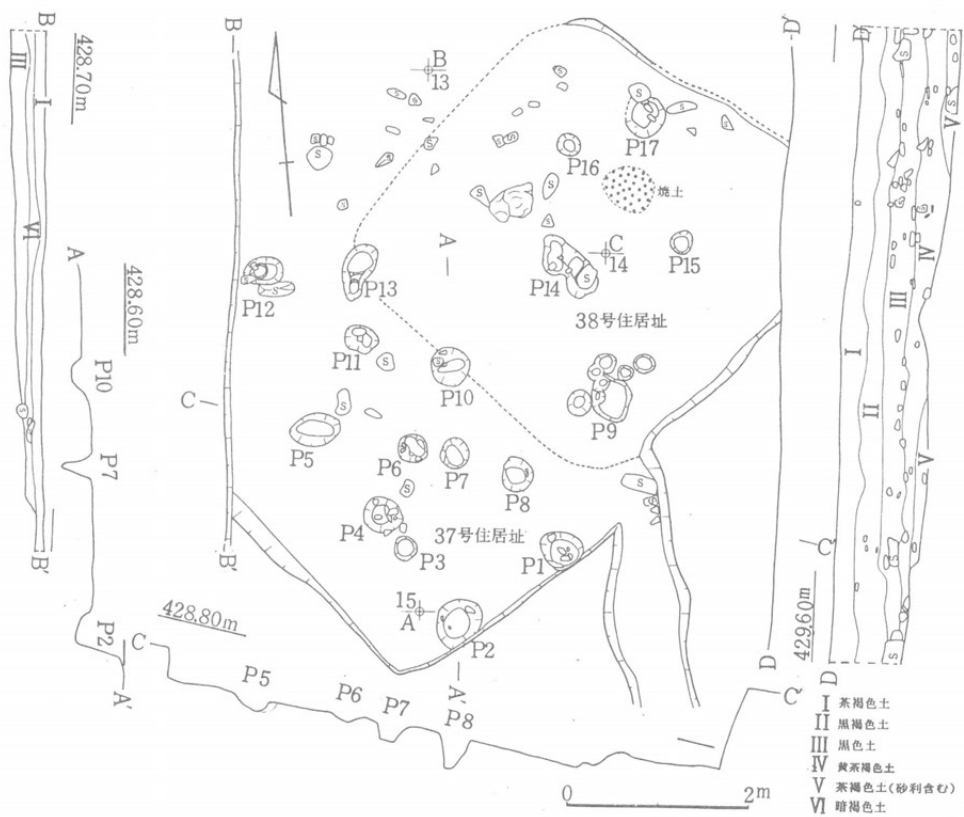


図36 37・38号住遺構実測図

→21  
西から見た  
37・38号住  
の土器



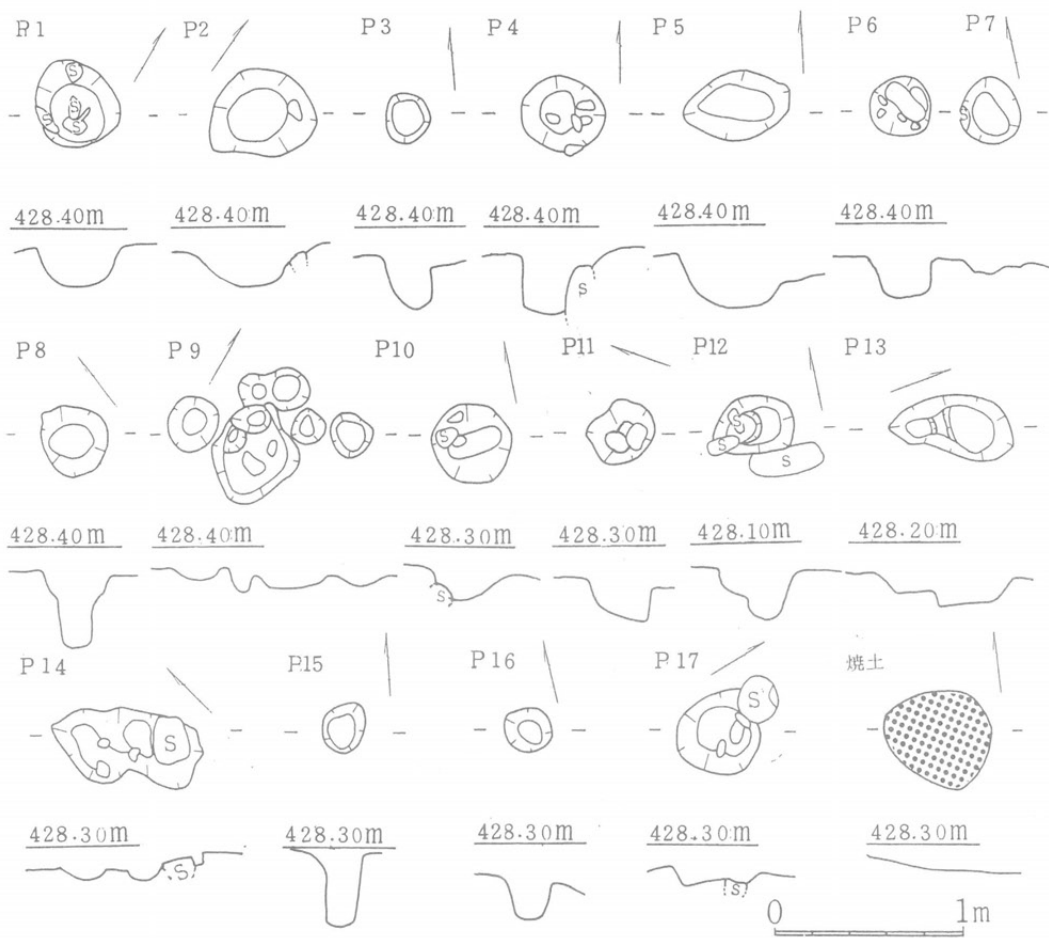


図37 37・38号住柱穴・焼土実測図

→22  
西から見た  
37・38号住  
の床面



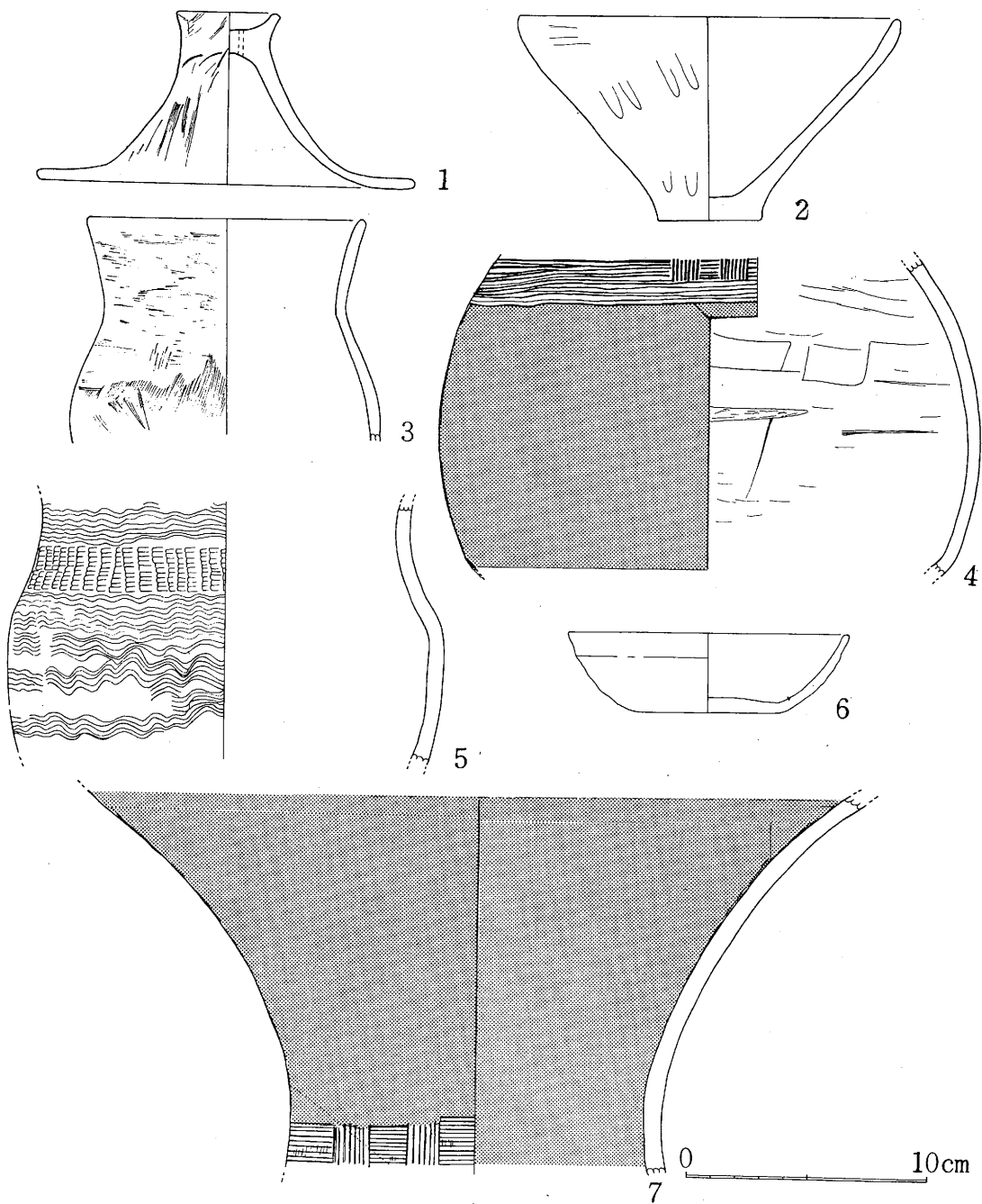


図38 37・38号住出土土器実測図

### 39号住居址

39号住は支線2号の角に位置して、H1～3の間であって、南東の畑面から床面までの深さは70cmを測り、検出した面積は、4/5である。

1辺4.3mの隅丸方形の住居址で、この中に黒色土とともに、弥生時代から古墳時代の土器が落ち込んでいた。このうち古墳時代の土器は器台(42図4)を除き小破片で、復元資料はない。

床面上の土器は、台付甕・鉢・高坏・注口付高坏・甕・紡錘車（42図）などである。

支柱穴は、P2・4・5・7・8とともに推定され、P4とP5の関係は補強などのため床面と考えられる。

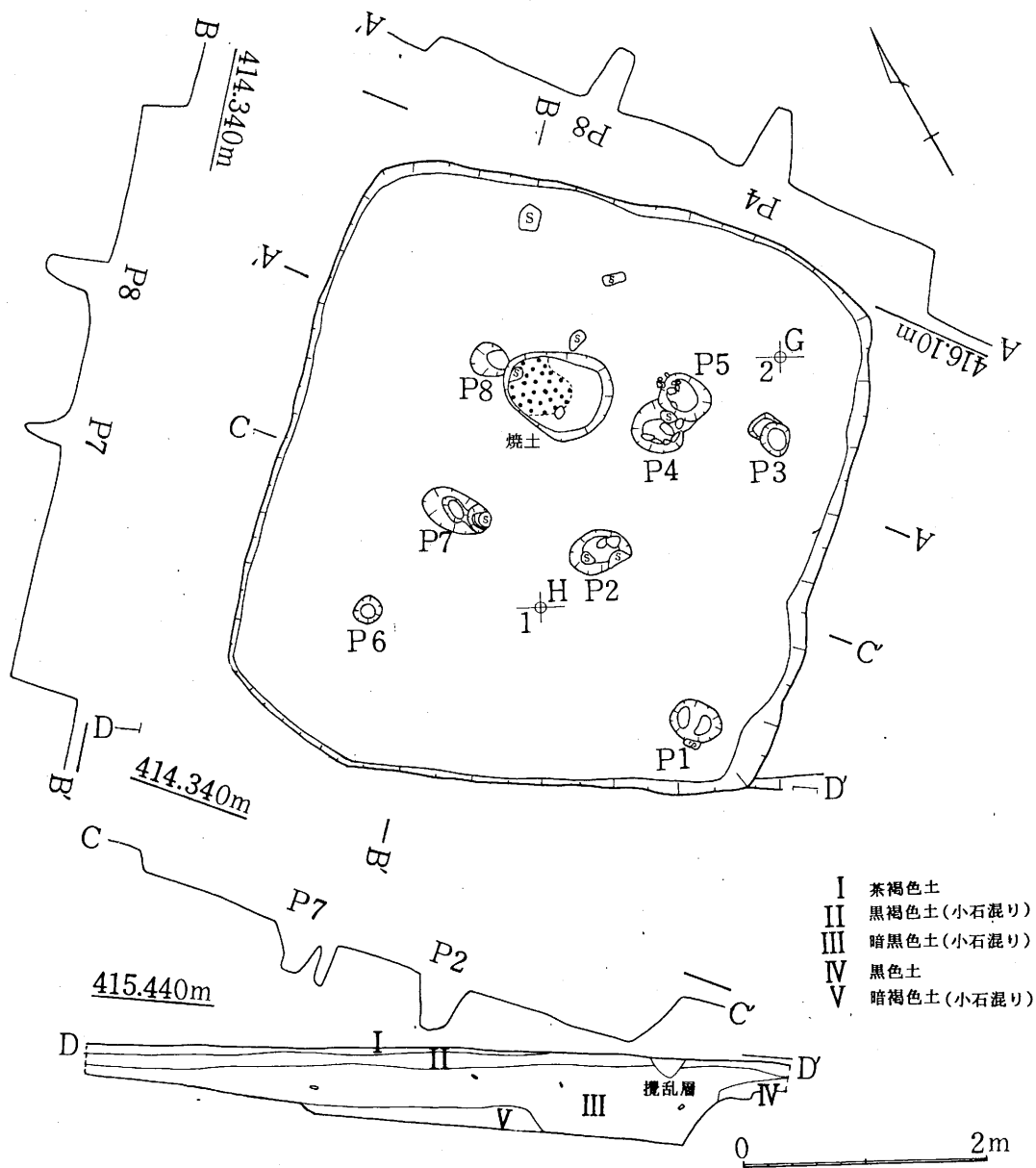


図39 39号住遺構実測図

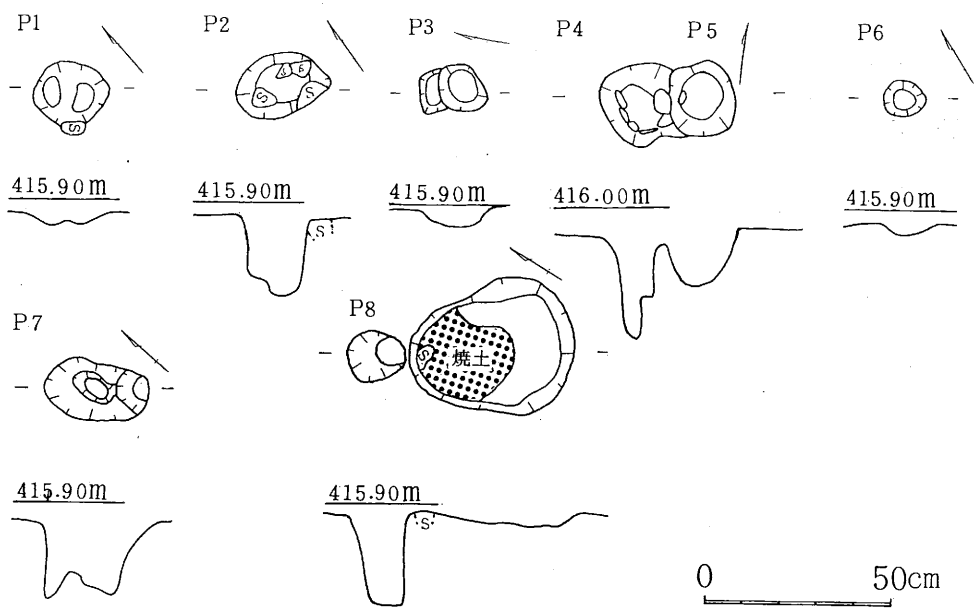


图40 39号住柱穴·烧土实测图

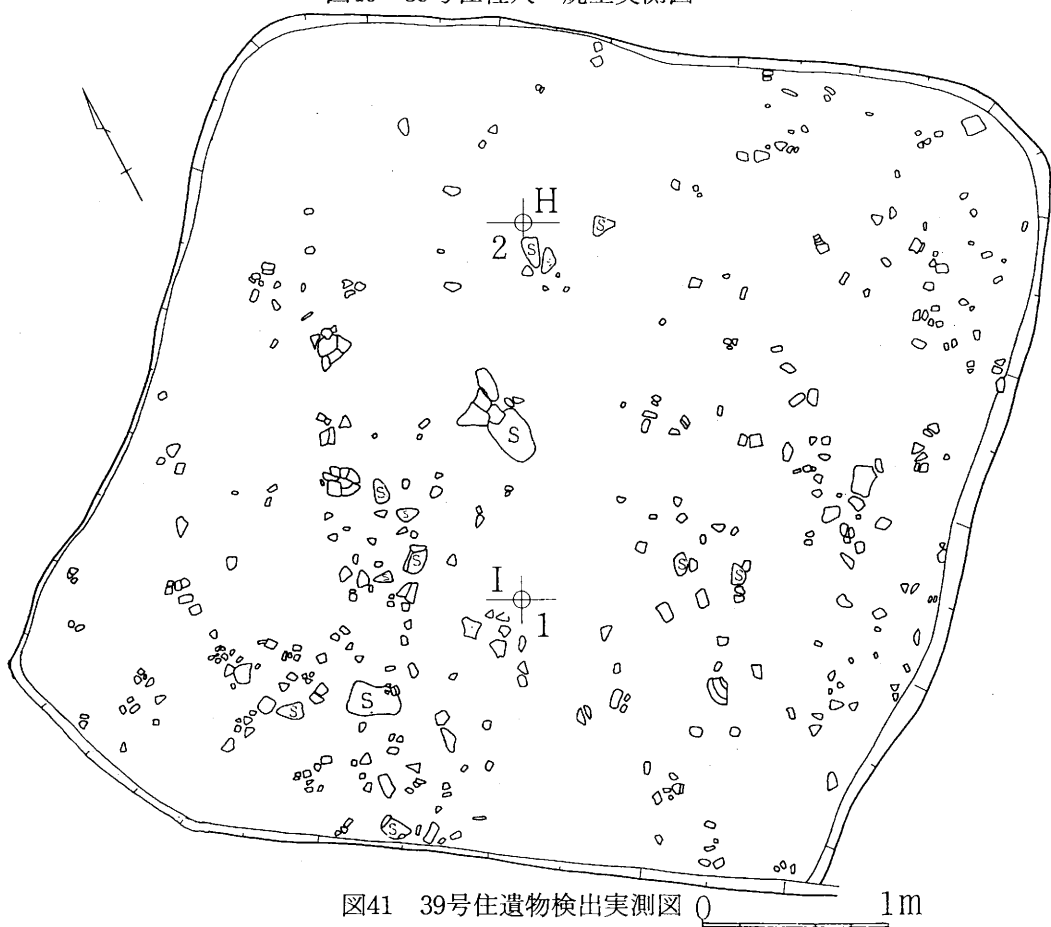


图41 39号住遺物検出实测图

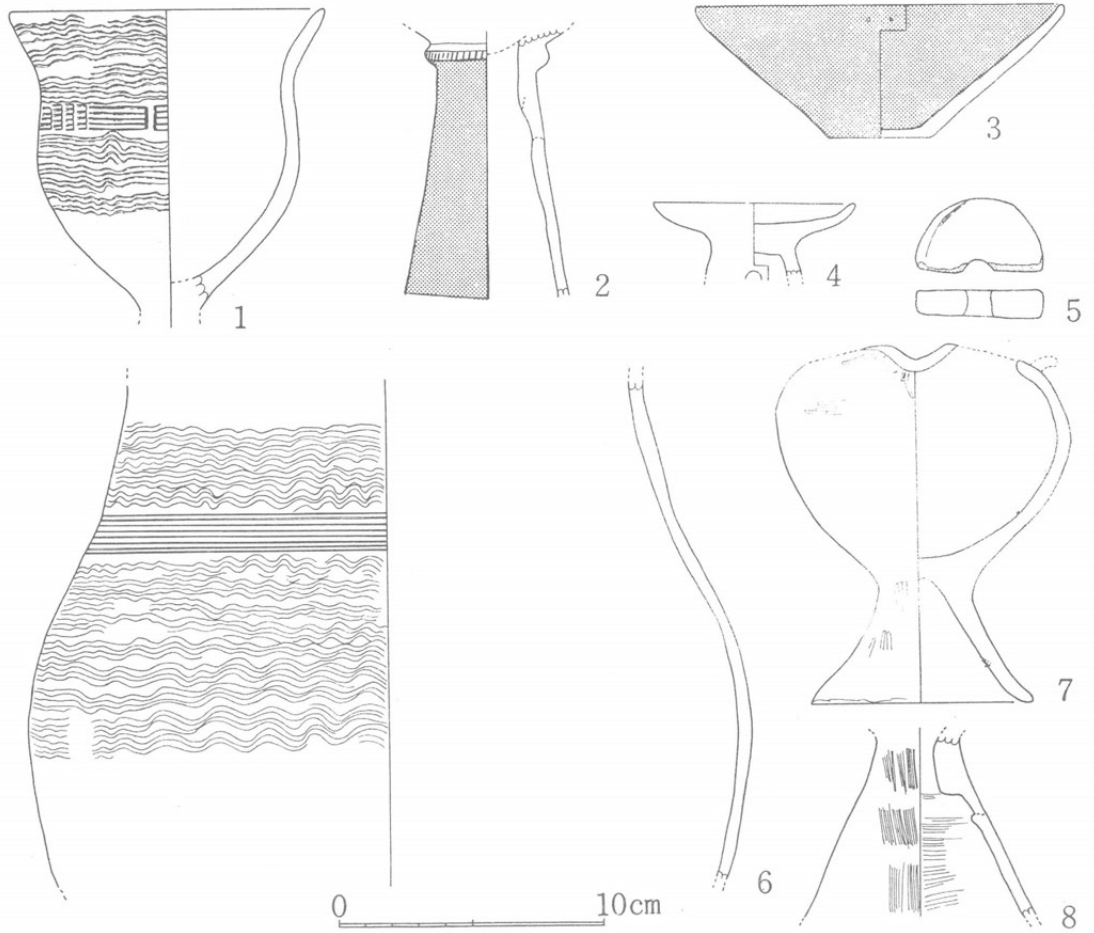


図42 39号住出土土器実測図

→23  
西から見た  
39号住  
の土器



→24  
西から見た  
39号住  
の床面



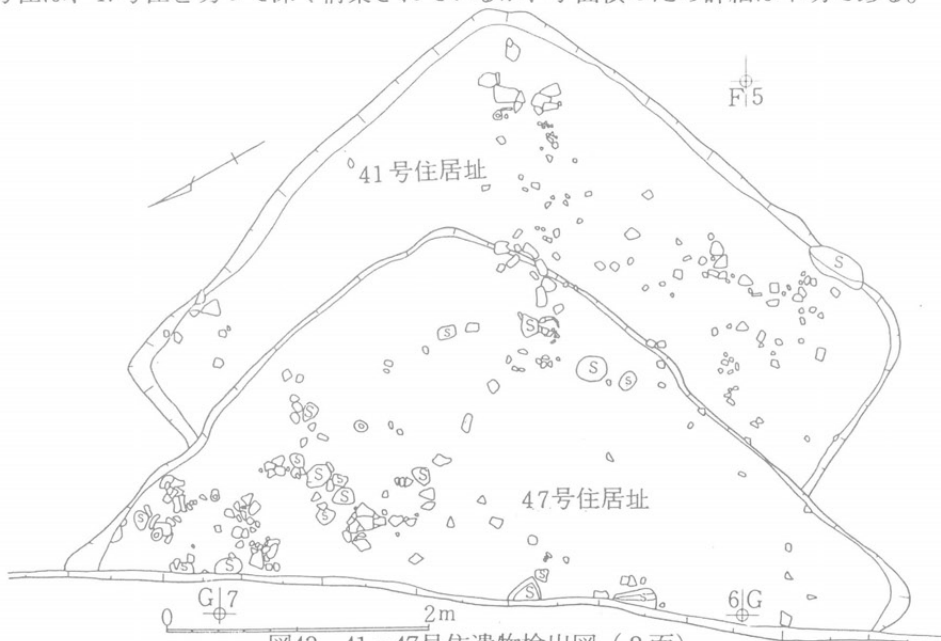
#### 41・46・47号住居址

41・46・47号住と40号住（後述）は、複合住居址である。47号住は約1/2の検出面積で、1辺4.5mの隅丸方形の住居址で、高坏脚部（45図1）、鉢などが検出されている。この面での柱穴は、P3・P9が推定されるが、41号住の支柱穴と重なる位置にあり、検討を要する。これを埋めて41号住がつくられ、4.2×4mの方形住居址が造られ床面の差は15cmである。

この住居址面の土器は、在来の箱清水式の影響下にありながら、文様に簡略化の傾向があり、これは小形甕（同図6・7）などに現れており、箱清水式の最末期の段階の住居址と思われる。

この住居址の柱穴はP5・P7が候補で、P7の北に直径25cmの地床炉が見られ、この方角に柱穴の存在が予想される。（48図）

46号住は、47号住を切って深く構築されているが、小面積のため詳細は不明である。



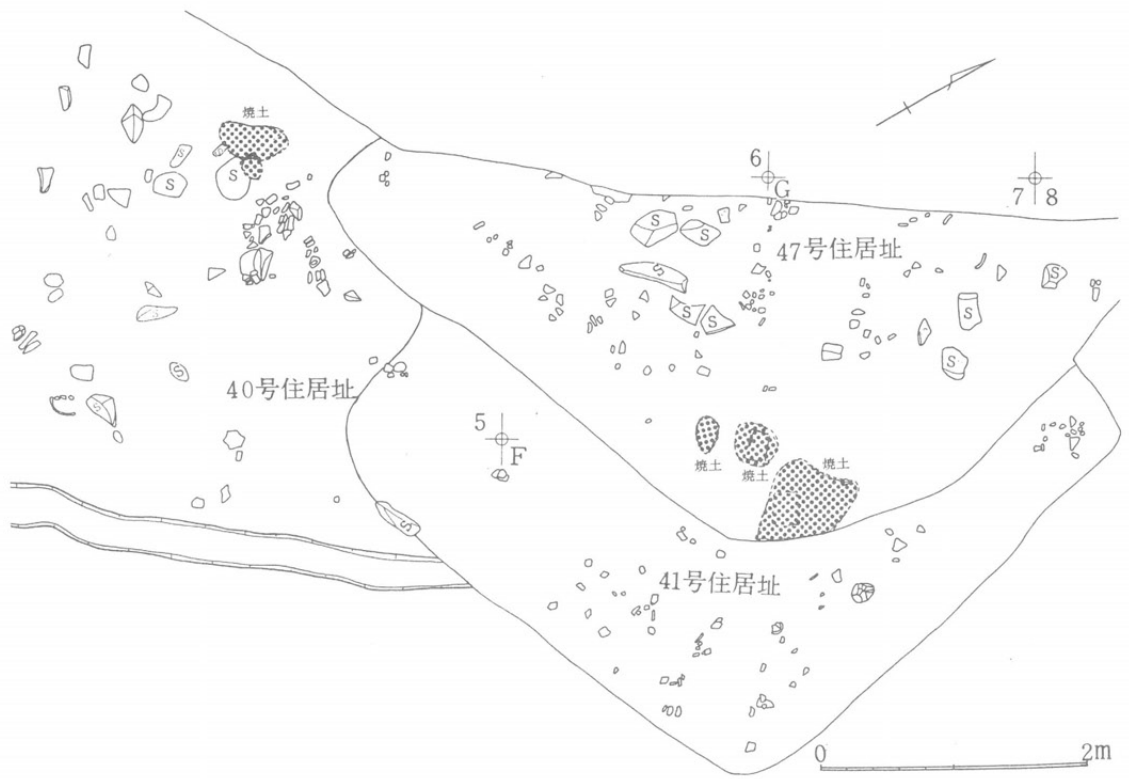


図44 40・41・47号住遺物検出図（1面）

→25

南から見た  
39号住（手  
前）とD地  
点、41・47  
号住（中央）  
奥は42・43  
号住





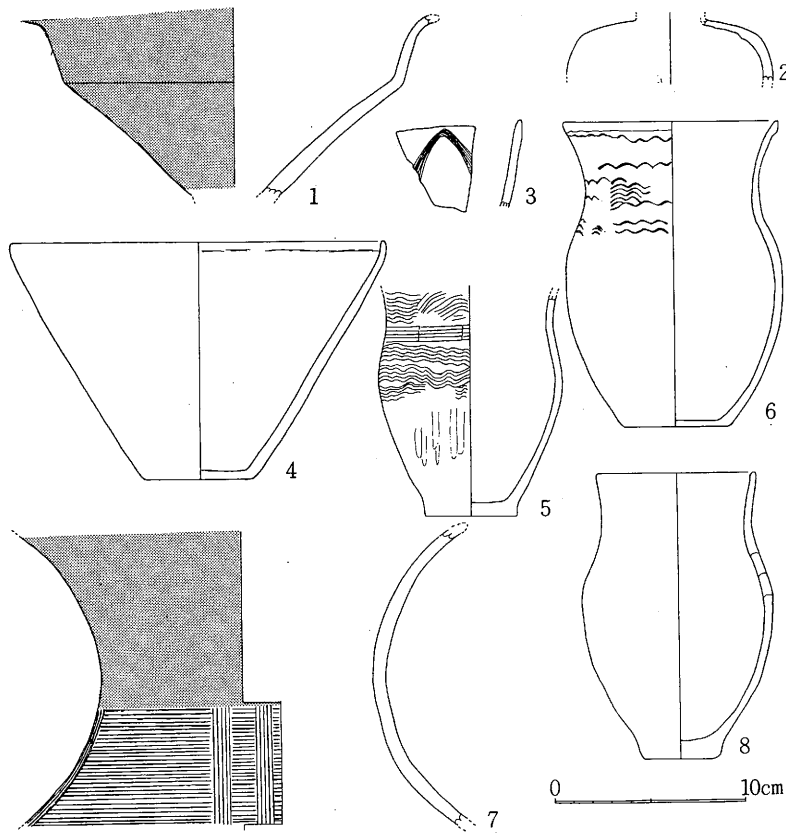


图45 40·41号住出土土器实测图

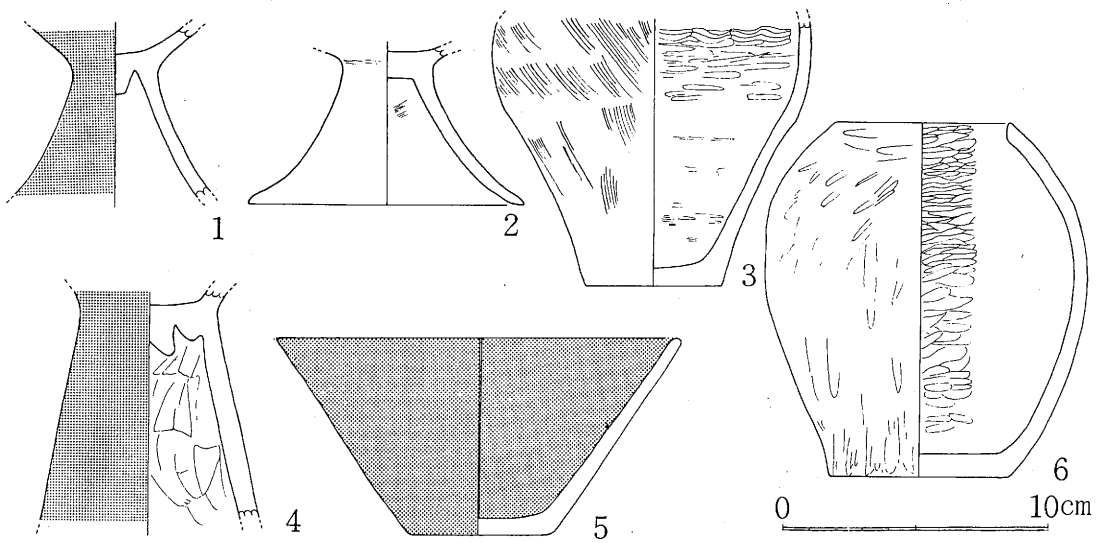


图46 47号住出土土器实测

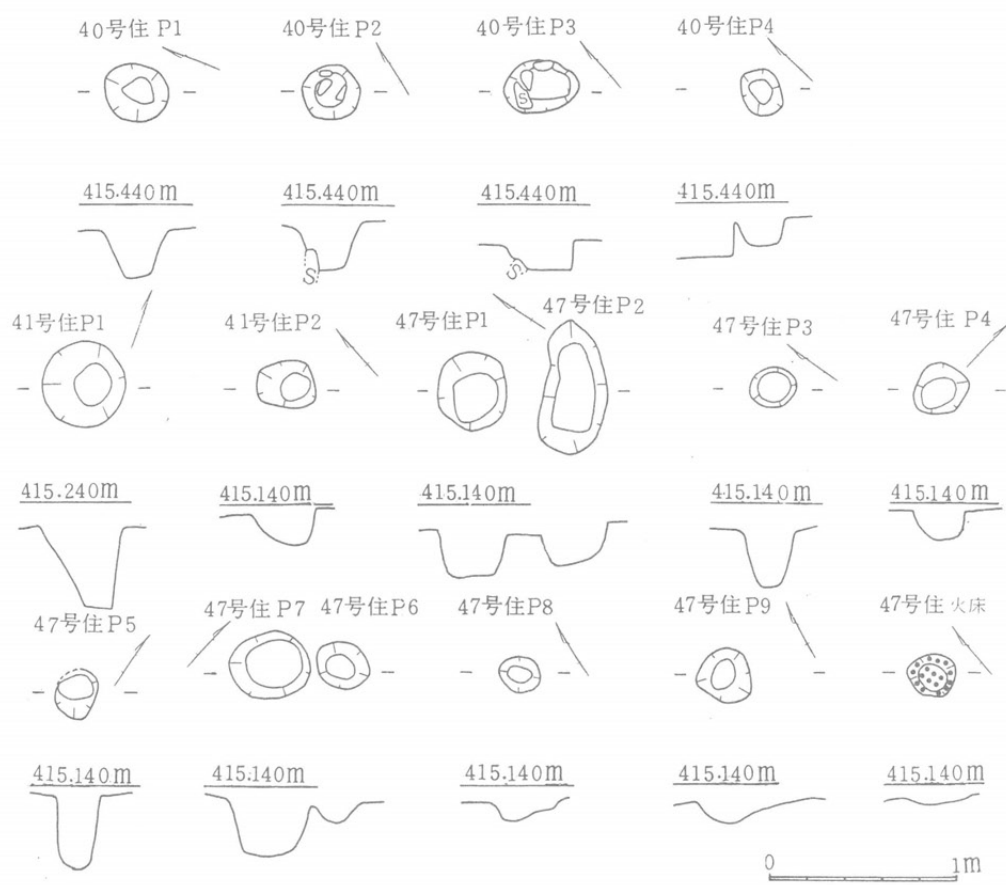


図47 40・41・47号住柱穴火床実測図



↑26 北から見た40・41・47号住の土器

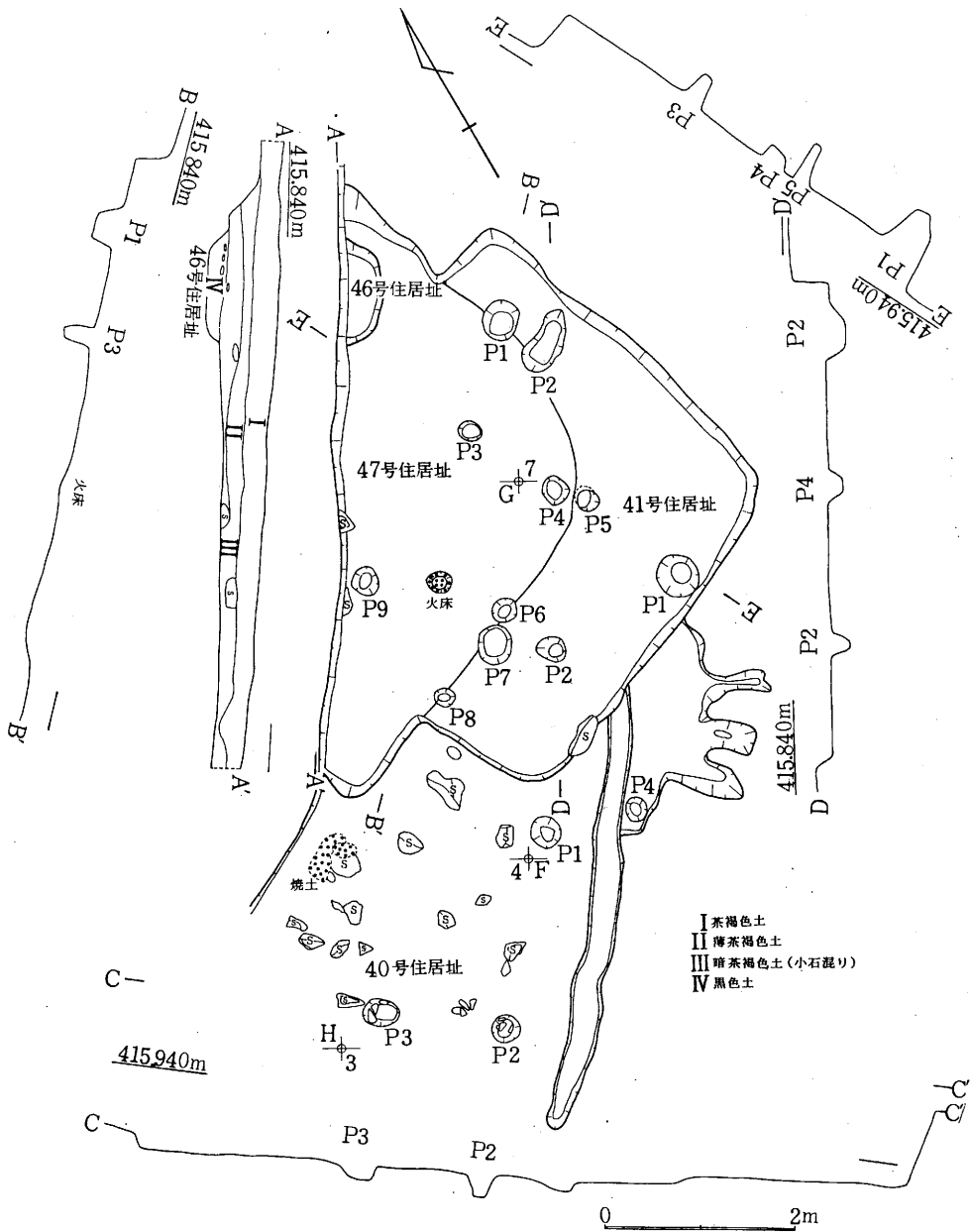


図48 40・41・46・47号住遺構実測図

42・43号住居址

42・43号住も複合しており、E 7～14の間にある。そして43号住を切って42号住が造られている。42号住は約1/2の検出面積で、東の畑面から床面まで117cmを測る。

4 × 5 mの隅丸方形の大形の住居址で、P 1～3が支柱穴で、もう1箇所は未掘である。

P1・2の間に石を伴った直径30×60cmの地床炉がある。この住居址で図示した土器は、高坏脚部、紡錘車（52図3）で、他は破片である。

床面の差は43号住より10cm低い。西壁から打製石斧（10図1）が出土した。

この住居址の北側を埋めて、43号住が造られ、東側が僅か未掘である。この住居址から甕・高坏・鉢があり、西南に大形壺があった。（51・52図）

主柱穴はP2・3が確認され、組み合わせとなる柱穴は、42号住の地床炉などと重なって確認されていない。P2～3の間に直径60×60cmの地床炉があり、焼け土面が広がって、焼失家屋と推定される。（50図）

この2住居址は、箱清水式期の前後する時期のものとして推定される。



↑27 43号住の土器



図49 43号住遺物検出図



↑28 西から見た42号住の土器

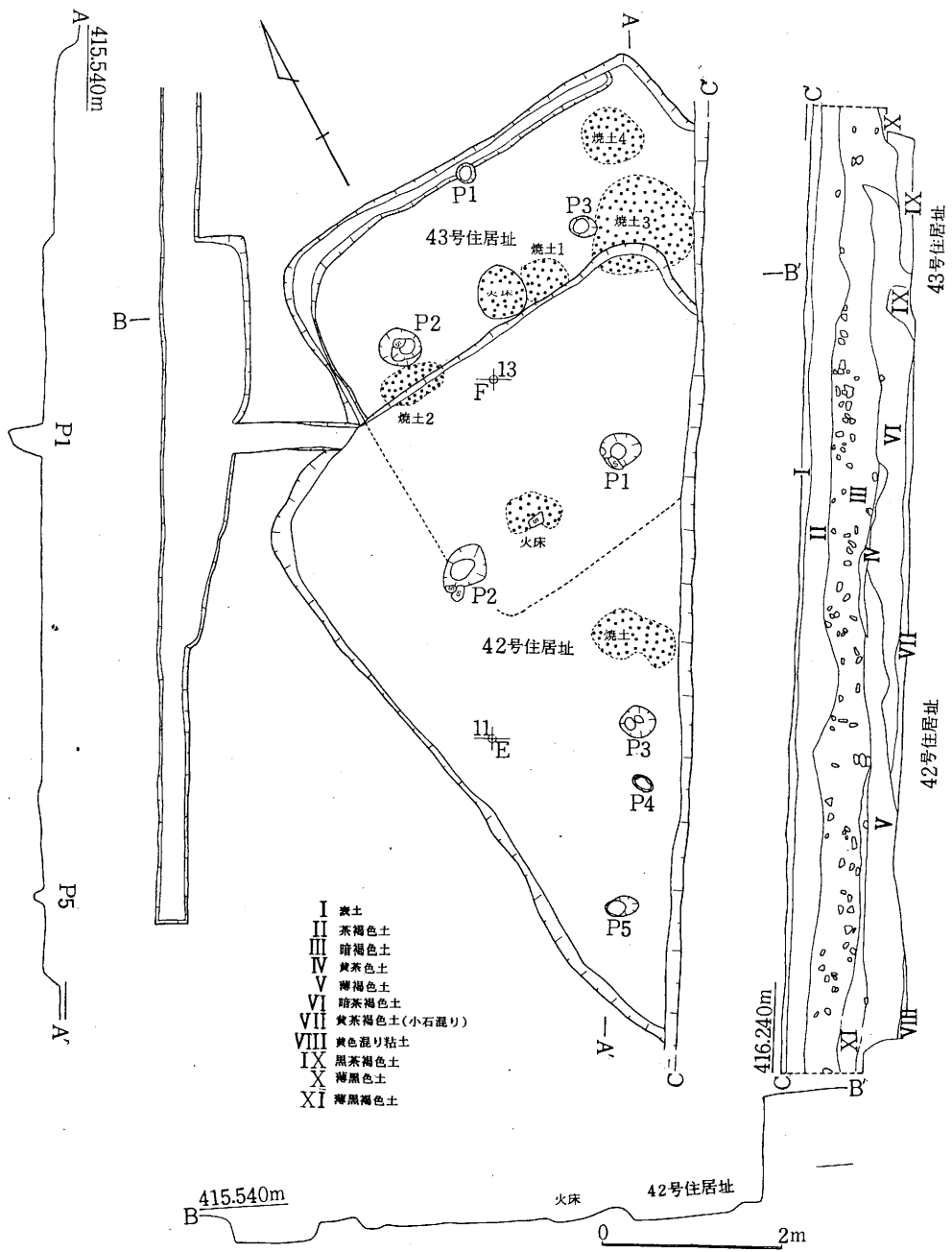


図50 42・43号住遺構実測図

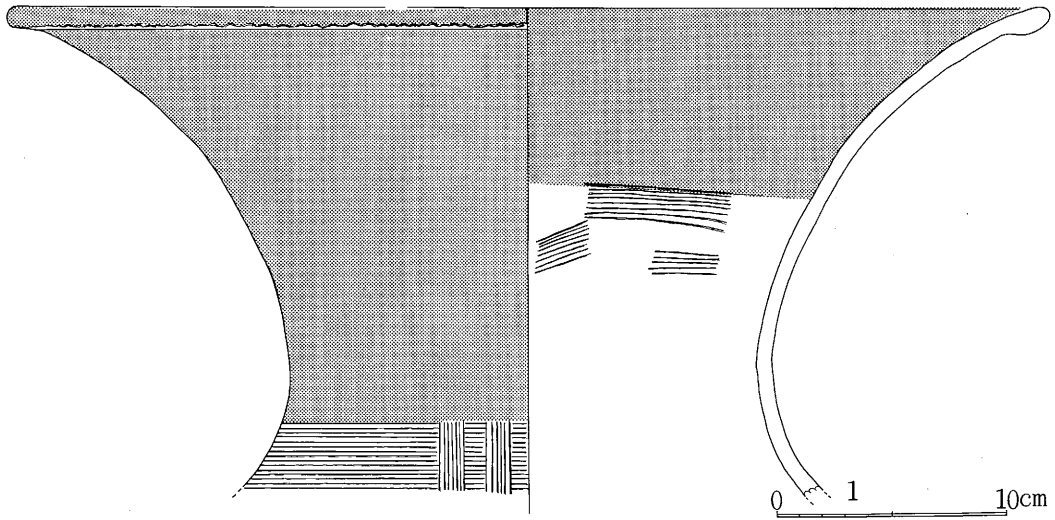


图51 43号住出土土器实测图

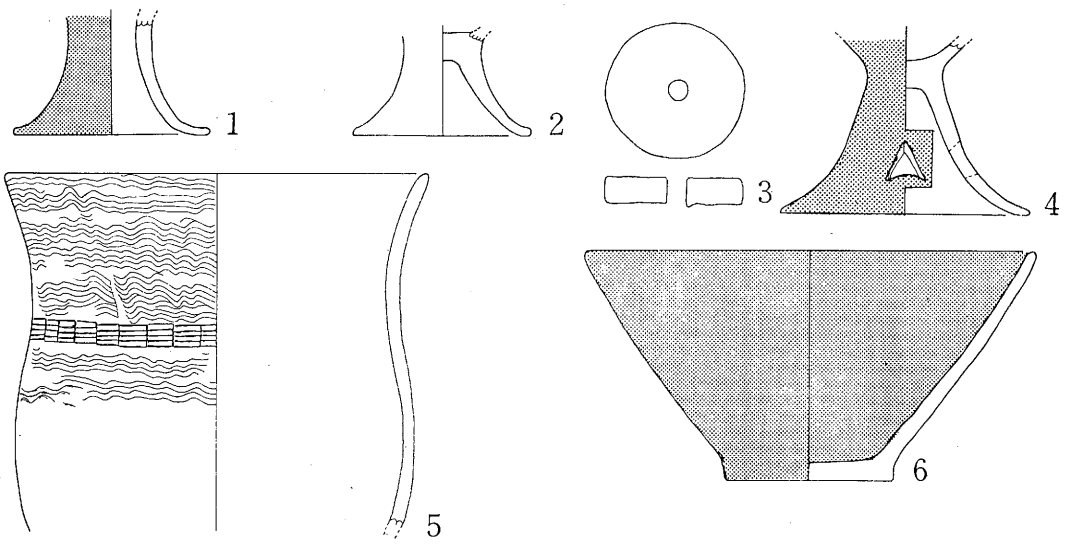


图52 42·43号住出土土器实测图

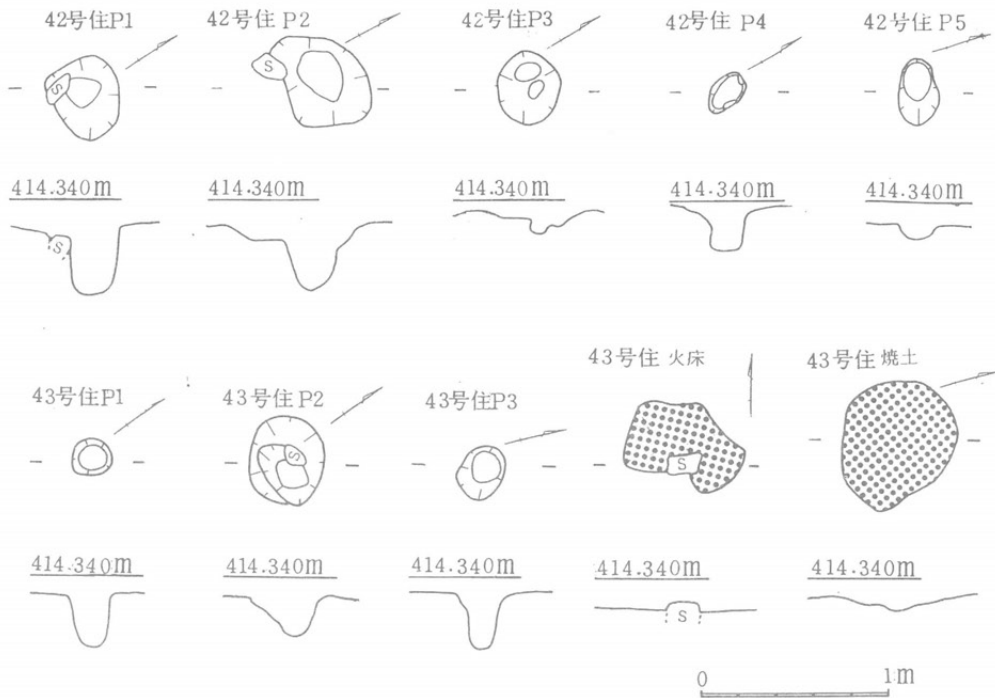
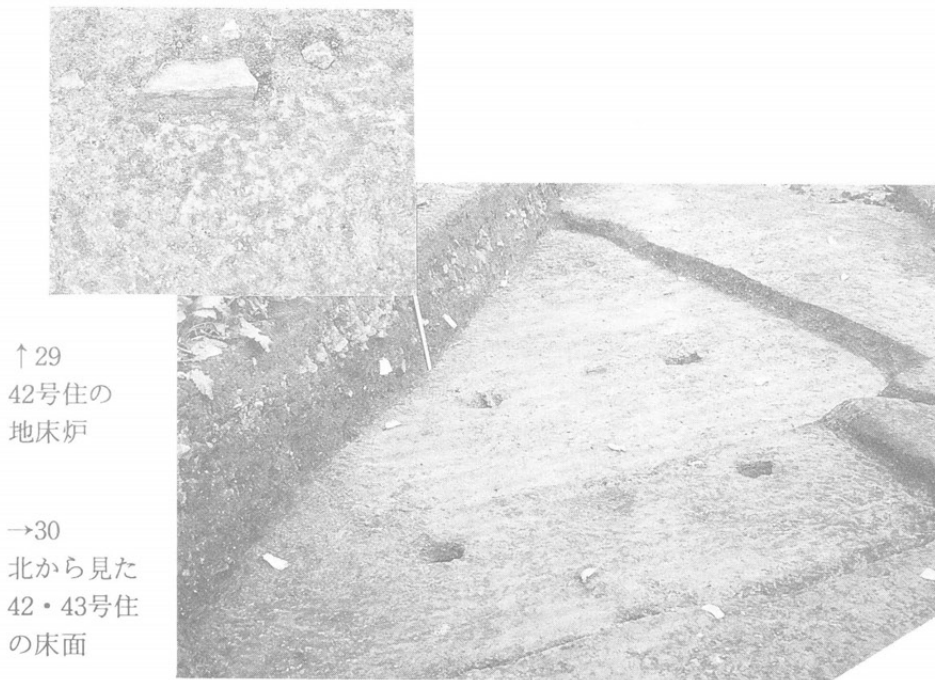


図53 42・43号住柱穴・焼土実測図



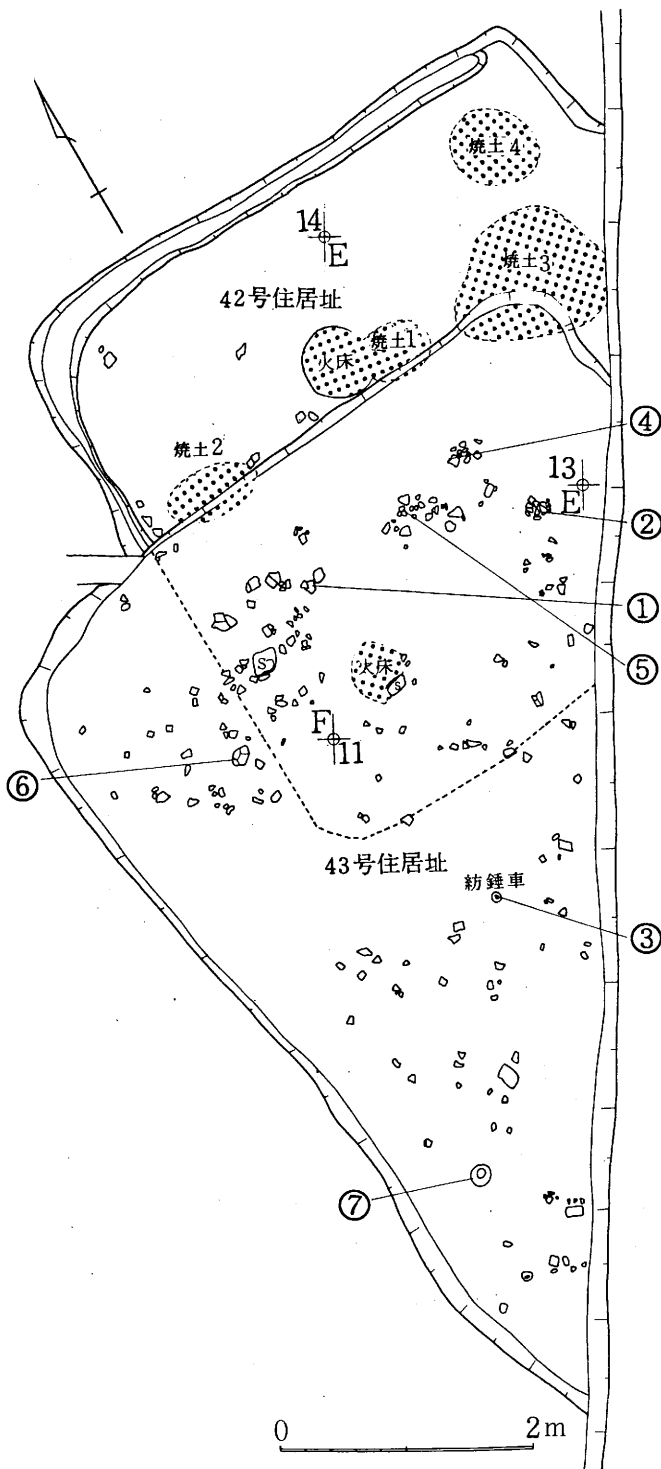


図54 42・43号住遺物検出図

44号住居址

44号住はD22~24の位置に長さ4.4m、幅50cmの部分だけ検出された。東の畑面から床面まで、80cmを測る。

この住居址には黒色土、箱清水式土器片などが落ち込んでいた。

床面もあまり確定できず、小面積のため詳細は不明である。

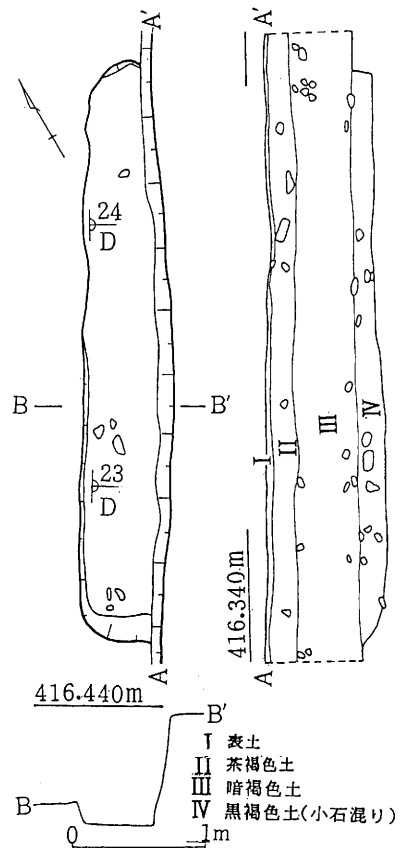


図55 44号住遺構実測図





図56  
44号住遺物検出図

45号住居址

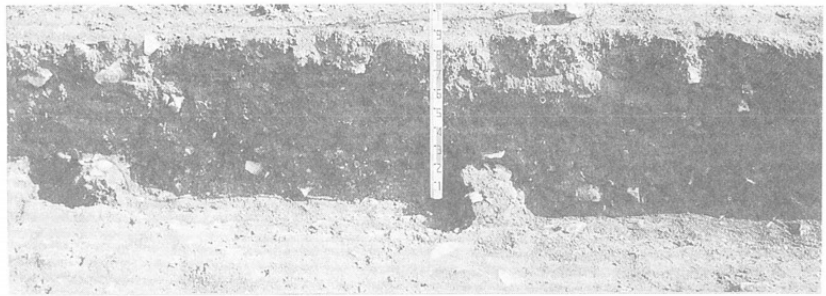
45号住はF 29～33の間であって、用地内の西に寄っている。約2/5の検出面積である。当初住居址のプランの確定が不十分で後に拡張して、1辺7.8mの大形の住居址となった。西の畑面から床面までの深さは、30cmを測る。

この住居址の床面上には、多量の土器があり、特に北側におおく集中して検出された。この中には小形甕・高坏脚部・大形中型甕・鉢・中型壺・大形壺4・紡錘車・(58・59・60図)などこのほかにも多くの土器片が検出された。

この住居址も焼失しており、床面に炭片が広がっていた。この中に樹種がケヤキと思われる盤状の木器(炭化片)もあった(58図1)。

P 2とP 5が支柱穴の候補と思われるが、他は用地外のため不明である。

この住居址の年代は箱清水式期に該当する。



↑31 西から見た44号住の土器



←32 同上の遺構



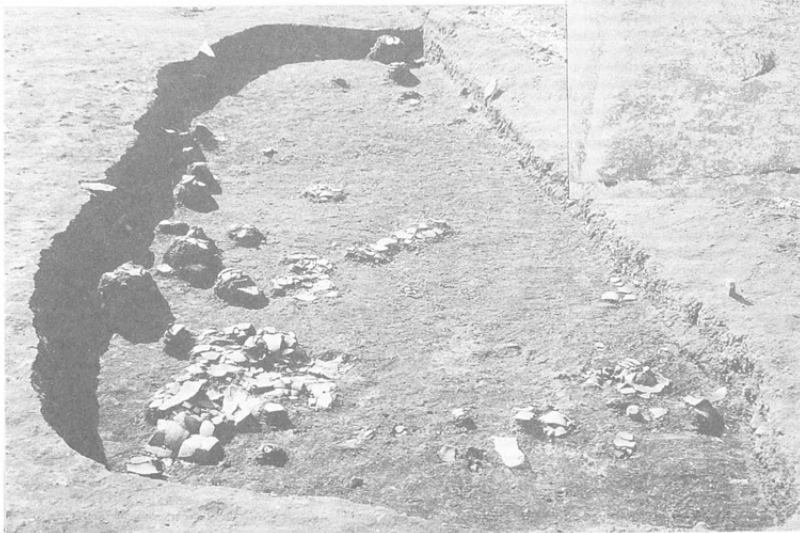
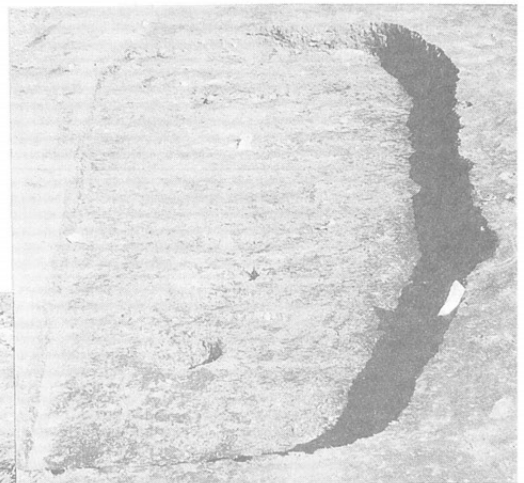
↑33 南から見た45号住北の土器



図57 45号住遺物検出図

→34 南から見た45号住  
の床面

↓35 北から見た45号住の土器



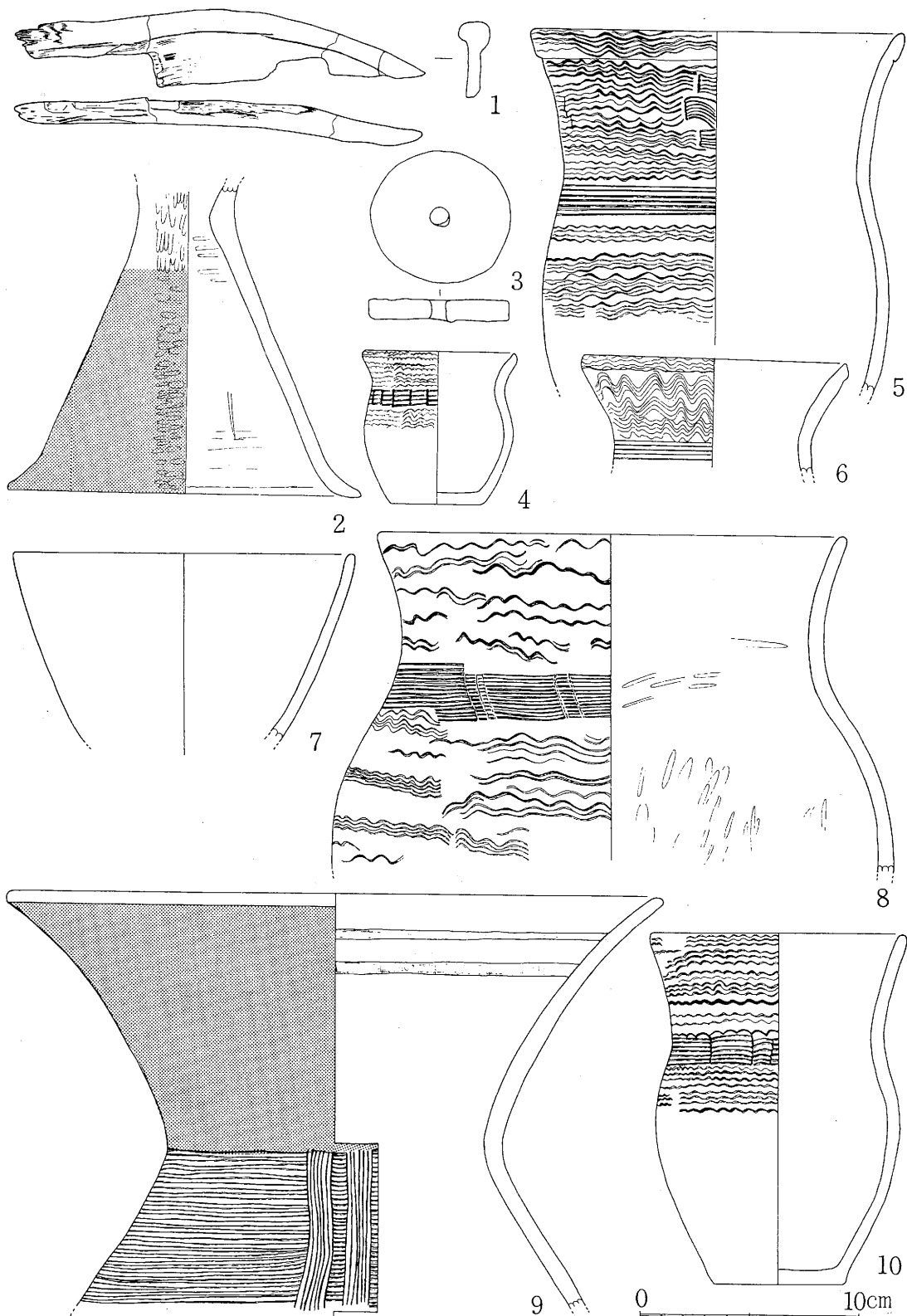


图58 45号住出土土器实测图(1)·木器实测图

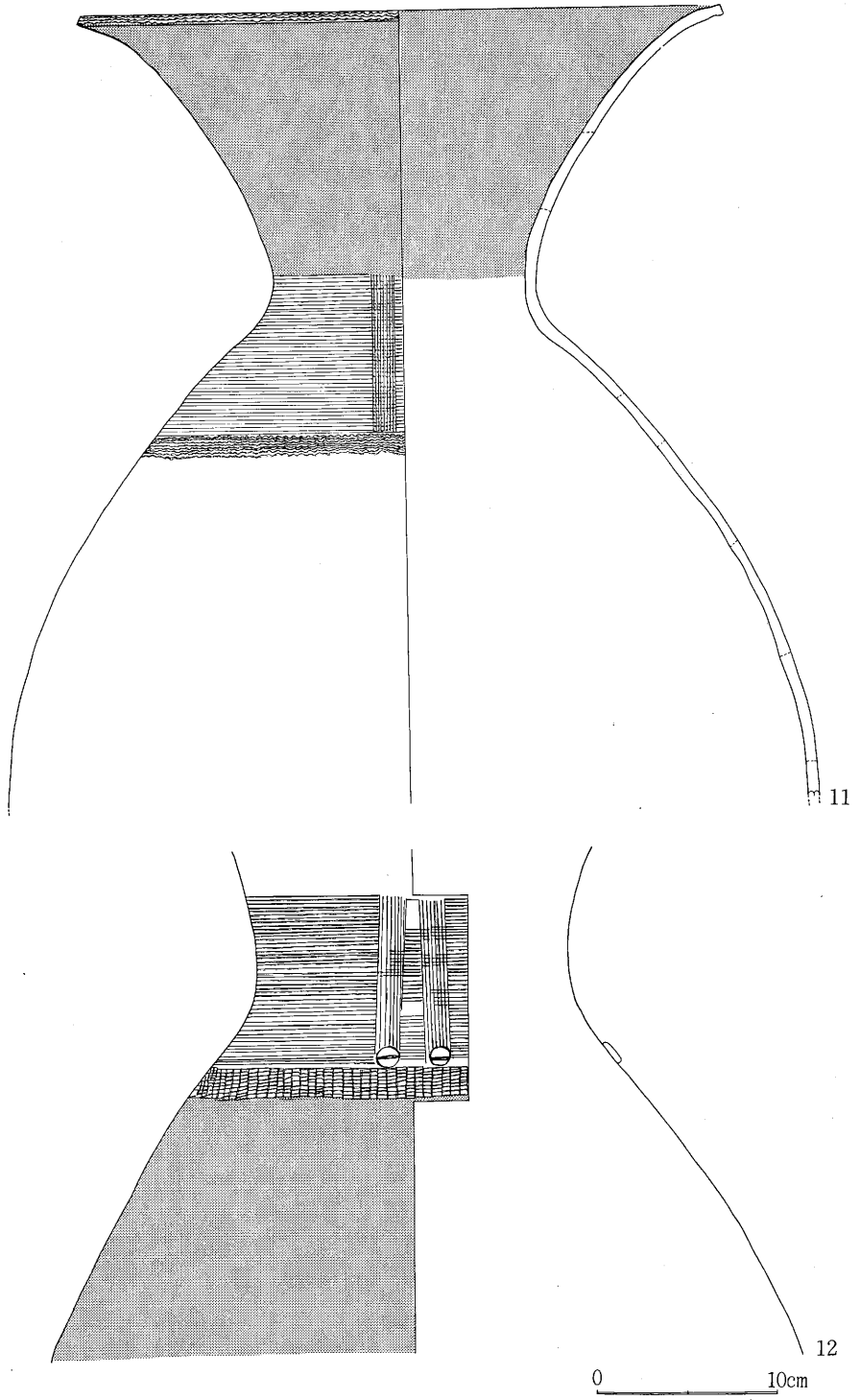


图59 45号住出土土器实测图(2)

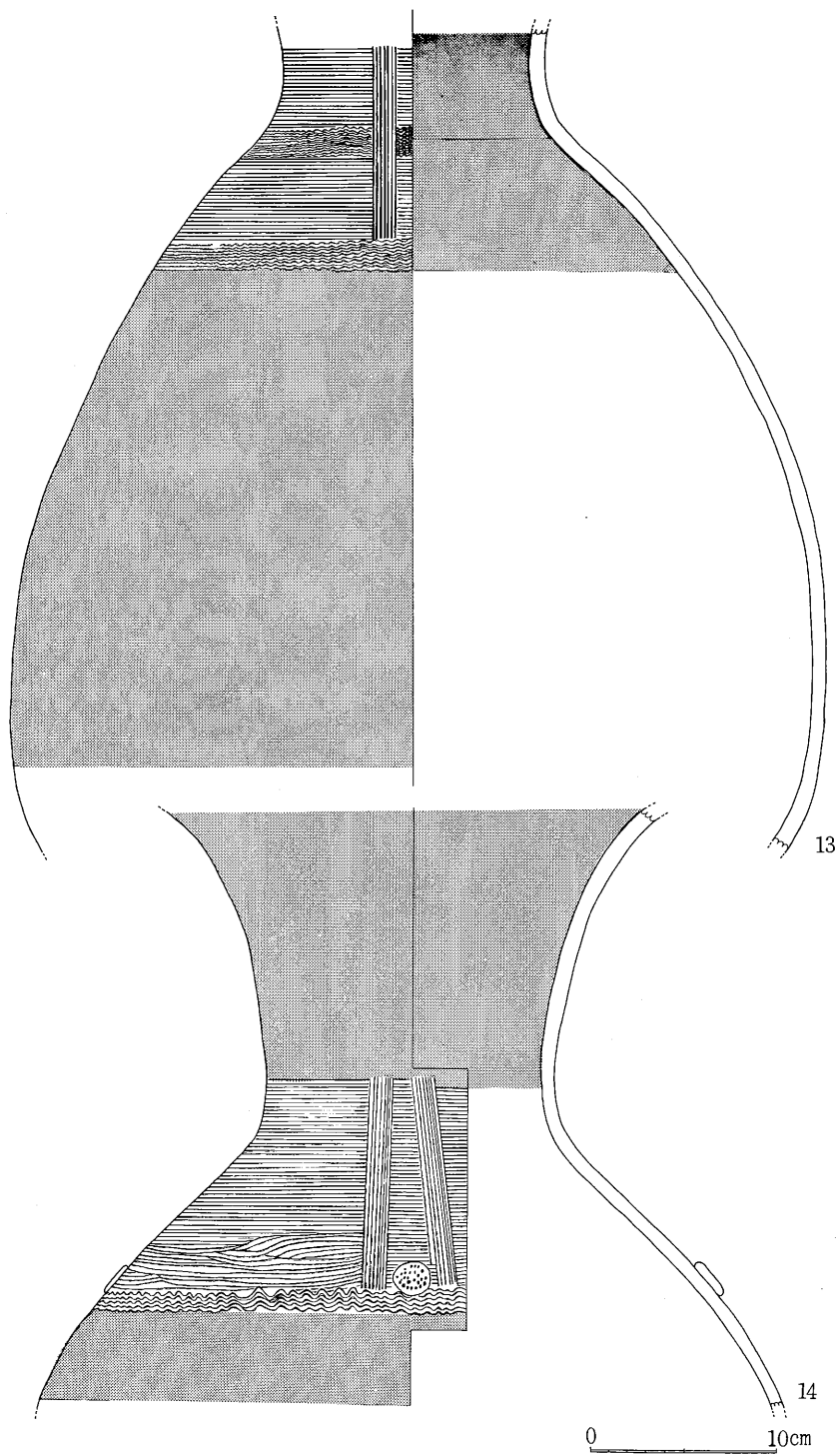


图60 45号住出土土器实测图(3)

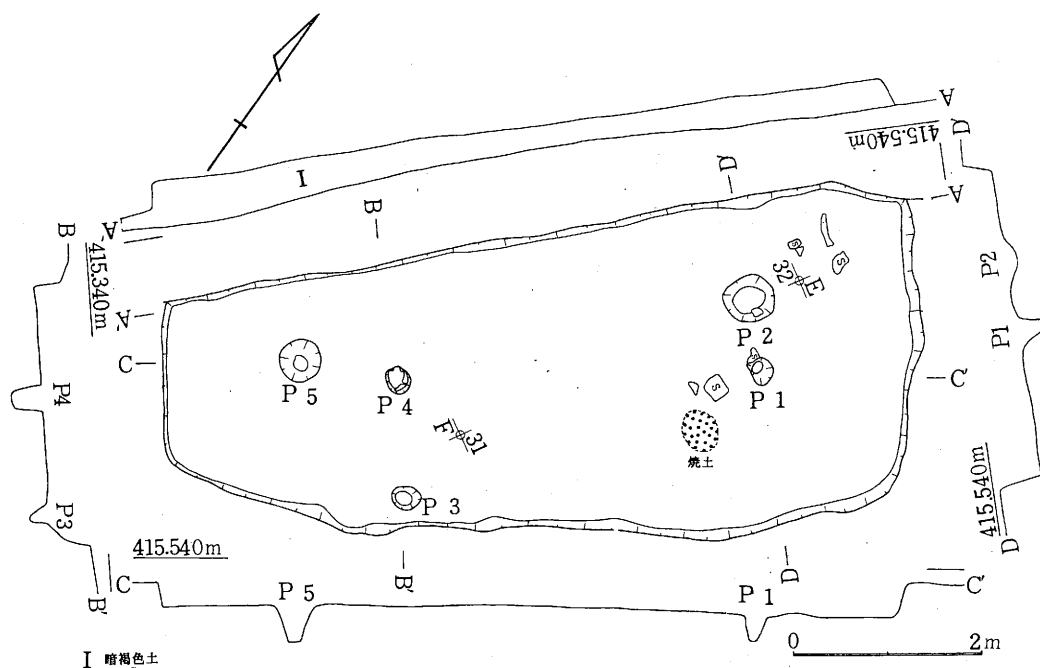


図61 45号住遺構実測図

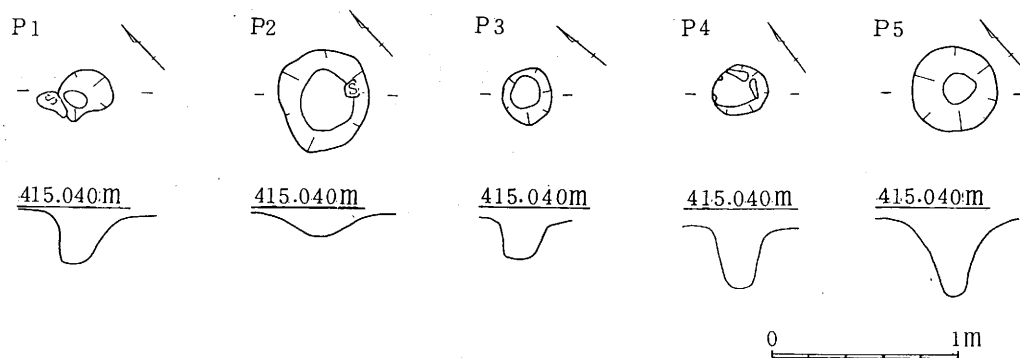


図62 45号住柱穴実測図

#### 48号住居址

48号住はE地点のB26~29の間であって、今回の調査ではもっとも西の下方にあたる。ここで調査した幅は、用地買収した部分だけで、従前からの道路は北側にあり、調査時の所見では、傾斜のため、路面の土が流出して、遺構が失われていた。

この住居址の検出面積は、1/2弱で西方は傾斜のため、壁面は明確でないが、1辺4m強の隅丸方形の住居址と思われる。

南東の畑面から床面まで、深い位置で65cmを測る。この中に土器片が多く埋まっていた。

この中に壺下半部2・大形甕・中小形甕・大形壺・紡錘車2などがあった。(66~68図)床面の西に水道の敷設のため、攪乱をうけたところがあった。

柱穴も3箇所検出されたが、支柱穴と思われる位置にはない。箱清水式期の住居址と思われる。



図63 48号住遺物検出図

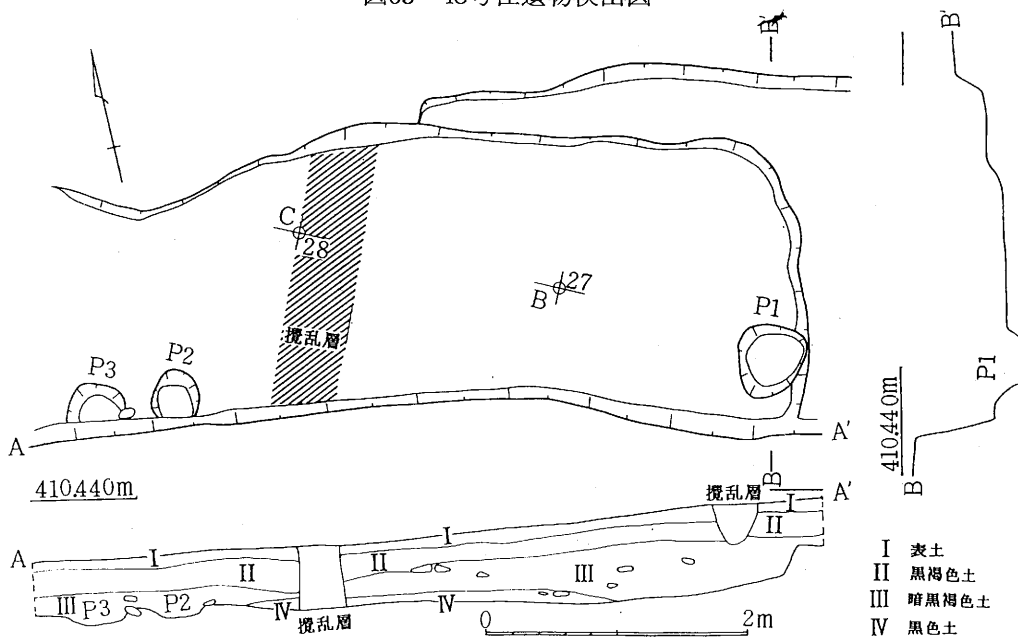


図64 48号住遺構実測図

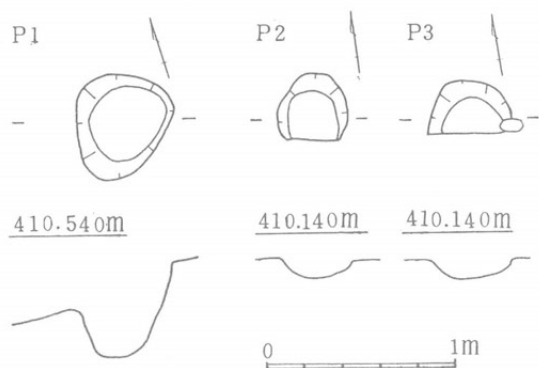
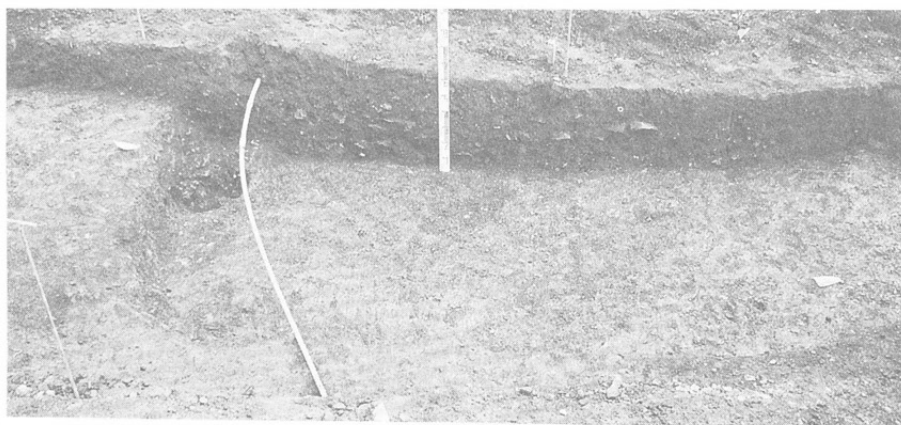


図65 48号住柱穴実測図

↑36 48号住出土土器



↑37 北から見た48号住の土器



↑38 同上の床面



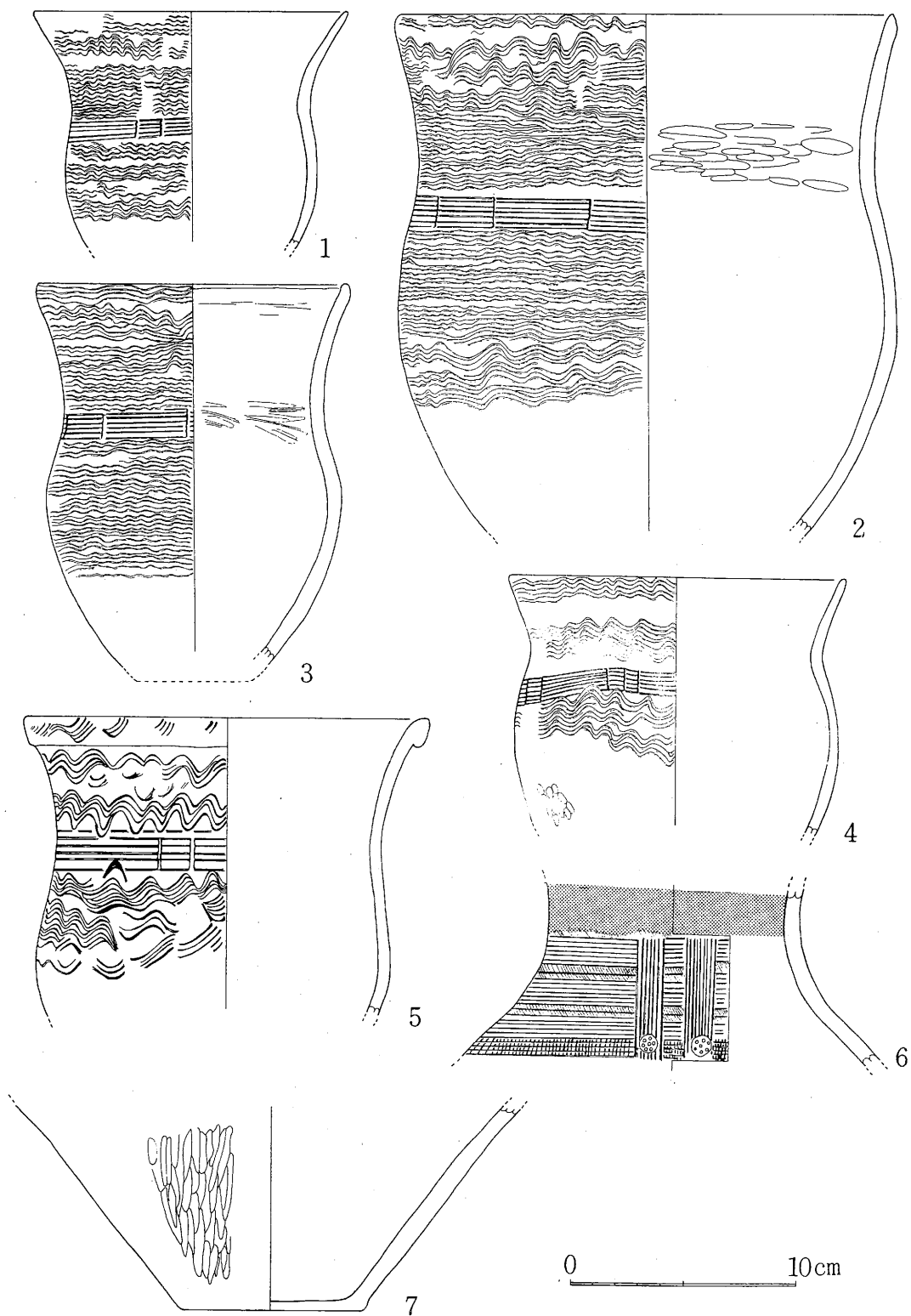


图66 48号住出土土器实测图(1)

図67  
紡錘車実測図



図68 48号住出土土器実測図(2)

### 50号住居址

50号住はE15~17の間にあって、1辺4.5mの隅丸方形の住居址で、南東の畑面から深いところで床面まで、85cmを測る。住居址の角を傾斜面の上に向けて、地割りをやっている。

この住居址内の落ち込み土は、茶褐色土が多く床面上では、焼土が東側に広がっており、黒色土が3~5cm薄く堆積していた。3/5の検出面積である。

土器は上下2回にわたって取り上げた。(図71は2回目) この中に赤彩鉢・注口鉢・小形甕・大形甕2・折り返し口縁甕・壺・高坏などがあつた。

支柱穴はP1~4があり、正方形をなさない。P2~4の間に直径70cm深さ8cmの円形の地床炉があり、赤く焼けていた。

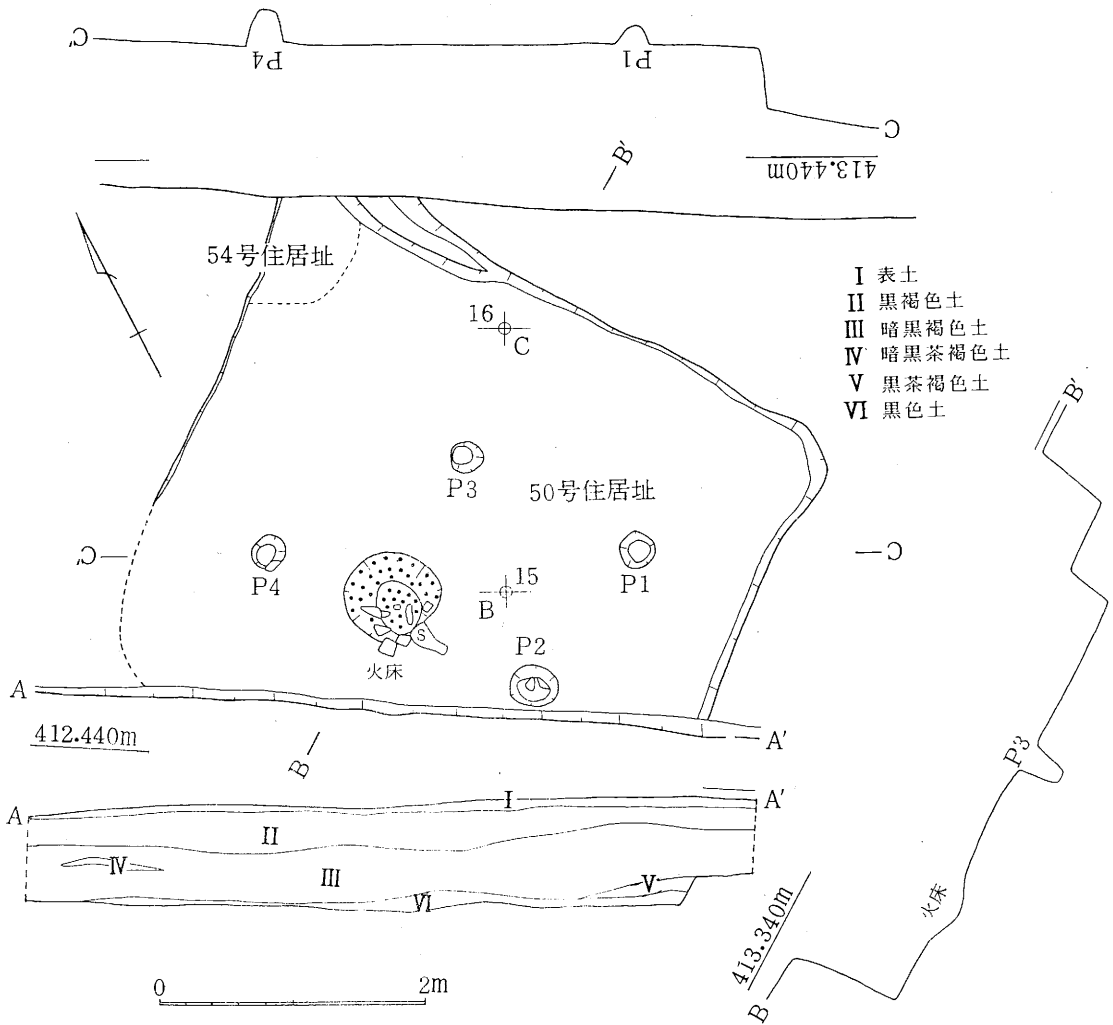


図69 50号住遺構実測図

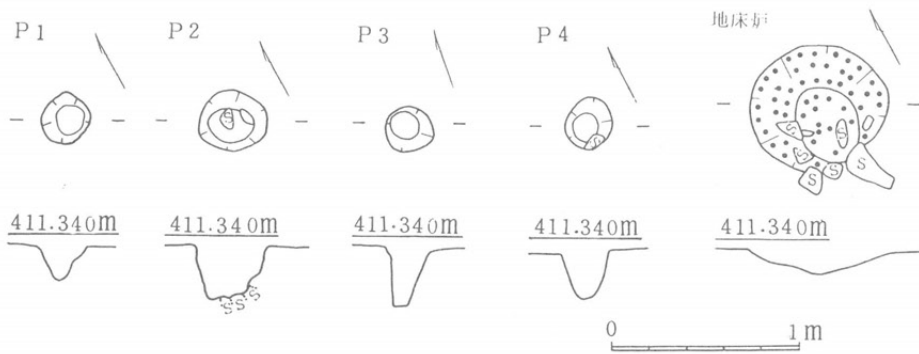


図70 50号住柱穴・地床炉実測図



↑39  
西から見た  
50号柱

→40 同上





図71 50号住遺物検出図



↑41 北から  
見た50号住の  
地床炉



→42 西から  
見たE地点  
手前49号住、  
中50号住

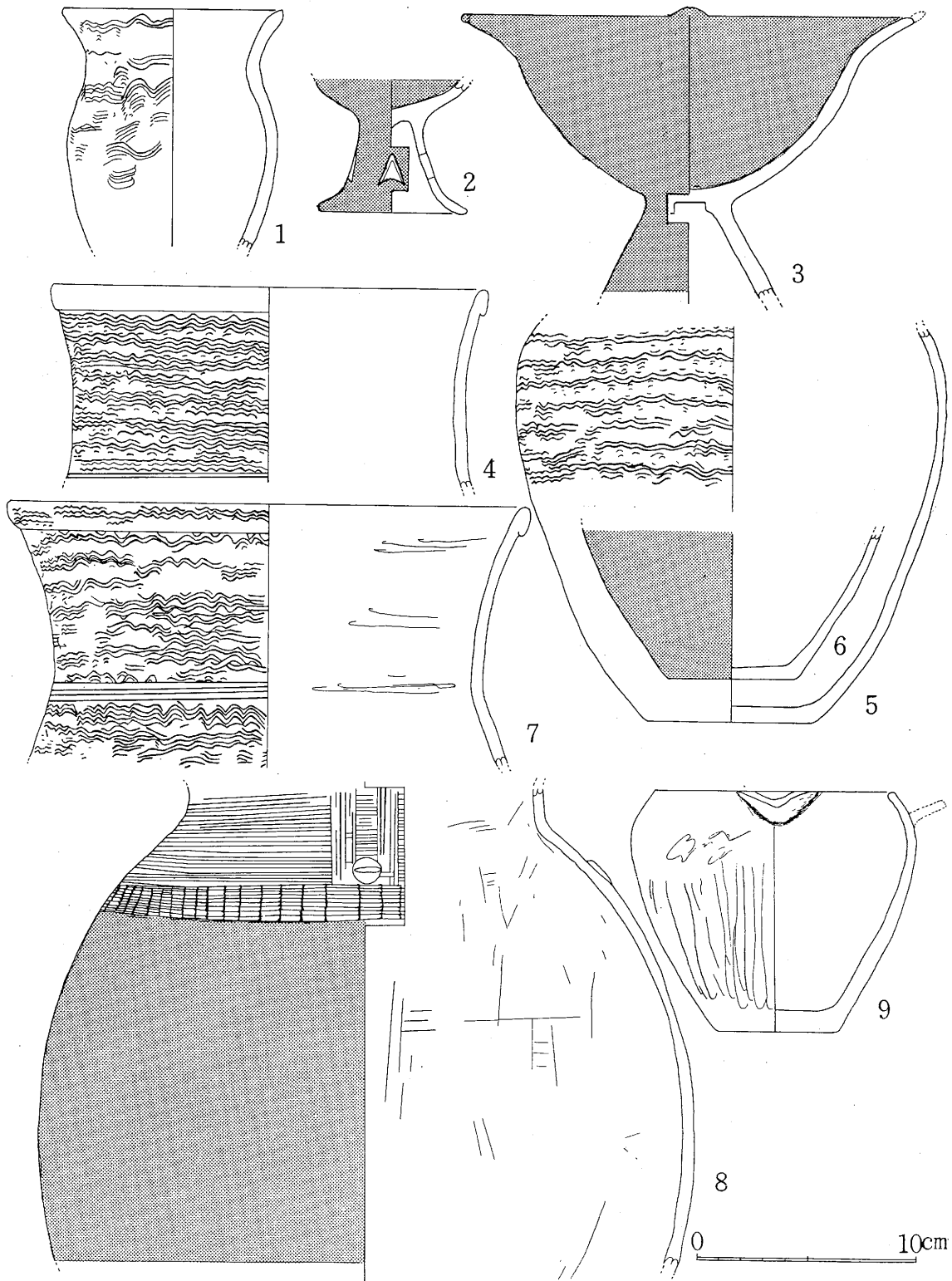


图72 50号住出土土器实测图

### 51号住居址

51号住は、E C 6～8 の位置にあり、大部分は元の道路下で、この影響で上が破損した土器が見られた。東南の角で畑面から床面まで、50cmを測る。

床面上には炭化材が多く残り、東側にはこの小屋組の炭化材が中心部に向かって倒れていた。樹種はこの地方で、雑木と呼ばれているものである。床面も焼けた所が見られた。

このように焼失家屋のため、床面にあった土器と、転入、落ち込みの土器とは区別が容易であった。

これらの土器は壺（76図12・13）鉢（75図2・4・6）高坏（同5・8）甕（同9・10）などで、（76図11）の折り返し口縁の甕は、住居址の西の下層の出土である。この住居址は1辺約4.5mの隅丸方形で、南側1/5が未掘である。

P 7 の位置に柱穴が予想されるが、後世に攪乱をうけていた。これとP 9 が主柱穴で、この間に直径45cmの円形の地床炉があった。南側のP14も主柱穴の候補で他は未掘で不明である。

床面の土器からこの住居址は、吉田式期に属すると見られる。

→43 東から  
見た51号住



図73 51号住遺物検出図



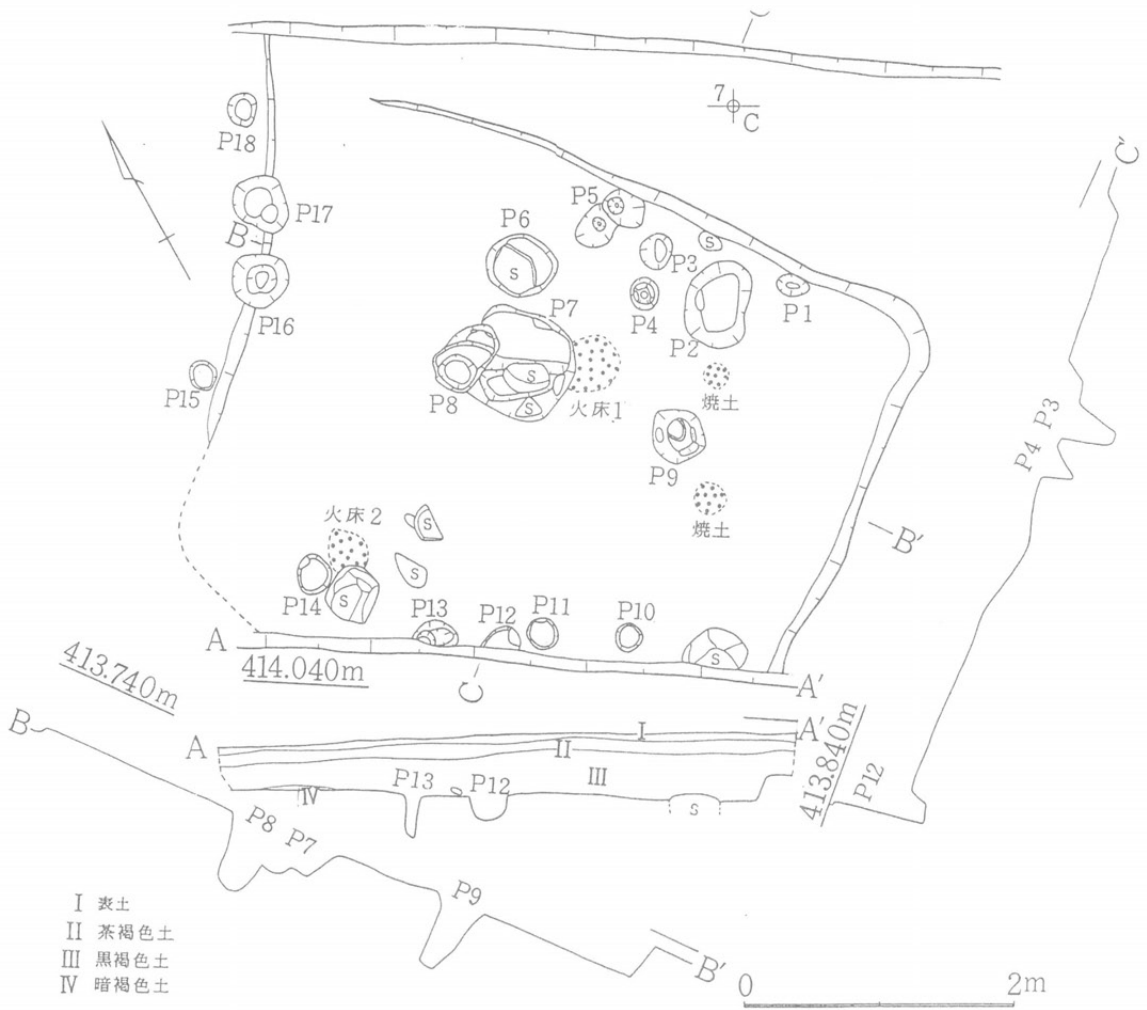


図74 51号住遺構実測図

→44 西から見た51号住の土器





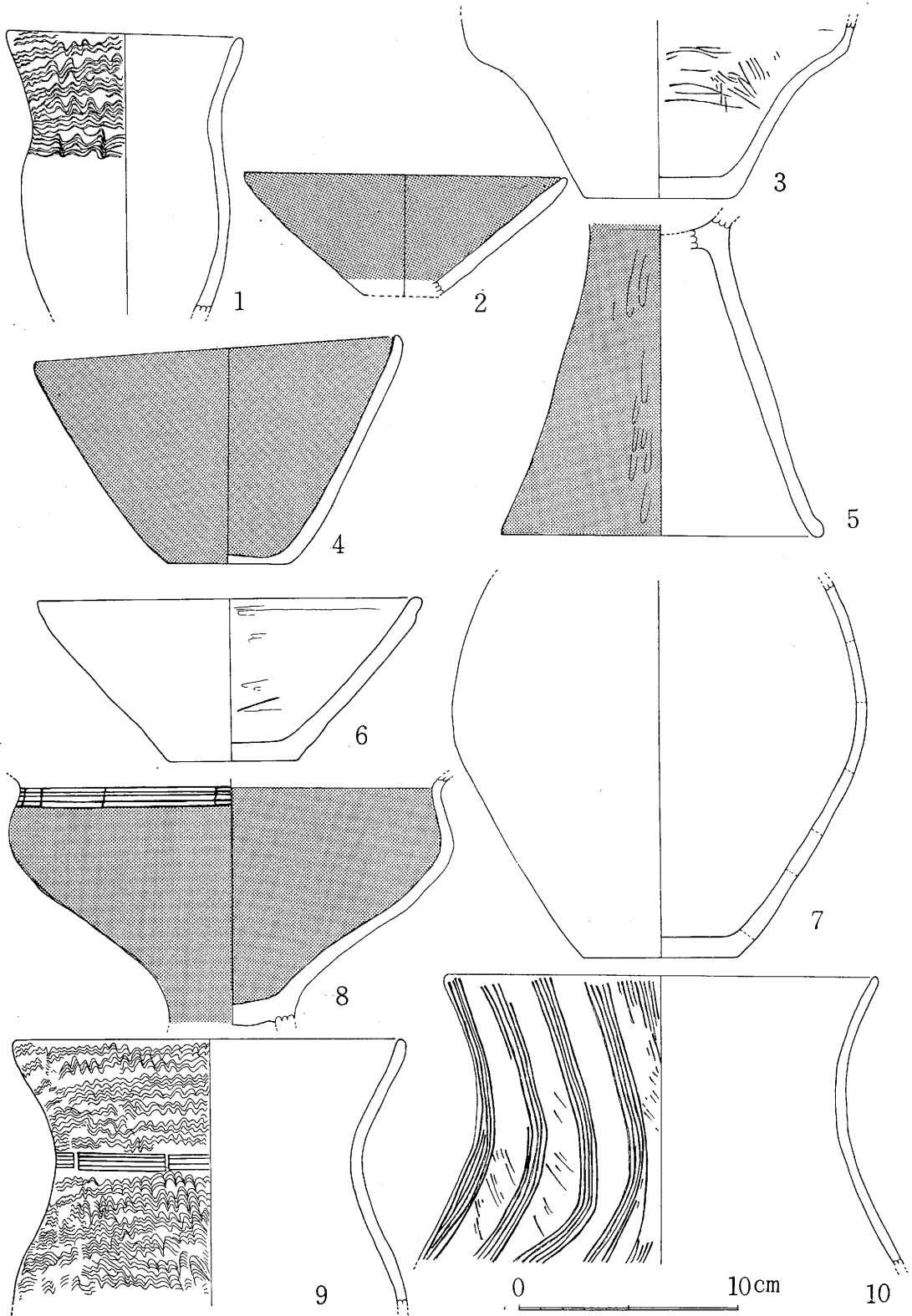


图75 51号住出土土器实测图(1)

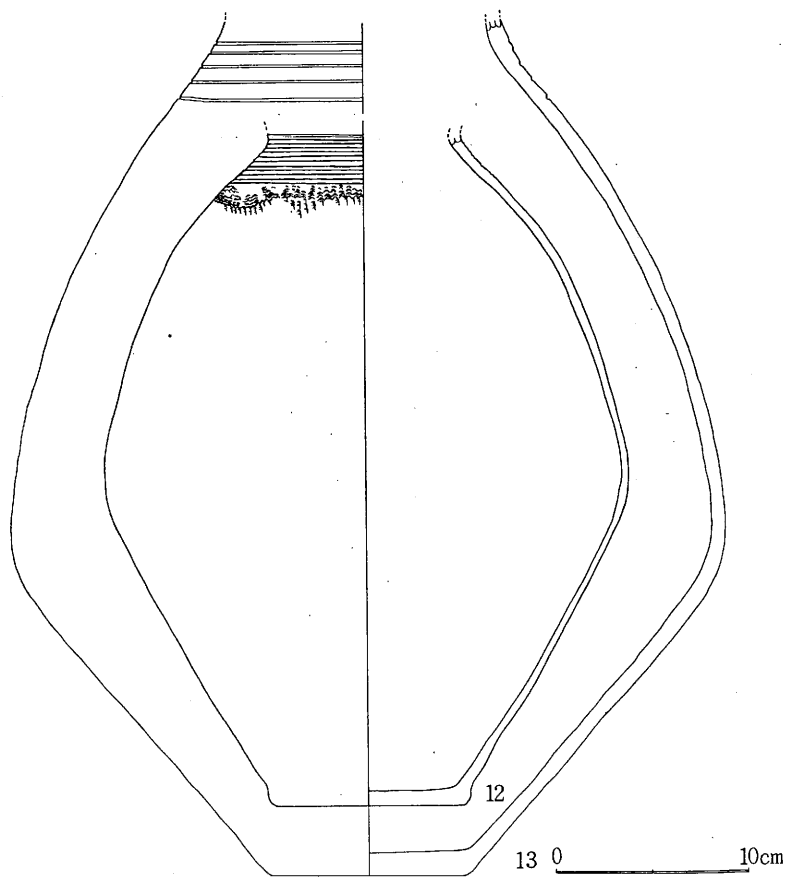
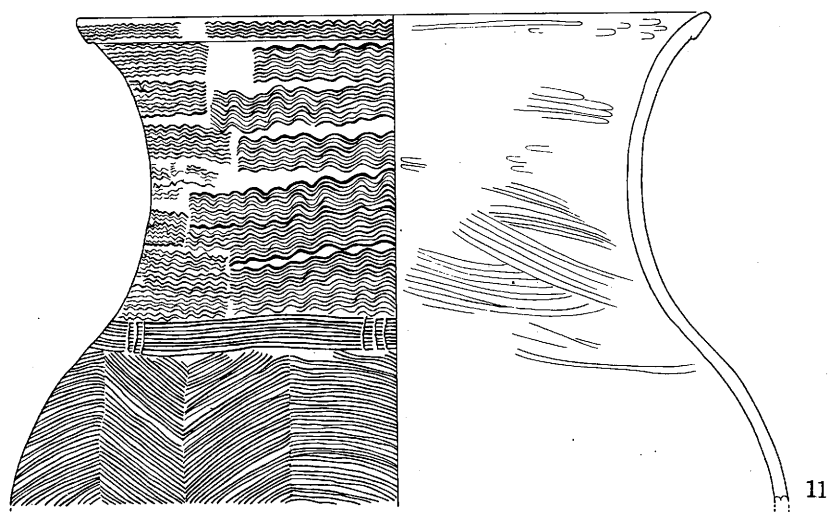


图76 51号住出土土器实测图(2)

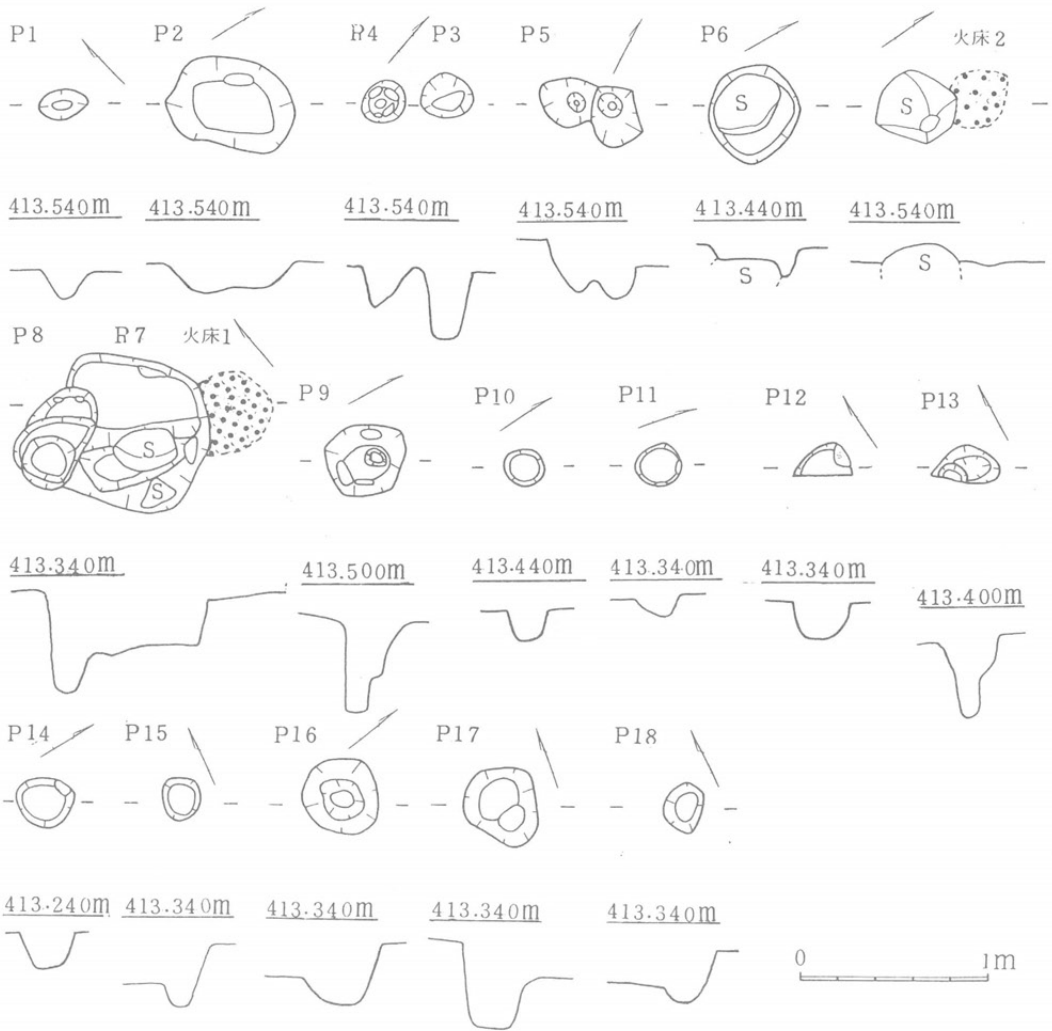


図77 51号住柱穴・火床実測図

→45 西から  
見た51号住の  
床面



52・53号住居址

52・53号住はE C 9～11の間であって、53号住を切って52号住が複合している。また、53号住の南側に平安時代の土壌が掘られていた。

52号住の東の隅は、畑面から床面まで、1mと深く角を傾斜面の上に向けている。検出面積は、1/2である。

東の壁際に土坑（1×0.7m、深さ4cm）があり、赤彩の壺などが埋まっていた。

1辺が5mの隅丸方形の住居址で、P1・P2が支柱穴と推定される。しかし他は未掘である。円形で直径30cmの火床が、西側にあった。

この住居址からは、壺下半部・赤彩高坏・小形広口壺（図81）などが出土している。

52号住居址の床面より、53号住の床面は13cm高く、南の畑面から床面まで、77cmを測る。

1辺が4～4.5mの方形の住居址で、傾斜面の等高線に沿って造られている。

北東の位置のプランの外に、幅1.5×1mの窪みがあり、出入り口か、貯蔵穴の可能性はある。

ここの土器は上層出土の古式土師の甕を図示し、他の破片は図示していない。

この二つの住居址は箱清水式期に属するが、52号住が新しいと見られる。

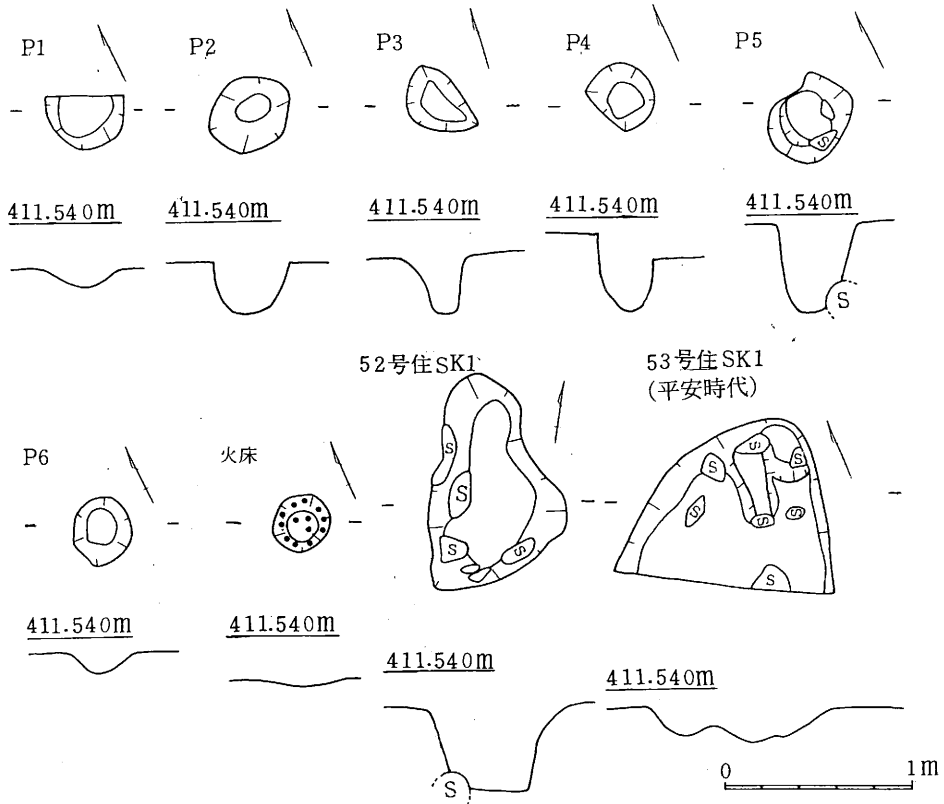


図78 52・53号住柱穴・火床・土坑実測図

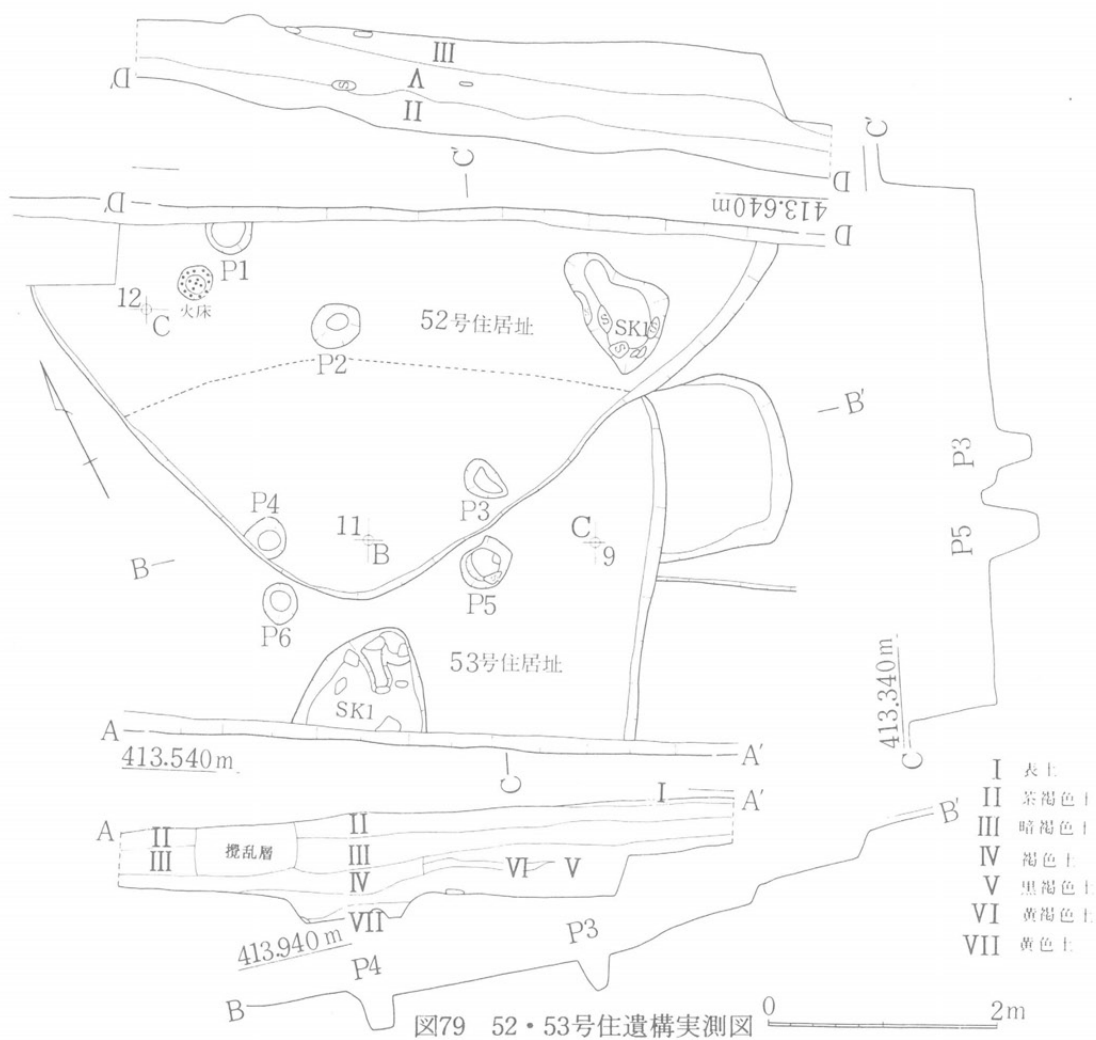


図79 52・53号住遺構実測図

→46  
西から見た  
52号住  
(左)と  
53号住  
(右)と  
土壇(右端)



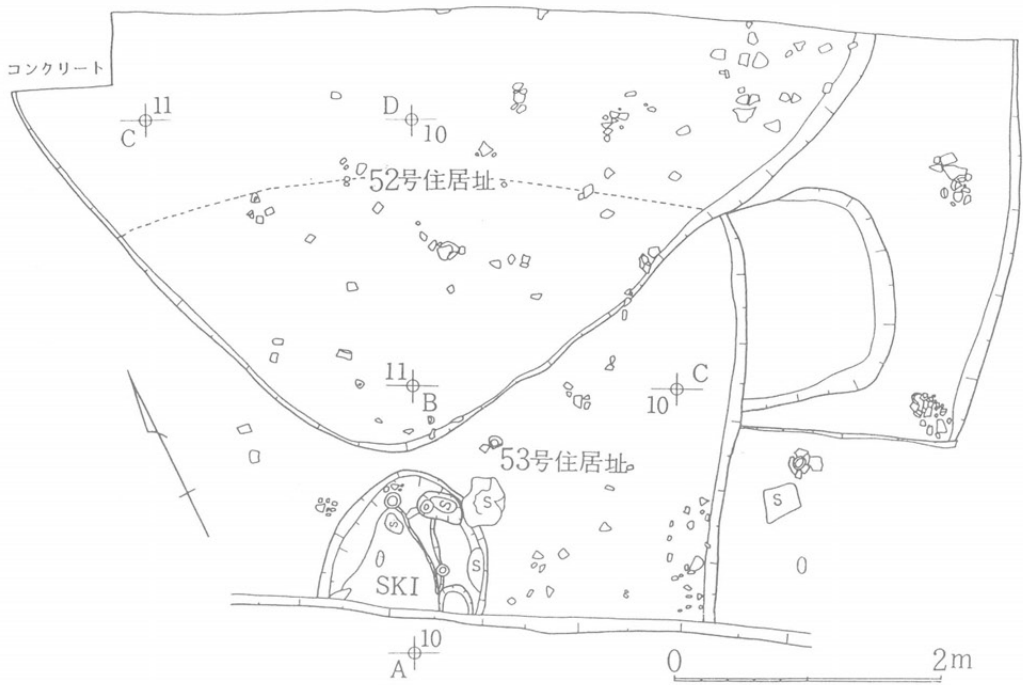


図80 52・53号住遺物検出図



↑47 西から見たE地点 手前52・53号住、中51号住、上端39号住

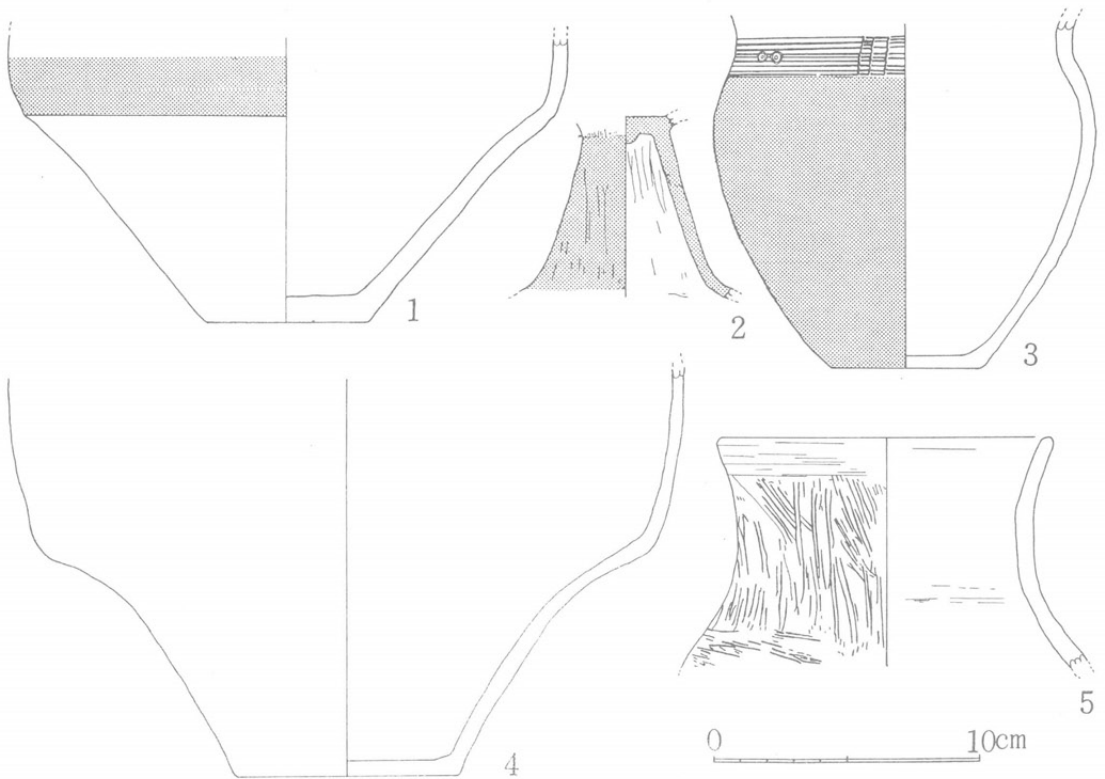


図81 52・53号住出土土器実測図

#### 54号住居址

54号住は、50号住の北西に切り合いし、1辺3.5m、奥行き85cmの検出面積である。北の納屋のコンクリート面から床面まで、1mを測る。隅丸方形のプランで、壁面が赤く焼けていた。これも焼失家屋で、炭片が厚いところで8cmの厚さに堆積していた。

床面の土器は、東よりに見られた壺の破片で、箱清水式期のものである。

→48  
西から見た  
56号住(左)  
右上50号住



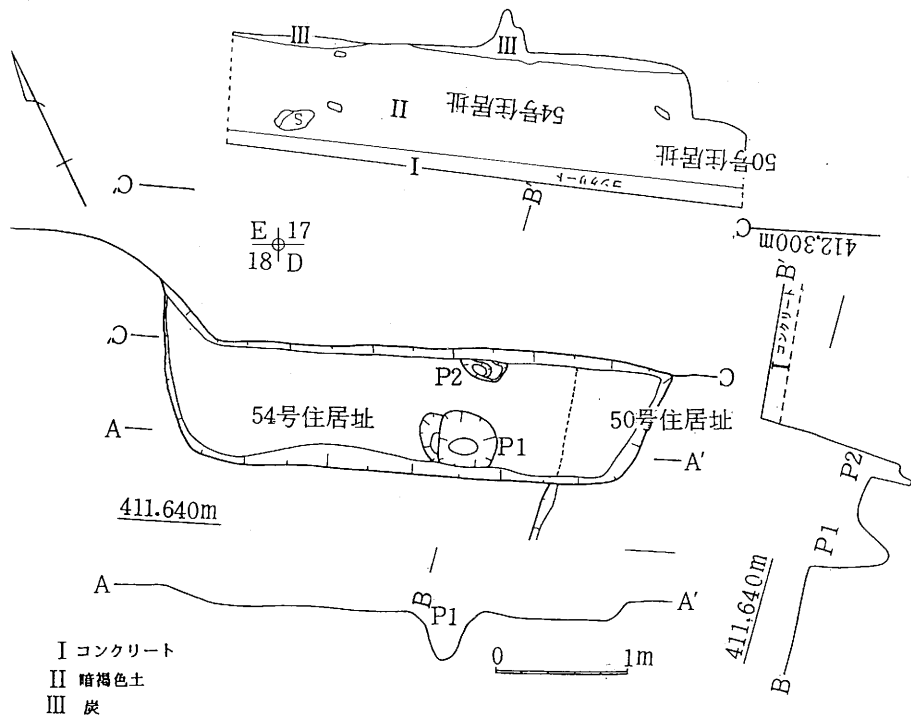


図82 54号住遺構実測図

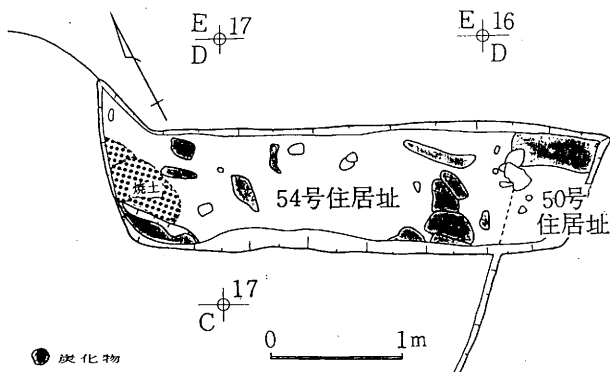


図83 54号住遺物検出図

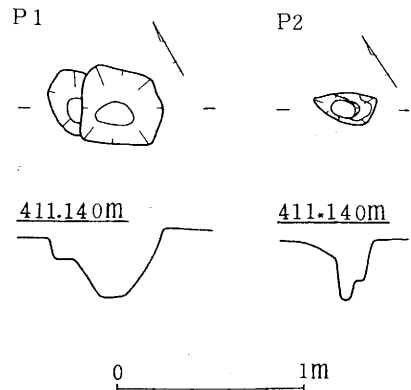


図84 54号住柱穴実測図

### 壺 棺

間山豊富神社の入り口近くのD地点B36の位置にあって、口頸部から上を欠いた壺を組み合わせて壺棺としている。南側の中程に中形の壺が置かれていた。(84図C)

西側の壺A(88図A)は、破断面で直径44.5cm、高さは約56.5cmで、口頸部から上の破片は無かった。

東側の壺Bは、破断面の直径32cm、高さ約48cmである。この壺Bを壺Aの中に入れて組み



合わせていた。この壺Bは口頸部をノミ状の工具で、打ち欠いており、この破片は壺棺のまわりに散乱していた。(87図B)

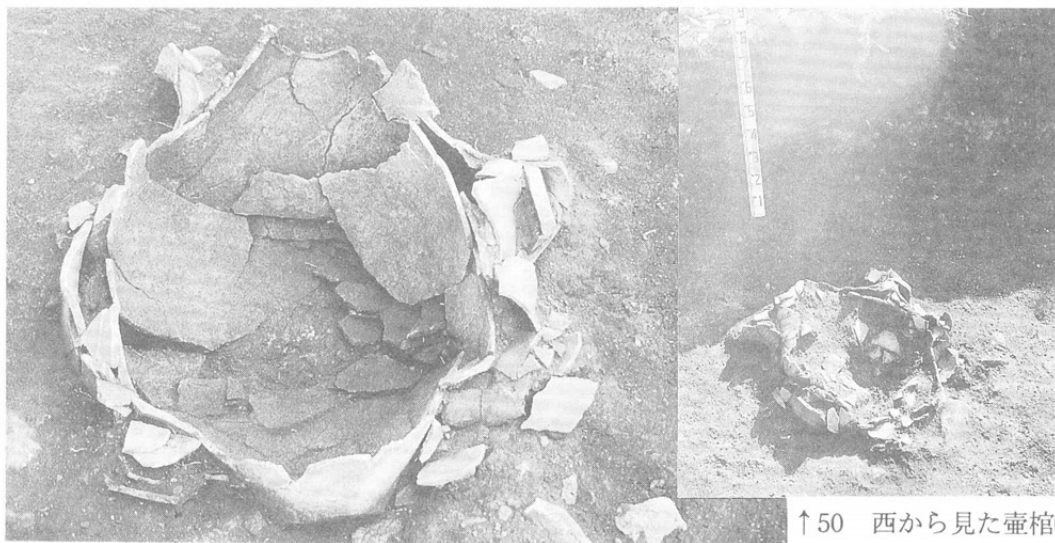
両者の組み合わせた長さは145cmで、幅1m以上に広がっていたが、元は幅61cmと推定される。

墓壙の掘り方は、地山面まで掘って、周りを石で押さえていた。(86図)

南側の中辺に壺Cが置かれていた。これは壺ABの破断の時に、南側面の下敷きになったと推定される。

これらの壺ABCの内部の黒色土を、水洗を行い精査したが、遺物は発見できなかった。

壺ABCは器面が、よく赤色磨研されている。壺Bの櫛描簾状文の存在などから、箱清水式期の所産と考えられる。



↑49 西から見た壺棺(1)

↑50 西から見た壺棺(2)

→51 北から見た壺棺の掘り方



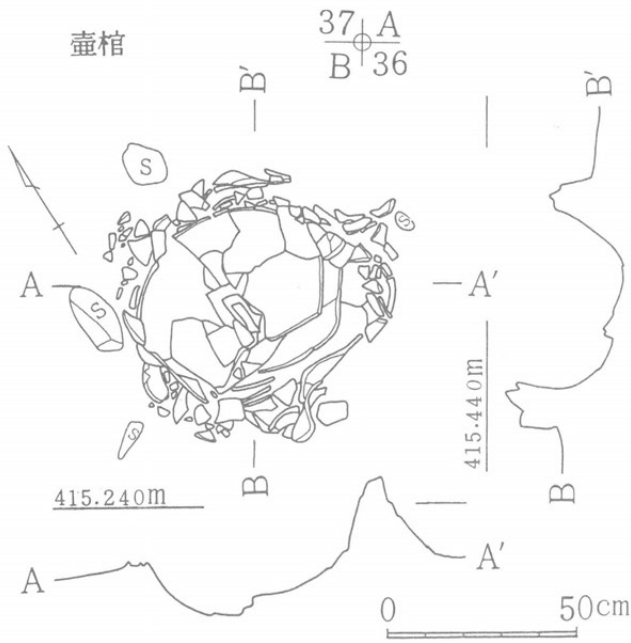
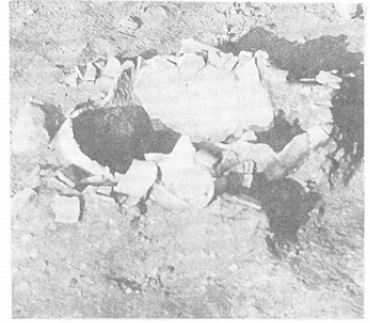
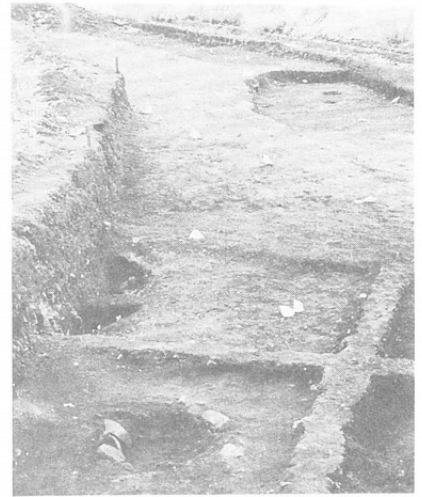


図85 壺棺検出実測図



↑52 南から見た壺棺



↑53 北から見たD地点・壺棺墓壇  
46号住(左) 45号住(右上)

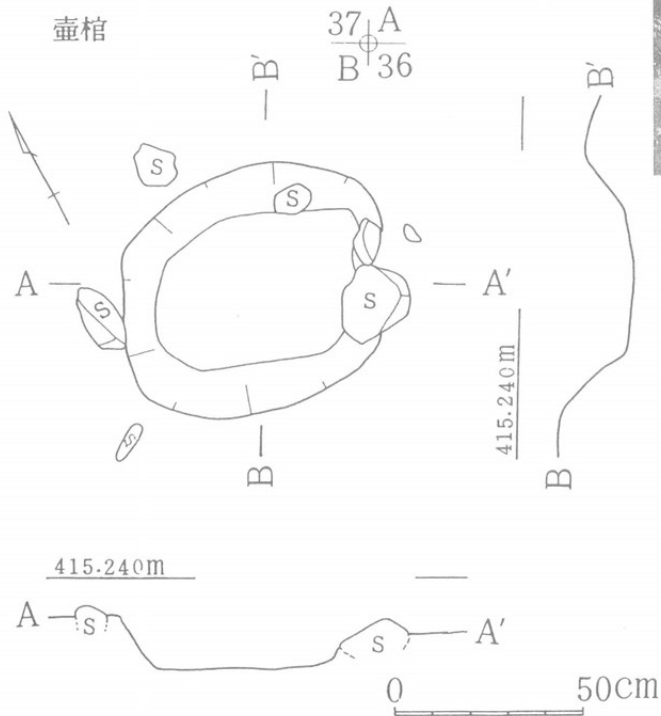


図86 壺棺墓壇実測図

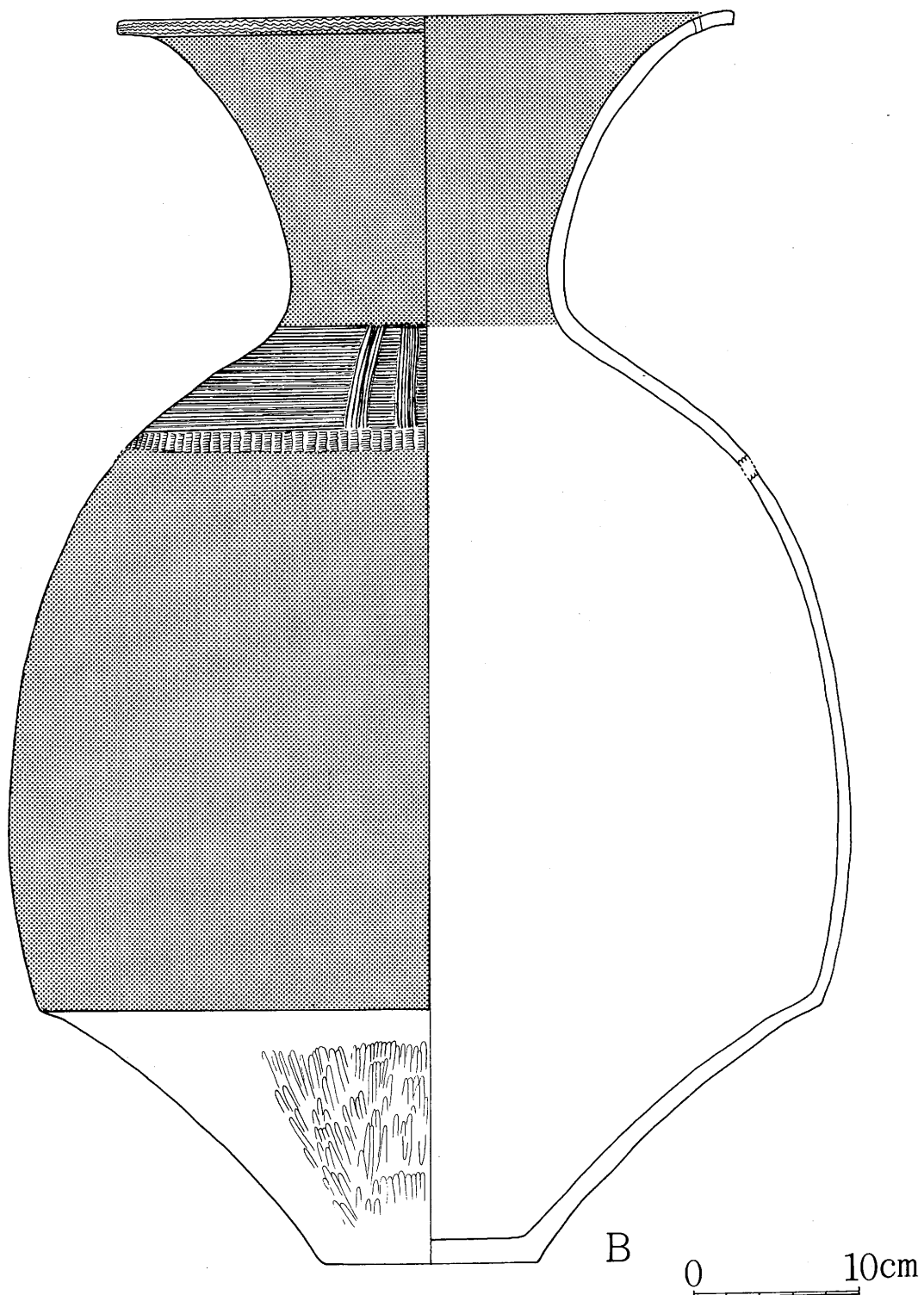


图87 壶棺B 实测图

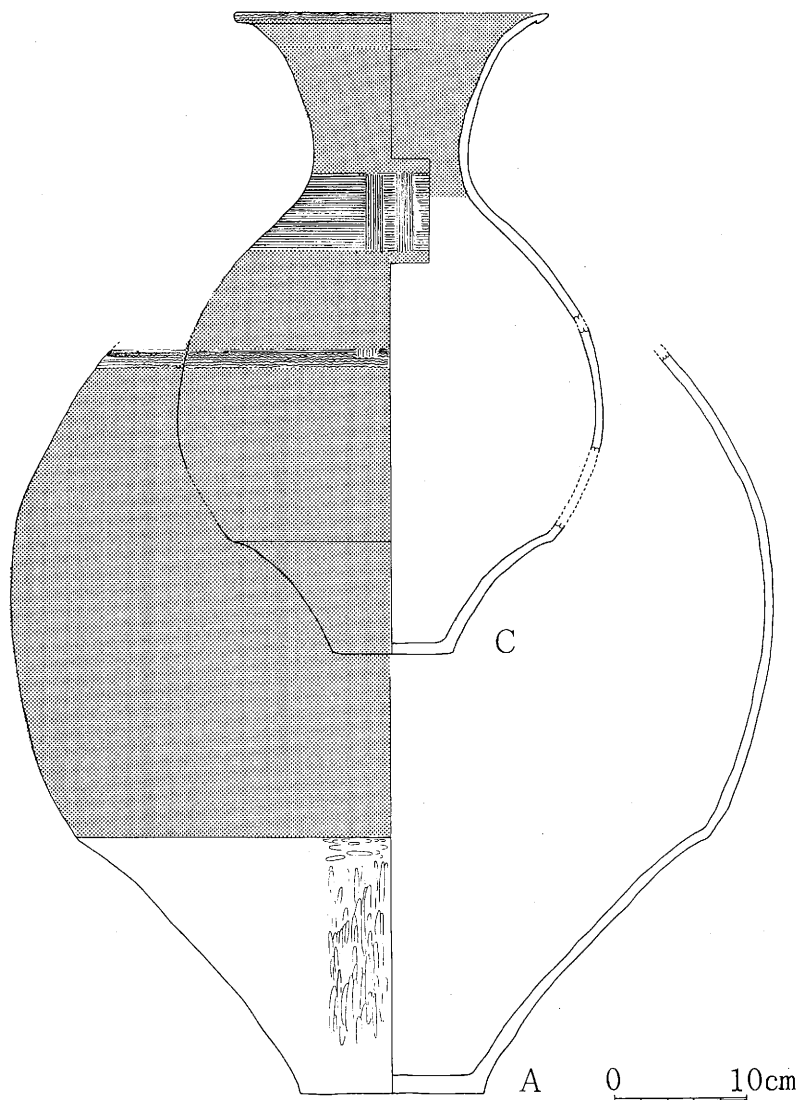


図88 壺棺 A・C 実測図

### 第3節 古墳時代の遺構と遺物

#### 7号住居址

7号住居址は、G 3・4・5の位置にあって、1辺7.5mの大形な方形住居址だが、東半分は未発掘である。

この住居址の西北には、後に報告する二つの溝が接続しており、土塁状遺構ではないかと、

報告したが、この住居址と、土壘状遺構との関連が注目される。

この住居址の床面上 30 cm のところには、95図 15 の古墳時代 IV 期の広口壺があって、他の土器とともに展開していたが、黒土層の中にあつて、住居址などは明確にすることが、できなかった。

検出した堅穴のプランは壁面に沿って焼け土が巡っていた。このように壁面から床面上に焼土で埋まっていたのは、屋根材の上に土が載せてあつたと推察された。

さらにその下には、木材・カヤなどが炭化されて、埋まっていた。

床面は北側部分で広く焼けており、使用された地床炉はどれか、完掘していないので、にわかには決めがたい。

柱穴の状態を見ると、4 本支柱ではないと推定される。

床面から検出された土器は、各地からの搬入された土器が多くみられ、94図 10 の S 字口縁の甕、95図 13 の壺胴部は、元屋敷式土器にみられるもので、ともに東海系の土器で、元屋敷式の土器と、つぎに報告する北陸系の土器とのあり方を端的に示しているのが注目される。

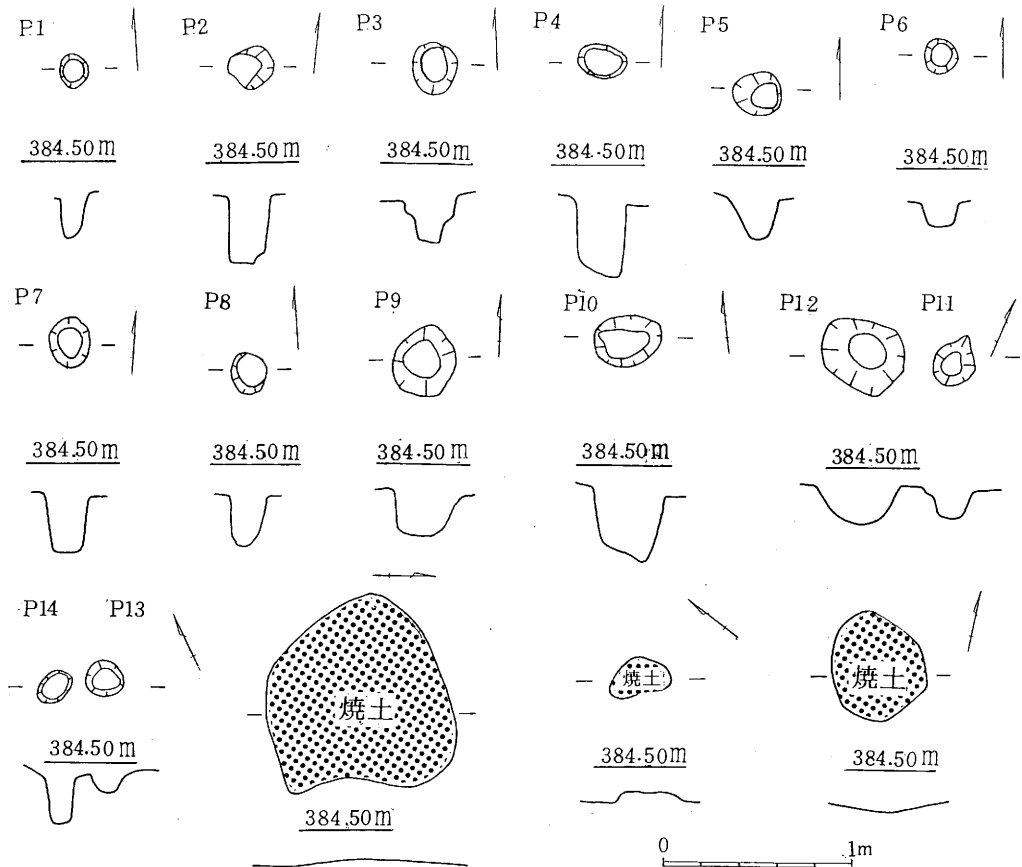


図89 7号住柱穴・焼土実測図

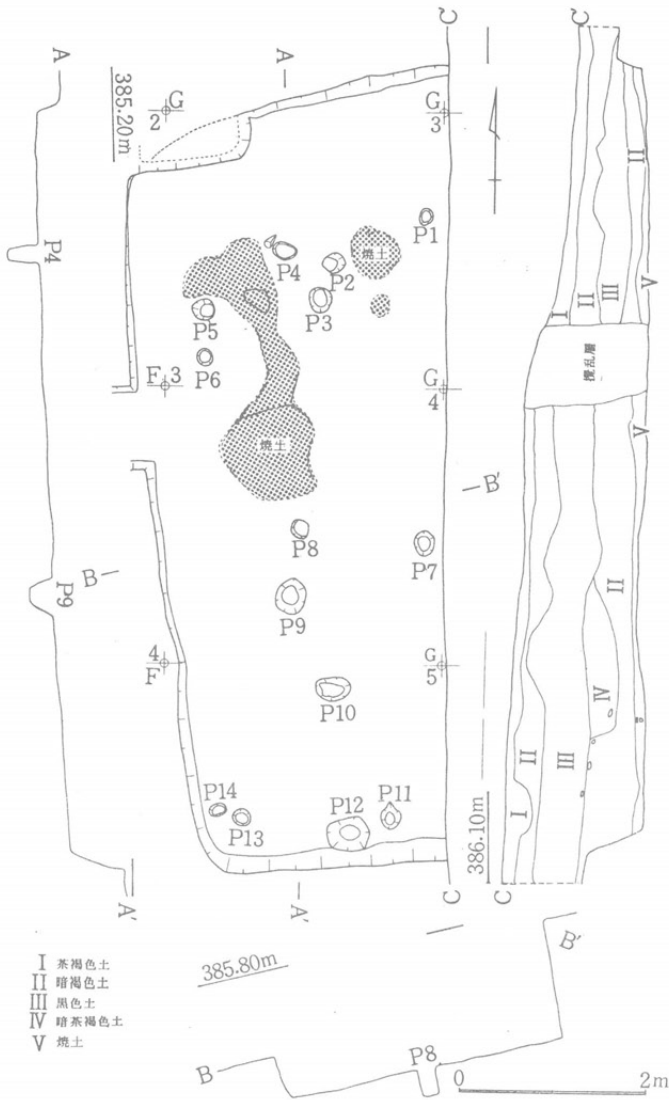


図90 7号住遺構実測図



↑54 7号柱の高坏



↑55 7号住南壁の炭



↑56 西から見た7号住の遺物

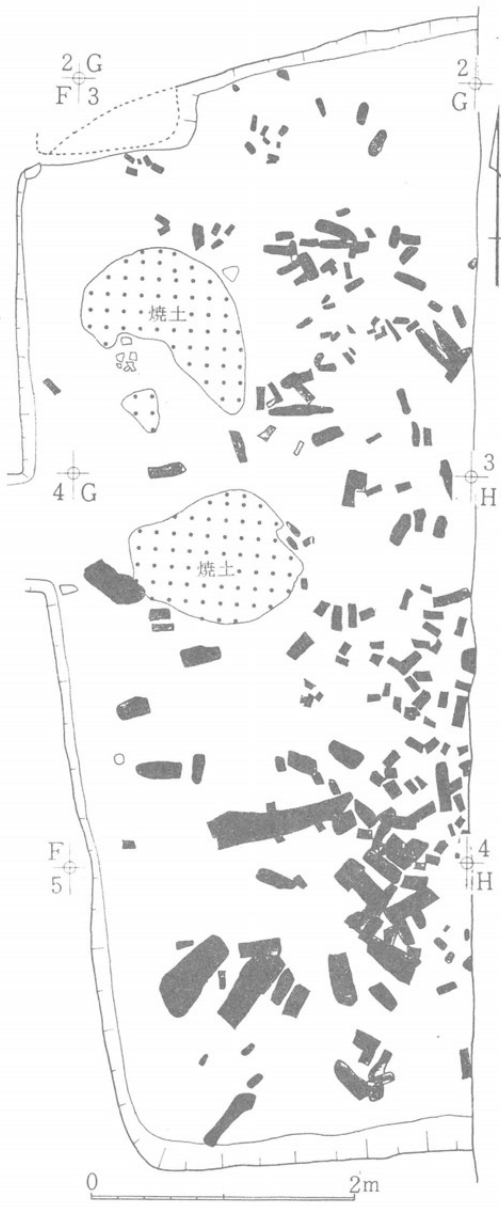


図91 7号住遺物（炭）実測図

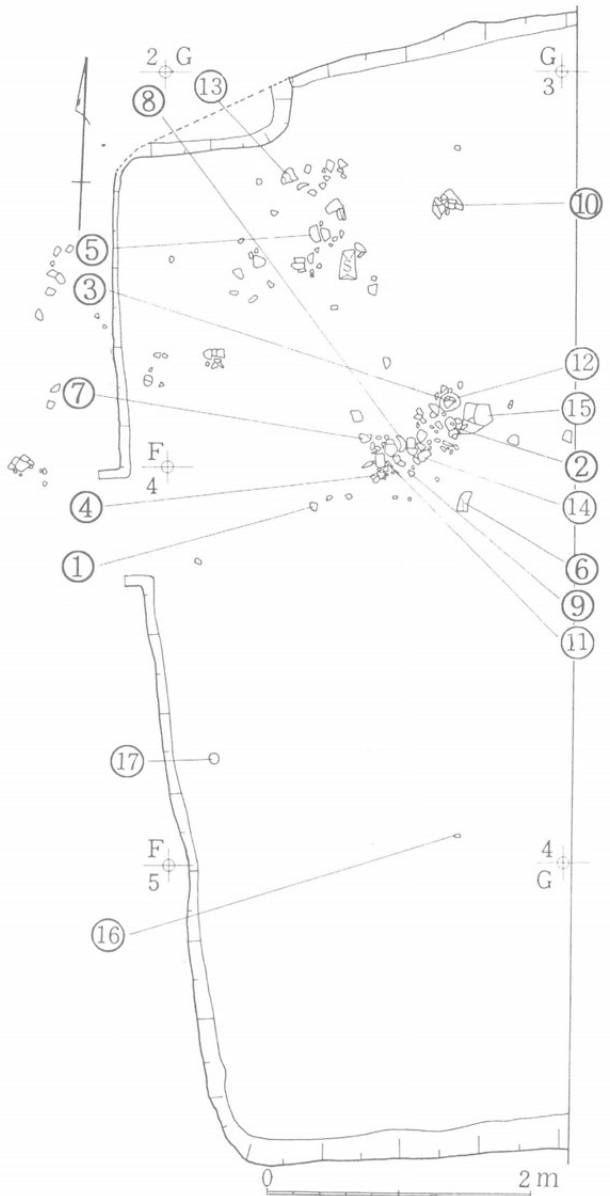


図92 7号住遺物検出図

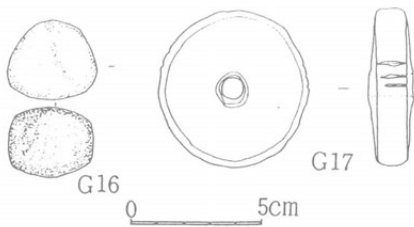


図93 7号住出土土器・石器実測図

→57 7号住床面出土禾本科植物の炭化物





→58 南から見た7号住の炭化物



↑59 南から見た7号住の床面



↑60 南から見た7号住上層の土器



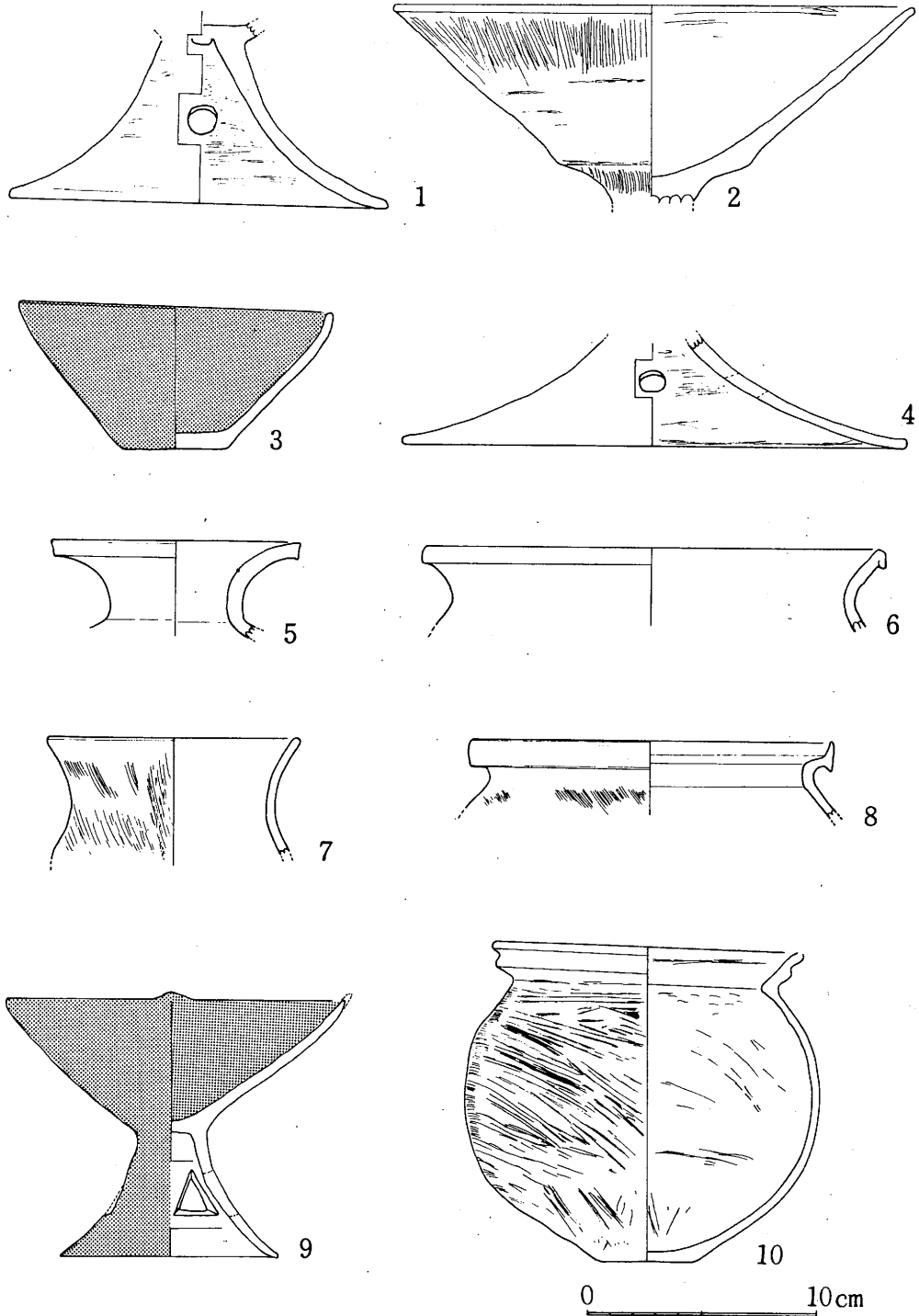


图94 7号住出土土器实测图(1)

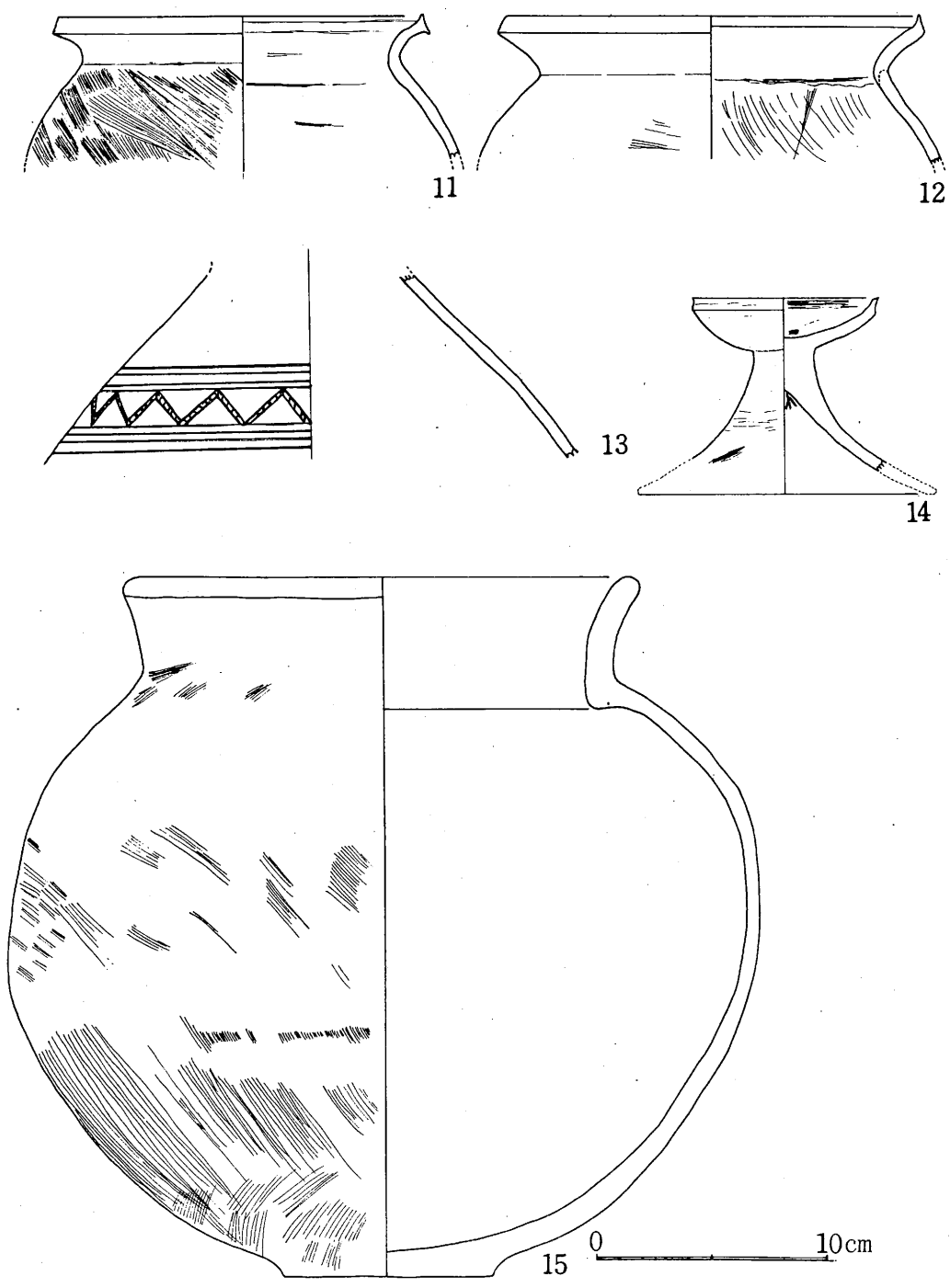


图95 7号住出土土器实测图(2)

### 9号住居址

9号住は本線G 8～10の間にあり、約2/3の検出面積である。東側の畑面から床面まで1 mあまりの深さである。1辺5.4mの隅丸方形のプランで、中に石礫が落ち込んでいた。

中には直径50cmを越すものも見られた。発見された土器は少なく、甕・器台（96図）など僅かである。

支柱穴はP 1～3で4は未掘である。地床炉は中央南よりにあり、幅8 cm、長さ20cmの石を南北に据え、焼けた範囲は長径70cm、幅30cmである。

南側と西側に連続して、幅20cm、深さ8 cmの溝が壁面に巡っていた。これは間山遺跡では古墳時代の住居址に顕著である。



↑61 西から見た9号住

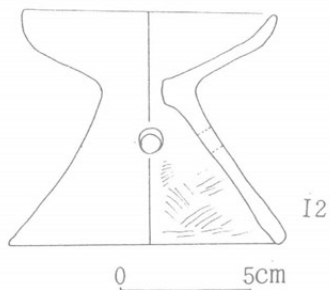


図96 9号住出土土器  
実測図

→62 9号住の地床炉  
と土器



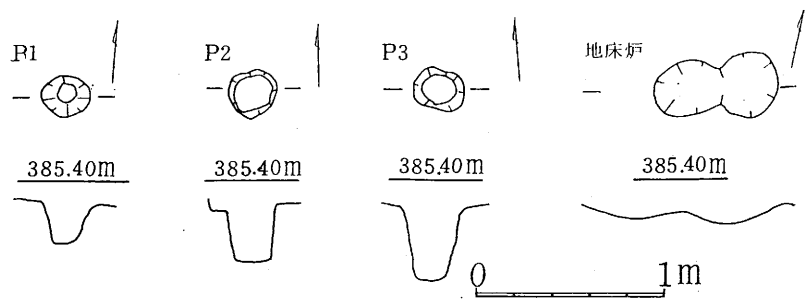


图97 9号住柱穴·地床炉实测图

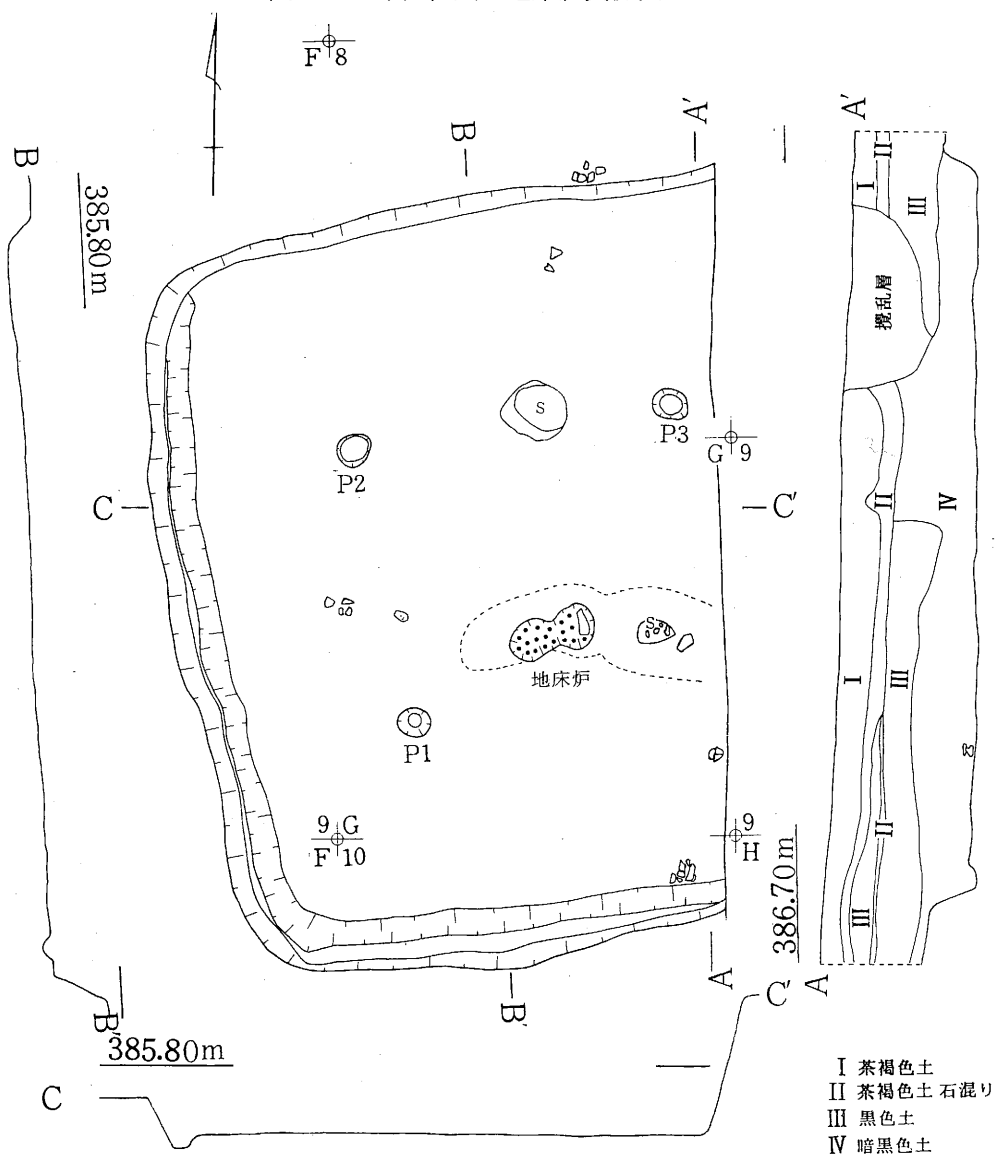
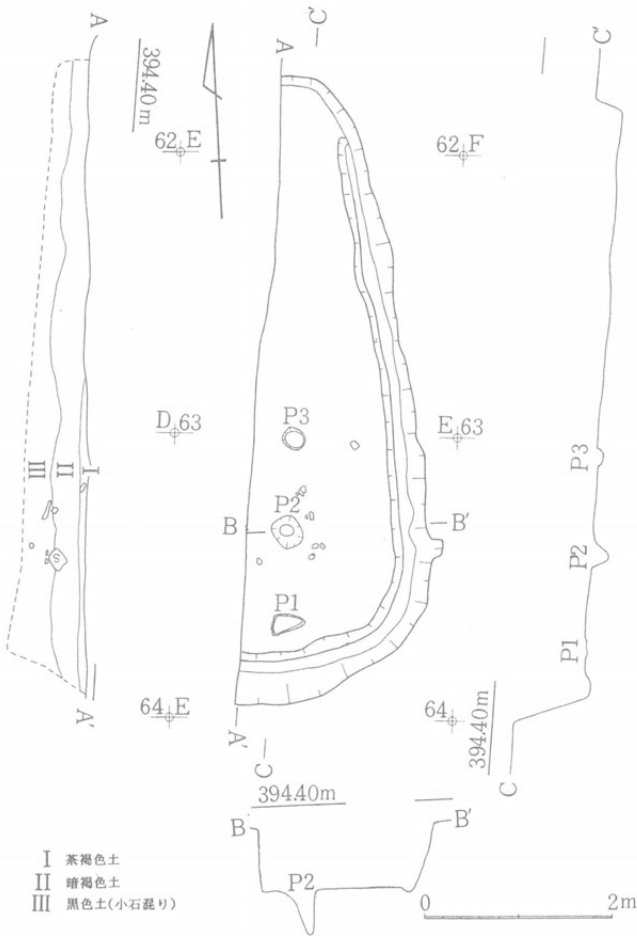


图98 9号住遺構实测图

### 13号住居址

13号住居址はE 63・64の位置にあって、東側部分1/4ほどの検出である。隅丸方形で、東壁南北の長さは6 m程の長さで、東と南の床面の回りには、溝が回っている。

ここからの土器の出土は、発掘面積の関係もあって少なく、住居址の年代と時期の決定は土器からは困難である。しかし、今回の発掘の所見として、古墳時代の住居址は、弥生時代より大きく、また、床面の周囲に、溝が見られる例が多いので、古墳時代の住居址と判断した。



↑ 63 北から見た13号住

図99 13号住遺構実測図

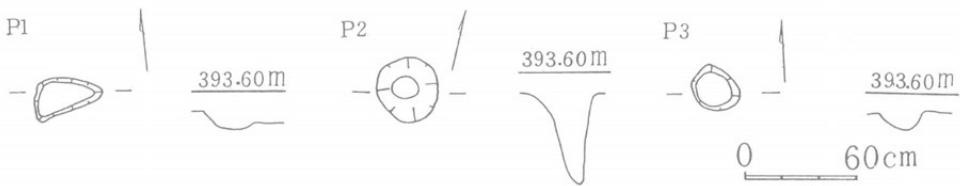


図100 13号住柱穴実測図

14・16号住居址

14・16号住は本線F 58～60の間であって、14号住は西にあり、1辺5 mの隅丸方形で、東と南側に溝が回る。上から2.3mの位置に10cmの差の段がある。西の1/5は未検出で、甕（104図）が床面にあった。柱穴は4基みられるが、不規則である。

16号住は、東のアスパラ畑の面から床面まで、70cmを測り、検出面積は約1/4と思われる。西側に土坑とピットが3基見られる。土坑は直径70cm、深さ45cmを測り、中に甕（102図）が埋まっていた。

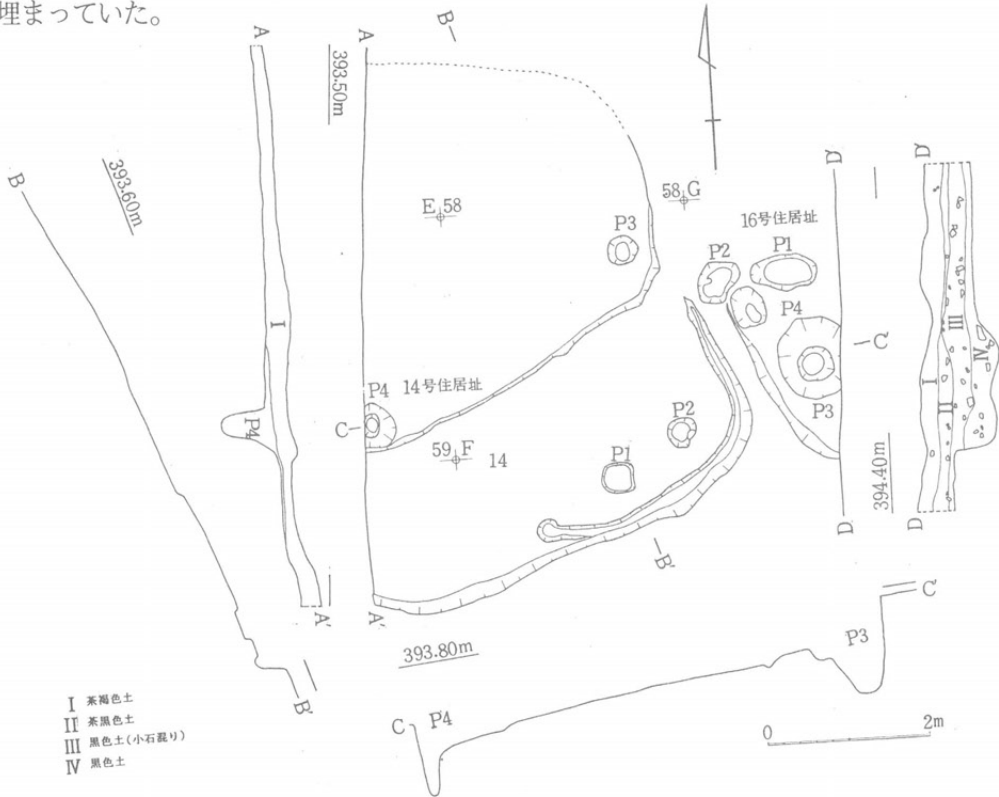


図101 14・16号住遺構実測図

→64 北から  
見た14（右）  
16（左）号住



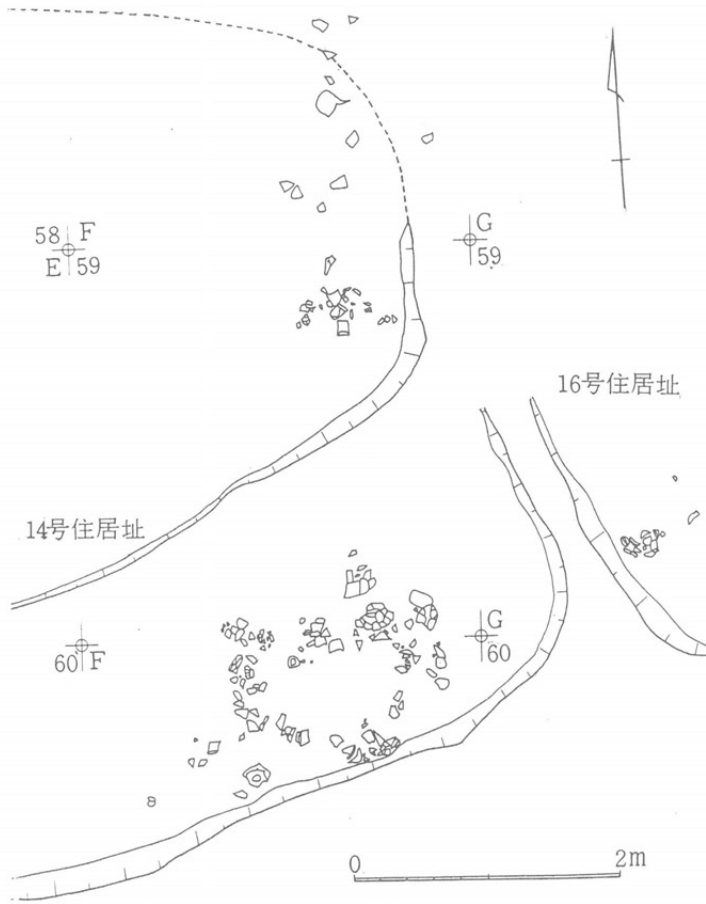


図103 14・16号住遺物検出図

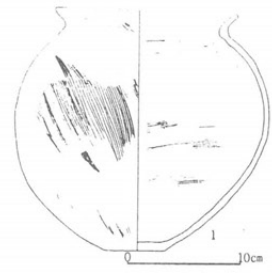


図102 16号住出土土器実測図

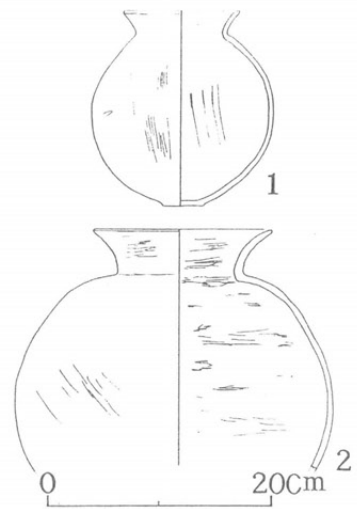


図104 14号住出土土器実測図

→65 北から  
見た14号住の  
土器



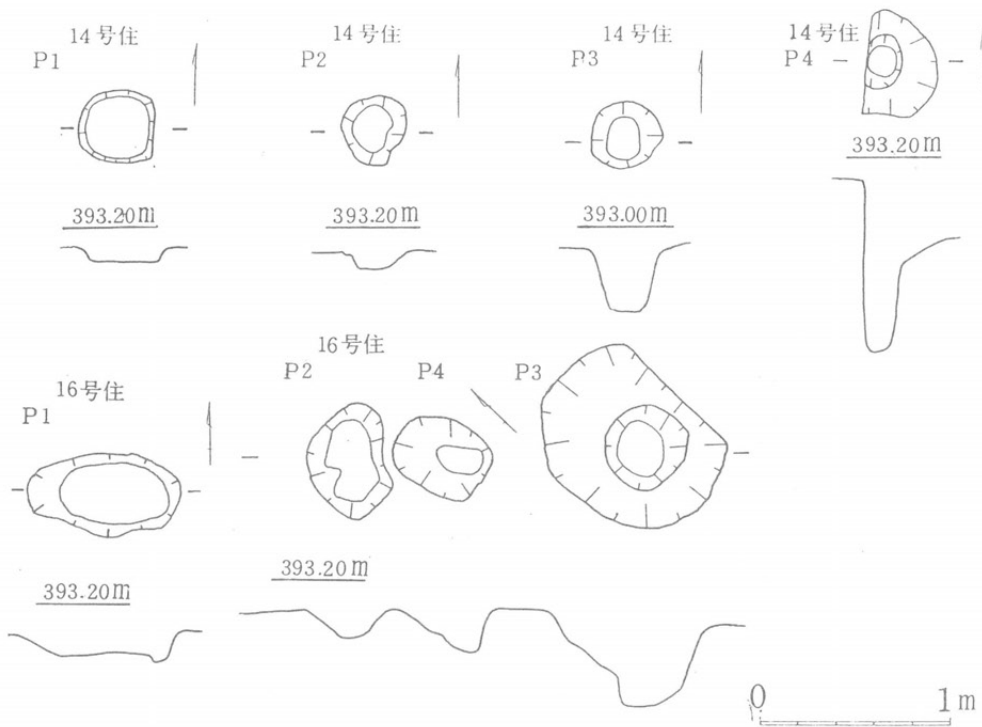


図105 14・16号住柱穴実測図

→66 西から見た16号住の土坑内の土器



### 15号住居址

15号住は本線C55～57の間であって、4.7×5.3mの隅丸方形の住居址である。東南角の畑面から床面まで、1.3mの深さで、床面の中央西に自然流下の乱流（幅40cm）の跡が残る。これはこの住居址が埋まり切らないうちに、雨水などが流れてできたものと思われる。



床面の南（上）側に幅20cm、深さ10cmの溝があり、西に巡っている。出土した土器は古墳時代の初めのもので、高坏・甕・器台（119図）などがあり、北陸の月影式の影響の見られる高坏脚部（同図4）が中央から出土した。支柱穴はP2・4で他は未検出である。

P1は90×105cm、深さ50cmの大きさの土坑である。この15号住や14号住の上層には中世の石敷の道が検出されている。

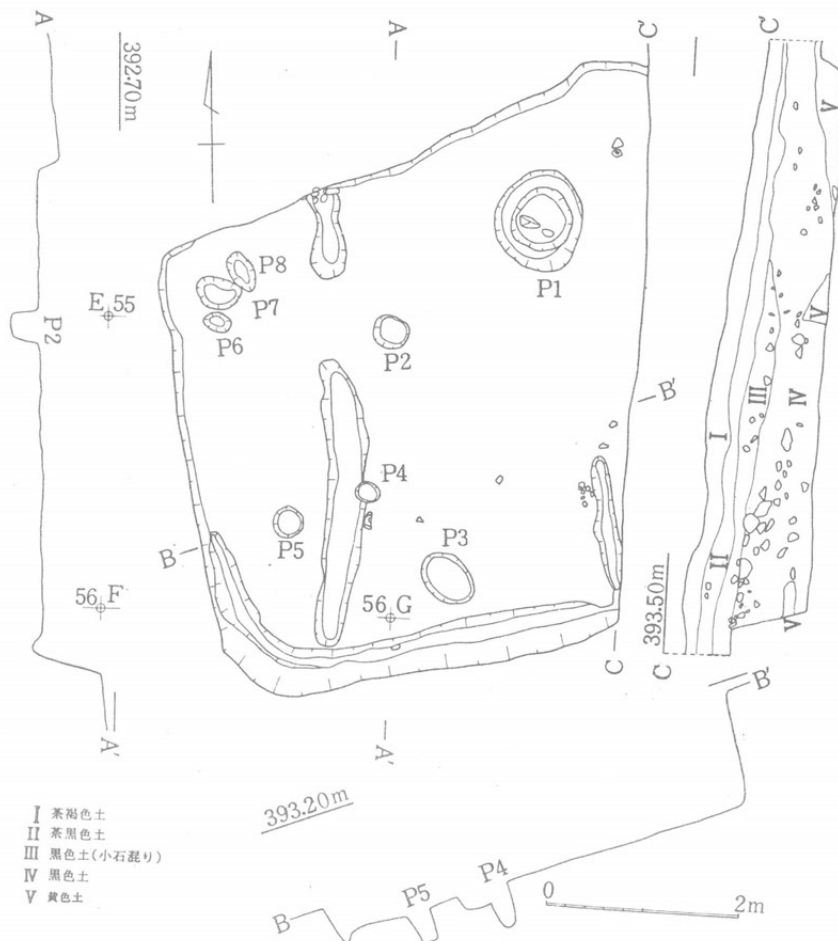


図106 15号住遺構実測図

→67 北から見た15号住の土器



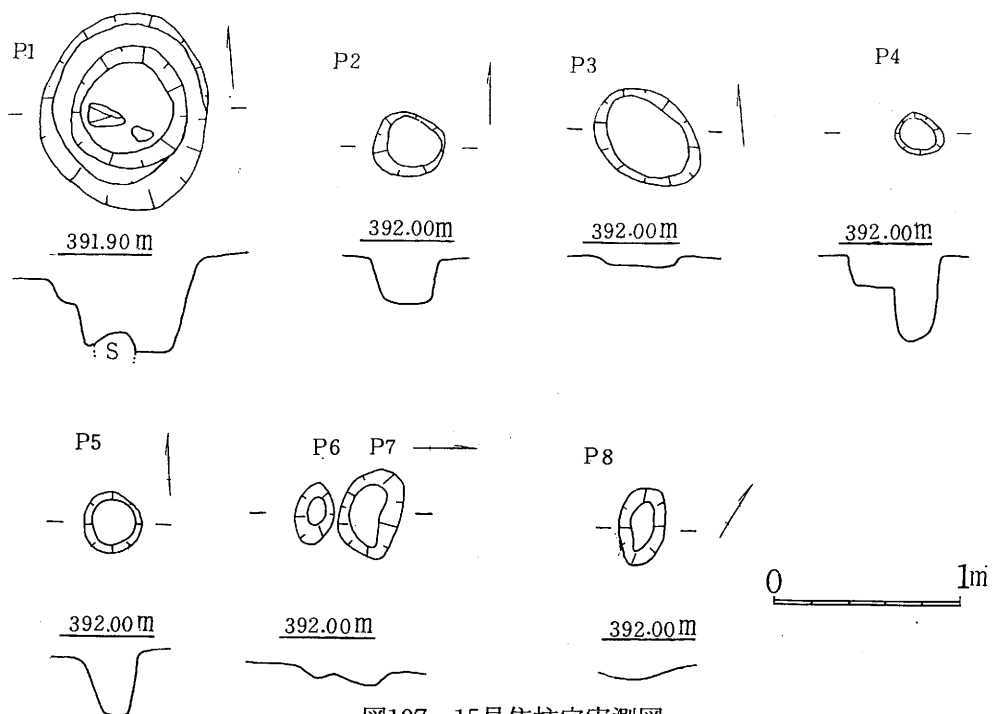


图107 15号住柱穴实测图

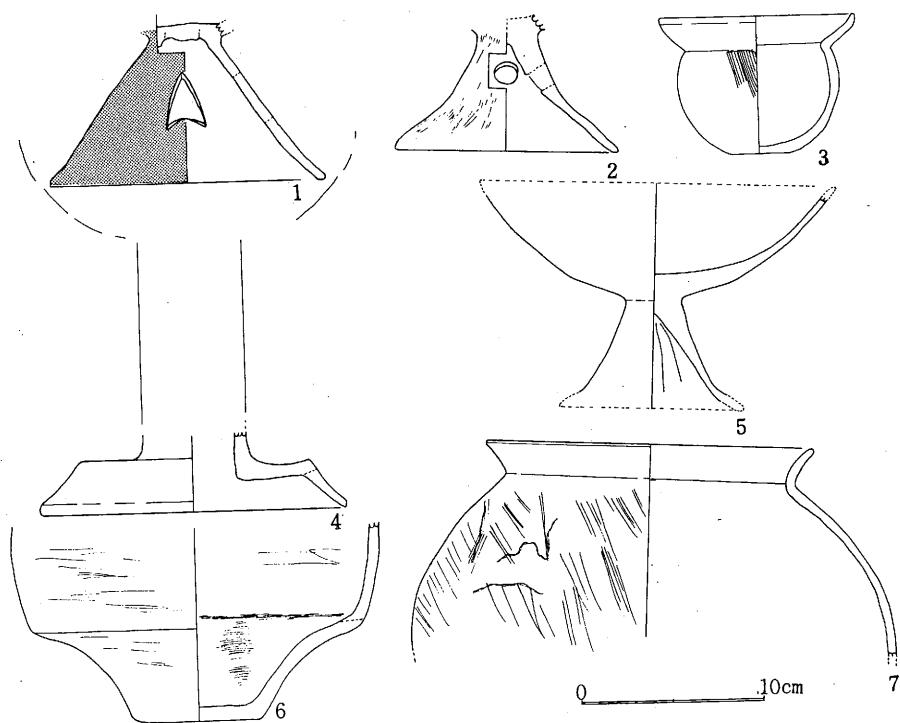


图108 15号住出土土器实测图

→68 北から見た15号住の床面、中央の小石は中世の道



### 20号住居址

20号住居址はC 81～83の間であり、東南と西北の一部を除いて完掘できた。1辺5.5mの隅丸方形の住居址であった。床面の土器は少なく南側に土器片がみられ、P 4の中に器台脚部が落ち込んでいた。支柱穴はP 1・2と推定されるが、他は適當の位置に存在しなかった。

壁面の溝は幅20cm、深さ8cmの規模で、南から西に回っており、P 1・2の間にもものびていた。地床炉は北にあり、直径30cmである。遺物は図示していないが、古墳時代の住居址と思われる。

この辺は、東の畑と道路面から西の畑面へと傾斜しており、住居址の東側の断面は、床面から1m以上埋まっており、千数百年の時の流れを感じさせる。この層序には、石の含まない部分が布状にみられ、耕作地として耕された年代があることを示している。その特定も間山の古代・中世を探る必須の事項と思われる。

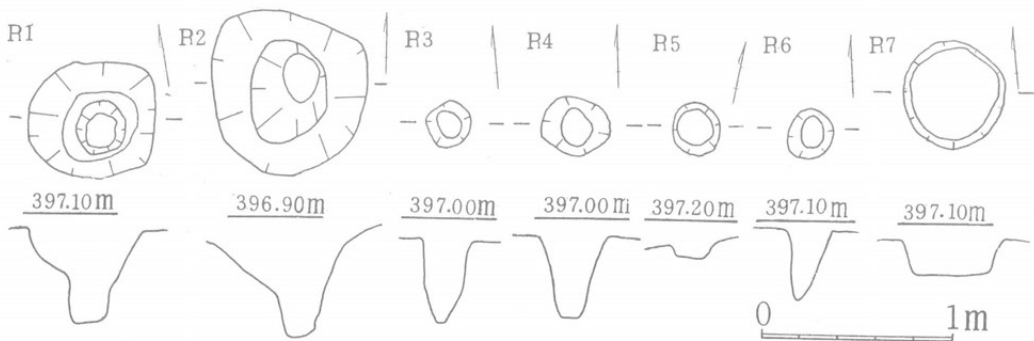


図109 20号住柱穴実測図

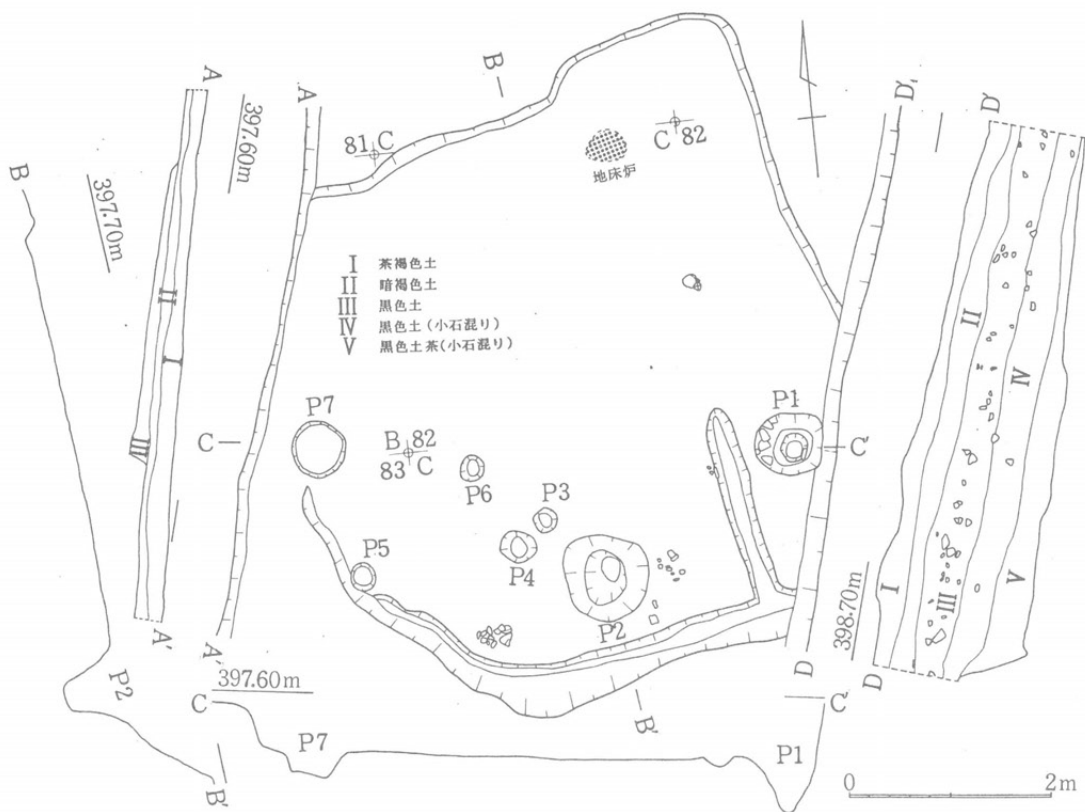


図110 20号住遺構実測図

→69 北から見た20号住床面



27号住居址

27号住はZ97~98の間であって、約1/2の検出面積である。1辺2mの隅丸方形の住居址で、東の畑面から床面まで、1mの深さがある。

床面上の土器は、在地系と思われる甕(113図1・2・7・10・11)に東海系の(同図4・5)の壺口縁があり、(5)には刺突文があり、愛知県の元屋敷式の土器にみられるもので、松本市の弘法山古墳に供献された壺口縁にみられるものである。(6・8)のS字甕も東海系の影響のもの

である。P2の小土坑内に手づくね土器(同図2)があり、壺形の手づくね土器は、中央の床面にあった。

支柱穴はP1・3・4があり、1基は東の用地外にあると思われる。

以上のことから古墳時代前期の住居址である。

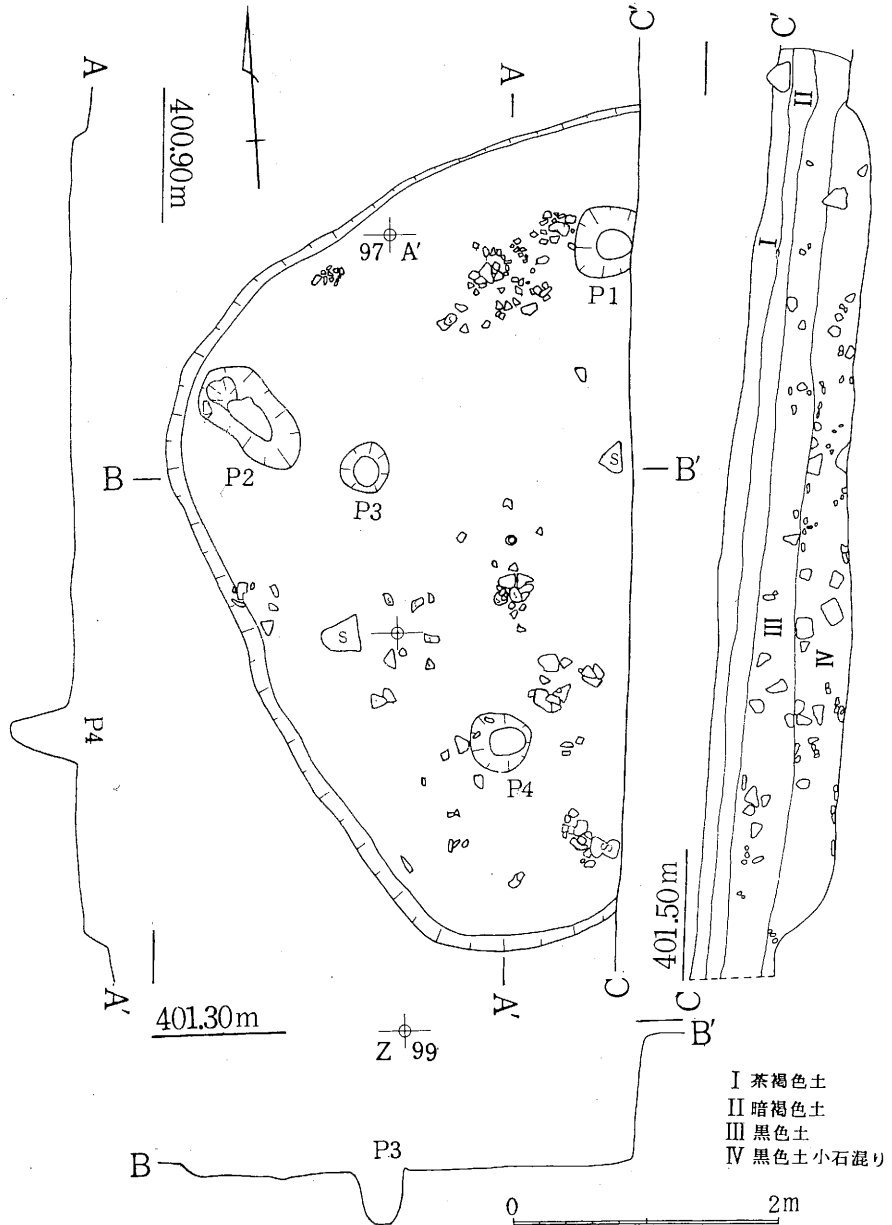


図111 27号住遺物・遺構検出実測図

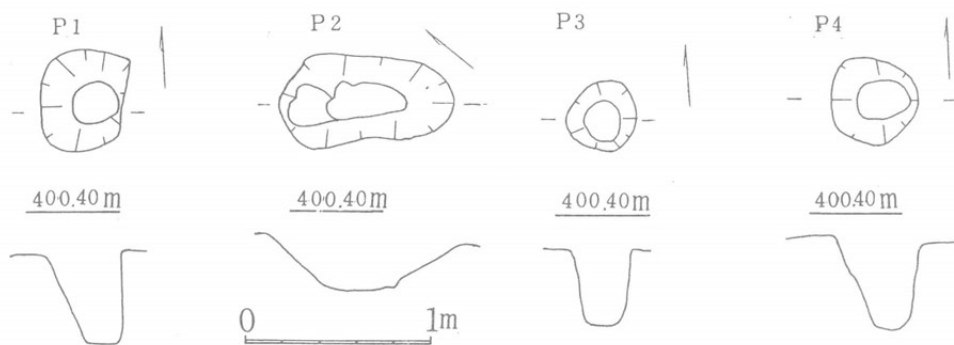


図112 27号住柱穴実測図



↑70 北から見た27号住の土器



↑71 北から見た27号住の床面

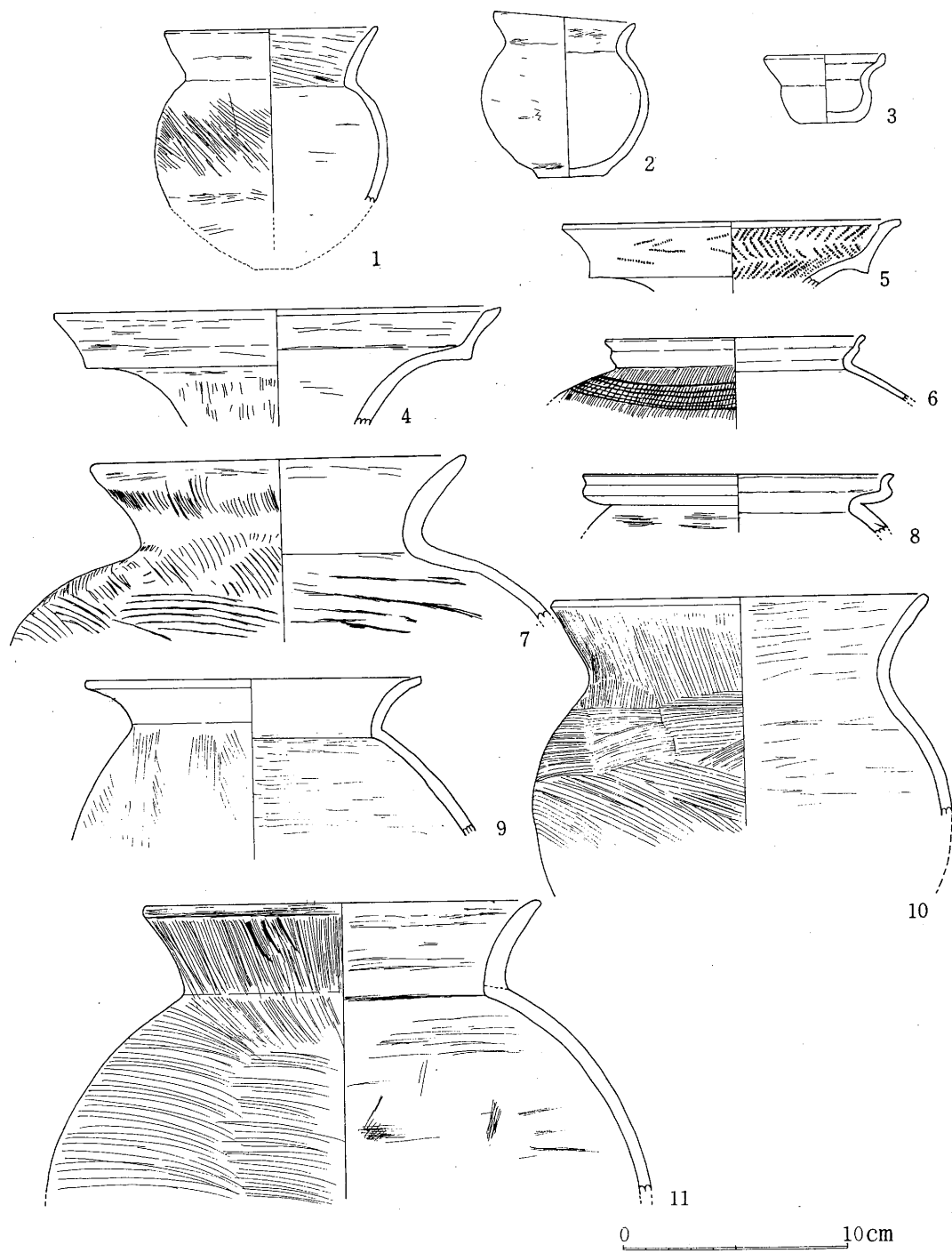


图113 27号住出土土器实测图

### 30号住居址

30号住は支線1号のに8~10の間にあつて、隅を傾斜の上に向けて、この部分には石を積んでいた。北側の畑から床面までは、60cmを測る。1辺4.2mの方形のプランで、上(南)側には、溝を巡らしていた。

床面上層の土器は、箱清水式の高坏、甕などの破片があつたが、床面の土器は古式土師の台付の甕・壺などが中央西にあり、中央に直径1mの地床炉があり、柱穴はP1・2と見られるが東の位置には、ホップの棚の吊線の穴があつて攪乱され確認できない。

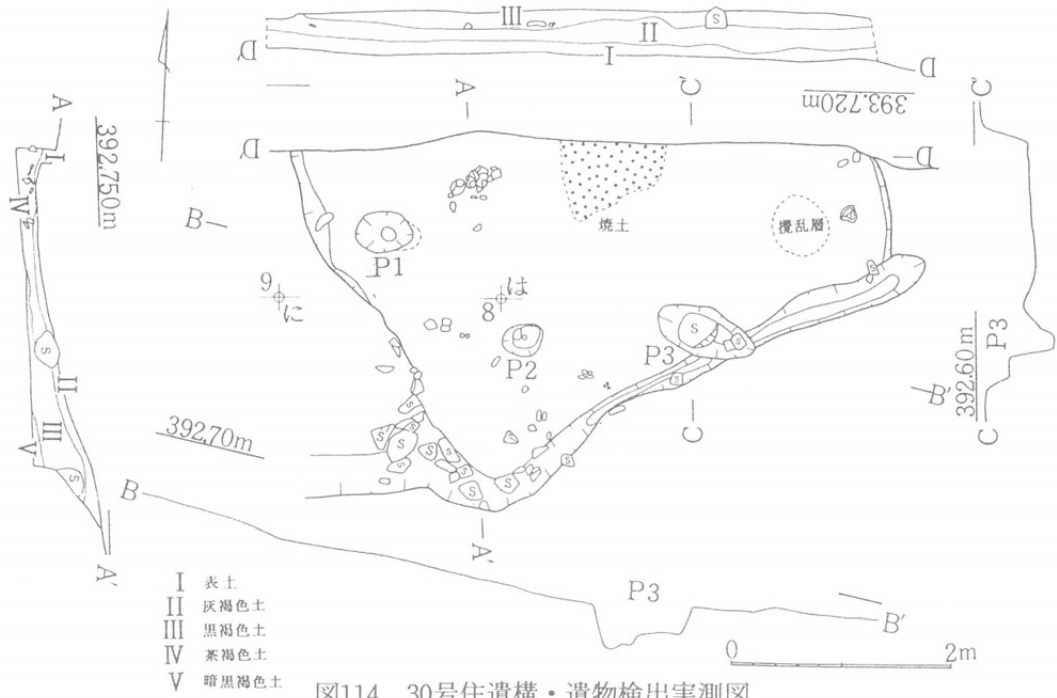


図114 30号住遺構・遺物検出実測図

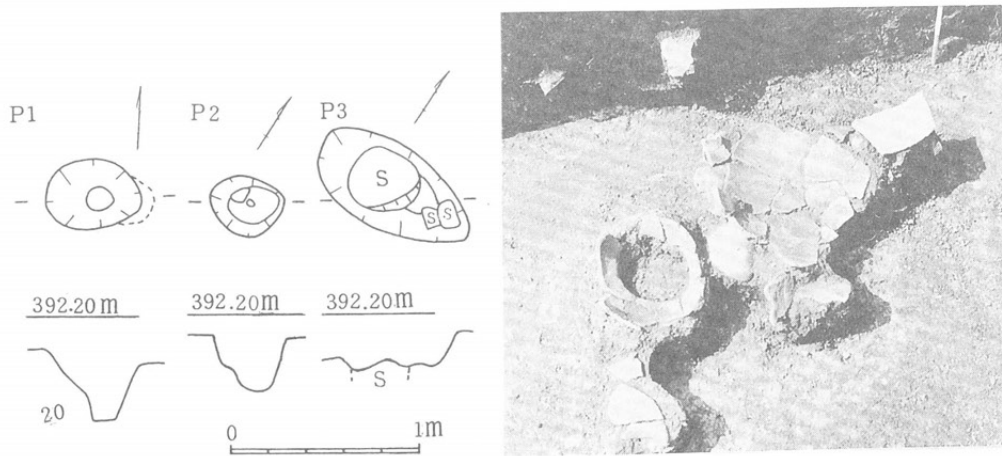
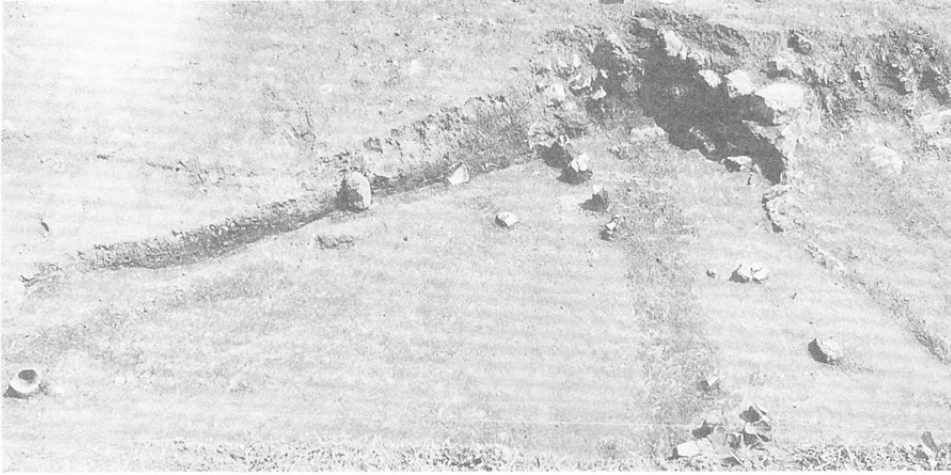


図115 30号住柱穴実測図

↑72 南から見た30号住の土器(1)





↑73 北から見た30号住の土器(1)

→74 西から見た支線1号の調査全景(手前30号住)



### 32号住居址

32号住は本線A地点にあって、A 2～4 の間にあり、31号住の下の西方に位置する。1辺6.7×4 mの長方形の住居址である。床面までの深さは東南隅で、地表下1.2mに達し、確認面からは70cmである。

土器は3回にわたって取り上げた。この土器は箱清水式から古式土師、さらに上層には須恵片まであり、覆土中に多数の石とともに土器片があったが、この中には北陸系の古墳出現期の土器が多数を占めている。(118～120図)

床面の状態は東端に幅1 m、深さ15cmの落ち込みがあり、P 1～8 の柱穴がみられたが、P 1・4・5が主柱穴で、地床炉がP 4～5の間にある。

これは直径70cmの範囲で、中心に5×15cmの石がおかれていた。土坑も2基、西南に連続して設けられていた。

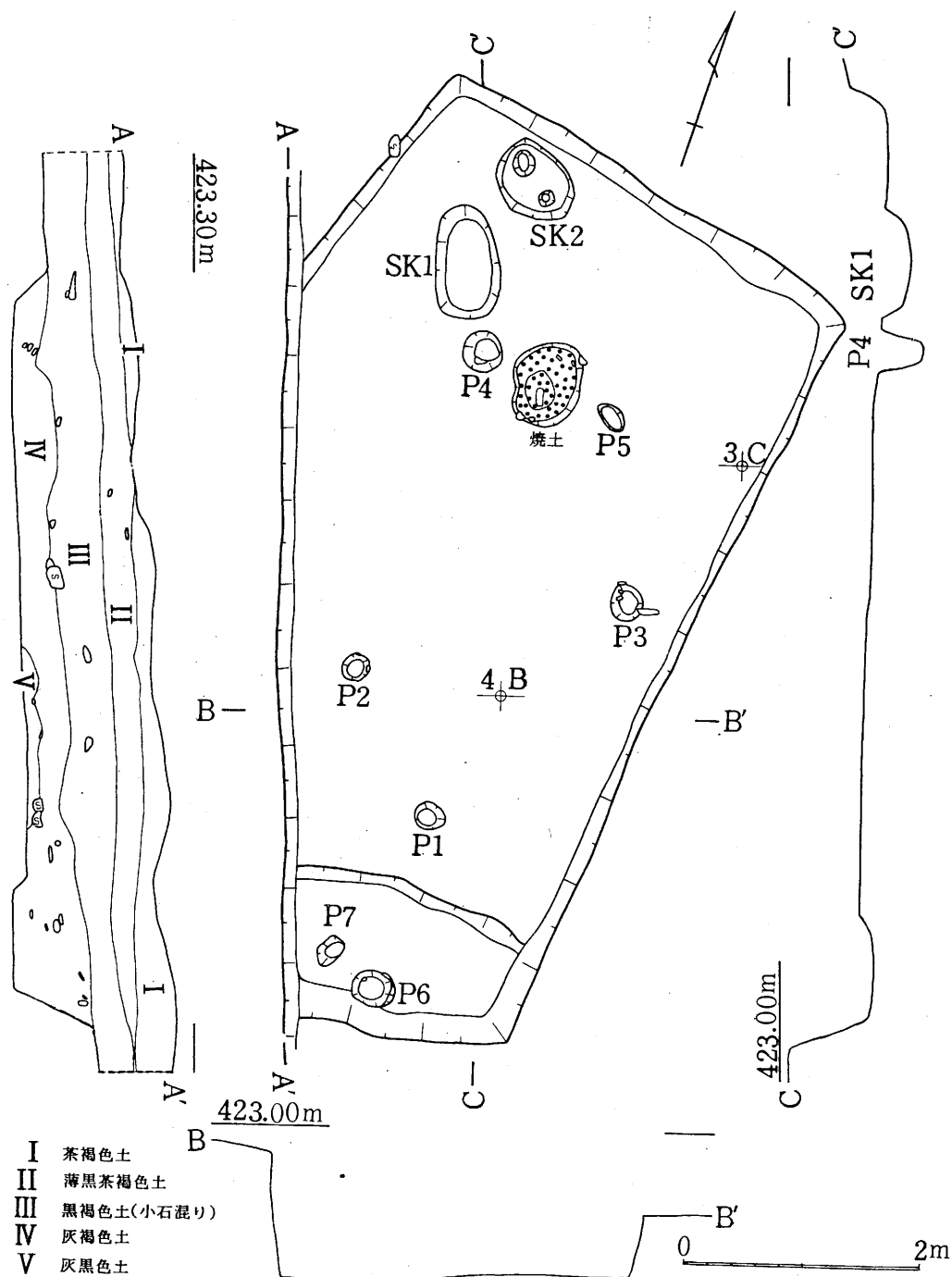


図116 32号住遺構実測図

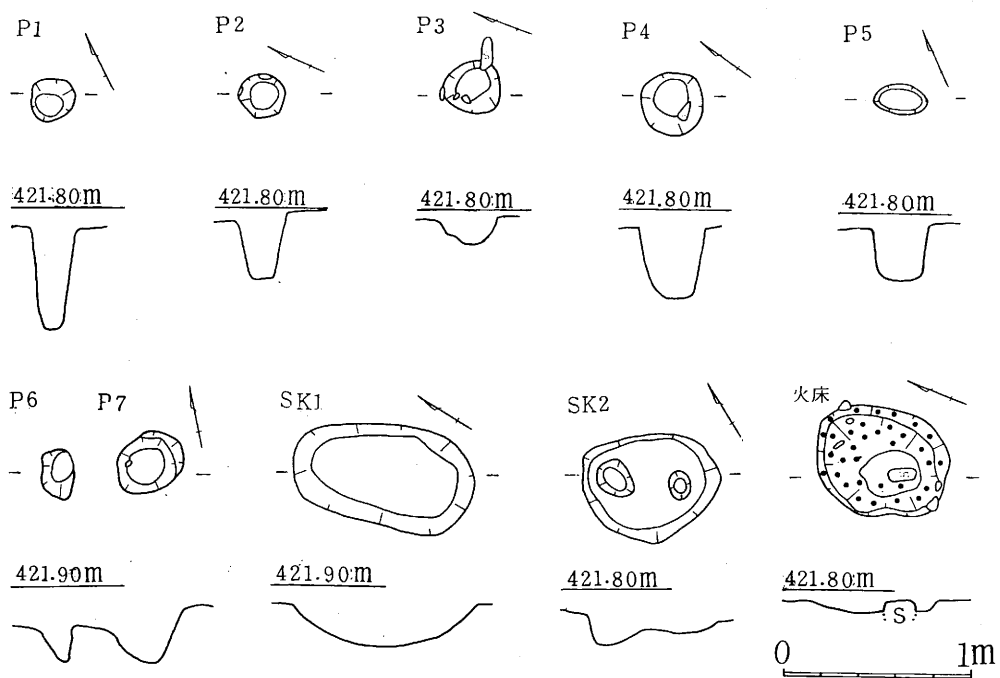


图117 32号住柱穴·炉址实测图

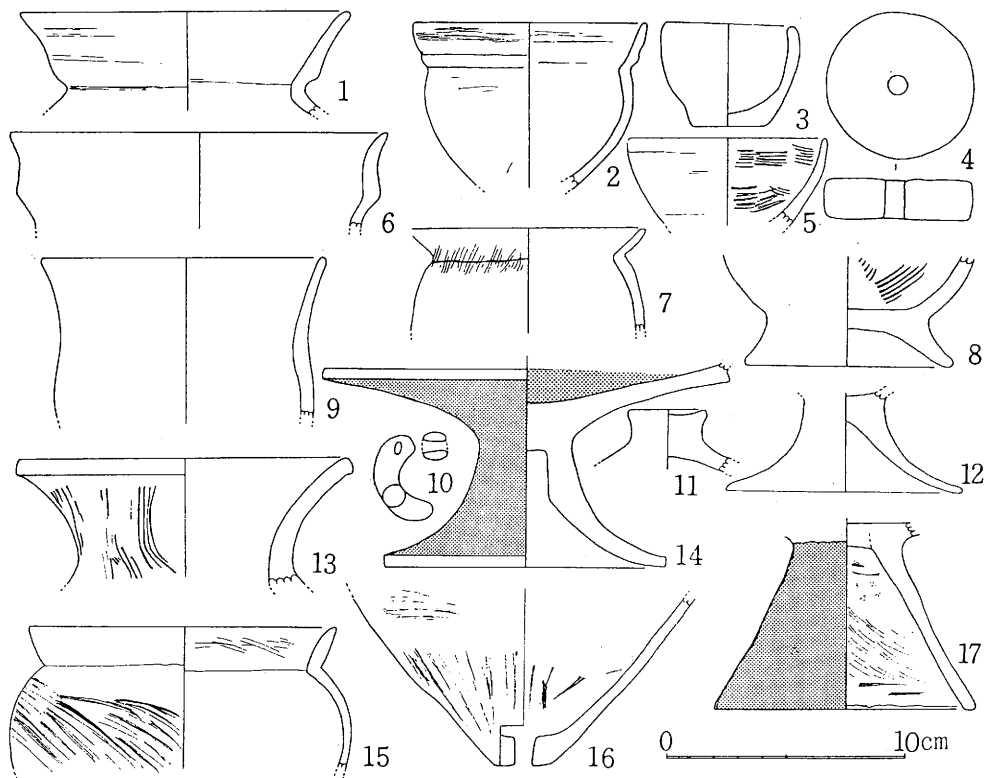


图118 32号住出土土器实测图(1)

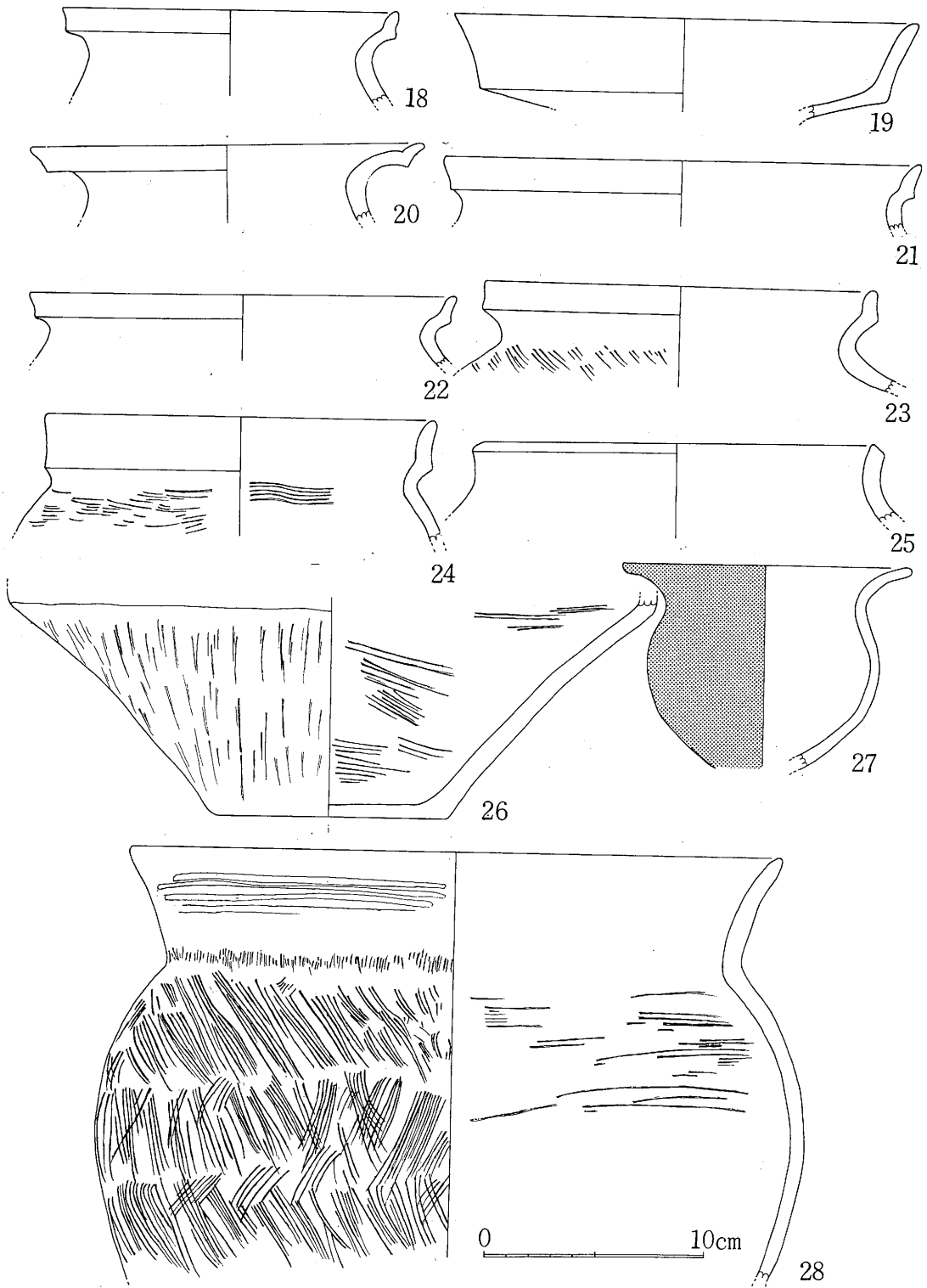


图119 32号住出土土器实测图(2)

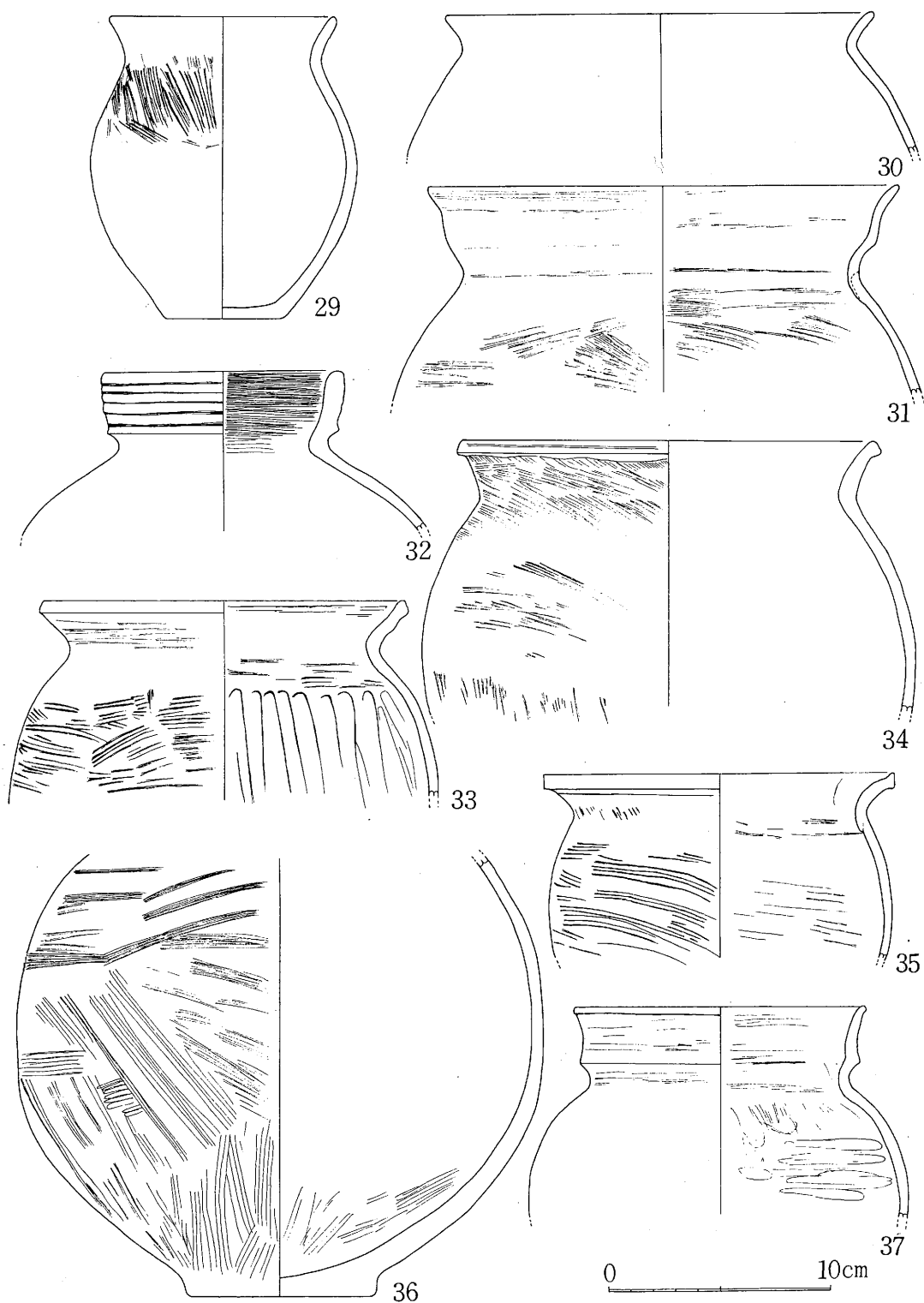


图120 32号住出土土器实测图(3)



↑75 東から見た32号住  
の土器

←図121  
32号住遺物検出図

→76 西から  
見た32号住の  
土器



→77 西から見た32号住の床面の土器



←78 西から見た32号住の床面

### 33号住居址

この調査地の本線B地点は、今までの中野市の遺跡地図では、範囲外になっていた所である。これから上は、試掘の時に土器片など発見されなかったので、今のところ間山遺跡の東南方の限界に近い地点と思われる。

このB地点の用地内を20mにわたって排土した結果、二つの落ち込みがあった。この内33号住は、C 2～5の間であって、北側の1/2は用地外であった。1辺3 m弱の方形で、柱穴が西側に5基検出されたが、他は認められていない。床面は明瞭には検出されず、34号住の付属の建物と思われる。

検出された土器は、床面上に多くあり、箱清水式の甕・高坏などの破片と、古式土の壺・甕（121図1・4）、壺（同図2）ミニチュアの壺（同3）などで、甕（同4）はやや疑問があるが、34号住を含めて外来系の土器の割合が少ない点が注目される。

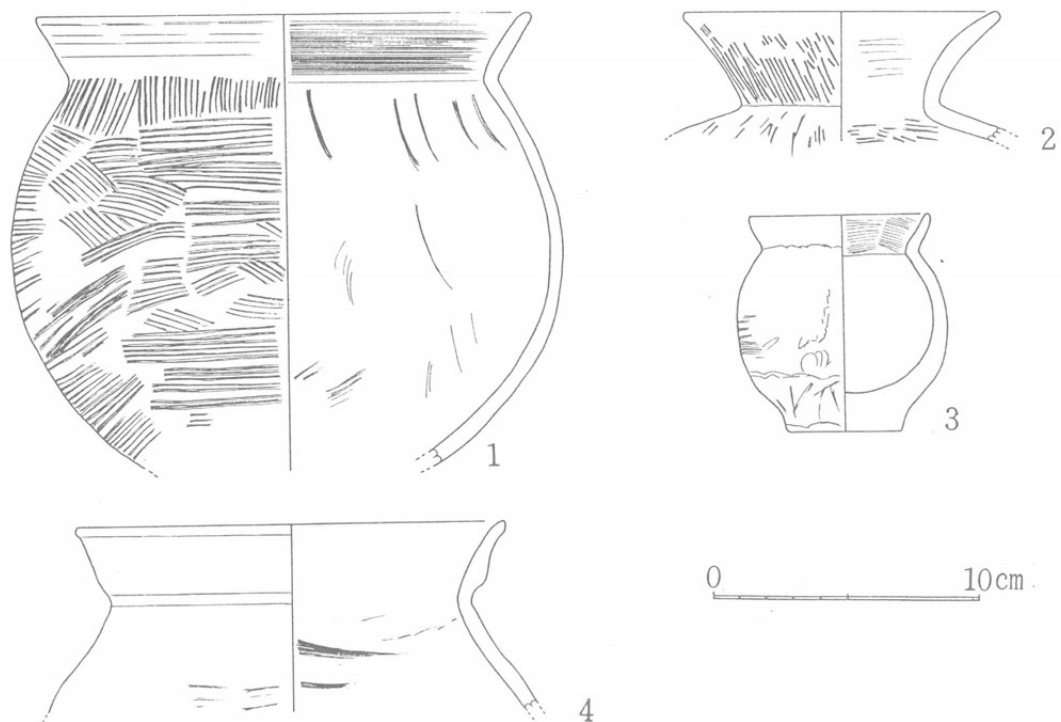


図122 33号住出土土器実測図

→79  
西から見た  
本線B地点





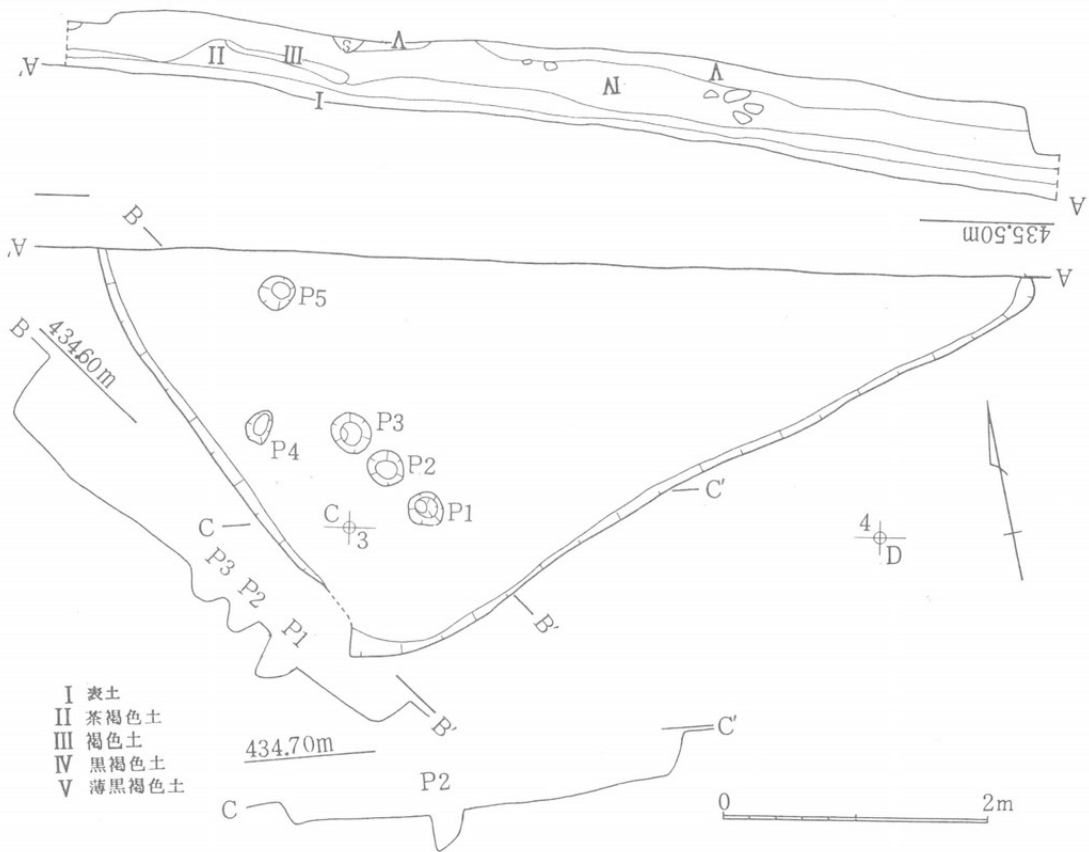
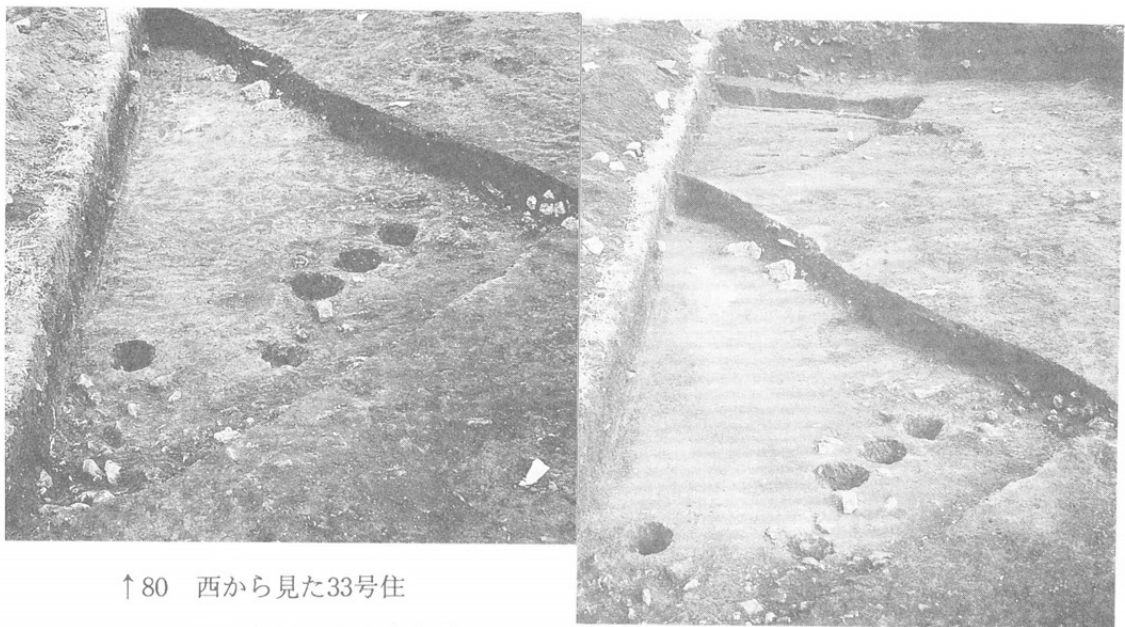


図123 33号住遺構実測図



↑80 西から見た33号住  
 →81 西から見たB地点全景

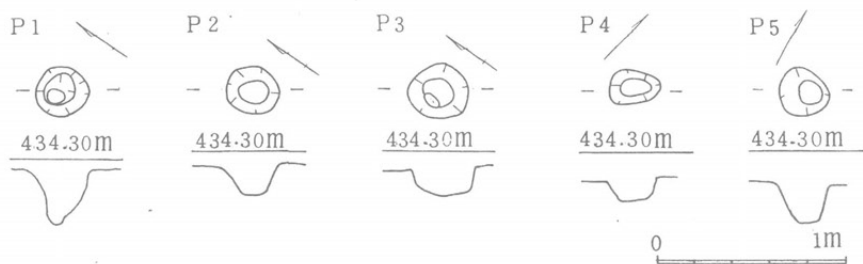


図124 33号住柱穴実測図



図125 33号住遺物検出図

→82 南から見た33号住



### 34号住居址

33号住の東に隣接して34号住がC 5～8の間にあり、これも北側部分1/2が用地外であった。この辺は標高435mに位置するところで、東側は今の道路面から床面まで1.5mの深さで、この間は黒色土で埋まっていた。

この土器も破片ばかりが多く、床面上の覆土には、箱清水式の壺・甕の破片が見られたが、おおくは在地系の古式土師の壺・高坏・甕の類である。

この住居址の床面は、あまり強く締まらず、短期間の住居の使用を思わせた。支柱穴はP 3・7と推定され、壁面の東から南に幅20cm、深さ5～10cmの溝がめぐっていた。

この住居址で気がついたことは、外来系の土器が見られないことである。

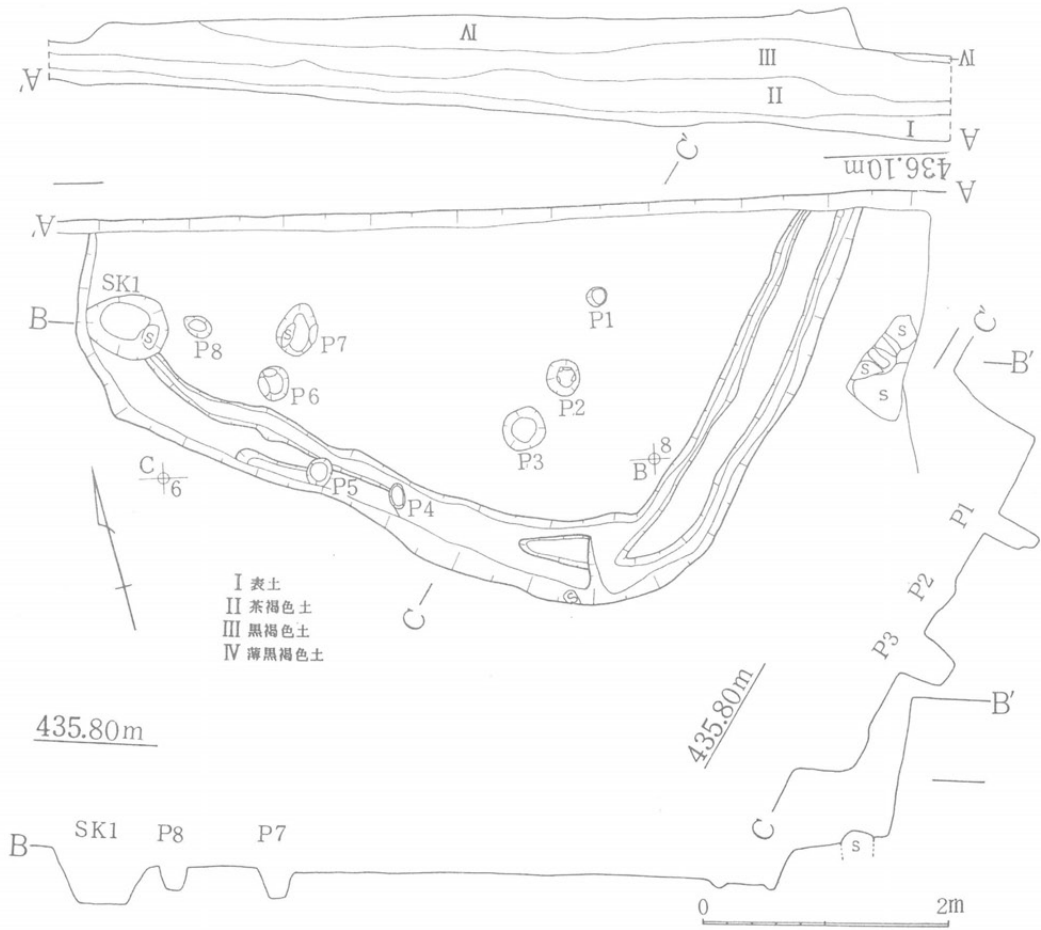


図126 34号住遺構実測図



↑83 南から見た34号住上層の土器

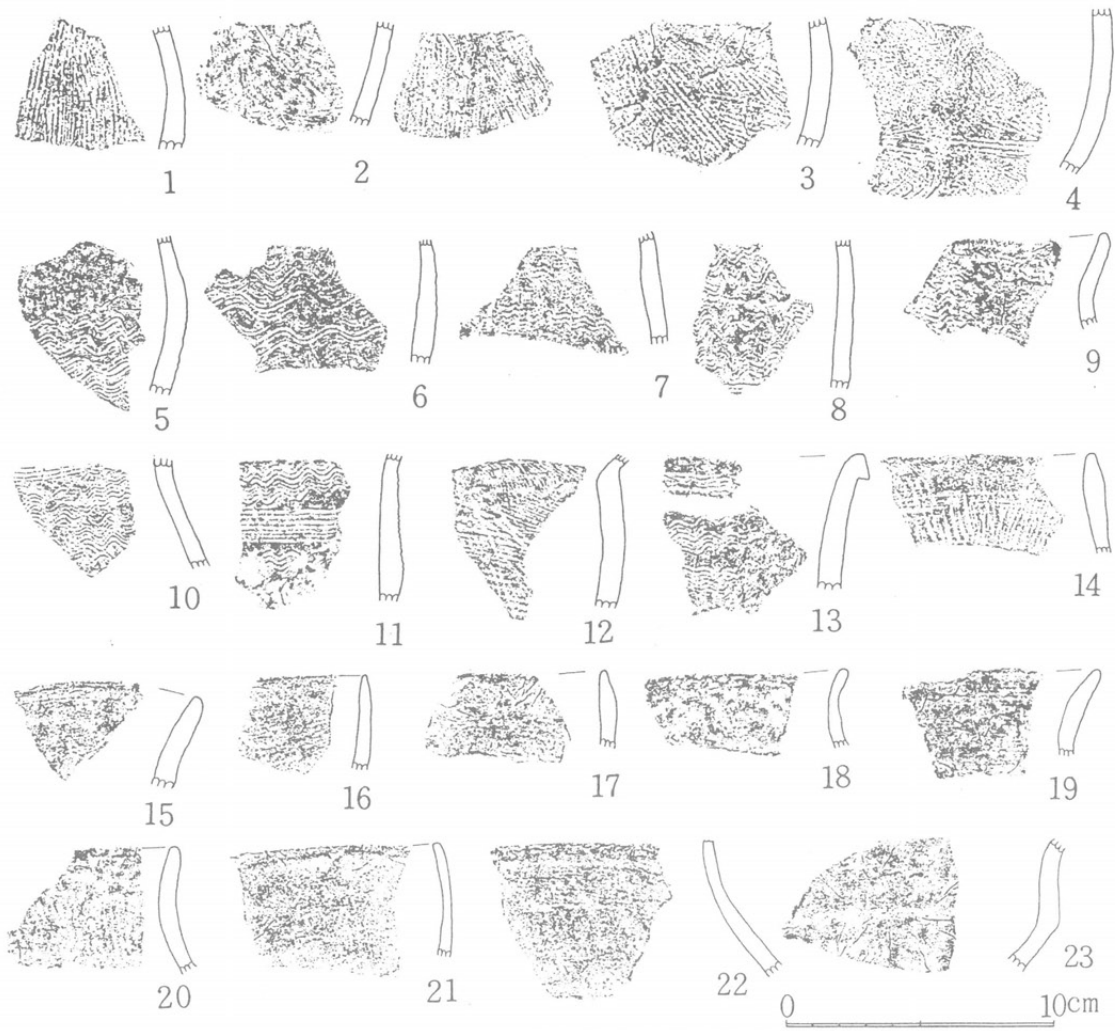


図127 34号住出土土器拓影図

→84 東から見た34号住の床面



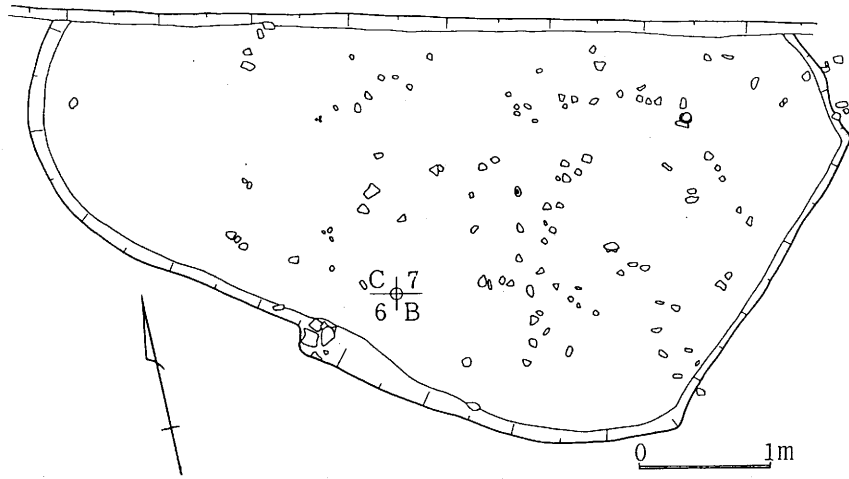


図128 34号住遺物検出図

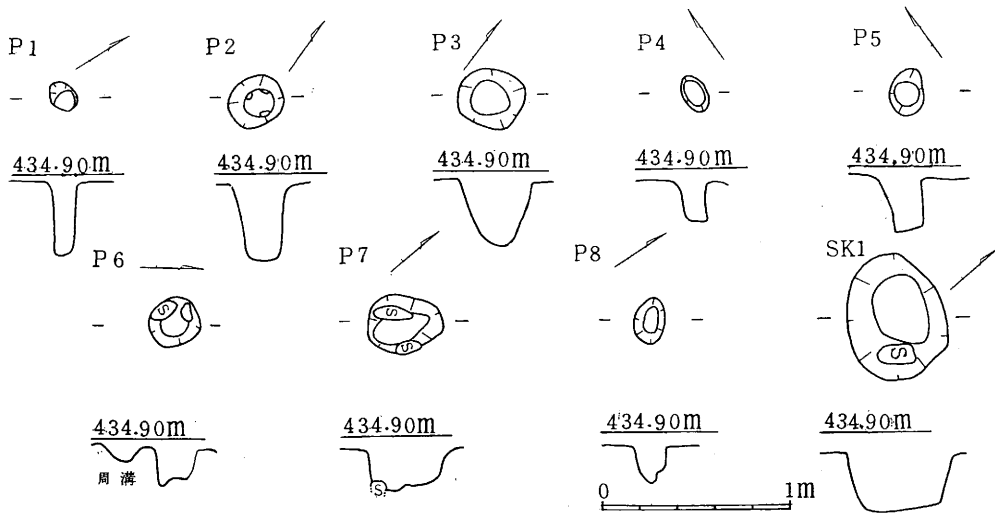


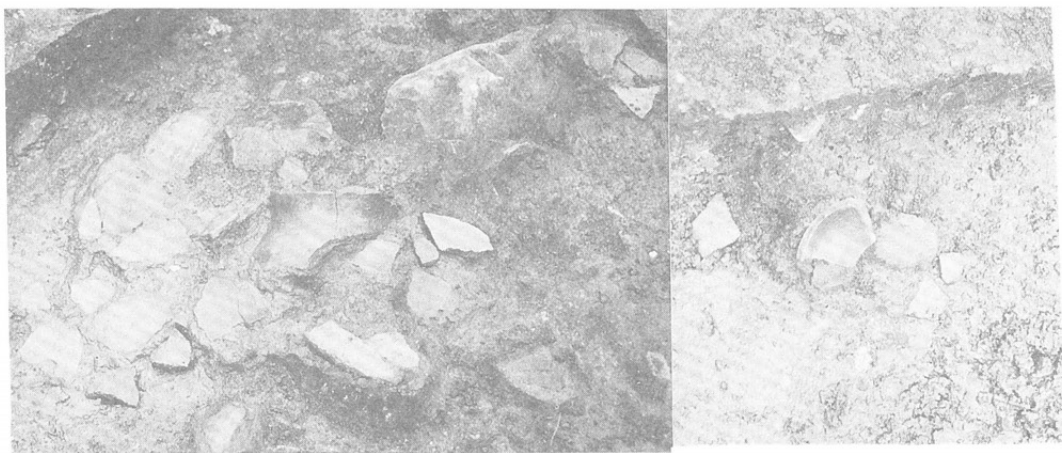
図129 34号住柱穴・土坑実測図

#### 40号住居址

ここは支線2号D地点にあり、今の道路の下にあり、その影響をうけて破壊された所があった。東側に幅30cm深さ10cmの溝が南北にあり、柱穴もP1～3があったが、プランはよく確定できなかった。

焼土と炭片が西側に広がっていたが、床面とおもわれる面の石の在り方から、この面は破壊をうけていた。(47図)

ここの遺物は、箱清水式の高坏の坏部分、初期須恵器の甕、中国の北宋時代の蓮弁文の青磁碗(45図1・2・3)などで、初期の須恵器の住居址からの出土は、注目される。



↑85 南から見た40号住の土器

↑86 同初期須恵器

## 第4節 平安時代の遺構と遺物

### 1 49号住居址

49号住は支線2号E地点D19~21の間にあつて、その西側にも焼土が広がっており、D23の付近には、完形の坏が3個(130図)あり、2個は逆位に1個は正位にあつた(写真91)。

49号住の遺構は、黒色土層にあつたため、プランの検出は明確でなく、床面は焼土の広がり追求した。したがつて壁面は不安の面を残している。しかし1辺4.5mの方形住居址と推定している。

支柱穴とP2~5と推定され、石組のカマドが東側壁に焚口を南に向けてあり、中央に支柱石が見られた。カマドの規模は、奥行40cm、幅45cmで、回りに石を使い粘土で、高めていた。この回りから内黒坏・甕(132図6は上層出土)などが多数みつかった。

この中には、灰釉の碗(132図4)・暗文のある坏(同図1)・玉縁状の甕(同図8)・片口の付いた大鉢(133図12)などが注目される。

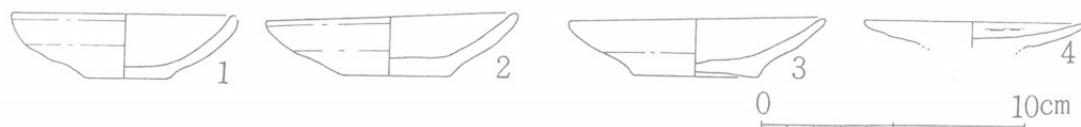


図130 E地点D23附近出土土器実測図

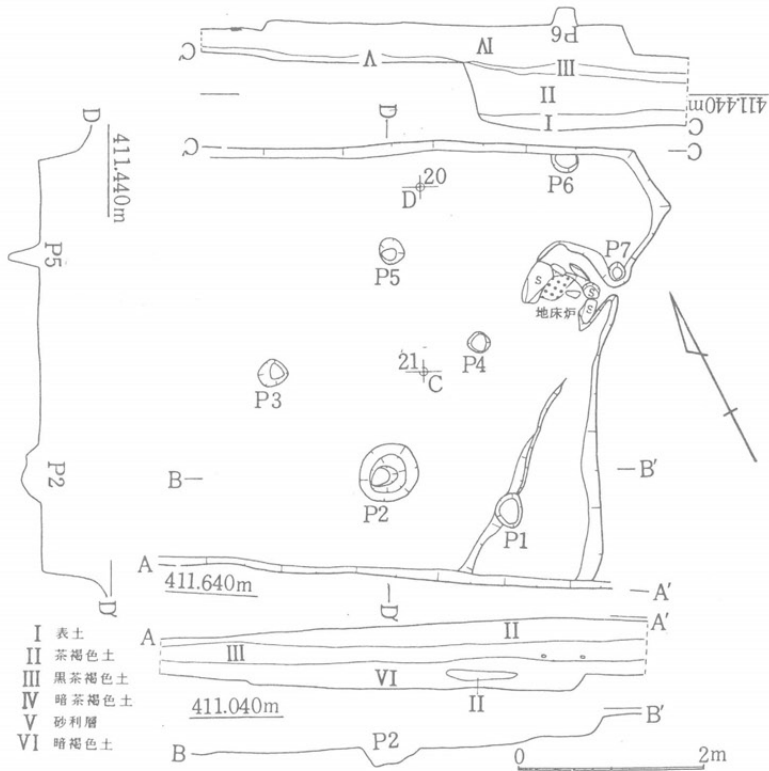


図131 49号住遺構実測図

→87 南から見た49号住の土器



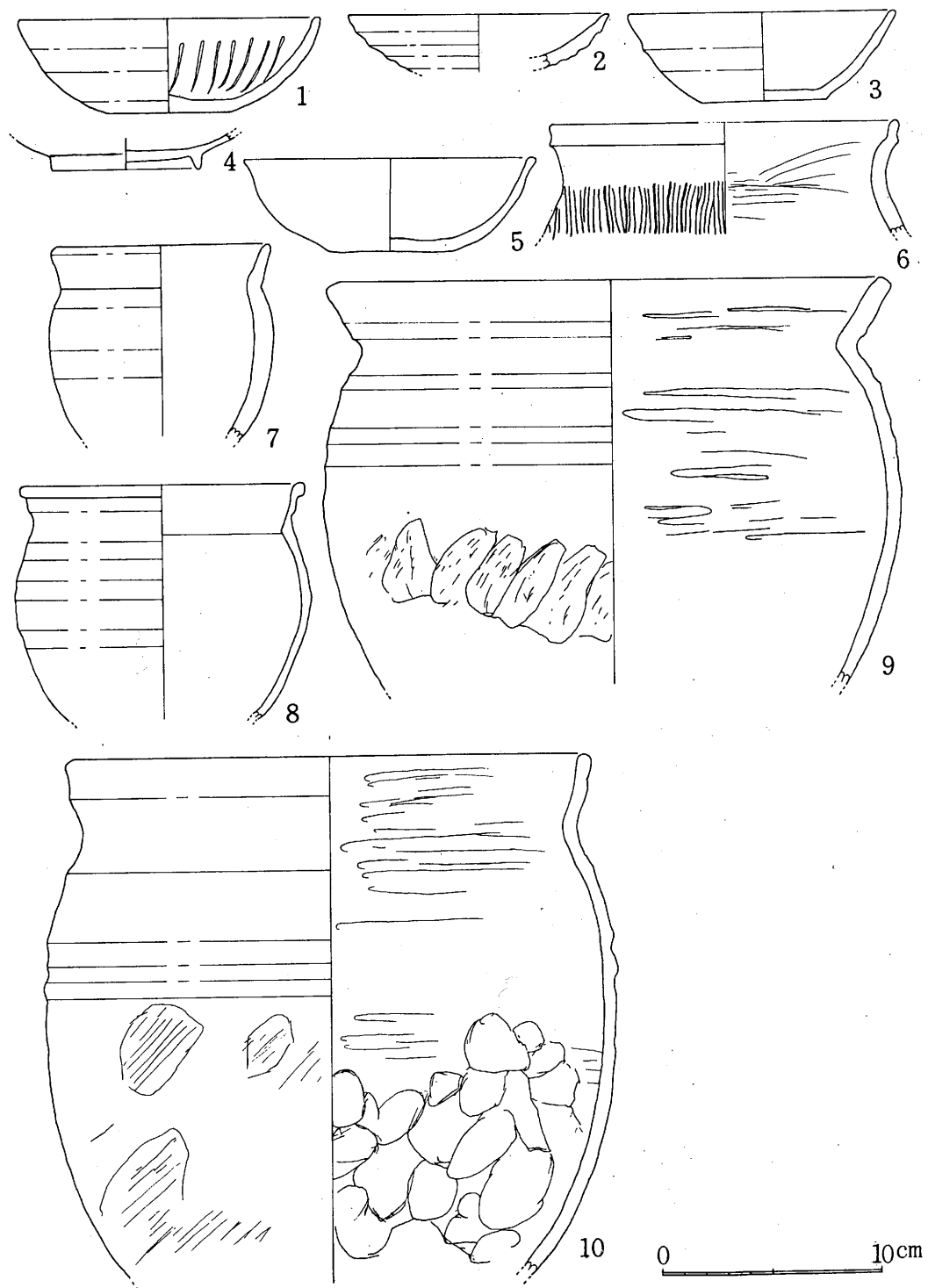
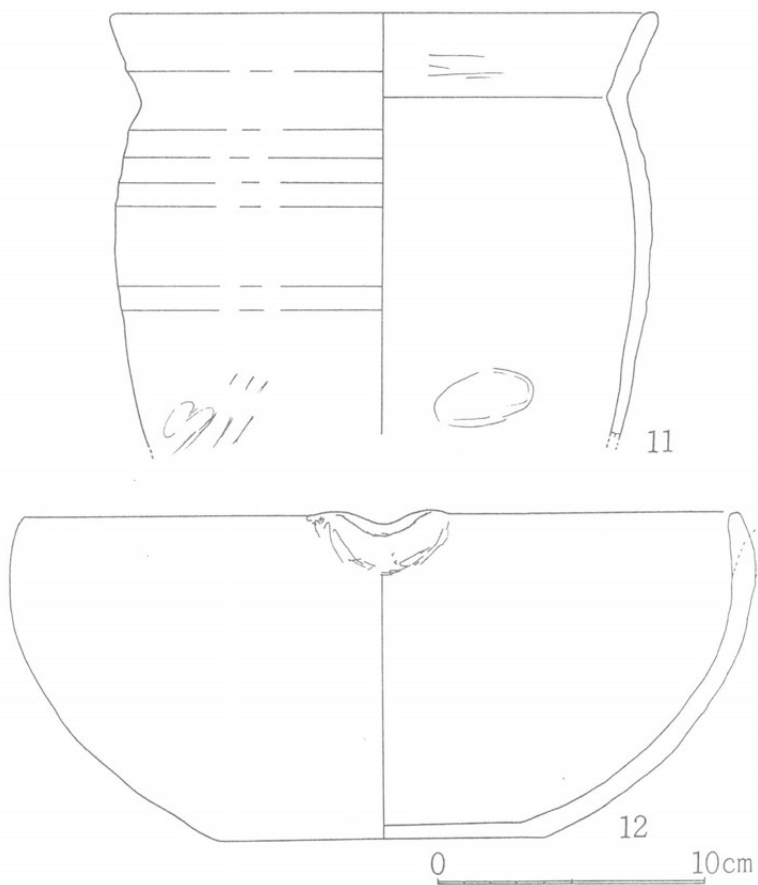


图132 49号住出土土器实测图(1)





↑88 南から見た調査前の支線2号D

図133 49号住出土土器実測図(2)

→89 東から見た調査前の支線2号E



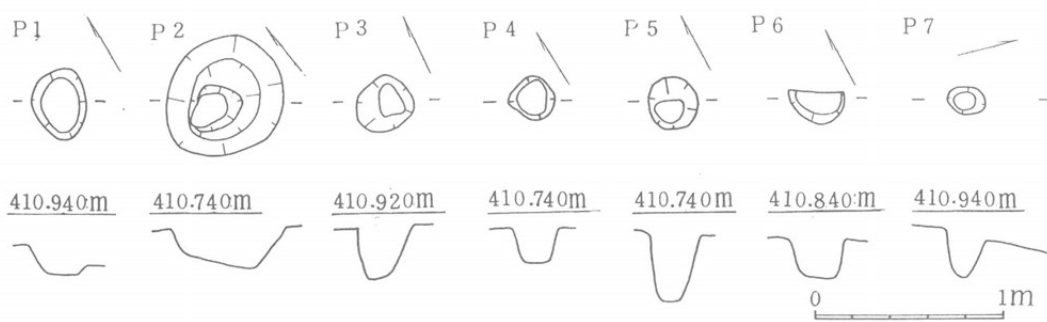


図134 49号住柱穴実測図

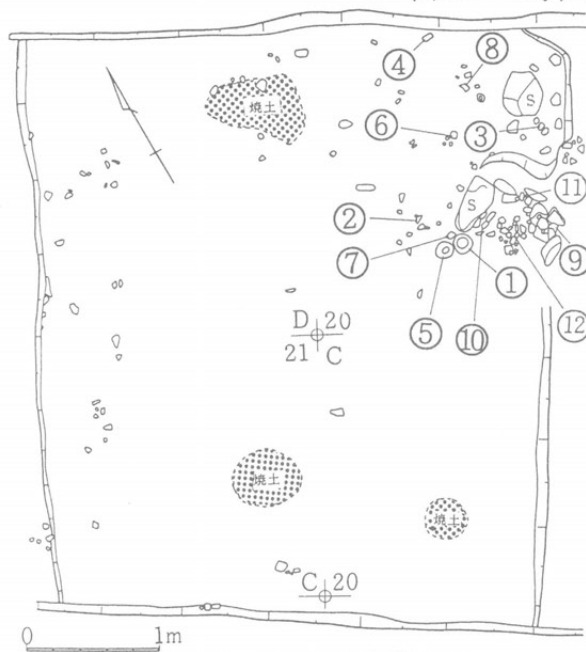


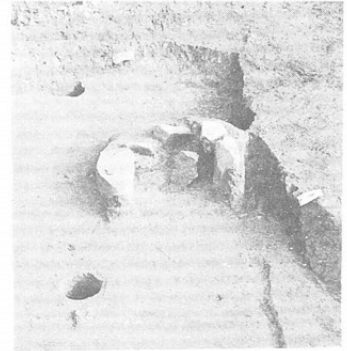
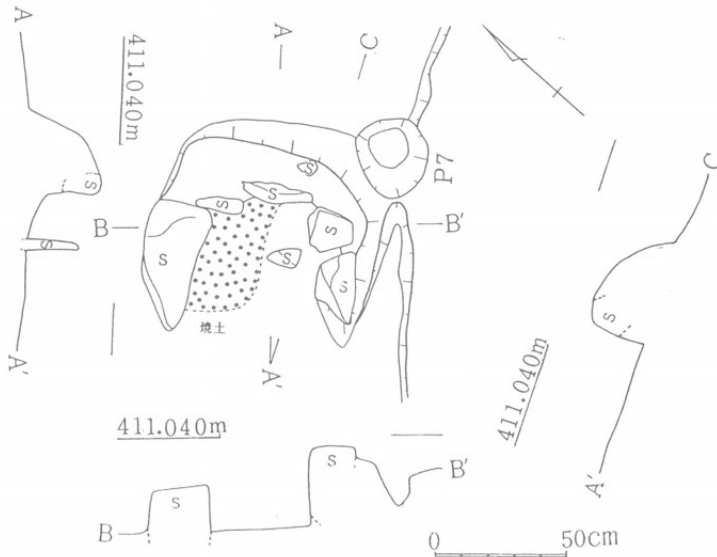
図135 49号住遺物検出図



↑90 北から見たE D23出土の坏

→91 南から見た49号住のカマドと土器





↑92 南から見た49号  
のカマド

図136 49号住カマド実測図

## 2 土 壤

この土壌は53号住の南側に検出されたもので、さらに南側の用地外に未調査の部分を残している。この土壌の上層の北辺に完形の小形の坏が2個と、少し中に入って同じ坏と破片1個体が検出された。さらに土壌の北西から破損した小形坏2個体が見つかった(137図)。

この土壌は南の断面でみると、上幅1.2m、底幅90cmの逆台形状を呈し、現地表下70cmの深さがある。検出された長さは1mを測る。しかし、想定復元では長径1.7mと考えている。この中には先に上げた小形坏のほか、箱清水式土器片に混じって土壌の北東側にやや大きい石があり、壙内にも4個の石が入っていた。

このようにこの土壌は墓墳であり、人が埋葬された後に、食物を盛って供献されたものと思われる。これは古墳時代からつづく、黄泉戸契(ヨモツ・ヘグイ)の葬送儀礼を表していると推定される。

小形高台坏(139図1・3)は、この間山遺跡の昭和58(1983)年の県道須坂～中野線の調査時の平安時代住居址の石組のカマドの回りから出土している。これには足高高台坏も伴っており、善光寺平第5様式(国分期)の第V期に当たり、12世紀後葉に位置づけられている。これをもって、中世の木製什器(お椀)に大きく転換する。(川上元「土師系什器の展開と終焉」『中部高地の考古学』I)とされている。

このようにこの土壌の所属年代は、平安時代の後葉と推定される。

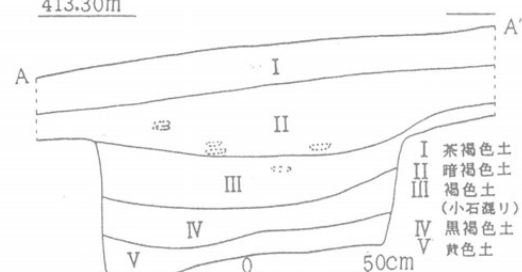
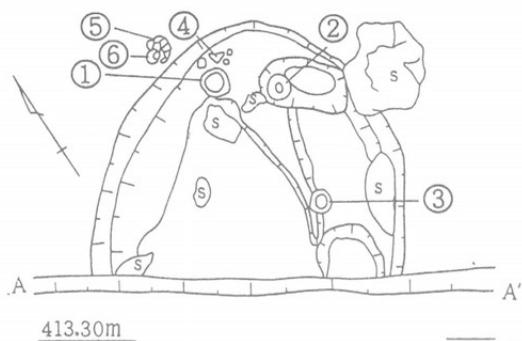


図137 平安時代の土壌遺物実測図

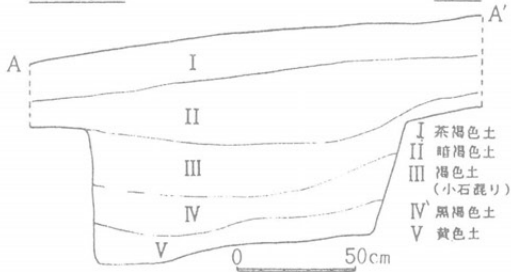


図138 平安時代の土壌実測図

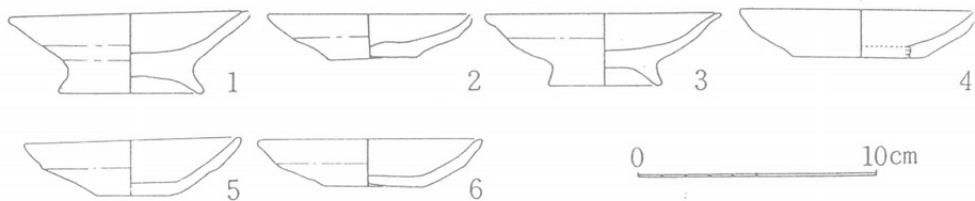
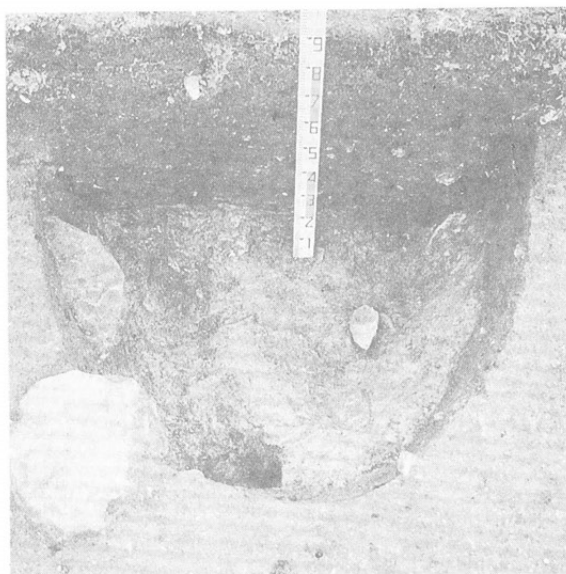


図139 平安時代の土壌出土土器実測図



↑93 北からみた平安時代の土壌と土器



↑94 北から見た平安時代の土壙



↑95 西から見た平安時代の土壙と土器

### 3 その他の遺物

1991・92年の調査によって、間山遺跡全体から須恵器の破片が出土した。これらの調査では、まとまった遺構との検出はなく、なぜか点で発見される程度である。

(139図)は1991年出土した須恵器の拓影図である。奈良時代から平安時代にかけての在地产のものと思われる。但し(同図16)は中世の道跡出土の珠洲焼の摺鉢の底部である。



↑96 西方の山から見た間山遺跡  
中央の森は間山豊富神社、支線1号は写真中央左外、森の右1992年調査地。

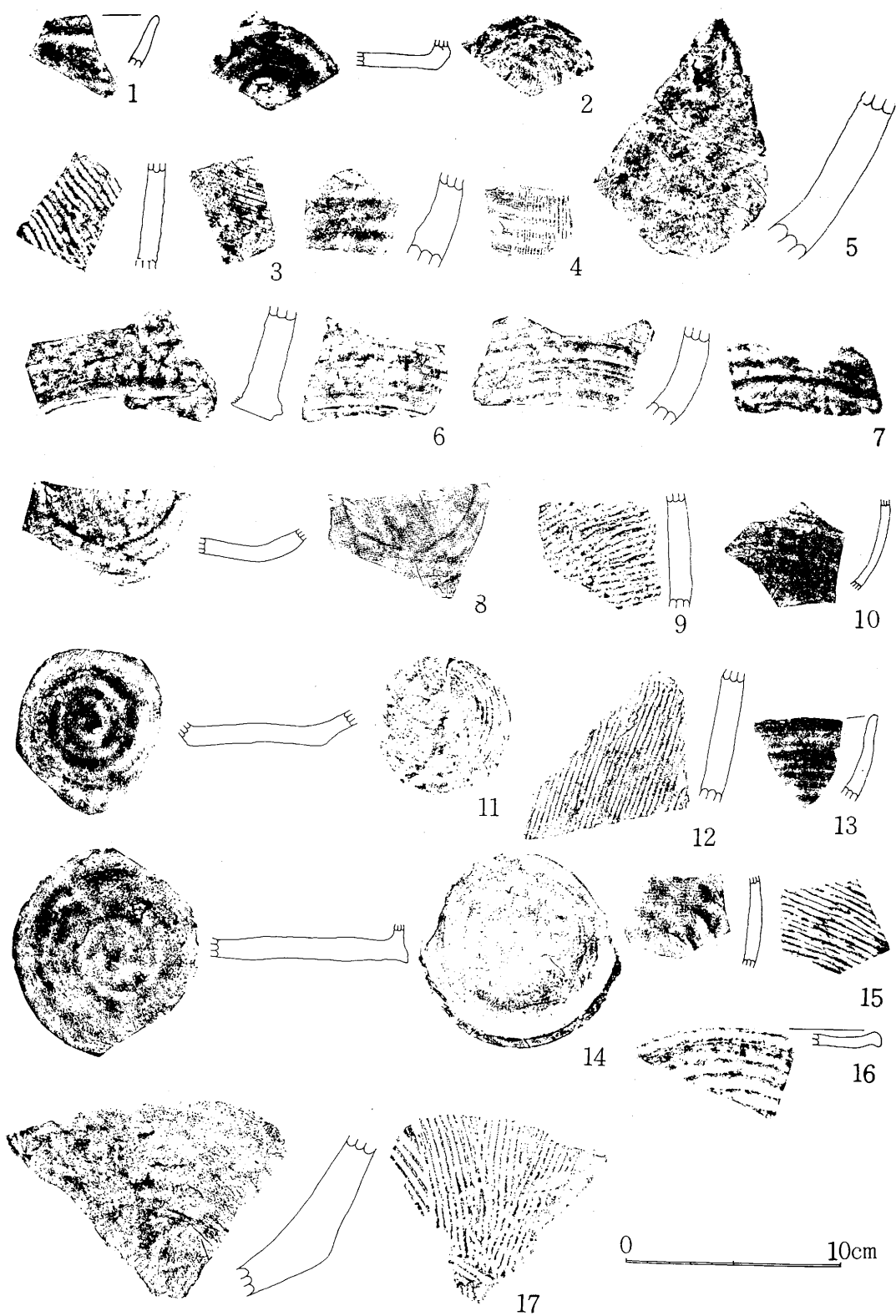


图140 問山遺跡出土須惠器・珠洲陶器拓影图

## 第5節 中世の遺構と遺物

### 1 中世の道跡

今回の発掘調査の用地は、中央農道と地元から呼ばれているごとく、左右に山が迫る間山の扇状地の中央を通過している。現在の間山の集落の現状を見ると、散村の形態をとり、遺跡のある中央の大部分は、耕地となっている。このように弥生時代から古代にかけての集落の在り方と変わっている。これがどの程度中世まで、影響しているか注目される点である。

1991年の調査において、中世の道と推定される跡が検出された。この地点では、主軸方向が北 $-21^{\circ}$  -西で、南の用地外の畑に向いていた。

この調査始点近くの本線B2（写真10）は地山面にくいこんで、幅1.5~2.2mの浅いU字状をなし、直径15cm以下の石を敷き詰めていた。これは溝・土塁状遺構に食い込んでおり、この道の使用の頻度、経過年数を物語っている。

この道が調査地の中に次に現れるのはF26からで、ここから北の部分約20mは、耕作土が浅く攪乱された可能性がある。この辺りの道幅は1.2mで、6号住の所では南側で、道から床面まで50cmの差があった（142図）。

この南のF37附近では、2条の敷石が残っていた。この上のF45付近は、畑から出た石を埋めるため、大きく前の道の部分を掘って石が埋まっていた。

18号住から南は、用地内のほぼ中央に位置していた。この辺は西に傾斜しているため、東側をえぐって平面を作って石を敷いていた。この辺の平均の道幅は1.5mで、一部補修されて2段の層位に分かれていたところもあった（141図）。

F63からは内耳土器の破片、文様のない古銭、珠洲の摺鉢の破片（139図16）などが検出されている。

今回の道路用地は、C75付近から西にふれているため、この中世の道は真っすぐ南の間山豊富神社に向いているため、用地外となり調査できなかった。

この道の検出によって、中世の間山の景観の復元にも役立つものと確信している。

→97 15号住  
と中世の道





図141 中世の道跡実測図(1) (F 61~66)



↑98 18号住から南の中世の道跡



↑99 南へ見る12号住北の中世の道跡



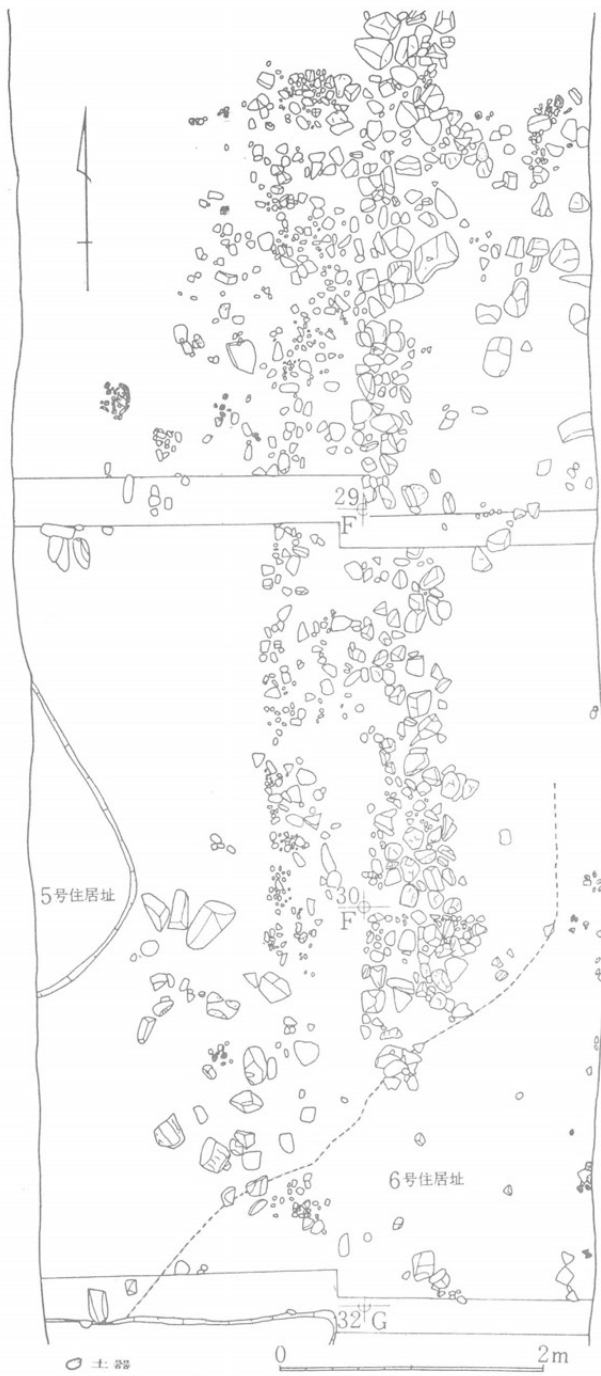


図142 中世の道跡実測図(2) (F 28~32)



↑100 F 40から北の中世の道跡



↑101 北にみる6号住南の中世の道跡

## 2 溝と土塁状遺構

溝には自然に雨水などによって、つくられたものと、人工のものがある。31号住から30号住の北にみられるものは、後者で、2号住から南方にみられたものは前者と思われる、これは随所にみられた。

このほかに人工的な防御の目的で造られた、溝が存在する。この可能性のあるものが、7号

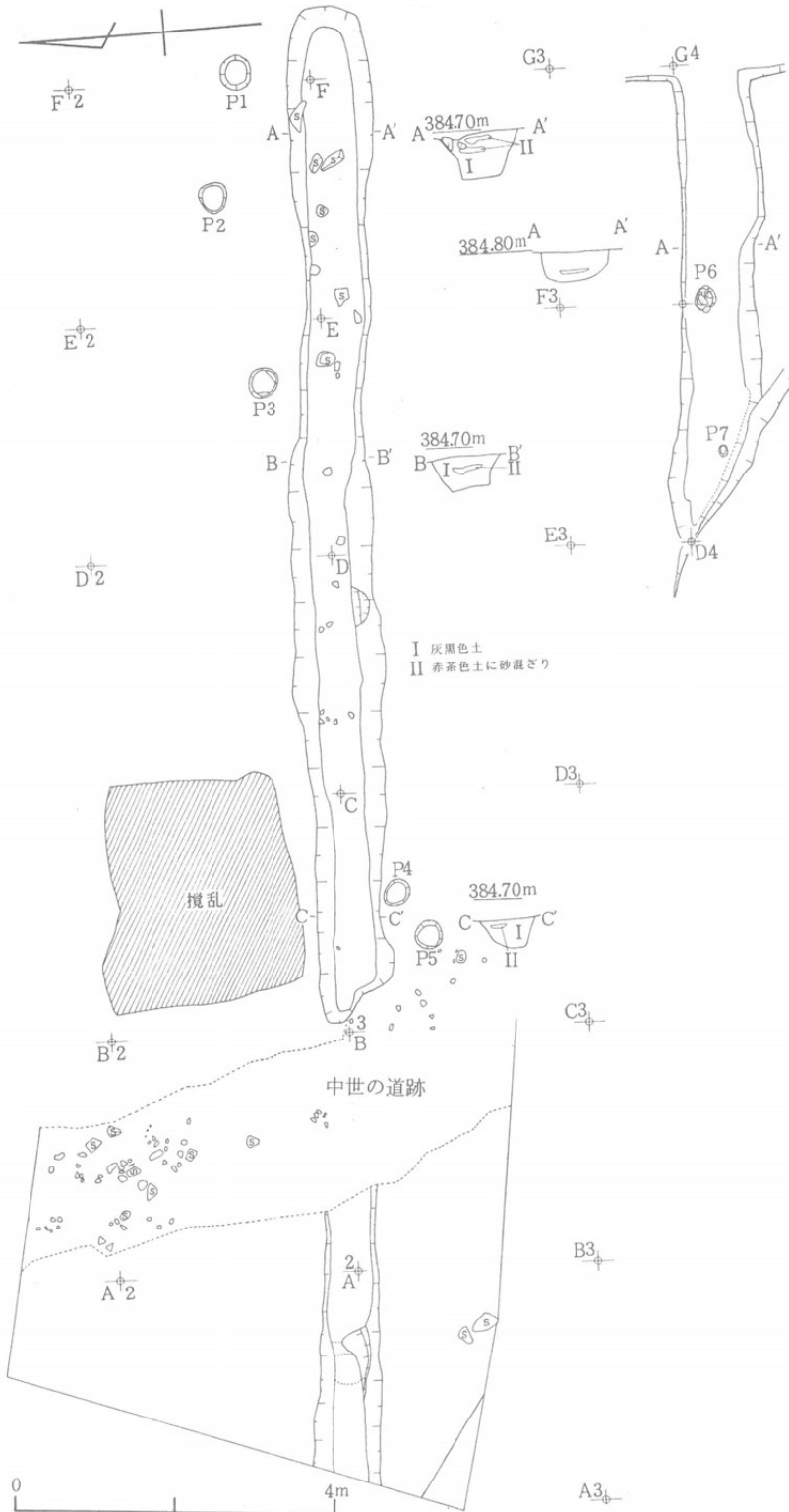


図143 中世の溝跡実測図



↑102 西から溝跡を見る



↑103 西から見た溝跡  
中央は中世の道跡

住の西にみられた(143図)。2条の溝が2mの間隔において、東西に走るもので、南側の溝は、逆台形状で、幅0.70~1m、検出面からの深さ40cmを測り、確認された長さ5.7mで、用地外の畑となる。北側の溝もほぼおなじ形状で、深さは60cmである。検出された長さは、約19mで、東は7号住の床面と壁面にくいこみ、西は道路分に没入していた。

西方の10号住の東側に、幅2mの中世の道跡があり、溝を埋めていた。これらの溝の中には、箱清水式の土器が埋まっていた。

10号住の西壁の観察によれば、この両方の溝の間には、土盛り状(土塁)遺構の存在が考慮された。この遺構の東西の方向は、現在の畑の畦畔の方向とも一致しており、大字間山小字石動下と、大字新野小字上東との境界線になっており、10号住西の広い道路は、大正末年に耕地を分断して開設されたもので、以前はこの10号住の西の農道が本通りで、ここから西に折れて、約100mで南に直角にまがっていた。

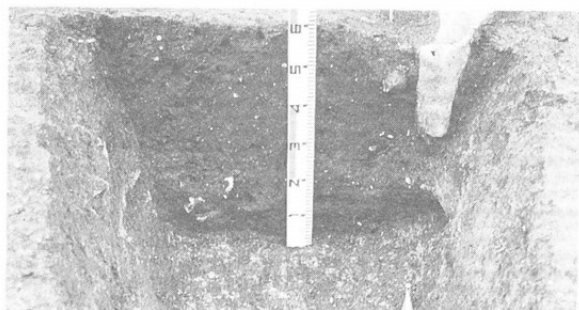
これらのことをもって、大きな視点からみると、この線の東は、県道須坂~中野線までで、延長170mに及ぶことがわかる。しかし7号住のところから今度の新設道路の計画は、畑の境界線を中心にして設定されており、この延長120mのところ、津島公会堂の下の道があり、この道の延長が130m西に伸び、先に記した大正末年以前の古道に合し、ここから北へ当初の東西線までは、120mを測る。

以上の結果からあくまで推測にすぎないが、この地点に方形の防御施設が予想される。このことは、永正7(1510)年高梨政盛が越後魚沼郡長森原で、関東管領上杉顕定を打ち取り、「間山の館にかえる石動の構えなり」と記された、江戸時代の記録「白井文書」を思い出すのである。この津島公会堂の所には、明治6年新野と間山の共立で、日野小学校の前身のれいせん體泉学校が置かれた。この體泉とは、甘い即ち美味しい泉との意で、ここには清冽な泉がいまも湧きだしている。

戦国前期に属するこの時期の居館は、回りに溝や柵をめぐるした、館の姿が想定されている。今回の発掘は、それを確定するには、あまりにも部分的なものである。これに関連して中世の道跡との関係が考慮され、館の北の入口か、どうか、今後の検証をまたねばならないし、今回検出された溝の時代決定も確定すると思われる。



図144 間山館跡推定図



↑104 東から見た北側の溝断面

→105 東から見た中世の溝跡手前は7号住



#### 礫の埋没坑

石動下と津島の小字境は、道路でも区画され、今回の用地内の旧道は交錯している。この地点を排土すると、石礫が集中して埋没している所であった。この大きさは、長さ9m余、幅4mあまり、深さ2mの規模であった。

これは畑から除去された石を集めて、埋めたと想定され、さらに地山の黄色土を採取した土坑内に埋められたと推定している。昔はこの辺に矢塚が沢山あったとする話があり、埋没された年代についても古老に尋ねたが、確答が得られなかった。



↑106 北から見た礫の埋没坑

## 第Ⅲ章 調査の結果と考察

### 第1節 間山遺跡の土器編年試案と考察

今までと今回の調査によって知られた、間山遺跡の土器編年は、概略次の通りである。

時 期	ほぼ該当する土器編年	調 査 年 ・ 文 献 ・ そ の 他
縄文時代前期Ⅱ期	関山式	支線1号土坑1992、中野市教委「間山」1981 「下高井」小野1953
〃 V期	諸磯B式	1991年調査
〃 Ⅶ期	諸磯C式	〃
〃 中期Ⅰ期	新崎式、(深沢式)	〃
〃 中期後半Ⅰ期	加曾利E式	1992調査
弥生時代中期後半	栗林Ⅱ式	〃
〃 後期前半	吉田式	1991・2調査
〃 後半	箱清水式	〃 1984年調査、「下高井」1953
古墳時代前期	北陸系・東海系土器	1991・2年調査
〃 中期		〃 少量
奈良時代		〃
平安時代後期		〃 39号住 桐原1958 1984年調査
鎌倉～室町時代		1991年調査

次に2年度にわたった発掘調査で、発見された遺構の年代を列挙すれば、次の通りである。

番号	名 称	該当する時期	説 明
1	支線1号土坑	関山式	
2	51号住	吉田式(古)	沈線文の壺形土器あり
3	17号住	〃(中)	
4	24号住	〃	
5	29号住	〃(新)	
6	2号住	箱清水式(古)	
7	3号住	〃	
8	4号住	〃	
9	5号住	〃	

10	6号住	〃	
11	8号住	〃	
12	10号住	〃	
13	11号住	〃	推 定
14	22号住	〃	
15	23号住	〃	推 定
16	25号住	〃	
17	36号住	〃 (中)	
18	38号住	〃	
19	43号住	〃	
20	44号住	〃	
21	45号住	〃	
22	48号住	〃	
23	52号住	〃	
24	54号住	〃	
25	壺 棺	〃	
26	12号住	〃 (新)	
27	18号住	〃	
28	19号住	〃	
29	21号住	〃	
30	26号住	〃	
31	31号住	〃	
32	35号住	〃	
33	37号住	〃	周囲に古式土師あり
34	39号住	〃	
35	50号住	〃	
36	53号住	〃	
37	41号住	〃	
38	42号住	〃	
39	47号住	〃	
40	50号住	〃	
41	1号住	〃	
42	32号住	〃	
43	15号住	古墳時代前期	

44	20号住	〃	上層はⅢ期の土器
45	30号住	〃	
46	33号住	〃	
47	34号住	〃	
48	40号住	〃	
49	7号住	〃	
50	9号住	〃	
51	15号住	〃	
52	14号住	〃	
53	16号住	〃	
54	13号住	〃	
55	27号住	〃	
56	49号住	平安時代Ⅳ期	
57	支線2号土壙	〃 Ⅴ期	

## 第2節 各住居址の土器様相について

次に各住居址から出土した土器について、特に注目される組成・形態・出自・分布などについて、概説する。

### (1) 51号住居址の土器

弥生時代後期前半の住居址は、4軒発見されている。このうち最古と思われるものは、支線2号Eの51号住と推定される。この住居址は焼失した住居で、遺物の残りがよく床面の土器と流れ込みの土器との区別が容易であった。

壺(76図12)は長胴形で頸部に太い櫛描横線文があり、下に櫛描波状文のみられるもので、壺(76図13)は器型が似て、頸部に沈線文のみられるもので、栗林Ⅱ式の文様の伝統を引き継ぐものである。

甕(75図10)は頸部が長く櫛描文が縦、或は斜走する。これは栗林Ⅱ式の甕の胴部の文様のみられる。斜走または斜格子状の櫛描文に系譜が求められる(『栗林遺跡第Ⅸ次報告書』1992)。

大甕(76図11)は51号住西の外、床面のレベルから下に埋没していたもので、折り返し状の口縁をもち、胴部の櫛描波状文は断絶痕があり、下の櫛描文は綾杉状の施文、(波状条線文)となっている。これも栗林Ⅱ式の文様に見られるものである。これらの土器の様相からみると、長野市吉田高校グラウンド出土の土器を標式とする。吉田式の土器と比較すると、栗林Ⅱ式に近い様相が認められる。これは、時期差であるか、地域差であるか、今後の検証に待つところで

ある。

このタイプの壺は22号住（1992年報告）出土の壺の型式に引き継がれるのとも考え、箱清水式の古相を示すものとして位置づけている。

これと脚部が直線に開く高坏などが同時期と推定される。

## (2) 6号住居址とアメリカ式石鏃

6号住は1991年調査された住居址で、1/3の未発掘部分を残しているが、床面の土器など遺物の残存が良かった。

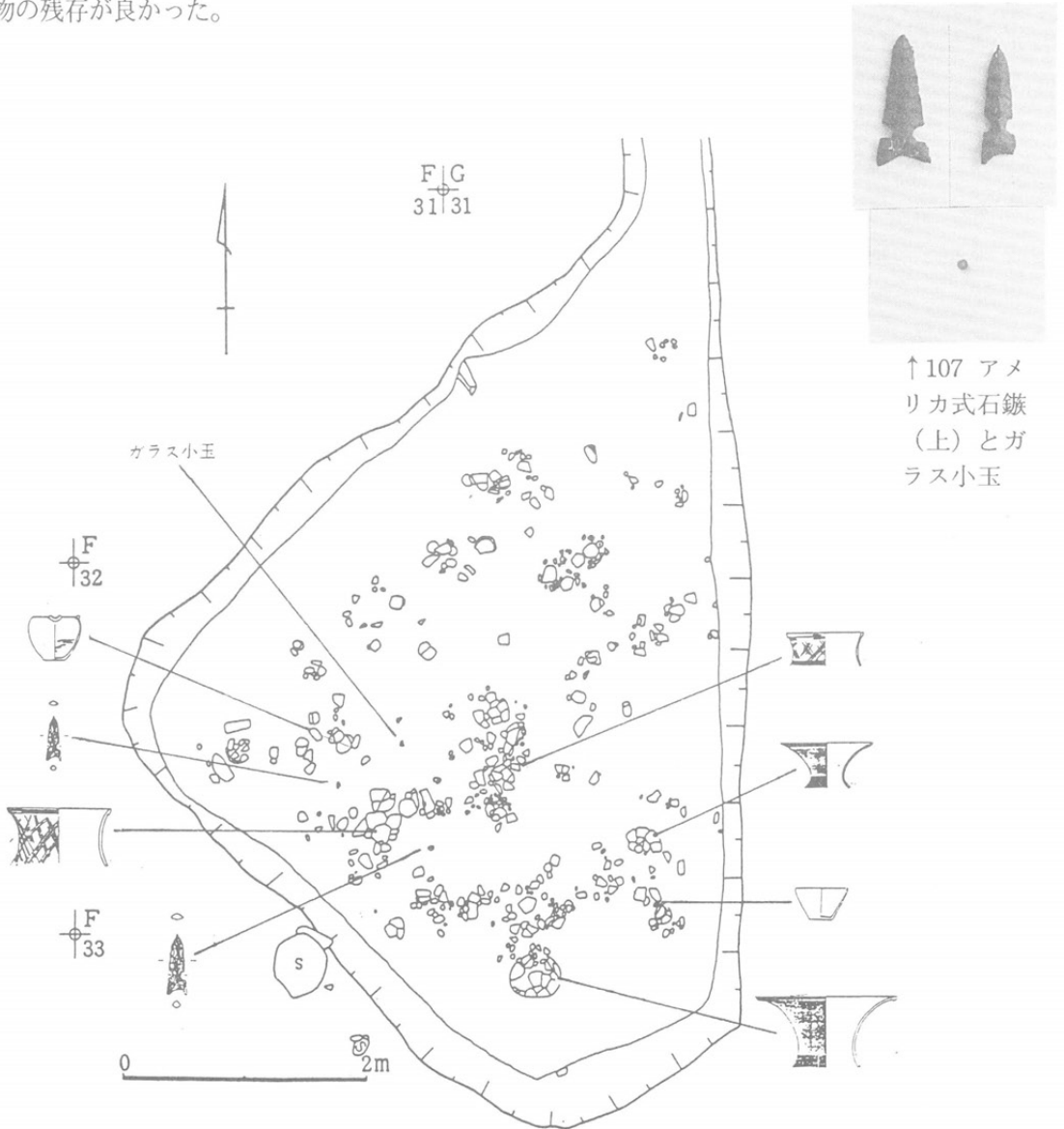


図145 6号住遺物出土実測図



この床面上からは、ブルーのガラス小玉1個と、アメリカ式石鏝2個（写真138）があり、そのほか、土器の大壺は赤彩され、口縁がベルト状に肥厚して、外面に櫛描簾状文を施文したものが、他の赤彩の壺は頸部に櫛描横線文があり、口唇部分がやや内折した形で、その外側に櫛描波状文のみられる。

甕には、飯山・佐久地方に多いとされる、折り返し状口縁で、口縁に櫛描波状文を施文し、頸部から胴部分に櫛描の斜格子文を施す甕は2個見つかっている。このほか、片口形土器は2個、甌形土器、赤彩の鉢形土器などが出土している。

これらの土器の編年代は、箱清水式の前葉の土器群と推定される。

ここで問題としたいのは、アメリカ式石鏝の存在で、これは中野市では初見のものである。

この石鏝はアメリカ・インディアンの使用品に、これと似たものがあることから、名がつけられた。これは関東北部から北と、能登半島から北の日本海側から東北地方に多く発見されている。

しかし最近大坂府でも発見されたとされるが、東北の枡形罌式に伴出し、福島県の天王山式土器に伴うことから注目されている。しかしこの土器の時代に汎日本的には弥生時代であり、この石鏝は、縄文文化の伝統の残る地域の所産と言われている。

中野市地域では、弥生文化の土器は、中期後半に位置づけられている栗林式土器は中期初頭の阿島式からの系譜上がたどれる土器で、文様には縄文文化から引き継ぐ、縄文の多用、沈線文などと、弥生文化の櫛描文を合わせた2種類のものがある。

しかし発見された弥生記号の存在から、縄文文化の伝統を残しながら、稲作を基調とする西からの弥生文化の中に栗林式文化が位置づけられると理解される。この文化を承継する吉田式、箱清水式文化は、その伝統の上にある。

この箱清水式段階の6号住から検出されたアメリカ式石鏝は、前に記した縄文文化の伝統の残るどの地方から搬入されたか、興味ある問題である。攻める弥生、守る縄文の時代、どの地帯にいつどこに、両者の線引きができるのか。交流と搬入には、どのような経過・経路をたどって、間山遺跡まで持ち込まれたか、今は謎である。

### (3) 31号住居址と土器

この住居址は焼失しており、北東の部分が未掘である。この床面上層からは、古式土師の土器が出土している（24図1・2・3）。

床面の土器搬入されたか甕（同図4）、台付甕（同8）、塗彩されない鉢（同7）などと、特に注目されるものは、超大型壺、台付飾壺の破片（同5）である。

この台付飾壺は、北陸の弥生後期から古墳出現期の法仏式から月影式にみられるもので、この土器は装飾器台などがみられる、月影式の影響を受けて居ると思われ、胎土・焼成からも搬入された外来系の土器と認められる。

住居址の西南隅には、超大形壺（25図9）が口縁部を東に向けてつぶれていた。口縁部分の一部は、使用中に欠けたか、破片のまとまりの中には無かった。この壺の文様から箱清水式の後半段階の土器と思われる。この土器を復原して、容量を調べたところ頸部上までで、145ℓの容積量があることが分かった。この壺は何を貯蔵したか、靱が有力と思われるが、この時代の生活を復原する手がかりとなるものである。

#### 45号住居址

45号住居址は1/2の検出面積で、一辺7.5mの大形住居址である。床面の土器は北辺に多い傾向であった。ここから出土した土器は大形の壺が多く（58図9）（59図11・12）（60図31・14）などである。

9の壺は、頸部に櫛描横線文に縦線文が2連みられ、内面の二つの黒い帯は赤彩の上の墨のあとである。11の壺は口縁外に櫛描波状文があり、頸部に櫛描横線文と縦走文、その下に櫛描波状文がある。12の壺は縁部が欠損し、頸部に櫛描横線文と縦走文が2連し、その下部に「一」の刻みのあるボタン状貼付けを施している。

13の壺は頸部に櫛描横線文と、波状文が中央と下にあり、縦走文もみられるものである。14の壺は口縁部欠損し、頸部に櫛描横線文と縦走文が2連あり、その下の中間に、多孔のボタン状貼付があり、下の文様は波状文である。

このようになぜ、この住居址に壺が多いのか、疑問に思われ、合わせて下半部の欠損した壺の多いのに注意される。

このほか、ごく小形の甕（58図4）もあり、加熱のあとがみられないことから、塩などの貴重品を入れたものと推定したい。

そのほかに小形甕（同図6・10）、大形甕（同図8）、鉢（同図7）、赤彩の高坏の脚（同図2）があり、東南の壁からは、紡錘車（同図3）が出土している。また焼失家屋のため、土器集中のところに、材質がケヤキと思われる盤の破片も検出されている。

これらの遺物から箱清水式の中葉以後の住居址東南の思われる。

#### 7号住居址と土器

7号住居址も一辺7.5mの大形に属する住居址で、焼失していた。発掘時の所見によれば屋根に薄く土が載せられたおり、これが焼け土となって、床面上に堆積したと観察された。

この住居址の上層50cmには、在地系の広口壺（95図15）がつぶれて、展開していた（写真56）。従って床面の土器とは、多少の時期差を考慮しなくてはならない。

そのほかの図示した（94・95図）の土器はこの住居址に伴うものと思われる。

壺（95図13）は横走の直線文帯の間に、刻み（断絶痕）のある山形文帯があり、赤彩はされていない。これは愛知県朝日遺跡などの元屋敷式土器に伴う、宮廷式（パレススタイル）の壺

にみられるもので、羽状や円形の刺突文を伴うものが多い。大参分類によると、山形文帯はD類以降に出現し、直線文帯は、D・E類の分類は長野県にも認められ、その中心地は、尾張平野（美濃地方）とされている。

松本市弘法山古墳出土の同種の壺《『長野県史考古資料編』遺構・遺物》（177図1）と同時期と思われ、古墳時代I期新段階に位置づけられている。

これと同種の壺の破片は支線1号の表採の壺破片（146図4）と、27号住出土の壺口部破片などが検出されている。

器台（96図14）と高坏（95図2）は、奈良県纏向遺跡辻土壙4（5F8W）下層出土資料にあり、北陸の月影式にみられるもので、纏向遺跡のものは、北陸からの搬入品と推定され、7号住の器台・高坏は北陸からの搬入または、影響のあるものとみられる。

甕は在地系と思われる甕（95図7）もみられるが、他の図示した甕は、外来系のものである。S字甕（95図10）は胎土・焼成・形態の観察から搬入品と認められるものである。

S字甕とは濃尾平野の欠山式土器の時期に、台付甕から生まれたもので、台付のものが多いが、図示したものは、台付ではないが、明らかに搬入品である。

高坏（同図9）は赤彩され、口縁に小突起があり、坏部が大きく開き、脚部に三角窓が3カ所みられるもので、小突起などは箱清水式の系譜を引くものである。

この住居址の土器の系統と出自は、外来系が80%を越すものと思われる。

このように北陸系の土器を主流にしながらも東海系の土器がみられる現象は、市内の安源寺遺跡にも認められるところで、弥生から古墳時代への変革期を迎えて、全国的に人も土器も動いたとされる現象が、間山遺跡からもよみとれるのであり、次に述べる32号住居址出土土器でもその傾向が認められる。

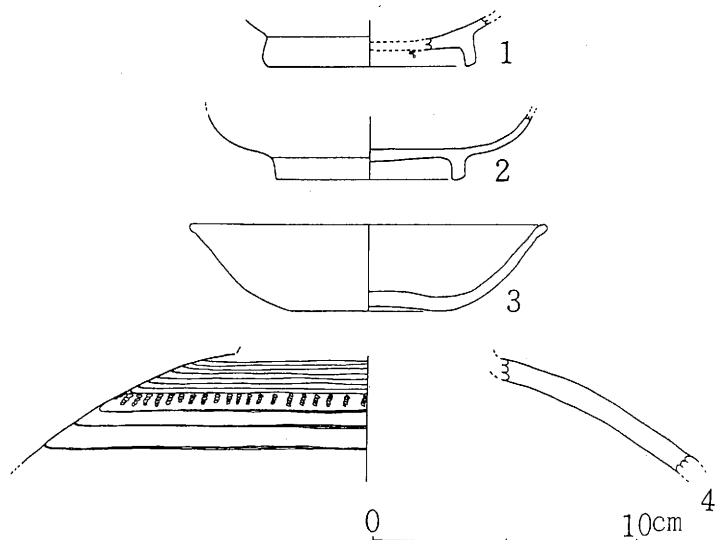


図146 支線1号 表採土器実測図

### 32号住居址と土器

32号住は先に報告した31号住の西側に位置した住居址で、この中に石とともに多数の土器片が検出されたが、流れ込みの状態の土器が多く、この住居址の時期を決定する床面の土器は、発掘した状況からよみとり、決定することに躊躇されたが、図示したとおりの多くの古式土師の存在から住居址の時期を決定した。

小形丸底鉢（117図2）は、北陸の月影式の第三段階頃の器形で、富山市杉谷A遺跡第2方形周溝墓出土の同種土師器に似ており、胎土・焼成からみて搬入品である。

器台（同図14）脚が短く坏部が大きく開く形態は、富山県小杉町中山南遺跡2号住居址出土土器、新潟県新井市斐太遺跡群上の平・矢代山遺跡出土土器にみられ（『月影式について・報告編』1986 石川考古学研究会）、北陸系の土器である。

壺・甕の口縁形態からみて、北陸系と認められるのは、（118図1・6・13）・（119図18・20～25）・（120図31～35・37）などで、新潟県方面に出土例の多いものである。

壺24・37の口縁形態は、月影式3段階にみられるもので、このほかの（7・9・15・29・30）などは在地系の土器と思われる。

壺32は口縁部に凹線文のみられるもので、滋賀県高島郡針江遺跡出土例にあり、近江系と呼ばれるものである。これは石川県の法仏式から月影Ⅱ式にみられる器形である。しかし、この凹線文の口縁の壺は、愛知県安城市中狭間遺跡溝状遺構出土土器にもみられる。これは畿内の土器が、東海地方と北陸地方へ影響をあたえたことを示すものである。

このことからこの古墳出現期の土器は、再論すると、北陸からの流れを主としながらも、一部は東山道経由のルートもあったことになる。

19の土器は、坏部の破片で全体像がつかめないが、赤彩されており、形態から月影Ⅱ式にみられるもので、器台形土器の坏部とみられる。

有孔鉢（16）は富山県大門町串田新遺跡出土例にあり、大形甕（28・36）などは在地系のもので、壺下半部（26）、高坏脚部（17）などは、箱清水式のものである。

（28・36）の土器は、この時期の壺形土器と推定される。

ミニチュアの鉢（3）土製の曲玉（10）などは古墳出現期の祭祀にかかわるものとみられる。

## 第Ⅳ章 む す び

間山遺跡の通称中央農道建設に伴う緊急発掘調査は、平成3・4（1991・92）年の2カ年にわたって行った。その成果はすでに前年の報告分を含めて、54号の住居址に及んでいる。この中には、1部分の検出にとどまったものもあるが、縄文時代から平安時代のものである。

これらの何千年に及ぶ年代のなかで、この遺跡に人が住んだ時期と住まない時期があった。勿論、該当する時期の遺構に直面しなかったことも考慮されるが、過去の調査例とも合わせ考えて、今回これだけの広域の遺跡の発掘調査を実施した結果から、この遺跡のもつ性格の大まかな傾向は把握できたと思われる。

縄文時代は、前期前葉の関山式の土器が十二川沿いの地点に確認され、前期後葉の諸磯式B式C式の土器は、今回の調査で初めて確認されたが、僅かである。中期の土器は、前葉の北陸文化圏に属する土器（狭義には深沢式）で、これらも僅かである。

つぎの後葉に属する加曾利E式の把手が1点発見されている。後期の土器は、隣の新野遺跡で、堀ノ内I式土器が発見されているが（未報告）、ここではみられない。晩期の土器も同様である。

しばらく無人の地であった遺跡に、人が住むようになったのは、約2千年前の弥生時代中期後半の栗林II式土器の時代になってからで、土器は小破片で量も僅かである。つぎの後期はじめの吉田式から住居址が時期別に追えるようになり、土器の様式の変化、住居の規模・構造の変遷が、遺跡の中でとらえられるようになる。最盛期を迎えたのは、箱清水式の時期で、住居址が切り合い関係や、伴出した土器によって時期の細分が可能である。この時期の超大型壺の存在や、壺棺墓の確認などは、弥生社会の復元に役立つものと思われる。

この箱清水式の末葉には、外来系（北陸月影式）（越後系）（東海欠山式）の流入があり、箱清水式土器は解体の方向を向かえる。この現象は、これらの地方との交流や、人の流れがあったことが土器は示している。次の段階の小型丸底土器・器台型土器・小型高坏などの小型精製土器の出現は、古墳時代の葬送儀礼や、祭祀に使われたもので、古墳時代の土器である。

この報告書では、前段階の月影式（庄内式併行）の影響の見られる土器も古墳時代に含めた。この時期の濃尾平野の元屋敷式系土器の流入は、今回確認されたもので、この時期に東海地方から強い影響があったことを物語っている。この転換期の土器様相は、市内安源寺遺跡でも同様に確認されている。

古墳時代中期から後期の遺物の発見は希薄である。奈良時代になって住居址がみられ、平安時代の10世紀には、住居址が散発的に発見され、今回を含めて3軒検出されている。この時期の土壇墓の検出では、小型坏が供献されており、当時の葬送儀礼の一端を知ることができる。

中世の遺構では、敷石の遺跡があり、中世の村落構造の復元の資料となり、溝を伴う土塁状遺構の検出も今後の検証が必要である。

発掘調査に際し多くの方々からご援助をうけたことを感謝し、締めくくりとします。

<付表> 第10図 石器観察表 (1992年)

番号	出土地点	種別	器形	寸法 (センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底型	器高	外面	内面		
1	5号住	打製 石斧	バチ型						安山岩製、刃部及び側面に摩滅痕あり、成型、調整ともに粗雑である	
2	7号住	〃	短冊形						安山岩製、保存状態は良好であり使用による摩滅等に痕跡なし、成型・調整、ともに精緻である	
3	14号住	タタキ 石	(三角柱)						砂岩製、上下両面に打撃痕あり	
4	12号住	磨石	(玉子形)						火成岩製、表面に火をうけ酸化している。風化が著しい	
5	13号住	石刃	ブレイド 状						黒耀石 側面に使用痕あり	

第12図 土器観察表 (1992年)

1	5号住	土器	甕	18.0		(残存高) 19.0	赤褐色 黒褐色	黄褐色 黒褐色	外 口縁 意識して平滑にフチどり 下部 施文のあと 下からナデ や や 脆弱 砂粒多い 内側 ヨコミガキ	1/2残
---	-----	----	---	------	--	---------------	------------	------------	---	------

第16図

1	28号住	土器	甕	10.4	9.0	5.4	赤褐色 褐色		堅 外 砂粒少し	胴上半 2/1残
2	〃	〃	高杯	13.0	(10.6)	(12.3)	赤彩		堅 鉄分粒 砂粒あり	3/5残
3	29号住	〃	壺	16.8			上部-赤彩 下部黄褐色暗褐色		砂粒細かい	頸部上完
4	〃	〃	〃		8.1		茶褐色 淡橙色 黒色		外 タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 砂粒少し 赤彩なし	下半部 3/1残
7	〃	〃		(胴部) 28.8	9.0		明黄褐色 淡橙色 黒色		堅 外 タテヘラミガキ、ヨコヘラ ミガキ 内 アライハケでヨコナメに 整形 外二黒斑あり、胎土砂粒なし、赤彩なし	2/1残
5	30号住	〃	壺	16.0	5.0	19.0			堅 外 口縁 ヨコナデ 上部ナメハケメ 下部ハケメの粘土滞流 内 ヨコナメハケメ	完
6	〃	〃	高杯		14.5	(残存高) 10.0	赤色塗採	暗褐色	堅 砂粒多し	2/5残
8	〃	須恵器	瓶	(3.8)	頸径(上) 7.6		灰青色		堅 外 ロクロナデ 胎土灰白色 内 ヨコナデ	

第24図

1	31号住	土器	壺	9.4			赤彩	赤彩	堅 石英粒、淡い赤い色	1/4残
2	〃	〃	甕	14.0			灰褐色	白黄色	堅 外 ヨコナデ歯状工具痕 残る 内 ヨコナデ	1/7残
3	〃	〃	壺	13.4			黒褐色の 部分あり	明黄褐色		1/4残
4	〃	〃	甕	12.0			黄赤褐色 明青灰色		堅	1/3残
5	〃	〃	壺				淡赤彩	白黄色	堅 石英粒 外来系	1/4残

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底型	器高	外面	内面		
6	31号住	土器	脚		6.0		赤褐色		堅 外 上部5センチ位ヨコ 中2.5センチ タテヘラミガキ 下部5ミリヨコ 内 ヨコナデ	脚完存
7	"	"	浅鉢	18.8			明黄褐色	明黄褐色	堅 石英粒、無塗彩 外 タテケズリナデ 内 ハケ整形ヘラミガキ	1/3残
8	"	"	高台付 甕	11.2			黒褐色 茶褐色	左同	堅 外 タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ	3/5残

第25図

1	31号住	土器	壺	50.0	19.0	108.0	赤彩		堅 外 タテ、ヨコヘラミガキ	
---	------	----	---	------	------	-------	----	--	----------------	--

第28図

1	35号住	土器	甕	10.0			黒褐色	黒褐色	堅 外 砂粒多 上 ハケメ、ヨコタテナナメ 内 ハケメヨコ、上ナデミガキ	1/2残
2	"	"	"	17.0					堅 砂粒、鉄分粒、胎土青白色 二 次火熱媒付着 内側ヨコヘラミガキ	下半分上 1/2残
3	"	"	高坏 (脚部)				赤彩	赤褐色	堅 砂粒あり、外 タテヘラミガキ 内側 ヨコヘラミガキ	3/5残
4	36号住	"	深鉢							加曾利E式 把手
5	"	"	甕	26.0			黒褐色 (煤) 黄褐色	黄橙色 青灰色	堅 鉄分粒、砂粒ヨコヘラミガキ	口縁部1/2残
6	"	"	"	14.0				赤褐 暗青灰色 暗褐色	堅 鉄分粒 砂あり 外 ハケメナナメ 内 ヨコヘラミガキ	在地系か? 内ヘラミガ キ特長

第38図

1	37号住	土器	蓋	(ツマミ) 径4.4	口径 16.0	7.2	暗赤褐色	黒褐色	堅 外 ハケメタテ 内 ナナメハケ、整形ヨコ つまみ部に径0.2センチの貫通孔あり	2/5残
2	"	"	鉢	(16.0)	(4.4)	(8.6)			堅 外 ヨコヘラミガキ、タテヘ ラミガキ 内 ヨコナナメヘラミガキ 明橙色、胎土中青灰色	1/4残
3	"	"	甕	11.6				暗褐色	堅 外 ハケメヨコ タテナナメ 内 ハケメヨコ 上ナデミガキ 砂粒多し 古式土師	1/2残
4	"	"	壺				赤彩	黄橙色	堅 外 ヨコヘラミガキ 内 板あとあり ハケメヨコ	胴部1/4残
5	38号住	"	甕				明褐色 (煤)	明黄灰色	堅 外 タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 良好	1/2残
6	"	"	坏	(11.8)	(6.0)	(3.2)	赤褐色 黄褐色	黒色	堅 外 ヨコナデ 内 黒色ヨコナデ 糸きり (平安時代)	3/5残
7	"	"	壺					赤彩	堅 外 ヘラミガキ 内 ヘラミガキヨコ 他に同 壺の破片なし	南西隅出土

第42図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
1	39号住	土器	甕	12.0			赤褐色		やや軟 外 タテヘラ整形 火熱痕 内 タテヘラミガキ	1/2残
2	"	"	高坏				赤彩	赤褐色	堅 外 タテヘラミガキ 内 ナデ整形 隆帯後に付着	頸部に隆帯あり
3	"	"	鉢	15.0	4.3	4.9	赤彩	赤彩	やや軟 外 タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 器面剥落 石英粒 砂粒多し	1/2残
4	"	"	器台	7.6			黄褐色		堅 砂粒多し 孔3ヶ所	
5	"	"	紡錘車	(直径) 4.7		(厚さ) 0.9	赤褐色		堅 砂粒中	1/3残
6	"	"	甕				黒褐色 黄褐色		やや軟 外 タテヘラミガキ 煤付着 内 ヨコヘラミガキ	胴部 1/4残 胴下25.4
7	"	"	注口土器	8.4	7.1	12.8			やや軟(焼成)外 上部ヨコヘラミガキ 下部タテヘラミガキ 内部 ヨコヘラミガキ良好 胴部に外から後の穿孔あり径0.4センチ	注口部の口先がやや高くなっている。 4/5残
8	"	"	高坏(脚部)	3.2	8.8	6.5			堅 外 ハケメタテ 内側ハケメヨコ 石英粒	

第45図

1	40号住	土器	高坏	(21.0)			赤彩	赤彩	堅、くすんだ赤彩砂粒少 ヨコヘラ磨き	坏部1/3残
2	"	初期須恵器	甕				濃緑青色	青灰色	胎土青灰色自然釉、鉄分沈着	甕破片
3	"	青磁	碗						青磁しのぎ蓮弁文碗	
4	41号住	土器	鉢	20.0	6.0	12.5	明黄橙色	明赤褐色のところが あり	やや軟砂粒ヨコヘラ磨きタテヘラミガキ 二次火熱痕	1/2残
5	"	"	甕		4.9		セピア色		堅 黒褐色 胎土青灰色	1/2残
6	"	"	"	11.2	5.5	16.1	赤褐色	黄橙色	脆弱 赤褐～暗茶褐色 口縁暗赤褐色 内ヨコナメヘラミガキ	3/4残 器面剥落多し
7	"	"	壺(頸部上)				赤彩	青灰色	やや軟赤褐色 内面赤彩わずか、剥落 観察不能のところ多し外タテヘラミガキ 二次焼成	頸部上 1/2残
8	"	"	甕	8.3	4.0	15.0	赤褐色		脆弱 文様なし 砂粒少し 二次焼成内炭化物	完

第46図

1	47号住	土器	(高坏脚)				赤彩	赤彩	堅 外 砂粒少し 赤彩剥落 タテヘラミガキ ヨコヘラミガキ ヨコナデ	脚下部下端 坏部上部欠
2	"	"	"		10.4		赤褐色 褐色		やや軟 外 砂粒中タテヘラミガキ 接合痕 内 ハケメのこる	1/2残
3	"	"	甕		5.0		黄褐色	黄褐色	堅 砂粒あり 外 ナナメハケ タテハケメ 内 タテヘラミガキ ヨコヘラミガキ ヨコナデオサエ	1/2残



第46図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底型	器高	外面	内面		
4	47号住	土器	高坏 (坏脚)				赤彩		堅 胎土赤褐色 砂粒、鉄分粒 外 ヘソ状突起で坏部と脚部を接 合 孔をあけて タテヘラミガキ	脚部3/5残
5	"	"	鉢	半径 14.3	5.5	7.4	赤褐色		やや軟 赤彩痕二次焼成 器面剥落 赤彩鉢なるも火焼のため摩滅	3/4残
6	"	"	注口? 土器	(8.5)	6.7	13.3	明黄褐色	黒褐色 明黄褐色	堅 赤彩なし注口がつくか不明 外 ヘラヨコミガキ、タテヘラ ミガキ 内 ヨコヘラミガキ	9/10

第51図

1	43号住	土器	壺	45.6			赤彩	堅 外 タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 二次焼成痕あり、砂粒あり	頸部上 ほぼ完
---	------	----	---	------	--	--	----	--	------------

第52図

1	42号住	土器	高坏 (脚部)		7.4		赤彩 (くすぶつ た色)	黒色	堅 外 タテヘラミガキ 内 ヨコナデ 石英砂粒 脚内黒	下部3/5残
2	"	"	"		6.7		赤褐色 褐色		堅 内 ヨコナデ 砂粒多い	下部完存
3	"	"	紡錘車	(直径)5.2	(厚さ)1.0		黒褐色		堅 砂粒多い	完
4	43号住	"	高坏 (脚部)		9.4		赤彩		やや軟 外タテヘラミガキ 砂粒中、胎土赤褐色 透孔3ヶ所	下部1/3残
5	"	"	甕	16.0			暗褐色		堅 外 タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 下部二次火熱、砂粒少し	上半1/3残
6	"	"	鉢	(17.0)	6.3	9.1	赤彩		堅 外 タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 砂粒、胎土中心黒色、両 面は黄褐色	1/2残
7	"	"	壺		15.0				堅 鉄分粒、砂	下半分残

第58図

1	45号住	木器	盤						樹種 榲 盤	
2	"	土器	高坏 (脚部)		16.1	14.3	赤彩		堅 脚上部タテヘラミガキ ヨコヘラ ミガキ ナナメヨコ整形砂粒あり 板状オサエ痕	1/2
3	"	"	紡錘車	(直径)6.5	(厚さ)0.9		黒褐色 赤褐色		堅 砂粒	完形
4	"	"	小型甕	7.2	4.5	7.0	赤褐色 黒褐色	同左	堅 砂粒少、口縁部に縦にヒビ割れ あり、外タテヘラミガキ	"
5	"	"	甕	8.5		残16.5	暗黄褐色	"	堅、炭化物付着、砂粒少、折返し口 縁、外 タテヘラミガキ、内側 ヨコヘラミガキ 良好	2/5残
6	"	"	甕	12.0			濃いセピア色		堅、砂粒少、内ヨコヘラミガキ	口頸1/4残
7	"	"	鉢	15.6			暗褐色	赤褐色	堅、砂粒少、外上部ヨコヘラミガキ 下部タテヘラ内部ヨコヘラミガキ良好	1/3残
8	"	"	甕				暗褐色	黒色～ 褐色	堅、外面煤付着、金雲母、砂粒 内上部ヨコヘラ下部タテヘラミガキ	上半部2/5残

第58図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
9	45号住	土器	壺	30.0			赤彩 (くすぶった赤)	赤彩	堅、砂粒少、鉄分粒、口縁ヨコヘラミガキ、内部ヨコヘラミガキ、薄い墨の線 下部タテヘラミガキ	頸部1/2残
10	"	"	甗	11.9	6.0	16.0	赤褐色	赤褐色	堅、砂粒 鉄分粒、外半分ほどタテヘラミガキ、内部 ヨコヘラミガキ	3/5残

第59図

11	45号住	土器	大壺	(径)35.6	(頸径) 14.6		赤彩 (やや暗色)	赤彩	堅 外側上タテヘラミガキ、 下ナナメヘラミガキ、器厚薄い。 内上部ヨコヘラミガキ 下部タテヘラミガキ	1/2残
12	"	"	"				赤彩 (くすぶった赤、うすい塗り)	黄褐色	やや軟 櫛描横線文タテヘラミガキ 第二次火熱 簾状文 内側 赤彩なしヨコヘラミガキ タテ櫛描文2連(四ヶ所)	胴部上1/2残

第60図

13	45号住	土器	壺				赤彩 (黒色煤附着)	赤彩	やや軟 砂粒鉄分粒器面剥落、 タテヘラミガキ、数値に移動あり、 タテ櫛描線四ヶ所	
14	"	"	"				赤彩	口縁 赤彩	堅 内面剥落ボタン貼付四ヶ所 内外煤附着、口頸胴部残存 他に破片多数あり	

第66図

1	48号住	土器	甗	14.0			赤褐～ 黒褐色	暗黄褐色	堅 外 タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 砂粒少し、二次火熱痕	上半分1/4残
2	"	"	"	22.0			暗褐色	黄褐色 暗黄褐色	堅 外 ナナメヘラミガキ タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 砂少し	1/4残
3	"	"	"	13.3			暗赤褐色	黒褐色	堅 外 タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 砂粒少し	上下1/3残
4	" No.7	"	"				暗黄褐～黒褐色		堅 外 ヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 火熱痕	1/4残
5	"	"	"	18.0			暗褐色、内外 火熱痕		やや軟 鉄分粒あり、 内 ヨコヘラミガキ 折り返し口縁	2/3残、下部なし
6	" 東		壺					明黄白色	堅 外 タテヘラミガキ ヨコヘラミガキ ボタン貼付あり 砂粒少	頸部1/3残
7	"	"	"		8.2				石英粒	下部3/4残

第67図

1	48号住	土器	紡錘車	(直径) 4.1	(厚さ) 1.1		赤褐色		堅 砂粒少 刺突文あり	下半部1/3残
---	------	----	-----	-------------	-------------	--	-----	--	-------------	---------

第68図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底型	器高	外面	内面		
8	48号住	土器	壺	36.0	39.4	36.5	明黄褐色		堅 外 ヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ、ヨコハケ メ痕 砂粒少し、2本組縦櫛条5 ヶ所	頸部上4/5残
9	"	"	甕	31.5	34.2		赤褐色 黒褐色 火熱痕	黄褐色	やや軟 内ヨコヘラミガキ 砂粒多い 折り返し口縁	口縁1/2残
10	"	"	壺		(13.8)		淡黄褐色		堅 外 タテヘラミガキ 内 ハケメ 煤一部付着	下半分完形 底一部なし

第72図

1	50号住	土器	甕	10.0			暗黄灰色		堅 内 ヨコヘラミガキ 砂粒少し	上部1/2残
2	"	"	高坏 (脚部)		6.6		赤彩		堅 外 タテヘラミガキ 砂粒多い透し穴3ヶ所	1/2残
3	"	"	高坏 (坏部)	2.1			赤彩		やや軟、外、ヨコヘラミガキ タテ ヘラミガキ、くすんだ色 突起4ヶ所 内 ヨコヘラミガキ 脚部胎土 灰青色 砂粒中	坏部1/3残
4	"	"	甕	20.0			暗褐色	暗褐色	堅 砂粒中、使用されて文様不 明 内 ヨコヘラミガキ	口縁部 1/2残
5	"	"	"		7.6		赤褐色 暗褐色	暗褐色 黄褐色	やや軟 外 ヨコヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 砂粒少し 2次火熱痕	下部1/2残
6	"	"	壺		5.9		赤彩		堅 外 ヘラタテミガキ 内 ヨコヘラミガキ 砂粒少し	下半部完
7	"	"	甕	24.0			淡黒褐色	黄褐色 褐色	堅 外 火熱痕、摩滅 文様不明	口縁部1/2残
8	"	"	壺				暗赤色	暗黄褐色	やや軟、外ヨコナナメヘラミガキ 内 ヨコハケメ 上ナデ 煤付着	
9	"	"	注口 土器	12~12.5	5.8	11.0	黒褐色 白灰~ 暗橙色	黄白色 黒褐色	外 タテヘラミガキ雑 内 ヨコヘラミガキ 砂粒少し タテハケメ残る	ほぼ完

第75図

1	51号住 No.7	土器	甕	14.0			黒褐色 赤褐色	黒褐色 黄褐色	堅 外 ヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 砂粒少し	2/5残
2	51号住	"	鉢	14.7			赤彩	赤彩	堅 外 ヨコヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 砂粒多し	赤彩剥落 1/2残
3	"	"	壺 (下半部)		7.1		明黄褐色		堅 石英粒	下半部完形

第75図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
4	51号住	土器	鉢	16.7	5.8	10.6~9.0	外底を除き 赤彩		堅 外 ヨコヘラミガキ タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ	完形
5	"	"	高坏 (脚部)		14.8	残14.2	赤彩		堅 外 タテヘラミガキ 内 オサエナデ接合痕 砂粒多し胎土部淡黒色	1/2残
6	"	"	鉢	19.6	6.0	7.3	黄褐色 黒褐色	黄褐色 黒褐色	堅 外 ヨコヘラミガキ タテヘラ ミガキ 内 ヨコヘラミガキ 底ヨコヘ ラミガキ 砂粒少し	4/5残
7	"	"	甕		7.2		赤褐色 暗褐色	赤褐色	軟 外 タテヘラミガキ 二次火熱痕、器面剥落 文様不明	1/2残
8	"	"	高坏 (坏部)				赤彩	赤彩	堅 砂粒多し、二次火熱の所あり	坏部1/2残
9	"	"	甕	17.8			赤褐色	暗褐色	やや軟、二次火熱 下半部破損 外 火熱痕多し 内 ヨコヘラミガキ	上半部 1/2残
10	"	"	"	20.0			暗褐色	黒褐色	やや軟 砂粒多し 外 煤付着 二次火熱	

第76図

11	51号住	土器	大型 甕	32.5			明黄褐色		堅 外 タテヘラミガキ 上に楕描 文 内 ヨコヘラミガキ ハケメ残 り	上部1/2残
12	" No.1	"	壺		9.8	35.5	黄褐色	黄褐色	堅 外 ヨコヘラミガキ 内 ヨコハケメ残る整形良好 砂粒 多し	道路下にて 上部破損 3/5残
13	51号住	"	"		10.2		黄褐色 黒斑あ り	黄褐色	堅 外 タテヘラミガキ 塗彩なし 内 ヨコヘラミガキ 砂粒中	吉田式か? 頸部上欠 3/5残

第81図

1	52号住	土器	壺		6.2		赤彩 明黄白色 明橙色	明橙色	堅 外 タテヘラミガキ 砂粒多し	下半部3/5残
2	"	"	高坏 (脚部)				赤彩	白灰色	堅 外 タテヘラミガキ タテヘラ 整形 ヨコヘラミガキ 砂粒 金雲母	脚3/5残
3	"	"	壺	13.0	5.8		赤彩	明赤褐色	堅 外 上部ヨコヘラミガキ 他タ テヘラミガキ 内 ヨコヘ ラミガキ 胴部に貫孔痕	口縁~頸部 1/3残
4	53号住	"	甕		8.4		濃暗褐色		堅 外 上部タテヘラミガキ 中部ヨコヘラミガキ 下部タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 砂粒多し	1/3残
5	"	"	壺	12.6			暗褐色	暗褐色	堅 外 上部ヨコナデ 他タテ ナナメハケ整形 内 ヨコナデ 砂粒多し	1/3残

第87図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底型	器高	外面	内面		
3	B	土器	壺	37.7	13.2	(76.5)	赤彩	黄褐色	堅 砂粒あり 外 ヨコヘラミガキ タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 上端人口的に欠く 櫛目タテ2本組	

第88図

1	A	土器	壺		14.0		赤彩		堅 砂粒、鉄分粒あり 下半分黒色の部分あり 内面剥落 外 タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ	頸部下 1/3残
2	C	"	"	24.0	9.0	(48.5)	赤彩	赤彩	堅 やや軟の箇所あり 胎土中心に暗青灰色あり 内部黄褐色 外 ヨコヘラミガキ タテヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 胴部上で人工的に破砕	1/4 欠落

第93図

G16	7号住	磨石		(直径) 3.4	(厚さ) 2.6					
G17	"	紡錘車		(直径) 5.8	(厚さ) 1.7				周囲に刻みあり	

第94図

1	7号住	土器	高坏 (脚部)	(頸径) 3.6	16.5			黄褐色	堅 外 ヨコナデ 穿孔3 内 ハケメヨコ ハケメナデ	下半4/5残	
2	"	"	" (坏部)	(頸径) 25.0	3.3	(残存) 9.0		明黄褐色	堅 上下部ハケメタテ 残ル 中部 タテヘラミガキ黒斑あり 内 ヨコハケメ僅かヘラミガキ		
3	"	"	鉢	13.6	4.5	7.0		赤彩		3/5残	
4	"	"	高坏 (脚部)		22.0			白黄色	堅 外 ヨコヘラミガキ 内 ヨコヘラミガキ 外一部黒斑		
5	"	"	壺 (口縁部)	11.0				赤褐色	堅 外 ヨコナデ 縁 凹線あり	1/7残	
6	"	"	甕	20.0		(現存) 4.0		暗橙色	やや軟 外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		
7	"	"	"	11.0				明黄色	堅 外 ヨコナデ、ナナメハケメ (細かい) 内 ヨコナデ		
8	"	"	壺 (口縁部)	(16.0)	(頸部) (14.2)			白灰色	堅 外 縁-ヨコナデ、ハケメ 内 ヨコナデ 北陸系土器 胎土青灰色 黄褐色	1/4残	
9	"	"	高坏	(坏部) 14.2	9.7	11.2		淡赤彩	堅 外 上部-ヨコヘラミガキ 下部-タテヘラミガキ 口縁突起4ヶ所 脚穿孔3ヶ所	3/5残	
D	"	"	甕	13.4	3.8	13.5		黒褐色 赤褐色	赤褐色	堅 外 ナデ 内 ヘラナデ S字口縁甕、器厚一薄、砂粒少	

第95図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底型	器高	外面	内面		
11	7号住	土器	壺	16.0	(頸部)13		白灰色		堅 北陸系 胎土青灰色黄褐色	1/4残
12	"	"	"	(18.0)			白黄色 一部 黒褐色	黒褐色	堅 外 上部ヨコナデ 下部ハケメ 僅かに残る 内 ヨコナデ、ハケメタテ 外来系	
13	"	"	"				明黄褐色	白黄色	堅 上部 ヨコミガキ 下部4本 横線文、施紋原体は同じ 内 ヨコナデ(剥落)元屋敷式	
14	"	"	器台	7.8	(12.7)	(9.1)	明黄褐色 黒褐色		堅 外 縁ヨコナデ 下部ヘラミガキ 内 凹線あり横ヘラミガキ 外来系 北陸系	
15	"	"	壺	22.5	9.0	30.0	赤褐色 黄褐色		堅 外 上部ヨコナデ ハケ整形痕 下部 ナナメ整形 下部は どハケメ残る 内 ヨコナデ ヨコハケ整形後 ナデ良好	

第96図

1	9号住	土器	器台	9.7	11.3	8.5	黄褐色		堅 脚部穿孔3	
---	-----	----	----	-----	------	-----	-----	--	---------	--

第102図

1	(16号 住付近)	土器	甕	16.4	5.0	20.5	黒褐色 黄褐色	黄褐色	堅 外 ハケメ整形 内 ハケメ残る 外底黄褐色 二次焼成痕	
---	--------------	----	---	------	-----	------	------------	-----	-------------------------------------	--

第104図

1	14号住	土器	甕	10.3	4.0	15.5	黄褐色 黒色		外 ナナメハケメ後ナデ整形 内 タテヘラ整形ナデ 砂粒多し、薄手、整形粗	
2	"	"	壺	15.8	(胴径) 28.5		黒褐色 赤褐色 黄褐色	黄褐色	堅 外 ヨコヘラナデ 内 ヨコヘラナデ	

第108図

1	15号住	土器	高坏 (脚部)		15.25		赤彩 (脚内なし)		堅 外 ヘラミガキ タテ方向 胎土白黄色、砂粒あり 窓三角、孔3ヶ所	
2	"	"	"		12.8		黄褐色 黒褐色	黄褐色	堅 外 タテミガキ 内 ヨコナデ 胎土青灰色 窓 円形	
3	"	"	小型壺	10.9	3.5	7.5	暗赤褐色	暗黄褐色	堅 二次焼成	1/2残
4	"	"	高坏 (脚部)	17.4		残存高 4.5	明黄褐色	明黄褐色 黒色	砂粒多し 古式土師 円 板をつくり接合したもの 剥落 北陸系	
5	"	"	高坏	(19.6)	(12.3)	(10.2)	明黄褐色		堅 砂粒少し 坏脚接合 内外 ヘラミガキ 古式土師 塗彩なし	
6	"	"	壺 (下半分)		6.7		赤褐色 黄褐色	赤褐色	やや軟 外 上部ヨコヘラミガキ 下部タテヘラミガキ ヨコヘラミガキ	
7	"	"	壺	18.0			明黄褐色 黒色		堅 口縁ヨコナデ 下部 整形 具痕 整形ヨコナデ	1/7

第113図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底型	器高	外面	内面		
1	27号住	土器	壺	9.1			黒褐色 暗黄褐色		堅 在地系、砂粒少し	3/5残
2	〃	〃	〃	6.3	3.0	6.5	黒褐色		堅 砂粒多し 手づくね	完
3	〃	〃	〃	5.5	3.0	2.9	半分赤褐色と 黒褐色		堅 手づくね土器 ワレてから二次 火熱	1/2残
4	〃	〃	壺 (口縁)	20.0			黄褐色		堅 砂粒少し	口縁部 1/5破片
5	〃	〃	〃	15.0		(残存高) 2.7	暗橙色	明橙色	堅 上部 ヨコナデ 下部タテハケメ 口縁内外、 羽状刺突文 内部ヨコナデ、施文磨滅 鉄分 あり、元屋敷式	1/6残
6	〃	〃	甕	11.5	(頸径) 9.0		白灰色		堅 胎土青灰色、外来系S字口縁甕	1/7残
7	〃	〃	壺	16.6	(頸部) 12.3		赤褐色 暗褐色	明黄褐色	堅 上部ヨコナデハケメ、内部ナデ、 下部ヨコハケメ 砂粒、鉄分粒 接合 ハケメス リケン	1/5残
8	〃	〃	甕	14.0	(残存高) 2.5		黒褐色	黄褐色	堅 上部ヨコナデ 内部ヨコナデ 下部ヨコハケメ、外来系、S字 口縁甕	1/7残
9	〃	〃	〃	15.0			黒褐色		堅 外上部ヨコナデ 下部タテナ メナデ整形痕僅か 内部整形痕ヨコ 在地系	1/5残
10	〃	〃	壺	16.8			暗褐色 黒褐色	暗褐色	堅 外 右から左へ整形 ササラ状 工具 内側へラ整形	上1/2残
11	〃	〃	〃	18.0	(頸部) 13.8	(残存部) 12.5	暗赤褐色		堅 外 ナナメヨコハケメ 口縁後 につける砂粒少し 内 ヨコナデ良好	1/4残

第118図

1	32号住	土器	壺	14.0			白黄色		堅 外面砂粒ありヨコナデ 内面ヨコナデ	1/7残
2	〃	〃	小型鉢	10.0			白灰色		堅 石英粒 外部ヨコナデ、ササラ 状工具斜め 内部ヨコナデ、ナナメ ナデ 外来系	1/4残
3	〃	〃	〃	5.4	3.1	4.3	灰青色 橙色	灰青色	堅 手づくね	4/5残
4	〃	〃	紡錘車	(直径) 6.1	(厚さ) 1.7		白黄色		堅 砂粒多し	完
5	〃	〃	甕	8.4			黒褐色	白灰色	堅 ヨコハケメ整形ナデ ハケ整形 痕 外来系	1/4残
6	〃	〃	壺	15.9					外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	
7	〃	〃	甕	10.0			淡黄赤色		やや軟 砂粒外ヨコナデ ハケメ 内ヨコナデ	口縁部1/3残
8	〃	〃	甕(台付)				明橙色	白黄色	堅 砂粒 高台部のみ完、附高台か	
9	〃	〃	甕	12.0			明褐色		堅 櫛描波状文痕跡わずかに残る	1/3残
10	4面	土製	勾玉				黒褐色		堅 穿孔上より片えぐり	完
11	32号住	土器	蓋				淡黄色		堅 砂粒少し	鈕部のみ残

第118図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底型	器高	外面	内面		
12	32号住	土器	器台		10.0		明橙色		堅 小砂粒多し	古式土師1/2残
13	"	"	壺 (口縁)	13.9			明黄橙色	黒色の部分もあり	堅 外ヨコナデ、タテハケメ 内ヨコナデ	1/5残
14	"	"	器台	(残存) 17.3	12.0	(残存) 8.5	脚部を除いて赤彩		堅 砂粒多し 外 タテヘラミガキ 頸径小 坏部上端不明 内、ヨコヘラミガキ赤彩なし	1/2残古式土師か北陸系
15	"	"	壺	13.0			暗黄褐色	赤灰色の部分もあり	堅 外ヨコナデ、ハケメナナメ 砂粒あり、口縁部を除いて外ハケメヨコのまま、内側の方が整形良好でヨコナデ	胴上部 完存 撤入?
16	"	"	有孔鉢						外 ハケメヨコタテ 内 ナデ、ハケのあと	北陸系 甕底部のみ
17	"	"	高坏 (脚部)		11.0		赤彩	暗橙色	堅 外 ヨコヘラミガキ タテヘラミガキ、内ヘラミガキ痕、押捺痕	脚完

第119図

18	"	"	甕				暗赤褐色	赤褐色	やや軟、在地系? 砂粒多し	1/8残
19	"	"	高坏 (坏)				赤彩	赤彩	堅 砂粒少 在地系? 内外ヨコナデ 胎土白灰色	1/4残
20	"	"	甕	18.0			黄白色		やや軟 砂粒中 ヨコナデ痕	口縁部1/6残
"	"	"	21.8				黄褐色		堅 石英粒 ヨコナデ痕	1/8残
22	"	"	"	19.6			黒褐色		堅 石英粒 ヨコナデ痕	1/8残
23	"	"	"	18.0			赤褐色 淡黒色		堅 砂粒多し、外部ハケメ斜め回転 ナデ、内部回転ナデ	口縁部1/6残
24	"	"	"	18.0			淡黒褐色	淡黒褐色	堅 砂粒多し	1/8残
25	"	"	"	8.8			明橙色	灰色	胎土石英粒多し	口縁1/5の 破片
26	"	"	壺 (底部)		10.8		白灰色	白灰色	堅 外 石英粒多しタテヘラミガキ 内 ハケメヨコ	下半分 1/4残
27	"	"	壺				赤彩	褐色 暗褐色	堅 外 赤彩煤付着ヨコヘラミガキ 内 ヨコヘラ磨き、砂粒少し	2/5残
28	"	"	甕	30.0			淡黒色 白黄色	赤褐 黄褐色	堅 外 砂粒中、ヨコナデ、タテナ ナメ櫛歯状整形具痕、内 ヨコナ デ 櫛歯状整形痕残	1/2残

第120図

29	32号住	土器	甕	10.4	5.4	14.2	黒褐色		堅 外側 砂粒多し(石英)	縦1/3残
30	"	"	"	19.4			黄橙色 黄褐色		堅 砂粒多し、内外上部ヨコナデ 下部ハケ整形	1/6残
31	"	"	壺	21.4			白灰色		堅 砂粒あり、北陸系	口縁1/2残
32	"	"	"	11.2			明橙色 黒色	明橙色 黒色	堅 砂粒少、外上部ヨコナデ、内部 細い横線(ハケ痕) 下部ヨコミガ キ? 北陸系	口縁1/4 破片
33	"	"	甕	16.6			赤褐色	黄橙色	堅 胎土、白色粒あり 砂多し 下 部ハケメヨコ、外回転ナデ、 内ナデハケメ、タテヘラ整形	口縁1/2残
34	"	"	"	19.4			黒褐色	黄褐色	やや軟、二次火熱 砂粒少し、内外 上部回転ナデ、下部ナナメヨコハ ケメ	口縁1/2残
35	"	"	"	16.0			赤褐色 二次火熱	赤褐色 灰褐色	堅 胎土小石あり、外ヨコナデ、ナ ナメハケメ 内ヨコナデ	1/6残



第120図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		整形・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底型	器高	外面	内面		
36	32号住	土器	壺		8.5		白黄色 橙色	白黄色	堅 砂粒あり	胴部1/4残
37	"	"	壺	13.4		(残存高) 10.5	明橙色	明橙色	堅 胎土小石含む(山石) 細いすじ 下部ヨコミガキ(整形痕残る) 外上部ヨコナデ 内 ヨコナデ 凹線文土器、二次焼成痕北陸系	2/3残

第122図

1	33号住	土器	甕	18.6			暗褐色 二次火熱	暗褐色	堅 外 口縁ヨコナデ、頸部タテナ デ、下半分横ナメナデ 内 上部ヨコヘラナデ整形、下 部ヘラナデ 砂粒、二次火熱	1/4残
2	"	"	"	12.0			明橙色	暗灰色	堅 外 口縁部ハケメ上ナデ 内 ハケメヨコナメ	口縁部 1/2残
3	"	"	"	6.8	4.5	8.1	白灰色		堅 外 上半部ハケメナデ 内 下半部オサエナデ 口縁内 面ヨコハケメ	3/5残
4	"	"	"	16.2			黄褐色		堅 外 ヘラ整形 ヨコナデ痕 砂粒多し	1/6残

第130図

1	ED23	土器	坏	8.5	3.0	2.4	赤褐色		堅 砂粒多し、内外ナデ、糸切り	完
2	"	"	"	9.5	4.2	2.2	明橙色		堅 砂粒あり 整形痕付着 糸切り	完
3	"	"	"	9.6	4.8	2.1	明白橙色		堅 砂粒あり 底 焼成時のキレツあり	完
4	ED21	"	器台?	8.4			黄白色		堅 外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	1/4残

第132図

1	49号住	土器	坏	14.0	5.6	4.3	黄黒褐色	黒色	堅 石英粒多し、磨研、ロクロナデの 後、放射状に細いヘラで捺痕(暗文状)	完
2	"	"	"	12.0			明黄橙色		堅 砂粒少し 外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	1/3残
3	"	"	"	12.3	5.6	3.9~4.6	白灰色 黒色		堅 糸切り	3/5残
4	"	灰釉	碗		6.9		白灰色		堅 高台付 ロクロ整形	底部1/2残
5	"	土器	灰	13.4	5.8	4.0	暗赤褐色	黒色	堅 石英粒多し、口縁一部欠く 使用された感じ 糸切り	
6	"	"	壺				赤褐色~淡黒色		堅	古式土師 口縁部1/6残
7	"	"	甕				"		堅 砂粒少 外 ヨコ、ロクロナデ 内 ヨコ、ロクロナデ	1/3残
8	"	"	"	12.9			赤褐色~黒褐色		堅 胎土石英粒多し下部 火熱痕 口縁形態 玉縁状	1/2残
9	"	"	"	25.8			赤褐色 (火熱)		堅 外 ロクロナデ ヘラケズリ 内 ロクロナデ タタキナデ 胎土石英粒多し 二次火熱の破片 と砲弾形接合	1/3残
10	"	"	"	24.0			黄褐色		堅 外ロクロ 敲打痕 内ロクロ 敲打当具痕 砲弾形 越後系	1/4残

第133図

番号	出土地点	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成型・調整・形態の特徴・系統など	備考
				口径	底型	器高	外面	内面		
11	49号住	土器	甕	20.4			黄褐色	淡黒褐色	堅 外 ロクロ 内 ロクロ当具痕 石英粒 胴上部敲打痕 砲弾形	3/5残
12	"	"	注口付 大鉢	27.0	12.0	12.3	黒色 赤褐色	淡黒色	堅 外 ヨコクロロナデ 内 ヨコクロロナデ、ヘラミガ キ 胎土石英粒多し 外底火熱痕(赤褐色 脆弱)	2/3残 中野市初見

第139図

1	53号住	土器	高台付 小型杯	10.3	6.0	3.2	白灰色		堅 砂粒多し 見込み逆「の」 字状ナデ	完
2	"	"	小型杯	8.6	3.8	1.8	白橙色		堅 砂粒多し 外 ナデ 内 ナデ 糸切り	完
3	"	"	高台付 杯	10.0	4.8	3.0	明橙色		堅 口唇薄い	完
4	"	"	小型杯	10.0	5.6	2.0	白灰色 赤褐色		堅 砂粒少し	1/4残
5	"	"	"	9.2	3.7	2.0	黄褐色		堅 砂粒少し 内ナデ 糸切り	3/5残
6	"	"	"	9.4	4.2	1.9	黄褐色		堅 砂粒少し 内ナデ 糸切り	3/5残

第146図

1	支線1号 表採	灰釉	碗		7.2				へら跡あり 高台付き	
2	"	"			8.2				高台付き	
3	"	土器 (黒色)	杯	13.5	6.2	3.3	暗褐色	黒色	堅い 石英粒、砂粒多い、糸切り底	1/2残
4	"	土器	壺破片					黄褐色	堅 刺突文、横線文、元屋敷系	胴部 1/2残

間山遺跡  
発掘調査報告書 III

印刷 平成5年3月10日  
発行 平成5年3月20日

編集 中野市教育委員会  
発行  
印刷 中野市中央2-2-2  
カナイ美術印刷

